

# 小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

上野遺跡・大倉崎遺跡

1990

飯山市教育委員会

# 小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

上野遺跡・大倉崎遺跡

1990

飯山市教育委員会



遺跡遠景（対岸宮中丘陵より）



上野遺跡発掘風景（Ⅳ・Ⅴ区南から）



大倉崎館跡の補遺調査  
外堀と郭内堀上層断面



土層断面と下層方形周溝墓





先土器時代の石器 1





弥生時代中・後期の土器



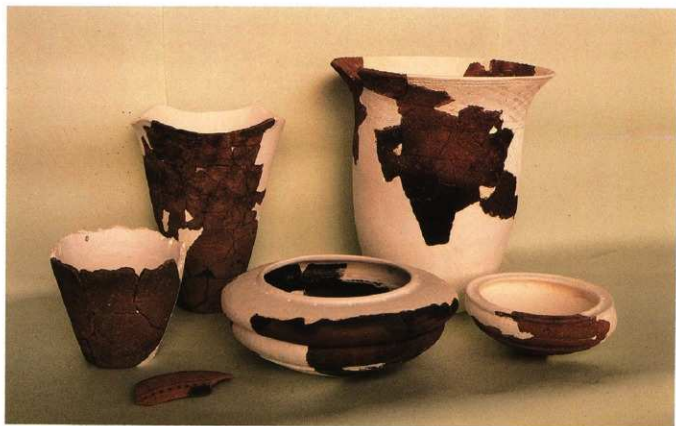
古墳時代前期の土器



平安時代の土器



縄文前期大型住居址・J 3号住居址（手前）  
同 方形住居址・J 6号住居址（右奥端際）



縄文時代前期の土器

# 序

飯山市教育委員会

教育長 浦野 昌夫

飯山市は長野県の北端に位置し、奥信濃の産業、経済の中心地であります。古くは、上杉謙信方に属し、その後飯山藩の城下町として発展してきました。また、この地域は原始～古代、中世にいたる埋蔵文化財の宝庫でもあります。

今回の一般国道117号線小沼湯滝バイパス建設に伴う調査は、昭和63年度から継続している調査であります。今年度は、上野、大倉崎両遺跡が調査の対象となりました。上野遺跡では1万数千年前の先土器時代から平安時代に至るまでの貴重な遺構、遺物が発見され大複合遺跡であることが判明しました。大倉崎遺跡は従来より縄文前期の遺跡として著名でありましたが、調査によって該期の集落址を明らかにすることができました。

飯山市教育委員会は、この貴重な文化財を大切に、永く後世に残していきたいと考えています。

この緊急発掘調査に協力して下さった飯山建設事務所及び地元関係者や多くの方々の御厚意に対し心から御礼申し上げます。

この報告書が郷土の歴史解明と明日の生活の糧として活用されることを念願するものであります。

平成2年3月1日



## 例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字常盤字外和郎に所在する上野遺跡・大倉崎遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、一般国道117号線の小沼湯滝バイパスの建設に伴い、飯山市教育委員会が飯山建設事務所の依頼を受け実施したものである。なお、本調査は単年度事業であるが、報告書は同一原因により実施した昭和63年度事業を継続して『II』とした。
- 3 発掘調査は飯山市教育委員会が主体となり、別に組織した遺跡調査会が平成元年度事業として実施した。調査会組織は、第1編第1章2（4～5ページ）に掲載した。
- 4 本書の作成にかかる名簿は、第1編第1章2（5ページ）に掲げた。文責については目次に明記した。
- 5 上野遺跡の地形・地質については早津賢二・小島正巳両氏に分析頂き、玉稿を賜った。また、上野遺跡先土器時代石器の石質の一部については早津賢二氏により鑑定していただいたが、一部のため誤りがあれば執筆者の責任である。
- 6 上野遺跡の墨書土器については、長野市立博物館にご配慮頂き、赤外線テレビにより調査・撮影いただいた。
- 7 発掘調査及び報告書の作成については多くの方の御協力をいただいた。調査・整理の実際についての協力・参加者は第1編第1章2に記載した。また、以下の方々には貴重なご指導・ご教示を賜った。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略・順不同）

河内八郎（茨城大学） 中島庄一（多摩市文化財団） 中島英子（東京都埋文センター） 森山公一（日本考古学協会会員） 金井正三（日本考古学協会会員） 太田文雄（千葉県文化財センター） 黒岩隆（長野県埋文センター） 吉原佳一（木島平村教育委員会）

# 国道117号線関係遺跡発掘調査報告Ⅱ

## 目 次

巻頭図版 1. 2. 3. 4. 5. 6

序  
例 言

### 第1編 概 要

第1章	序 説	望月静雄	3
1	調査に至る経過		3
2	調査と整理		4
A	発掘作業		4
B	発掘作業と報告書の作成		5
第2章	遺跡群の位置と環境		6
1	遺跡群の位置		6
2	遺跡群の範囲と現況		6
A	昭和163年度調査分の遺跡		6
(1)	日焼遺跡		6
(2)	南原遺跡		12
(3)	屋株遺跡		12
(4)	大倉崎館跡		12
B	上野遺跡		12
C	大倉崎遺跡		12
3	周辺遺跡		12
A	先土器時代		13
B	縄文時代		13
C	弥生時代		13
D	古墳時代		15
E	古代・中世		15

### 第2編 上野遺跡の調査

第1章	調査の方法と経過	19
1	調査方法	19
2	経 過	20
A	調査概要	20
(1)	層 序	20
(2)	遺跡の概要	常盤井智行 20

	B	調査日誌抄 .....	望月静雄 ...	24
第2章		先土器時代 .....		44
	1	先土器時代の調査 .....		44
	A	調査概観 .....		44
		(1) I 区 .....		44
		(2) II 区 .....		44
		(3) III 区 .....		44
		(4) IV 区 .....		44
		(5) V 区 .....		44
	B	層序と文化層 .....		44
	2	調査結果 .....		46
	A	遺物の出土状態 .....		46
		(1) I 区 .....		46
		(2) II 区 .....		46
		(3) III 区 .....		47
		(4) IV 区 .....		47
		(5) V 区 .....		47
	B	出土遺物 .....		59
		(1) 石器形態 .....		59
		(2) 出土遺物 .....		61
第3章		縄文時代 .....		106
	1	遺構 .....		106
	A	概要 .....		106
	B	溝状土壇 .....		106
		(1) 1号溝状土壇 .....		106
		(2) 2・3号溝状土壇 .....		106
		(3) 4・5号溝状土壇 .....		106
		(4) 6・7・8号溝状土壇 .....		106
		(5) 9号溝状土壇 .....		106
		(6) 10・11号溝状土壇 .....		106
		(7) 12号溝状土壇 .....		106
		(8) 13号溝状土壇 .....		108
		(9) 14号溝状土壇 .....		108
	2	遺物 .....		108
		(1) 縄文時代前期の土器 .....		108
		(2) 中期・後期の土器 .....		110
第4章		弥生時代 .....		111
	1	遺構 .....		111
	A	竪穴住居址 .....		111
		(1) Y1号住居址 .....		111

(2)	Y 2 号住居址	111
(3)	Y 3 号住居址	111
(4)	Y 5 号住居址	111
(5)	Y 6 号住居址	111
(6)	Y 7 号住居址	116
(7)	Y 8 号住居址	116
B	掘建柱建物址	119
	6 号掘建柱建物址	119
	7 号掘建柱建物址	119
(1)	土 址	119
	11 号土址	120
	12 号土址	120
	13 号土址	120
	14 号土址	120
	15 号土址	120
	16 号土址	120
2	遺 物	121
A	土 器	常盤井智行 121
(1)	住居址出土土器	121
(2)	遺構外出土土器	123
B	石器・石製品	望月静雄 127
C	土製品	常盤井智行 133
第 5 章	古墳時代	134
1	遺 構	望月静雄 134
A	竖穴住居址	134
B	掘建柱建物址	134
C	方形周溝墓	134
	1 号方形周溝墓	134
	2 号方形周溝墓	134
	3 号方形周溝墓	137
	4 号方形周溝墓	137
2	遺 物	常盤井智行 137
(1)	竖穴住居・方形周溝墓出土土器	137
(2)	遺構外出土土器	138
(3)	小 結	138
第 6 章	平安時代	141
1	遺 構	望月静雄 141
A	竖穴住居址	142
(1)	H 1 号住居址	142
(2)	H 2 号住居址	142

(3)	H 3号住居址	143
(4)	H 4号住居址	143
(5)	H 5号住居址	144
(6)	H 6号住居址	144
(7)	H 7号住居址	144
(8)	H 9号住居址	144
(9)	H 11号住居址	144
(10)	H 12号住居址	149
B	掘建柱建物址	149
(1)	1号掘建柱建物址	149
(2)	2号掘建柱建物址	149
(3)	3号掘建柱建物址	149
(4)	4号掘建柱建物址	149
C	土塚墓	151
2	遺物	153
A	土器	常盤井智行 153
(1)	H 1号住居址出土土器	153
(2)	H 2号住居址出土土器	153
(3)	H 3号住居址出土土器	153
(4)	H 4号住居址出土土器	153
(5)	H 5号住居址出土土器	156
(6)	H 6号住居址出土土器	156
(7)	H 7号住居址出土土器	156
(8)	H 8号住居址出土土器	156
(9)	H 11号住居址出土土器	156
(10)	H 12号住居址出土土器	160
(11)	S K 1出土土器	160
(12)	S K 19出土土器	160
(13)	小結	161
B	石製品	望月静雄 165
C	土製品	165
D	鉄製品	165
第7章	大倉崎館跡の補遺調査	常盤井智行 167
(1)	郭内堀の調査	167
(2)	土塁の調査	167
(3)	出土遺物	167
第8章	結語	高橋 桂 173
付 編	飯山市上野遺跡の地質	早津賢二・小島正巳 176
	——旧石器群の層位と段丘形成年代——	



第3編 大倉崎遺跡の調査

第1章	調査の方法と経過	181
1	調査方法	181
(1)	調査方法	高沢秀徳・常盤井智行 181
(2)	調査区の設定	高沢秀徳 184
(3)	層序	常盤井智行 184
2	調査経過	高沢秀徳 184
第2章	縄文時代	188
1	遺構	常盤井智行 188
A	竪穴住居址	188
(1)	J 1号住居址	188
(2)	J 3号住居址	191
(3)	J 4号住居址	191
(4)	J 5号住居址	192
(5)	J 6号住居址	193
B	土壇	194
(1)	S K16・S K17	194
(2)	S K19・S K20・S K21・S K22	195
2	遺物	195
A	土器	195
(1)	土器の分類	常盤井智行 195
(2)	J 1号住居址出土土器	高沢秀徳 196
(3)	J 3号住居址出土土器	197
(4)	J 4号住居址出土土器	197
(5)	J 6号住居址出土土器	198
(6)	土壇出土土器	田村澁城 198
(7)	グリット出土土器	(8類のみ高沢秀徳) 199
(8)	E地点(OZII)出土土器	高沢秀徳 204
B	石器	常盤井智行 205
(1)	打製石器	205
(2)	磨製石器	206
(3)	石製品	206
第3章	中・近世	240
1	遺構	常盤井智行 240
A	土壇	240
B	溝	242
2	遺物	高沢秀徳 243
A	石塔製品類	243
B	銭貨	243

C	土器	243
第4章	その他の時代	常盤井智行 247
(1)	木棺墓SK11	247
(2)	弥生時代・古墳時代	248
(3)	平安時代・中世	248
第5章	結語	高橋 桂 249

## 挿 図 目 次

### 第1編 概 要

図1	国道117号線小沼湯滝バイパス路線	3
図2	遺跡群の位置	7
図3	対象遺跡の範囲	8
図4	日焼遺跡出土土器(1)	9
図5	日焼遺跡出土土器(2)	10
図6	屋株遺跡出土土器	11
図7	周辺遺跡分布図	14

### 第2編 上野遺跡の調査

図1	地区割設定図	19
図2	調査地周辺の地形	21~22
図3	土層模式図	23
図4	先土器時代地点分布図	27
図5	縄文時代遺構分布図	28
図6	弥生時代遺構分布図	29
図7	古墳時代遺構分布図	30
図8	平安時代遺構分布図	31
図9	遺構実測図(1)	32
図10	遺構実測図(2)	33
図11	遺構実測図(3)	34
図12	遺構実測図(4)	35
図13	遺構実測図(5)	36
図14	遺構実測図(6)	37
図15	遺構実測図(7)	38
図16	遺構実測図(8)	39
図17	遺構実測図(9)	40
図18	遺構実測図00	41

図19	遺構実測図(11)	42
図20	遺構実測図(12)	43
図21	先土器時代地点分布図	45
図22	層序	46
図23	第1地点遺物分布図	48
図24	Ⅱ区遺物分布図	49
図25	第2地点遺物分布図	50
図26	第3地点遺物分布図	51
図27	Ⅲ区遺物分布図	52
図28	1号礎群遺物分布図	53
図29	2号礎群遺物分布図	54
図30	第4地点遺物分布図	55
図31	第4地点集中部遺物分布図	56
図32	V区遺物分布図	57
図33	第5地点遺物分布図	58
図34	先土器時代石器形態分類図	60
図35	各区出土先土器時代主要石器一覧(1)	66
図36	各区出土先土器時代主要石器一覧(2)	67
図37	先土器時代の石器 1	68
図38	先土器時代の石器 2	69
図39	先土器時代の石器 3	70
図40	先土器時代の石器 4	71
図41	先土器時代の石器 5	72
図42	先土器時代の石器 6	73
図43	先土器時代の石器 7	74
図44	先土器時代の石器 8	75
図45	先土器時代の石器 9	76
図46	先土器時代の石器 10	77
図47	先土器時代の石器 11	78



図4	D地点( O Z I ) 調査地実測図(1).....	185	図28	遺構外出土土器(6) 第5類~第11類.....	221
図5	D地点( O Z I ) 調査地実測図(2).....	186	図29	遺構外出土土器(7) 第8類(1).....	222
図6	E地点( O Z II ) 調査地実測図.....	187	図30	遺構外出土土器(8) 第8類(2).....	223
図7	J 1号住居址P <sub>1</sub> ・P <sub>2</sub> .....	188	図31	遺構外出土土器(9) 第8類(3).....	224
図8	J 1号住居址.....	189	図32	E地点( O Z II ) 出土土器.....	225
図9	J 3号住居址.....	190	図33	出土石器(1).....	226
図10	J 3号住居址P <sub>1</sub> 下段.....	191	図34	出土石器(2).....	227
図11	J 4号住居址.....	192	図35	出土石器(3).....	228
図12	J 6号住居址.....	193	図36	出土石器(4).....	229
図13	土壇SK16・SK17.....	194	図37	出土石器(5).....	230
図14	縄文土器分類図1類.....	207	図38	出土石器(6).....	231
図15	縄文土器分類図2類.....	208	図39	出土石器(7).....	232
図16	縄文土器分類図3~5類.....	209	図40	出土石器(8).....	233
図17	縄文土器分類図6~11類.....	210	図41	出土石器(9).....	234
図18	J 1号住居址出土土器.....	211	図42	出土石器(10).....	235
図19	J 3号住居址出土土器.....	212	図43	出土石器(11).....	236
図20	J 4・6号住居址出土土器(1).....	213	図44	土壇墓実測図(1).....	241
図21	J 6号住居址出土土器(2).....	214	図45	土壇墓実測図(2).....	242
図22	土壇出土土器.....	215	図46	石塔製品(1).....	244
図23	遺構外出土土器(1) 第1類.....	216	図47	石塔製品(2).....	245
図24	遺構外出土土器(2) 第1類・第2類.....	217	図48	銭貨.....	246
図25	遺構外出土土器(3) 第2類・第3類.....	218	図49	木棺墓SK11.....	247
図26	遺構外出土土器(4) 第4類.....	219	図50	その他の時代の土器.....	248
図27	遺構外出土土器(5) 第4類.....	220			

## 目 次

### 第2編 上野遺跡の調査

表1	先土器時代石器計測表(1).....	101
表2	先土器時代石器計測表(2).....	102
表3	先土器時代石器計測表(3).....	103
表4	先土器時代石器計測表(4).....	104
表5	先土器時代石器計測表(5).....	105
表6	飯山地方の弥生土器編年表.....	126
表7	弥生時代石器計測表.....	132
表8	平安時代土器計測表(1).....	162
表9	平安時代土器計測表(2).....	163

表10	平安時代土器計測表(3).....	164
表11	平安時代石製品・土製品・鉄製品計測表.....	164

### 第3編 大倉崎遺跡の調査

表1	大倉崎遺跡地点一覧表.....	183
表2	掲載石器計測表(1).....	237
表3	掲載石器計測表(2).....	238
表4	掲載石器計測表(3).....	239
表5	土壇墓一覧表.....	240
表6	石塔出土地一覧.....	244
表7	銭貨一覧表.....	246

## PLATE 目次

- PL 1 遺跡航空写真  
(上野遺跡)
- PL 2 調査開始式  
雑木の整理  
重機による表土除去
- PL 3 II区の調査  
IV・V区の調査
- PL 4 I・II区  
II区
- PL 5 III区  
IV区
- PL 6 IV・V区遺構上面検出状況  
IV・V区遺構完掘状況
- PL 7 第4地点  
第4地点石器出土状態
- PL 8 第4地点北方尖頭器出土状態  
第4地点北方尖頭器出土状態  
第4地点土層
- PL 9 第2地点東方石器出土状況  
第1号磔群  
第2号磔群
- PL 10 溝状土壇
- PL 11 Y1号住居址  
Y2号住居址  
Y2号住居址P<sub>2</sub>土器出土状態
- PL 12 Y3号住居址 遺物出土状態  
Y3号住居址 完掘状態  
Y3号住居址 竊出土状態
- PL 13 Y5号住居址 遺物分布状態  
Y5号住居址 完掘状態  
Y5号住居址 竊・石斧出土状態
- PL 14 Y4号住居址  
Y6号住居址 上面輪郭  
Y6号住居址 完掘状態
- PL 15 Y7号住居址 上面輪郭  
Y7号住居址 完掘状態  
Y7号住居址 小型壺出土状態
- PL 16 Y8号住居址 遺物分布状態
- PL 16 Y8号住居址 土器出土状態  
WC-20地区 石包丁出土状態
- PL 17 SK12木口痕跡  
SK13・SK15  
SK16
- PL 18 H9号住居址 遺物分布状態  
H9号住居址 完掘状態  
H9号住居址 二重口縁壺出土状態
- PL 19 3号方形周溝墓(SD3)完掘状態  
1号方形周溝墓(SD1)完掘状態  
2号方形周溝墓(SD2)完掘状態
- PL 20 1号方形周溝墓周溝とMSK13の切り合い関係  
2号方形周溝墓周溝内土器出土状態SB5
- PL 21 H2号住居址の完掘状況  
H3号住居址の中から伸びる溝状遺構  
H3号住居址の遺物分布状況
- PL 22 H4号住居址の遺物分布状況  
H5号住居址の遺物分布状況  
H5号住居址の完掘状況
- PL 23 H6号住居址の遺物分布状況  
H7・H8号住居址の輪郭  
H7号住居址完掘状況
- PL 24 H8号住居址完掘状況  
H12号住居址の輪郭  
H12号住居址遺物分布状況
- PL 25 H11号住居址の輪郭  
H11号住居址完掘状況  
H11号住居址カメラド
- PL 26 SB3・4  
SK1出土状況  
SK19
- PL 27 小学生の遺跡見学  
ベルトコンベアーの移動  
雨天時の土器洗い作業
- PL 28 大倉崎館跡、外堀と郭内堀断面  
郭内堀完掘状態
- PL 29 郭内堀土層断面  
土層土層断面



- PL 30 先土器時代の石器 (1) I 区・II 区
- PL 31 先土器時代の石器 (2) II 区
- PL 32 先土器時代の石器 (3) III 区
- PL 33 先土器時代の石器 (4) III 区・IV 区
- PL 34 先土器時代の石器 (5) IV 区
- PL 35 先土器時代の石器 (6) IV 区
- PL 36 先土器時代の石器 (7) V 区
- PL 37 縄文時代の土器
- PL 38 弥生時代の土器 (1) Y 2 号住居址
- PL 39 弥生時代の土器 (2) Y 3 号住居址
- PL 40 弥生時代の土器 (3) Y 6・Y 7・Y 8 号住居址
- PL 41 弥生時代の土器 (4) Y 5 号住居址、各地区
- PL 42 弥生時代の土器 (5) 各地区
- PL 43 弥生時代の土器 (6) 各地区
- PL 44 弥生時代の石器 (1)
- PL 45 弥生時代の石器 (2)
- PL 46 弥生時代の石器 (3)
- PL 47 弥生時代の石器 (4) 紡錘車
- PL 48 古墳時代の土器 (1) H 9 号住居址
- PL 49 古墳時代の土器 (2) 方形周溝墓、各地区
- PL 50 平安時代の土器 (1) H 1・H 2・H 3 号住居址
- PL 51 平安時代の土器 (2) H 4・H 5 号住居址
- PL 52 平安時代の土器 (3) H 6・H 7・H 8 号住居址
- PL 53 平安時代の土器 (4) H11号住居址
- PL 54 平安時代の土器 (5) H11・H12号住居址
- PL 55 平安時代の土器 (6) H12号住居址、SK1・SK19
- PL 56 平安時代の石製品
- PL 57 平安時代の鉄製品・鉄滓、中世以降の銭貨
- (大倉崎遺跡)**
- PL 58 近景  
重機による表土はぎ
- PL 59 調査に参加した人たち  
墓地に隣接した調査地の西側
- PL 60 J 1 号住居址検出状況  
J 3 号住居址  
J 6 号住居址
- PL 61 SK11(右)の木棺墓とSK12(左)の確認状態  
F<sub>1</sub>の検出面より出土した土器片  
SK17検出面に出土した土器片
- PL 62 SK14上面の有孔土器出土状況
- PL 62 SK20の土器出土状況  
SK21の土器出土状況
- PL 63 土器出土状況  
第3類土器出土状況  
石皿出土状況  
石皿、その他石器類出土状況
- PL 64 五輪塔の火輪などの出土状況 (SK1)  
笠と水輪の出土状況 (SK3)  
火輪と水輪出土状況 (SK9)
- PL 65 空・風輪と水輪出土状況 (SK5)  
有孔土器出土状況 (SK14・15)  
木棺墓の半掘状況
- PL 66 SK17の土層断面  
SK17の調査  
木棺墓の完掘 (SK11)
- PL 67 J 1 号住居址  
J 1 号住居址調査風景  
J 1 号住居址
- PL 68 J 3 号住居址調査風景  
J 3 号住居址調査風景  
J 3 号住居址遺物出土状況
- PL 69 J 6 号住居址調査風景  
J 6 号住居址遺物分布状況  
J 6 号住居址セクション
- PL 70 調査風景  
SK7の完掘状況
- PL 71 J 4 号住居址完掘状況  
J 6 号住居址完掘状況
- PL 72 道路用地の遺構・遺物の確認調査  
調査風景  
土器の出土状況
- PL 73 確認調査地  
完掘状況
- PL 74 J 1 号住居址出土土器
- PL 75 J 3 号住居址出土土器
- PL 76 J 6 号住居址出土土器
- PL 77 J 3・6号住居・グリット出土土器
- PL 78 J 6号住居址・SK17・20出土土器
- PL 79 SK18・21出土土器
- PL 80 グリット出土土器 (1) (第1類)

- |      |                           |      |          |
|------|---------------------------|------|----------|
| PL81 | グリット出土土器 (2) (第2類)        | PL87 | 出土石器 (1) |
| PL82 | グリット出土土器 (3) (第3類)        | PL88 | 出土石器 (2) |
|      | グリット出土土器 (4) (第4類)        | PL89 | 出土石器 (3) |
| PL83 | グリット出土土器 (5) (第4類)        | PL90 | 出土石器 (4) |
|      | グリット出土土器 (6) (第5・7・9・11類) | PL91 | 出土石器 (5) |
| PL84 | グリット出土土器 (7) (第8類)        |      | 銭 貨      |
| PL85 | グリット出土土器 (8) (第8類)        | PL92 | 出土石塔類    |
|      | グリット出土土器 (9) (第10・11類)    | PL93 | 弥生～中世の土器 |
| PL86 | E地点 (OZII) 出土土器           |      |          |

# 第1編 概 要

要 題 目 録

# 第1章 序 説

## 1 調査に至る経過

一般国道117号線は、長野市を起点とし、千曲川から信濃川沿いに新潟県十日町市を経て小千谷市に至る総延長110.9kmの国道である。隘路打開と高速交通網へのアクセス道路として改良・整備が行われている。

この一環の工事として行われている小沼湯滝バイパス建設のうち、柏尾橋～大関橋間の建設工事は、昭和63年度より着工することとなった。ところが、着工間際になってこの区間内に6か所の埋蔵文化財包蔵地が存在することが明らかとなり、急遽発掘調査を実施することとなった。このことの詳細については、「報告1」で詳細に触れている。結果的には、昭和63年度で4か所（日茂・南原・屋株・大倉崎館）、平成元年度で2か所（上野・大倉崎）を実施することとなった。また、昭和63年度に保存協議を行った大倉崎跡跡の補遺調査も平成元年度に実施することで関係機関との間で調整がなされた。

平成元年度の調査に至る経過は以下のとおりである。

### 昭和63年

11月9日 県教育委員会文化課小林・見玉両指導主事、県建設事務所、高橋桂氏および市教育委員会で現地協議を行う。

12月17日 県教育委員会教育長より市教育長あて「国道117号バイパス改良工事に伴う上野遺跡他の保護について」の通知があった。上野遺跡は、5,000㎡、大倉崎は3,000㎡以上発掘調査を実施し、記録保存を計る旨の計画書およびその予算書が示された。

### 平成元年

5月29日 昭和63年度委員並び平成元年度委員の新旧役員合同会議を開催する。この席で、調査会新委員および調査団員の委嘱状を交付する。63年度調査の報告、元年度事業の計画案等について協議を行う。

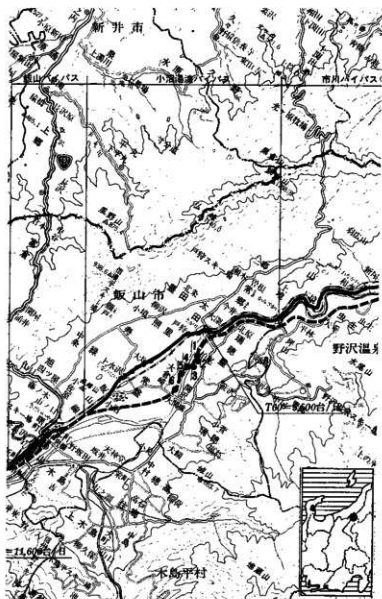


図1 国道117号線小沼湯滝バイパス路線(破線) 1 日茂遺跡、2 南原遺跡、3 屋株遺跡、4 大倉崎館跡、5 上野遺跡、6 大倉崎遺跡(一般国道117号概要より)



6月7日 飯山建設事務所長より市教育長あて「国道117号線国補道路改良工事に係る埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について」の協議書の提出があった。

6月9日 飯山建設事務所長と市教育長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」が締結される。

6月13日 上野遺跡に於て、調査会各委員出席のもとに調査開始式を開催。調査説明など行った後調査に入る。

## 2 調査と整理

### A 発掘調査

今次対象となった遺跡は、上野遺跡・大倉崎遺跡および大倉崎館跡の補遺調査であり、総面積は約8,000㎡、調査期間を6月中旬より11月中旬の約5か月間を予定とした。ただし、面積的に広大であり、また道路という関係上幅員15mと狭く、その分道路全長が長いため調査を進めるに当たっては色々な部分で支障があった。各遺跡の調査については各編で触れることとし、以下に発掘調査の概要を示す。

#### 上野遺跡

所在地 飯山市大字常盤字外和柳3921-11ほか

調査期日 平成元年6月13日～同年9月19日、調査面積5,000㎡

調査結果 先土器時代・弥生時代・古墳時代・平安時代各集落址・墓塚

#### 大倉崎遺跡

所在地 飯山市大字常盤字外和柳3864-41ほか

調査期日 平成元年9月20日～同年11月21日

調査面積 2,500㎡

調査結果 縄文時代前期集落址・弥生時代遺物・平安時代木棺墓・中世以降土墳墓

#### 大倉崎館跡（補遺調査）

所在地 飯山市大字常盤字外和柳3921-27ほか

調査期日 平成元年9月8日～同年10月5日

調査結果 土塁・堀調査、下層遺構＝弥生時代住居址・古墳時代方形周溝墓・平安時代土墳墓

調査会組織および作業参加者・協力者は以下のとおりである。

### 国道117号線関係遺跡調査会名簿（平成元年度）

顧問	小野沢 静 夫（飯山市長）
会長	浦野 昌 夫（飯山市教育長）
副会長	佐藤 清（飯山市教育次長）
委員	高橋 柱（日本考古学協会員）
	藤沢 賢一郎（飯山市議会議員）
	稲崎 實（上野区長）
	丸山 淳 一（大倉崎区長）
	高橋 貫 一（市公民館常設分館長）
	市川 和 夫（市建設課監理係長）
	西川 允 久（市建設課監理係主査）
事務局長	渡辺 博（市教育委員会社会教育係長）

事務局員 望月 静雄（市教育委員会社会教育係）  
" 榎山 二二子（市教育委員会臨時職員）

### 調査団

団長 高橋 桂（飯山南高等学校教諭）  
調査主任 高沢 秀徳  
調査員 田村 規城  
常盤井 智行  
望月 静雄

#### 発掘調査参加者

（上野遺跡・大倉崎遺跡）

（上野）万場キヨノ 小出まさ子 徳永愛子 万場くに 富岡みえ子 小出えい 万場とみ子 万場恭枝  
（大倉崎）鈴木操 丸山信隆 梨元智年 鈴木ため 丸山さだ子 今清水薫 丸山光子 今清水ちよ子  
小坂三次 鈴木みち 鈴木奈美（戸狩）小林経雄 竹内大五郎 北条辰男 大森信衛 森祐美子 峰村  
真美子（関沢）鷺野吉太郎（柏尾）出沢利雄 岸田今朝二（中条）清水志よ子（北畑）猪瀬光治  
（鹿野）宮沢純子（五荷）上原安（大深）栗林實（新町）高橋昭二（上倉）藤沢信善（奈良沢）  
清水三名 高橋茂 小林新治 丸山三二 達家わか の 常田利夫 村松修司 岡田勤 高橋右内（市ノ  
口）北山けさえ 上野松雄（木島平村穂高）土屋勲（高校生）森里美 長谷川恵 阿部浩美 金井久  
江 樋口愛子 富岡徹 丸山弘之 丸山和人 村上英樹 小林重希 鈴木聖久 小林耕彦 藤澤徹 滝沢  
裕理 服部勝利 樋口史 大島二郎 田中順一 阿藤さと子 塚田美紀 神田真由美 丸山ひろみ 岸田  
彩 小林恵理 佐藤美香 宮本ひろみ 山川あけみ 大熊由美 小林優美 鈴木早苗

#### 調査協力者・機関（敬称略）

小出久美子 小出大暎 小出一男 小林佑幸 鈴木元義 太田信事 小坂忠三 丸山幸雄 美妙寺（藤  
本智祐住職）

飯山建設事務所 中部土地改良区 上野区 大倉崎区墓地委員会（佐藤耕三委員長） 大倉崎区道路委  
員（鈴木一委員長） 大倉崎区園場整備委員会（鈴木松三委員長）

### B 整理作業と報告書の作成

現場における調査は、11月21日に全て終了した。整理作業は、旧第三中学校寄宿舎を借用し、12月1日  
よりスタートした。遺物洗浄は現地で大半行ったため、12月中旬には完了した。整理手順は、図面整理・  
台帳整備・照合・接合などを分担して行ったが、整理期間に限られている関係上遺物照合・接合などは充  
分に行うことができなかった。また、図版類の作成には調査員のほか多くの作業員が参加した。本書の作  
成については、主として遺物については常盤井・高沢・望月、写真については田村があたった。執筆分担  
については目次に掲げた。編集は高橋団長指導のもと調査員全員が行った。

整理作業指導 高橋 桂

#### 整理作業参加者

常盤井 智行・田村 規城・高沢 秀徳・榎山 二二子・高橋 ひとみ・坂本 房江・小林 龍子・綿  
田 茂実・小林 みさを・山崎 満枝・北山 けさえ・竹内 大五郎・北条 辰男・小林 経雄・小川  
ちか子・坪根 まどか・田村 邦子・望月 静雄

## 第2章 遺跡群の位置と環境

### 1 遺跡群の位置

上野・大倉崎両遺跡は、長野県飯山市大字常盤字外和柳に所在する(図2)。

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の峡谷地帯(通称 市川谷)を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南段丘群を形成してやがて日本海に注ぐ。

飯山盆地は南北に16km、東西6kmの紡錘形を呈し、盆地底の標高は300~320mを計る。西縁は、黒岩山(938.6m)、鍋倉山(1288.8m)等比較的低い関田山地によって画されている。ここには越後へ通ずるいくつかの峠道が存在している。一方東縁は、毛無山(1640.98m)等三回山脈の支脈によって、また断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。平地は、盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。西側は、飯山市街地より戸狩地区に至る長さ7kmに及ぶ長峰丘陵を介在させて、西側に外様平、東側に常盤平が広がり、当地方最大の穀倉地帯となっている。東側は、その南半にかつての千曲川氾濫原である木島平が広がるが、千曲川が東縁に近接するにしたがって段丘・丘陵などの微高地が開析谷を隔てて連続的に連なるといった複雑な地貌を呈している。遺跡が位置する大倉崎・上野丘陵は、常盤平の東端に位置するが、千曲川を挟んで盆地東縁の段丘群と相対している。

飯山盆地は、第三紀水成層を基盤とし、褶曲構造によって形成されたとされている。すなわち、西側を画する関田山地、盆地中央の長峰丘陵が背斜部に相当し、外様平・常盤平が向斜部となる。遺跡の位置する大倉崎・上野丘陵も背斜部分に相当し(中村 1962)、対岸の瑞穂地区の段丘とは千曲川の下刻により分断されたとされている。この段丘は、上位・下位の二面に分けられるが(小泉 1979)、大倉崎・上野丘陵は前年度調査した日焼・屋株遺跡が立地する段丘と同様に下位段丘に含まれる。

大倉崎・上野丘陵は、南北に約1.4km、東西0.3kmの細長い残丘状を呈している。西の常盤平へはなだらかに傾斜しているが、東側は千曲川の侵食により急崖となっている。特に北半の上野区では千曲川の攻撃斜面となっており、断崖となっている。

上野遺跡は、丘陵北半の上野地区全体が遺跡の範囲と考えられる。大倉崎遺跡は、南側で最も標高の高い地区を中心にして美妙寺から常盤神社にかけての範囲である。また東の千曲川にかけては新期の河岸段丘が形成されている。

遺跡のすぐ南側には県道小沼～関沢線が通り、大関橋が架かっている。

### 2 遺跡群の範囲と現況

#### A 昭和63年度調査分の遺跡

今次の対象となった遺跡は、上野遺跡・大倉崎遺跡の二遺跡と大倉崎館跡の補遺調査である。昭和63年度調査分については、『小沼湯滝バイパス関係遺跡調査報告I』で触れているが、あらためて簡単に触れておきたい。

##### (1) 日焼遺跡

遺跡は千曲川河岸にあり、約5000㎡の範囲に及ぶものと推定されている。調査された箇所は予割していた範囲の東北端にあたり、分布の末端と把握されていた。しかし調査によって2000点にものぼる石器群が

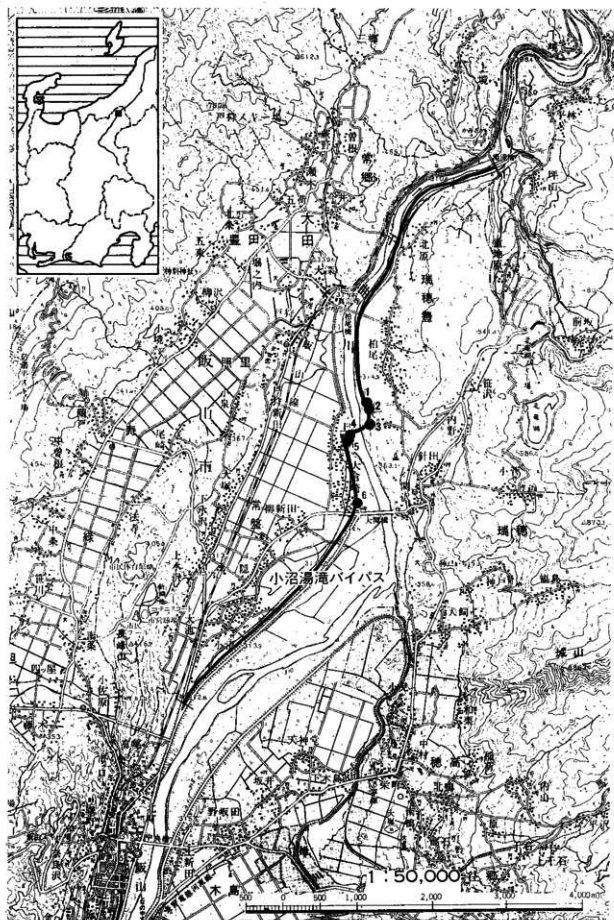


図2 遺跡群の位置 1:50,000 1.日焼遺跡 2.南原遺跡 3.里株遺跡 4.大倉崎館跡 5.上野遺跡 6.大倉崎遺跡

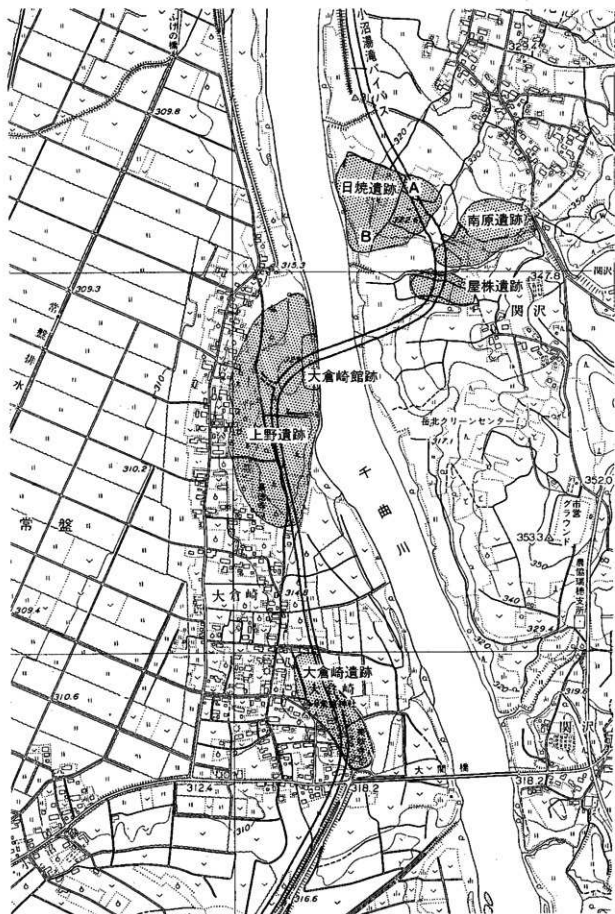


図3 対象遺跡の範囲 (1:10,000) (平成元年度 上野・大倉崎遺跡)

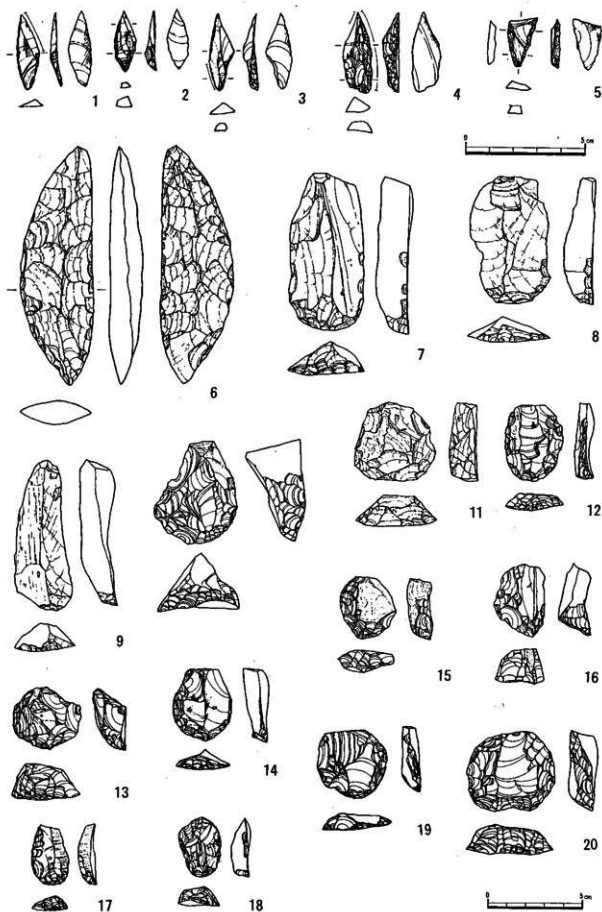


图4 日烧遗址出土石器(1) (3:5 1:2)

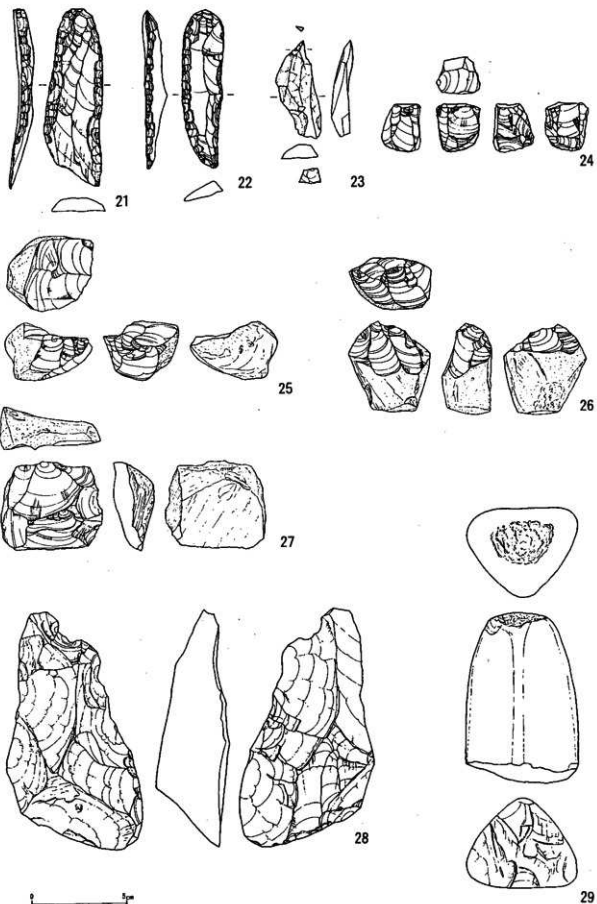


图5 日烧遗址出土石器(2) (1:2)

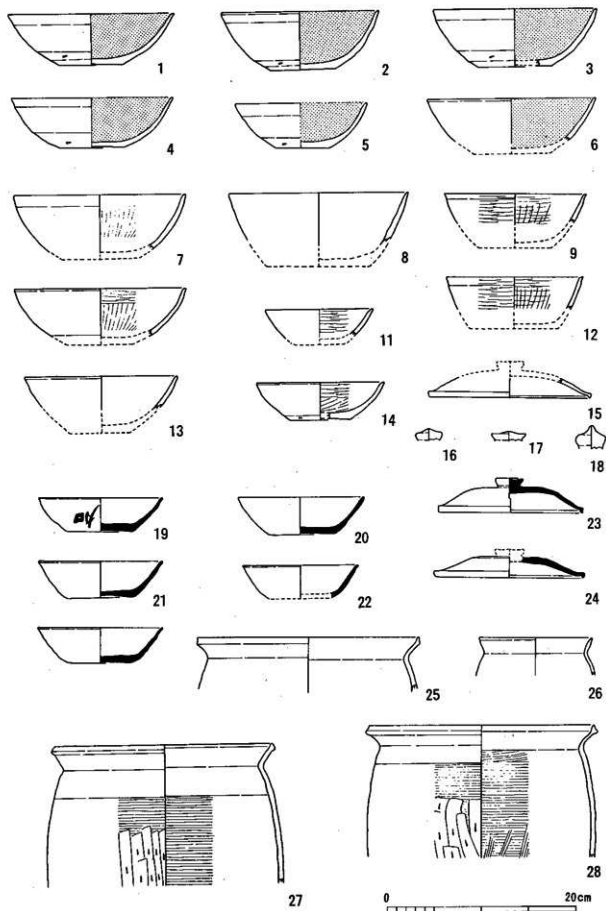


图6 屋株遺跡出土土器 (1:4)



検出され(図4・5)、遺跡の中心地と考えられた。また、既出資料が採集された地区は遺跡の南西の崖線部が中心であって、石器群にも多少の相違が認められる。したがって調査した地区をA地点、南西地区をB地点と呼称することとした。

現況は畑地であり、調査箇所以外は良好に保存されているが、道路開通と同時に開発が懸念される。

## (2) 南原遺跡

バイパス建設部分は、遺跡の南端をかすめた程度であって、大部分は畑地のまま保存されている。調査によっても時期不詳の土埴・溝状土埴・柱穴群等とともに剥片が僅かに出土したのみであった。遺跡の主要部分は段丘平坦面の部分に広がると考えられている。なお、今まで縄文時代前期・中期・後期の土器・石器、弥生時代後期の土器が採集されているが、それぞれ地点を若干異にしている。

弥生時代の中心地は、段丘上面のやや北寄りに集中しており、通称「境沢」の小河川に面している。

バイパス敷設に伴う取り付け道路がかかる可能性がある。

## (3) 屋株遺跡

関沢地区屋株集落をのせる段丘より一段低い日焼遺跡面と同じ段丘面にあり、南北を河川による開析により独立した舌状台地となっている。バイパスのルートは遺跡を横断する形で通過することとなった。調査によって、先土器時代の尖頭器・縄文時代前期後半の土器等とともに、平安時代の竪穴住居址1軒を検出した。中心部はさらに千曲川に寄った西側で約3000㎡の範囲に存するものと思われる。

## (4) 大倉崎館跡

今次に補遺調査を行っているので、詳細は第2編第8章にゆずる。14～15世紀の中世居館跡で、輸入陶磁器・瀬戸美濃陶器・瓦質土器・鉄製品など多数検出された。また、土塁・堀は遺存状態がよく、特に幅10m、深さ5mの堀は雄大で、周辺の館跡には見られない。

## B 上野遺跡

上野遺跡は以前より周知されており、「村史ときわ」にも弥生時代の項に遺跡名が掲げられている(桐原 1968)。また、「遺跡分布調査報告Ⅰ」では、先土器時代～平安時代までの遺物が採集報告されており、一部土取りによって平安時代の竪穴住居址の検出も報告されている(飯山市教委 1977)。ただし、当時の遺跡の範囲は畑地などの耕作地で発見された部分を中心に範囲指定されたもので、今回の調査結果によれば、南北約600m、東西約300mの大遺跡で、上野の小丘全体が遺跡と考えられる。また、時代別に分布も相違しており、時期的な変遷も把握できた。

バイパス通過により、現在の雑木林は大きく変化するであろうし、取り付け道路や住宅などの進出によって遺跡の保存が困難になることも予想される。

## C 大倉崎遺跡

古くよりその存在が知られていた遺跡で、昭和22年堤防の土取りによって住居址2軒が発見されている。また、昭和45年・48年にも調査が行われ、住居址2軒および土器・石器が出土している(高橋 金井 中島・1976)。報告文のなかで、諸磯b式期を細分してその後半に位置付けた。

遺跡は、美妙寺から常盤神社付近までを中心とした範囲である。遺跡は、土取り・宅地・墓地などによって破壊されつつあり、今回のバイパス通過によりほとんど消滅しようとしている。

## 3 周辺遺跡

遺跡の所在する常盤大倉崎・上野地区及び対岸の瑞穂地区にかけては、多くの遺跡が存在している。た

だ分布については、必ずしも明確に把握しているわけではない。以下に明らかな部分について時代別に述べて行くことにする。

## A 先土器時代

飯山地方で最も濃密に分布が認められている地域である。発掘調査がなされている遺跡は、太子林(21)、関沢(22)がある(飯山市教委 1981 望月 1982 a b)。また本事業によって、昭和63年に調査した日焼(13)遺跡では当該期の良好な石器群を検出し、屋株遺跡でも若干出土している(飯山市教委 1989)。このほか調査はなされていないが、千莉(24)(中島 1982)をはじめ城ノ前(28)、木原(31)、北竜湖(36)内野(37)でも良好な石器が採集されている(高橋 1980)。

以上の遺跡の立地は、大部分が千曲川河岸の段丘上に立地しており、千曲川と密接な関係を有していたことは想像に難くない。また、北竜湖例は湖沼周辺に立地する遺跡の典型例として注目される。

## B 縄文時代

縄文時代に属する遺跡で最も古い土器が採集されているのは北竜湖遺跡(36)である。湖岸より表裏縄文・押型文・条痕文系土器片が採集され、草創期・早期に位置づけられる(高橋 1980)。道添遺跡(18)でも条痕文系土器が採集されている。

前期の遺跡では、今回調査した大倉崎遺跡以外は量的にも少量の遺跡がほとんどである。大倉崎遺跡に近い瀬付遺跡(5)、北竜湖遺跡(36)、宮中遺跡(23)、太子林遺跡(21)などで出土している。宮中遺跡は、昭和53年に市立東小学校建築にともない試掘調査を行い、諸磯b式に比定される格子目土器が出土したが、遺構は検出されなかった(飯山市教委 1979)。また、太子林遺跡は昭和55年に調査が行われ、有尾式土器片と土壌が検出されている(飯山市教委 1981)。

中期の遺跡では、まず上ノ原遺跡(17)が挙げられる。調査は行われていないが、舌状台地の縁辺から大量に採集されている。五領ヶ台系・阿玉台系土器が若干認められるものの、多くは蓮華文・格子文などを特徴とする北陸の新保・新崎式土器に比定される土器が多い(高橋 1980 a)。このほか宮中では古くから土器片が多く採集されている。

後期では宮中遺跡(23)が重要である。昭和55年の調査によってわずか100㎡の範囲に23基の石棺墓が検出された。墓境内より浅鉢が伏せた状態で出土し、さらに浅鉢の中から竹製の漆塗櫛が出土している。他の石棺墓からも碧玉・耳栓状耳飾りが出土している。周辺より出土した土器より堀ノ内・加曾利B式期に比定している(高橋 1980 b)。なお北竜湖遺跡でも若干出土している。

晩期の遺跡は、当該地区では確認されていない。

## C 弥生時代

稲作が開始された弥生時代は、飯山地方では秋津田草川尻遺跡・長峰丘陵上の諸遺跡(7~10)が著名であり、瑞穂地区では太型蛤刃石斧が単独で採集されていたにすぎない。今回の調査によって上野遺跡で集落址を確認できたことで常盤平の一部が水田として活用されていたことが推定されると同時に、河東の瑞穂地区でも今後確認される可能性が高いと考えられる。

なお、長峰丘陵上の遺跡のうち分布図に示した遺跡は、旧照里小学校遺跡(8)、光明寺前遺跡(9)、照丘遺跡(10)の3遺跡である。調査が行われたのは照丘遺跡で、弥生中期栗林式土器・建築用材と推定される木製品等が出土している(高橋 1962)。



図7 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

1. 上野 2. 大倉崎館 3. 大倉崎 4. 大倉崎Ⅱ 5. 瀬附 6. 真宗寺 7. 岡峰 8. 旧照黒小学校
9. 光明寺前 10. 照丘 11. 上野Ⅱ 12. 柏尾南館 13. 日焼 14. 南原 15. 塚ノ沢 16. 尾株
17. 上ノ原 18. 道添 19. 水出口 20. 向峰古墳群 21. 太子林 22. 関沢 23. 宮中 24. 千苜
25. 大銅館 26. 飯綱堂古墳 27. 猿飼田 28. 城ノ前 29. 神戸古墳 30. 神戸城 31. 木原
32. 尾崎 33. 寺下 34. 南竜池 35. 小菅神社里宮 36. 北竜湖 37. 内野 38. 上野古墳

## D 古墳時代

三世紀末から七世紀にかけて王もしくはそれにつかえた豪族たちが大きな墳丘の墓を造った時代である。上野古墳(38)、向峰古墳群(20)、飯綱堂(狐塚)古墳(26)、神戸古墳群(29)が確認されている。飯綱堂古墳では石室が露呈しており、土師器・鉄鏡が出土したという。また、照丘遺跡では円形周溝が検出され、古墳の周溝の可能性がある(高橋 1968)。しかし、当該期の遺物が多く出土するような集落址と推定できる遺跡は発見されていない。おそらく今後確認されるであろう。

## E 古代・中世

奈良時代以降をまとめて概観する。現在までのところ明確に奈良時代に比定できる遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡では尾崎遺跡(32)、屋株遺跡(16)、大倉崎II遺跡が挙げられる。尾崎遺跡は、園場整備によって無残にも破壊されてしまったが、多量の土師器片が採集されている。屋株遺跡は、昭和63年に調査がなされ、堅六住居址1軒、土壇が検出され、須恵器環・蓋、土師器環・甕等が出土している。年代は9世紀中～後半におかれる。大倉崎II遺跡は千曲川べりの新期河岸段丘上にあり、やや小高くなっている。今回調査された上野遺跡の平安期集落址との関係や生業について、注目される立地環境である。

平安時代末から中世にかけては判然としにくい部分が多い。城館跡は、大倉崎館跡(2)、柏尾南館跡(12)、関沢館跡、大岡館跡(25)、神戸城跡(30)などが確認されている。大倉崎館跡は前年度及び今回の調査で明らかになった部分が多い。また、集落遺跡は、現在までのところ調査を行っていないし、また確認もされていない。これは、中世の考古学的調査が充分に行われた経過がないためであって、今後明確になるであろう。例えば、大倉崎地区内で中世珠洲系陶器の完形品が発見されており、集落址の存在を裏付ける資料が出はじめつつある。

## 引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1977 『遺跡分布調査報告Ⅰ』  
飯山市教育委員会 1979 『宮中遺跡—分布確認調査報告一』  
飯山市教育委員会 1981 『太子林・関沢遺跡』  
飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』  
飯山市教育委員会 1989 『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』  
桐原 達 1968 「常盤のあけぼの」 『村史ときわ』 常盤村史刊行委員会  
小泉武栄 1980 「瑞穂の地形分類」 『新編瑞穂村史』 瑞穂村史刊行会  
高橋 桂 1962 「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」 『信濃14—11』 信濃史学会  
高橋 桂 1968 「長野県飯山市照里環状周溝遺跡調査略報」 『信濃20—4』 信濃史学会  
高橋 桂・中島庄一・金井正三 1976 「北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告」 『信濃28—4』 信濃史学会  
高橋 桂 1980a 「瑞穂のあけぼの」 『新編瑞穂村史』 瑞穂村史刊行会  
高橋 桂 1980b 「宮中遺跡発掘調査—石椁状遺構を中心として」 『高井51』 高井地方史研究会  
中島庄一 1982 「北信濃地域における尖頭器を伴出した石器群について」 『信濃34—4』 信濃史学会  
中村二郎 1962 「飯山地方周辺の地質」 『信濃教育 907』 信濃教育会  
望月静雄 1980 「飯山市北竜湖採集の片刃石斧」 『高井51』 高井地方史研究会  
望月静雄 1982a 「太子林・関沢遺跡」 『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡北・東信』 長野県史刊行会  
望月静雄 1982b 「北信濃関沢遺跡の石器群」 『信濃34—4』 信濃史学会



## 第2編 上野遺跡の調査

要 題 目 録

# 第1章 調査の方法と経過

## 1 調査方法 (図1・2)

調査対象地は、長さ約400m、幅12~15mで面積は約5000m<sup>2</sup>である。当初より遺跡の中心部を縦断するとの予測をもち、全面が削平されることから出来るかぎり全面を調査することを計画した。現況は、南側約100mは畑地であるが、それ以外は雑木林となっており、また一部には墓地も造営されていた。

グリット基本ポイントは、バイパス建設工事用ポイントのNo49+80とNo49を用いこのラインをY軸とし、直角に振ってX軸とした。グリット間隔は、5mとし、座標軸は、第4象限を使用した。呼称はX軸がA・B・C・・・とし、Y軸は1・2・3・・・とした。また、Y軸があまりにも長くなるために、便宜的に100m毎にI区からV区に分割した。したがって、Y軸は20で次の区に移ることになる。グリットの呼称は、例えばIII区C-5というようにした。(なお、前年実施した大倉崎館跡の地区は、本書においては今後のグリットにあわせてVI区として報告する。)

調査は、時間的な関係もあって表土はすべてバックホーによって除去した。残土処理については、全面調査の関係から調査区外へ運搬する必要があったが、近隣地権者に配慮いただき近接した場所に搬出することができた。この搬出作業には、ベルトコンベアー6台を使用して行った。また、一部の地区で墓地および遺構の認められなかった箇所があったために土置場とした。

調査方法は、耕作土以下に包含される遺物については、全てドット化しレベルを記録することとし、遺構内出土遺物は上記作業とともに微細図を作成することとした。また、ナンバーリングは、遺構外出土遺物はグリットナンバーを、遺構内は略記号を付して取り上げた。例えば弥生時代1号住居址No1は、Y1住1としている。ただしこの方法は、遺存状態により略した遺構も多い。

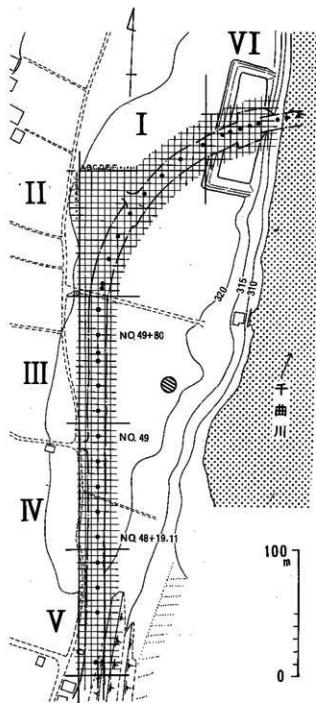


図1 地区割設定図 1:3000



## 2 経 過

### A 調査概要

#### (1) 層 序 (図3)

上野遺跡の基本的な層序は、上から暗灰色土(表土)、黒色土、淡褐色土(漸移層)、黄色粘土(地山)となる。暗灰色土(表土)は厚さ約15~30cm。黒色土は厚さ15~50cmで千曲川寄りの館跡近辺で厚い。黄色粘土(地山)は厚さ20~50cmで、その下はⅡ区より南部では茶褐色のかたい粒を含む黄色粘土層であり、北部では黄白色のシルトである。

遺構検出面は淡褐色土層上面である。遺構切り込み面は壁面および畔の観察によれば、弥生・平安時代ともに黒色土中だと考えるが実際に肉眼で観察してもその境はよくわからない。

#### (2) 遺跡の概要

上野遺跡は上野丘陵全体にまたがる遺跡でそこを縦断する今回の発掘では、先土器・縄文・弥生・古墳・平安・中世の各時代の遺構遺物が検出され、各時代にわたる複合遺跡であることが判明した。

#### (a) 先土器時代(図4)

I区~V区にかけて、5集中地点・2礫群を検出している。集中地点は、弥生・平安時代の遺構により、攪乱されている部分が多い。礫群はⅢ区において、2ヶ所検出されている。純粋な厨房施設と考えられる出土状態であった。

出土した石器は、各地点で石材や組成に若干の相違が認められるが、時期的に大きな差はないと考えている。器種別では、尖頭器・搔器を中心としている。石材は、地元産の安山岩のほか玉髓が多用され、しかも搔器との結びつきが強い。搬入品とも考えられる。時期的には「横倉型」尖頭器が出土しているところから、先土器時代末期に位置づけられると思われる。玉髓製の搔器もこれに伴うものであり、石刃技法の盛行・使用石材の変化等について重要な指針を与えている。

#### (b) 縄文時代(図5)

縄文時代に属する明確な遺構は検出されていないが、遺構の切り合い関係や、小動物の落し穴とも考えられることから、合計13基確認されている「溝状土壇」(MSK)を当期の遺構としておいた(MSK 1~13)。

出土遺物も遺構に伴うものはないが、調査地全域から散在して土器・石器などがある。

土器は南隣の大倉崎遺跡と同様な前期後半の諸磯様式のものが多い。

#### (c) 弥生時代(図6)

弥生時代は中期の竪穴住居7軒(Y1住~Y6住・Y8住)と、後期の竪穴住居1軒(Y7住)、掘立柱建物2軒(SB6・SB7)、木口板をもつ木棺墓(土塚墓)群などの遺構と土器・石器・勾玉・紡錘車などの多量の遺物が検出されており、当遺跡でも中心的な位置をしめる。

竪穴住居は中期のものが円形で後期になると方形となる。中期のものは多数の主柱穴が円形に配置される大形のもの(Y3・Y5・Y8住)と、4本ないし5本の主柱穴をもつ小形のもの(Y2・Y6住)がある。

掘立柱建物は弥生時代であるという積極的な根拠はないが、1間×5間(SB7)という構造や、SB6・SB7周辺の出土土器が弥生時代のものにほぼ限られていることから当期に含めておいた。

木棺墓(土塚墓)群は弥生時代の墓制や、集落と墓域にかかわる資料として重要である。

土器は、中期後半の粟林式に相当するもので、中には粟林I式に遡る可能性があるものもある。後期の

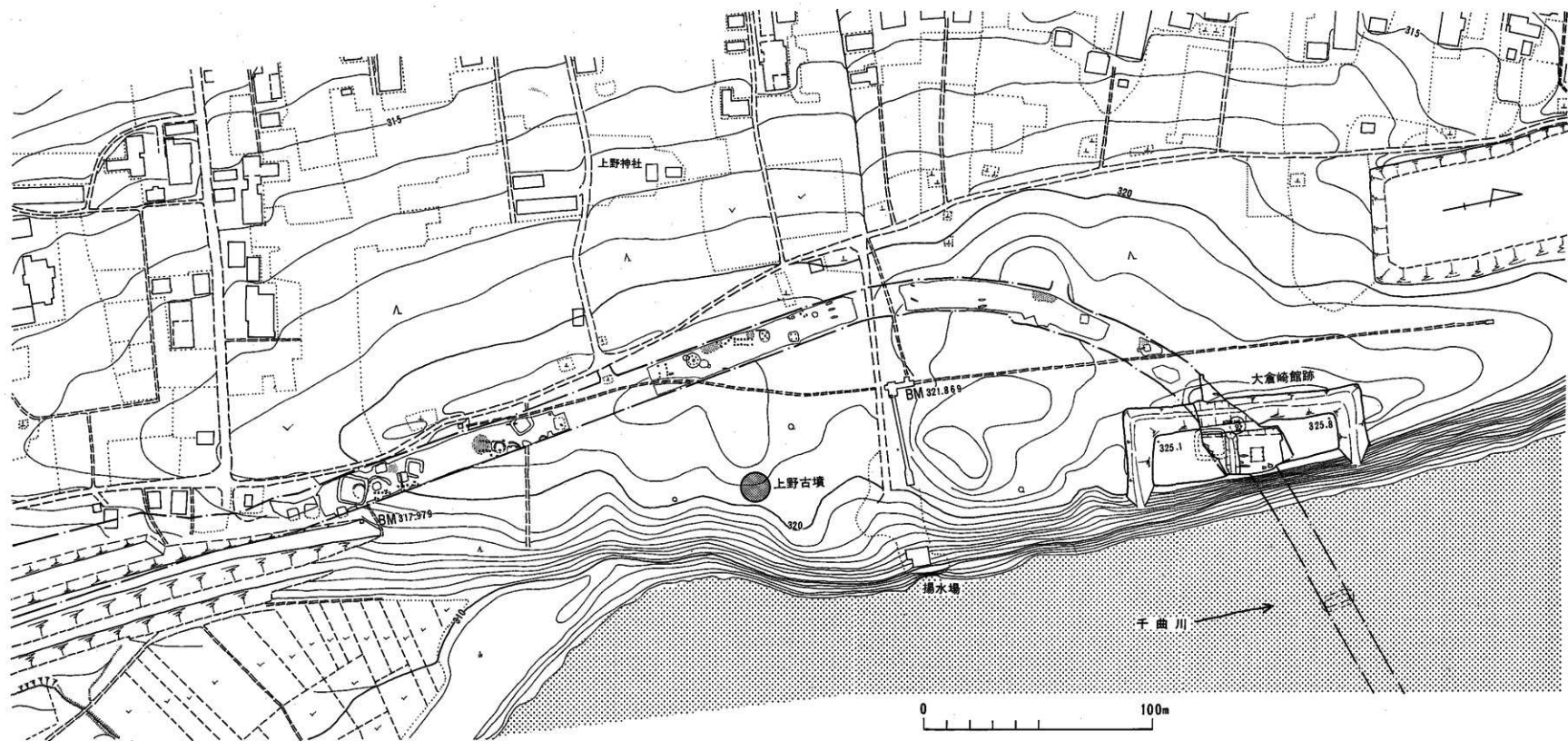


図2 調査地周辺の地形 1:1500

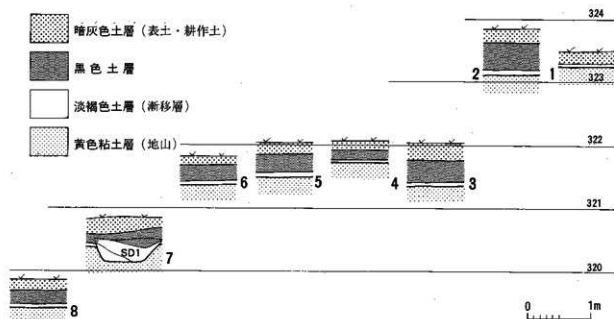
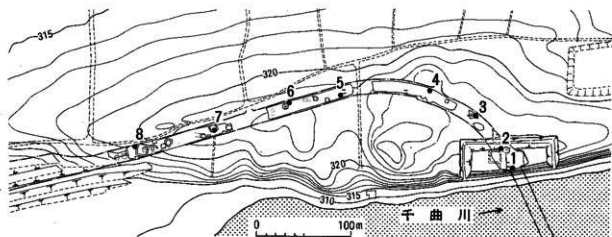


図3 土層模式図 1:60

土器は出土量が少ない。

石器は太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁など弥生時代を特徴づける磨製石器の他に打製石器も少なからず出土している。

勾玉は碧玉製の小型品が1点ある。

紡錘車は未製品を含め5点あり、当地方でも確実に紡織が行われていたことを裏づけている。

(d) 古墳時代(図7)

古墳時代は前期の竪穴住居址1軒(H9住)、掘立柱建物1軒(SB5)と同じく前期の方形周溝墓4基(1号~4号周溝墓)が検出され、それに伴う土器が出土している。

古墳時代前期の遺跡は飯山地方でも発掘例が少なく、当遺跡は重要である。

竪穴住居址(H9住)は残りが良く、出土した土器も良好で、良好な一括資料となった。土器はいわゆる北陸系の様相を強くもつものである。古墳文化成立の一指標となろう。

方形周溝墓は正方形に形が整えられたもので、主体部は検出されなかったが、周溝内より供献あるいは儀式に使用されたと考えられる土器が出土している。

掘立柱建物（SB5）については古墳時代前期とする積極的な根拠はないが、建物周辺で出土する土器に古墳時代前期のものが多いことから当期に含めておいた。

#### (e) 平安時代（図8）

平安時代は、調査地の北部と南部で、竪穴住居址10軒（H1～8・11・12住）と、掘立柱建物4軒（SB1～4）と、黒色土器および土師器の碗が副葬された土塚墓群（SK19～23）が検出され、それに伴う多量の土器や鉄製品・ふいご羽口などが出土している。

この平安時代も当遺跡の中心的位置を占める。

竪穴住居は方形のものだが、4本の主柱穴をもつものはない。中には竪穴内から竪穴外へ延びる溝をもつもの（H3住）もある。H11号住居址では石組みのカマドが良好な状態で検出された。

竪穴住居址は出土した土器から平安時代後期（10世紀末～11世紀）と考えられるが、南部の一群がより古い様相を呈し、北部の一群（H11・12住）がより新しい様相を呈している。

掘立柱建物（SB1～4）は小形の建物である。

土塚墓群は昨年度の大倉崎館跡の調査で確認されたもの（SK21～23）に加えて今年度の補遺調査でも2基が確認され、後に大倉崎館が造られた上野丘陵の最高所が、平安時代後期には墓域であったことが判明した。

竪穴住居址出土土器は、食器は黒色土器碗を主体として、土師器碗・鉢、灰釉陶器が少量あり、煮沸具として土師器の甕があり、越後型とされる甕を含んでいる。

また、出土土器の中には墨書されたものや、転用碗がある。

H11号住居から出土した鉄製鎌は飯山地方では初めての出土である。

鍛冶にかかわるものとして、ふいご羽口や鉄滓が調査地南端部から出土している。

#### (f) 中世以降

調査地北端には中世館跡の大倉崎館跡があり、昨年度の横台部分の調査で未調査であった郭内堀西延長部分と土塁の調査を行い、郭内堀が外堀までつぎぬけていたことを再確認し、土塁の構築方法等を確認した。

なお、バイパス路線部分の調査では当初、大倉崎館にかかわる中世の遺構の存在が予想されたが、明確な遺構は検出されず、遺物も陶磁器類が少量と銭貨が1枚散在的に出土したのみである。



## B 調査日誌抄

平成元年

- 5月18日（木） 飯山建設事務所と現地協議。発掘工程等を協議する。
- 5月24日（水） 上野・大倉崎区長を通して、発掘作業員の募集開始。上野遺跡より開始することとする。
- 5月29日（月） 残土処理現場の検討。調査会開催。
- 6月5日（月） 調査区内の残土処理。
- 6月6日（火） バックホーによる表土除去を開始（～9日）。
- 6月7日（水）～9日（金） プレハブハウス設置。器材搬入。グリット杭打ち作業開始（～13）。
- 6月13日（火） 9時、調査開始式開催。引き続きV区南端およびIV区14より作業開始。

6月14日(水)～Ⅳ区B～D-13・14より先土器時代尖頭器、弥生時代住居址など検出、確認作業を行う。

6月19日(月)～Ⅳ区B～D・15～17の精査。平安時代の土器片が多く出土。先土器時代～平安時代の複合遺跡であることを確認。

6月22日(木)Ⅳ区B～D-13～17の遺構確認作業終了。B～D-13の遺物集中箇所は時代的に複合していたが、方形周溝墓であることを確認(SD1)。また、弥生時代住居址は、平安時代住居址と切りあい関係にあり、それぞれH1・Y2、Y1・H2とした。また、C-16を中心とした地区において、先土器時代石器群が集中して出土した(のちに第4地点)。

市内新規採用教員研修視察。

飯山建設事務所用地課長ほか来跡。

6月23日(金)Ⅳ区出土遺構調査続行。Ⅴ区へ作業員移動。

6月27日(火)Ⅳ区B～D-8・9検出の落ち込みをセクション帯を残し掘り下げ。弥生中期土器片、石器出土。住居址の存在を予測させる。

6月29日(木)Ⅳ区出土遺構掘り下げおよび実測開始。写真撮影。Ⅴ区遺構確認作業続行。

6月30日(金)Ⅳ区B～D-8・9検出の弥生時代住居址をY3とする。その北側において、平安時代と思われる住居址を確認(のちにH3～6)。

7月5日(水)Ⅴ区1～8、遺構確認状態の写真撮影完了。Y3を取り巻くように検出された方形周溝墓(SD3)を掘り下げる。

7月6日(木)Ⅴ区C・D-6検出の住居址(H5)において、床面よりやや浮いた状態で黒色土器環2点が重なった状態で出土。

7月7日(金)Ⅴ区C・D-5・6検出の方形周溝墓(SD3)掘り下げ着手。B～D-4・5出土先土器時代石器出土地点精査(のちに第5地点)。

7月11日(火)Ⅳ区13～Ⅴ区清掃。柱穴群などの掘り下げ。平面図等実測作業開始。

7月13日(木)Ⅴ区9～11着手。

7月18日(火)Ⅴ区12～15拡張。新たに住居址を検出する(H7・H8)。

7月19日(水)Ⅴ区全体写真撮影。ほぼⅣ～Ⅴ区の発掘完了。実測作業のみ残す。

7月21日(金)戸狩小学校郷土クラブ体験学習。

7月24日(月)～29日(土)先土器時代第4地点および各遺構平面図実測作業。

7月27日(木)Ⅲ区9より南へ着手する。

7月29日(土)小島・早津両氏来跡。先土器時代包含層の調査並びに丘陵の地質調査を行う。

7月31日(月)Ⅲ区9以降精査。Ⅳ区11・12において古墳時代の住居址を確認(H9)。

8月2日(水)～4日(金)H9住調査。Ⅲ区9以降精査続行。

8月7日(月)Ⅲ区B-13およびC-11で先土器時代礎群を確認。清掃・写真撮影を実施。B・C-16・17で弥生時代円形住居址を確認。掘り下げる(Y5住)。

8月8日(火)～10日(木)Ⅲ区2～5着手。Ⅲ区全体精査。Y5号住居址、遺物出土状態・遺構写真撮影完了。D-7・8において住居址を確認(H10住のちにY7住となる)。10日市文化財審議会委員視察。

8月11日(金)Ⅲ区全体写真撮影。

8月12日～16日 休み。

8月17日(木)調査再開。Ⅲ区全体測量(40分の1)。Ⅱ区着手。

8月21日(月) II区8~4まで完了。G~I-5~7において、礫および石器群を検出(先土器時代第2地点)。K-5で磨製石斧出土。

8月25日(金) II区柱穴群等掘り下げ完了。J・K-3・4で確認された住居址(H11住)、掘り下げ着手。I区精査開始。O・P-19で住居址確認(H12住)。

8月28日(月)~30日(水) H11・12住精査。平面図実測完了。

市議会総務文教委員視察(29日)。

9月1日(金)~6日(水) I区・II区精査。全体平面図作成作業。

9月8日(金)~18日(月) 大倉崎館跡の土呈調査着手。完了10月5日(水)。

II区の精査および平面図作業。器材撤収。

9月19日(火) 午後3時より調査終了式並びに大倉崎遺跡の調査開始式を大倉崎公民館にて行う。大倉崎館跡の補遺調査を残し、上野遺跡発掘調査の全部を終了する。

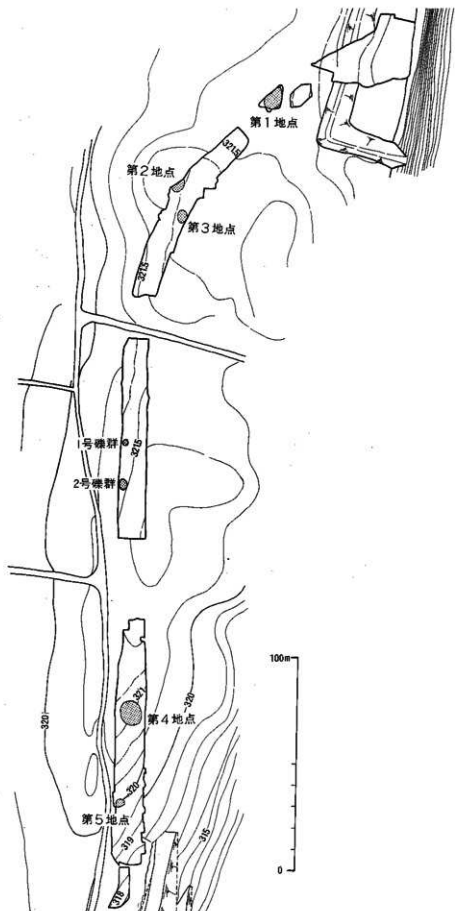


图4 先土器时代地点分布图

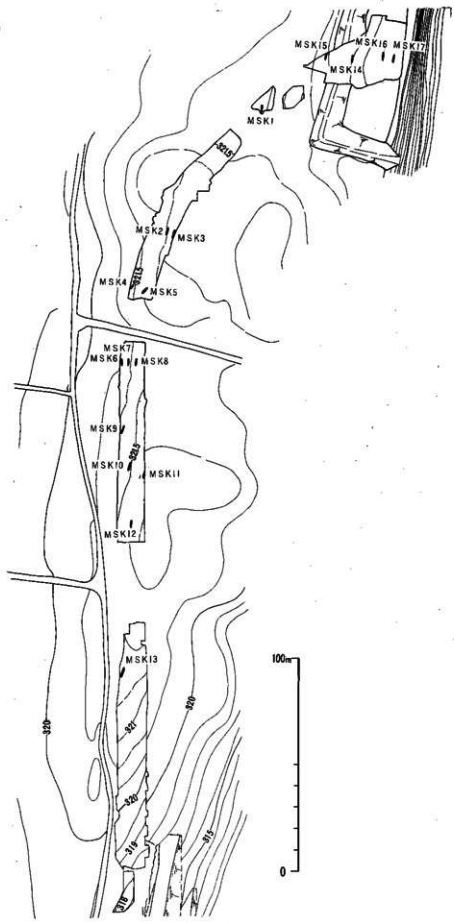


图5 縄文時代遺構分布図 1:1800



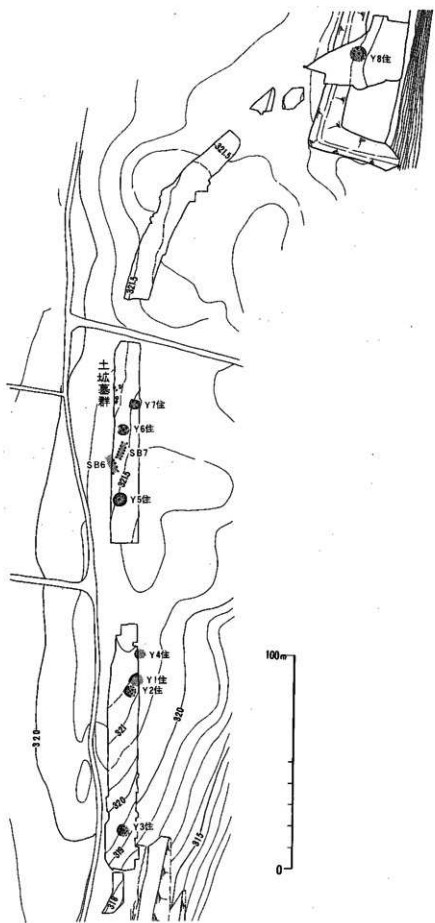


圖6 弥生時代遺構分布圖 1:1800

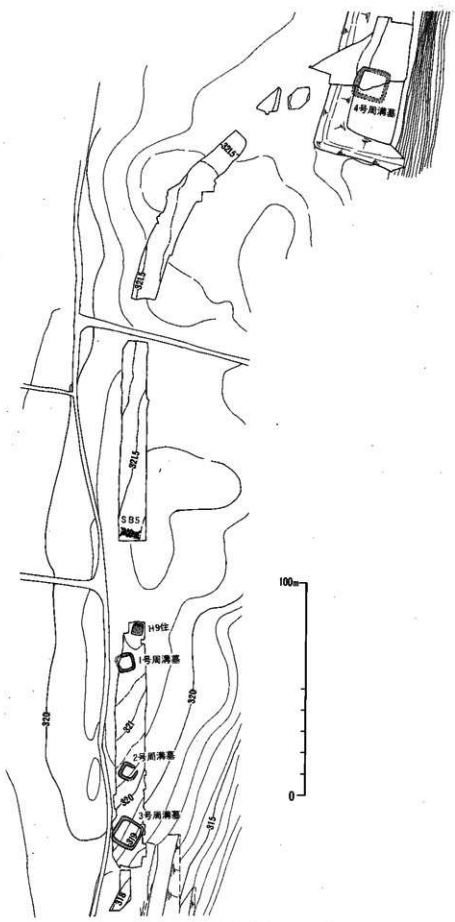


图7 古噴時代遺構分布图 1 : 1800

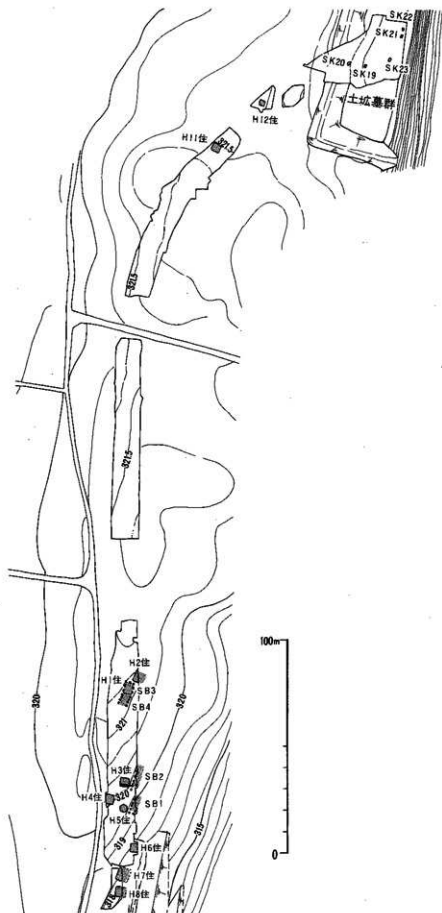


図8 平安時代遺構分布図 1:1800

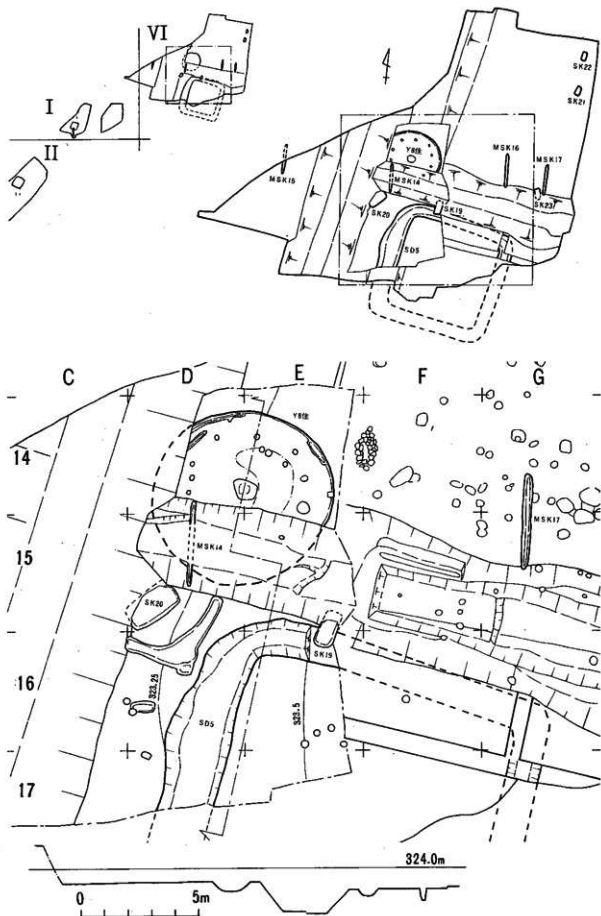


图9 遺構実測図(1) 1:160

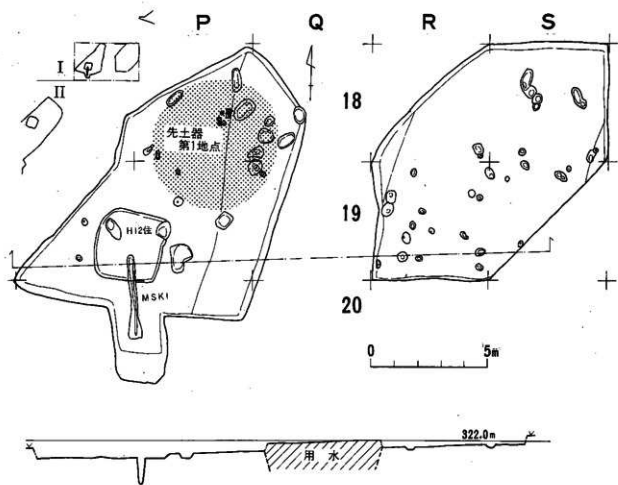


图10 遺構実測図 (2) 1 : 160

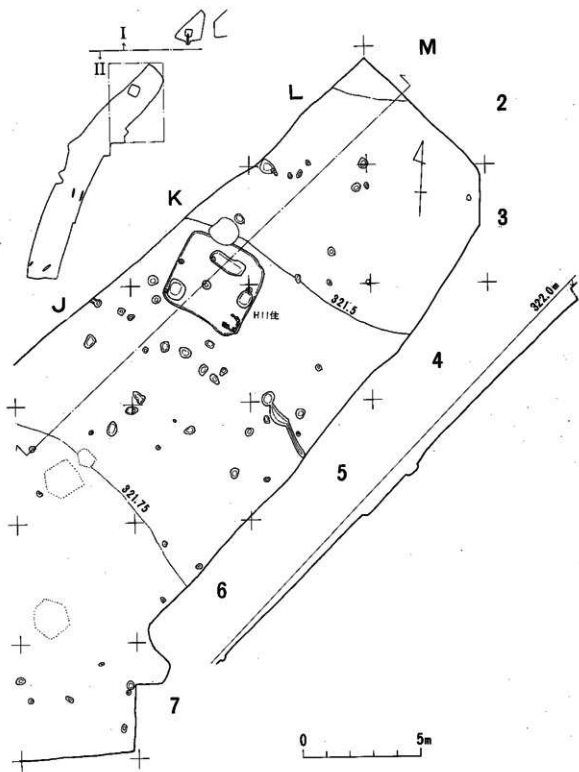


图11 遗構尖測図(3) 1:160

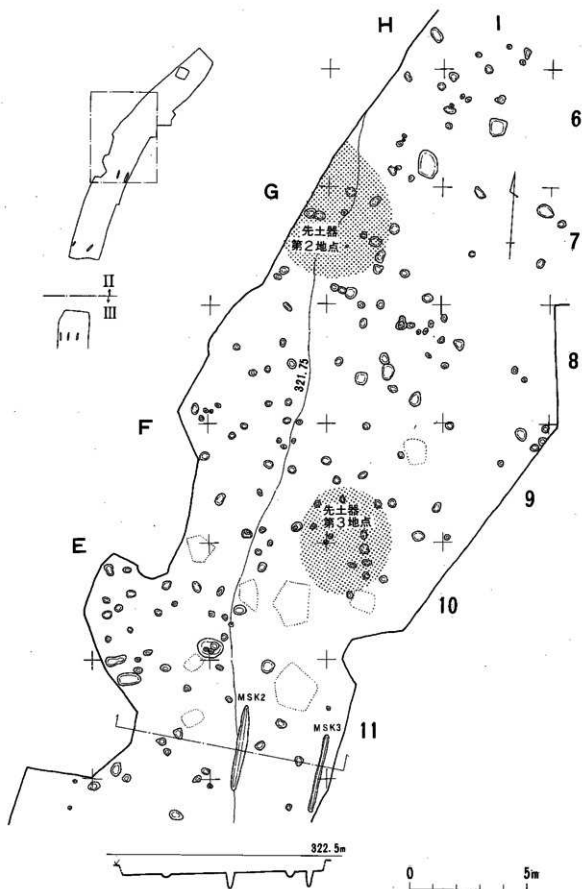


图12 遺構実測図(4) 1:160

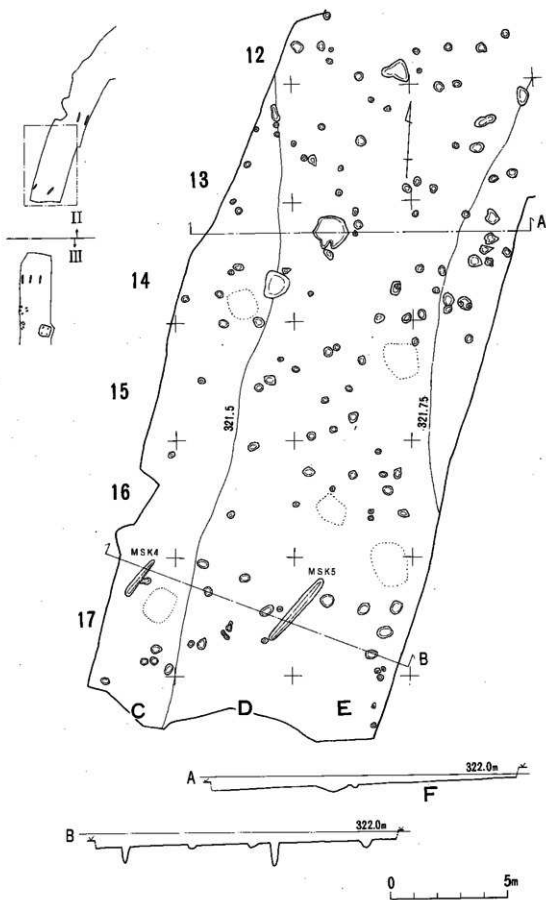


图13 遺構実測図(5) 1:160



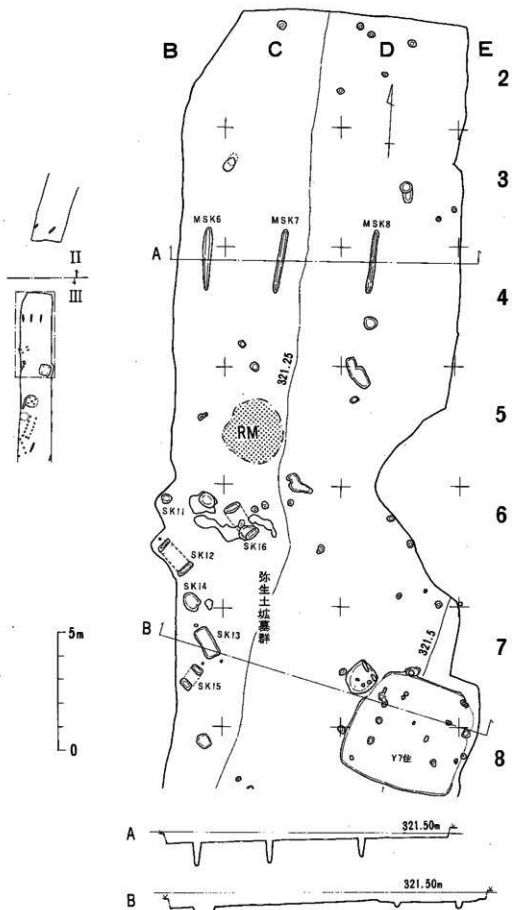


图14 遺構実測図(6) 1:160

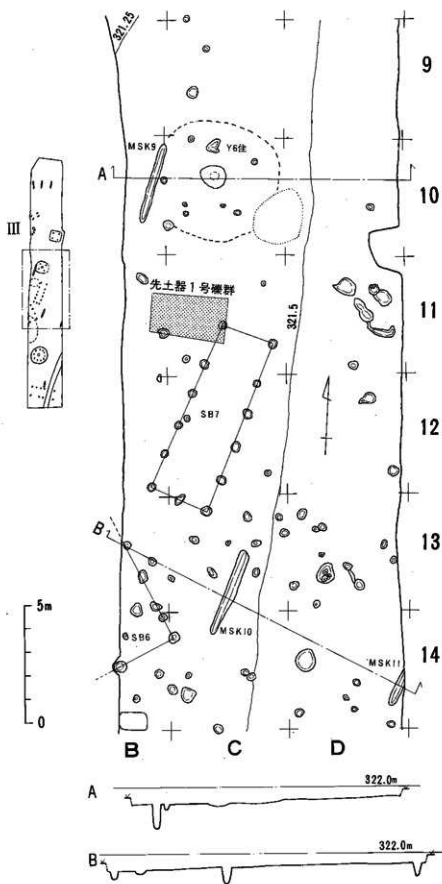


图15 遺構実測図(7) 1:160

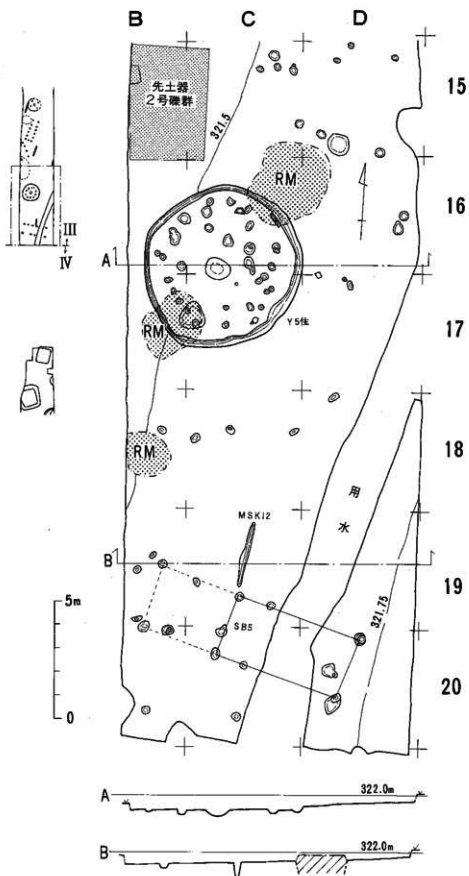


图16 遺構実測図 (8) 1 : 160

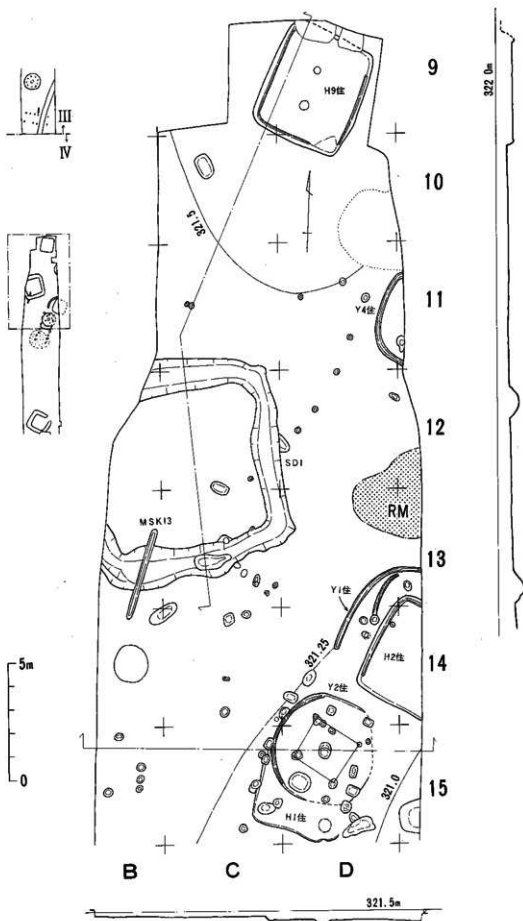


图17 遺構実測図(9) 1:160

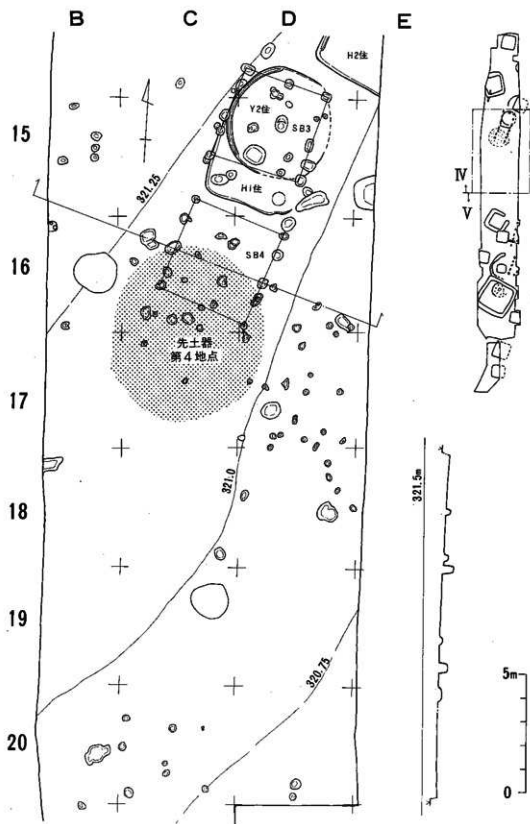


图18 遺構実測図 (00) 1 : 160

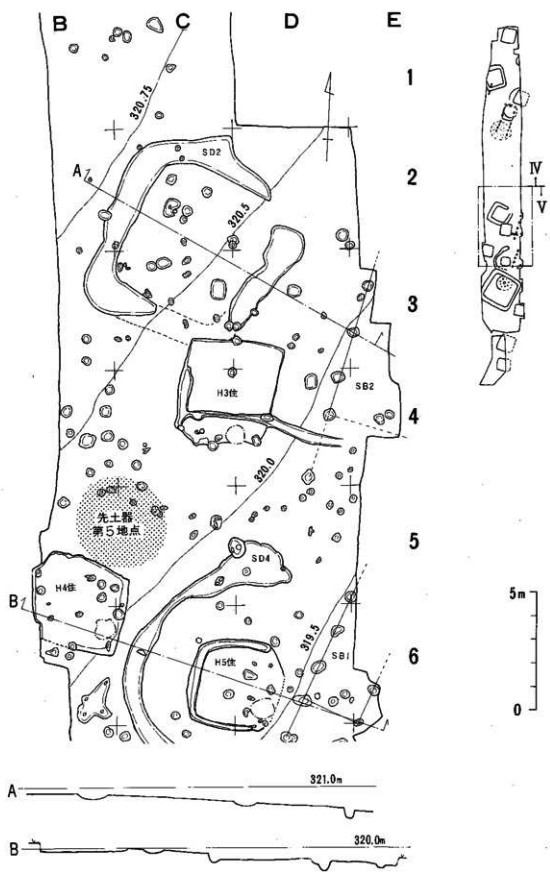


图19 遺構実測図 (1) 1 : 160

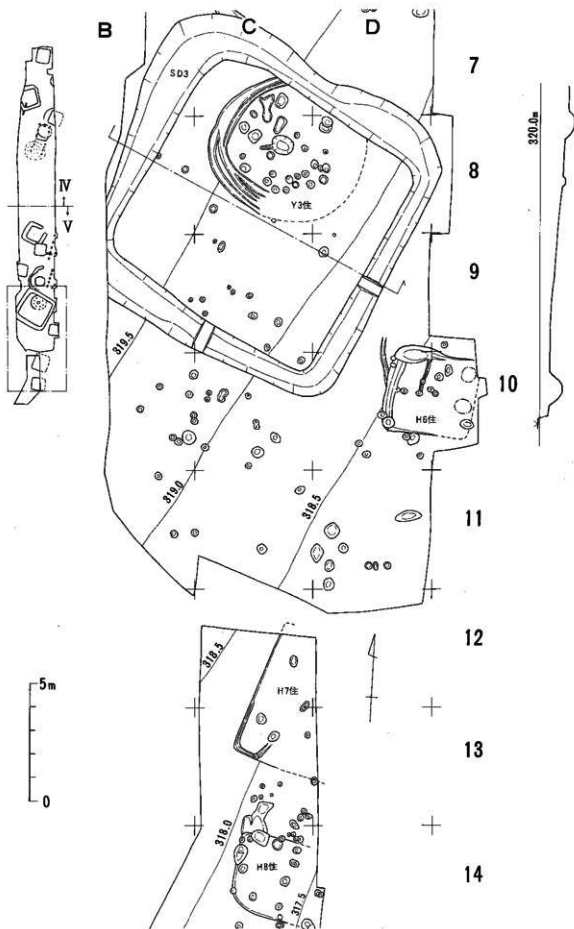


图20 遺構実測図 (2) 1 : 160

## 第2章 先土器時代

### 1 先土器時代の調査

#### A 調査概観

先土器時代に属する遺物は、一部の地点を除いて各区よりまばらに出土しており、縄文時代以降の構築物によりかなり破壊されていることが伺えた。以下に便宜的に分けた区別毎に概観する(図21)。

##### (1) I 区

大倉崎館跡の東側に位置する地区で、揚水路が埋められていたりかなり現状改変の認められる地区である。遺物は平安時代住居址および柱穴群の周辺より散在的に出土しており、第1地点として報告するが遺物集中地点とは呼称できない出土状態である。

##### (2) II 区

バイパス道路が緩く右にカーブする地区で、当該時期の遺物は二地点で集中的に出土し(第2・第3地点)、他は各グリットで単独に近い出土状態であった。I区と同様に平安時代の遺構が存在し、遺存状態は悪い。

##### (3) III 区

碟群が2か所で発見されている(第1・2碟群)。この地点は、後世擾乱の免れた地区で、比較的プライマリーな出土状態であった。また、尖頭器が多く出土したグリットがあったが、弥生時代住居址が構築されており、出土状態は不明確である。

##### (4) IV 区

弥生・平安時代住居址などによって多くの地区で包含層が破壊されているが、遺物集中地点が1か所確認されている(第4地点)。また、後世構築物周辺からも多く出土したが、石器の材質が同じことからすべて第4地点として一括して報告する。

##### (4) V 区

遺物集中地点が1か所発見されているが、後世擾乱を免れた小範囲のため出土遺物は少い(第5地点)。なお、各遺構包含層からも散在的に出土している。

以上、遺物集中箇所5地点、碟群2か所、その他グリット出土遺物として散在的に認められた。遺物総点数は約400点で、このうちツールに認定される石器は約150点である。地点によって多少の比率の違いはあるが、製品の占める割合が多いのが特徴であり、その例として、玉髓製の石器は、製品が100点以上に対し、剥片が数点しか認められていない。

#### B 層序と文化層(図22)

上野遺跡の土層については、小島・早津両氏による詳細な報告が付編でなされているので、本稿ではIV区の標準層序と遺物の包含層について説明することとする。

IV区は、上野遺跡では比較的低い位置にあり、標高320m付近である。北上するにつれて徐々に標高が高くなり、大倉崎館跡が最も高く、標高325.5mとなっている。

IV区の標準層序は図22のとおりである。

第I層 暗灰色腐植土層(耕作土)層厚12~18cm。



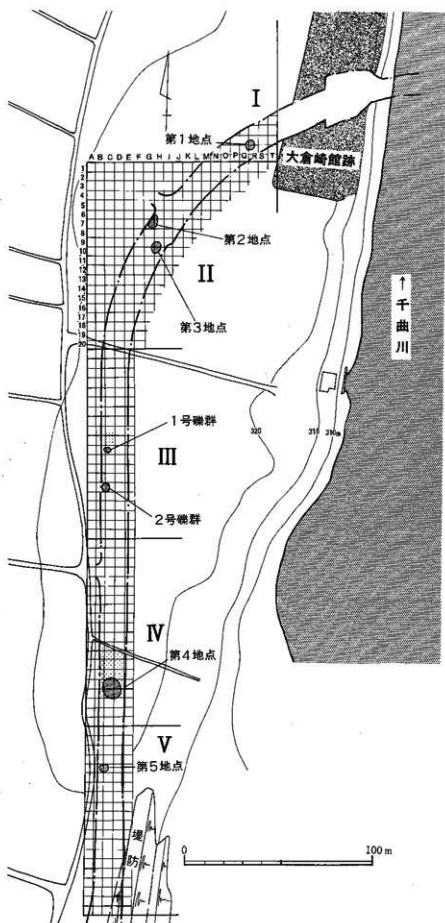


图21 先土器時代地点分布图 1:2000

第II層 黒色土層 層厚12~18cmで、しまりの良い土層である。III層との間には木の根などの攪乱層がブロック状に入る(I層)。

第III層 黄褐色土層(漸移層) 層厚3~12cm。IV層のソフト化したものと考えられ、II層漸移層としてとらえられる。

第IV層 黄褐色風化テフラ層 層厚12cm。緻密なテフラ層で、層厚はほぼ一定しているが、V層のクラックの落ち込み深く堆積し、50cmも深く入り込む場所もある。

第V層 褐色土層 層厚約50cm。上面がいわゆる亀甲状を示し、クラックの割れ目が認められる。砂・粘土質で、乾燥すると非常に固い。

第VI層 褐色砂質粘土層 層厚20cm以上。砂を含み、ポロポロとして柔らかい。

先土器時代石器群は、III層上面から出土する。IV層から出土するのは稀で、多くはIII層およびII層からの出土である。

第4地点以外の石器群の出土状態も、II層直下と考えられるので、層的には各地点出土層準に相違は認められない。

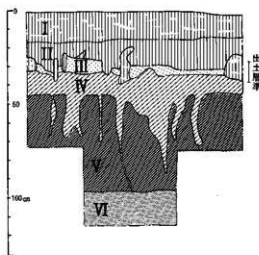


図22 層序 (1:20)

## 2 調査結果

### A 遺物の出土状態

#### (1) I 区

##### 第1地点(図23)

I区P~R-18・19出土地区をいう。石器総点数は11点で、出土層準はII層およびIII層である。一部の石器は、平安時代住居址(H12住)覆土よりの出土で、全体的にかなり後世の攪乱を受けた場所である。

石器は、ナイフ形石器・搔器・刃器状剥片等が出土しており、安山岩のほかには玉髓が用いられているのが注目される。

#### (2) II 区(図24~26)

##### (a) 第2地点(図25)

II区G・H-6・7に位置し、一部調査区外に伸びると推定される。出土層準はIII層上面。分布規模は、12m×3mで細長い形態を示す。出土石器は、総点数62点で他に礫が約10点まばらに出土している。使用石材は安山岩が多く、同一母岩と考えられる剥片が多く出土している。また黒曜石は、分布の西端にまともっており、石材別では分離される可能性が残される。石器は剥片が多く、製品は黒曜石製の特徴的な彫器が出土している。

##### (b) 第3地点(図26)

II区G・H-9・10に位置し、後世柱穴群によって破壊されている部分が多い。出土層準はIII層上面である。分布規模は8m×5mで、平面形態は楕円形である。石器総数は約20点と少い。器種別では石錐・石核が各1点出土しているが、他は剥片類である。石核と同一母岩の剥片が多い。なお、本地点出土剥片とD-15出土剥片が接合している。接合距離は約35mである。

(c) II区グリット出土 (図24)

II区において単独に近い形で出土した地区がいくつかある。これらは、後世の攪乱により原位置を動いたと思われる石器が多く、多くが黒色土層出土であった。

K-4・5からは、数点まとまって出土している。特徴的な石器では、磨製石斧が出土しているが、縄文草創期の石器である。また剥片は、第3地点出土剥片の石材が似ている。

D・F-13およびD-17では単独で各1点出土している。いずれも黒曜石製で、そのうち1点は見事な尖頭器である。

(3) III区 (図27-29)

(a) 第1磔群 (図28)

C-11に位置する。2.6m×1.4m規模をもつ。磔は約70個で構成しており、重なりあうことは殆どなく、平面的に広がる。完形磔は少量で、多くは破損磔でまた火熱を受けているものも多い。破損磔のうちいくつかは接合している。なお、石器は2点磔群の端部で出土しているのみである。

(b) 第2磔群 (図29)

B・C-15に位置する。2.4m×2mのほぼ円形プランを呈す。両端に人頭大の大きな石を配しているが、他は拳大の磔約130点で構成される。木の根が入り込んで磔が持ち上げられていたが、上下に重なる部分が多い。また、磔は火熱によると思われる赤色化したものが多い。

石器は、磔と混在する形で12点出土しているが、厨房に関係すると考えられる石器が多いのが注目される。

(c) グリット出土 (図27)

C-9・10で尖頭器が5点出土している。弥生時代住居址 (Y6住) の構築により分布状態は不明瞭であったが、集中地点として考えられる。

B-14でも黒曜石製の搔器等が5点出土している。調査地区西端のため分布は明らかにできなかったが、第2磔群に近接しており同時性が考えられる。なお、C-12でナイフ形石器が出土している。

(4) IV区

第4地点 (図30・31)

C・D-16・17を中心として検出された。中心部の範囲は、10m×6mであるが、出土範囲は25m×10mに及ぶ。弥生・平安時代遺構により中心部より攪拌されたものか、幾つかの地点分布に別れていたものかは判然としない。器種・石材も同様であり、同時期所産として一括してよいだろう。出土層も相違なく、III層上面が生活面と考えられる。

中心部は、平安時代の柱穴群によって多少攪乱を受けているものの、多くの石器群のまとまりがほぼ現位置と考えられる出土状態を示していた。出土石器は、搔器が圧倒的に多く、尖頭器・ナイフ形石器が各1点出土している。石核も安山岩製が2点出土し、それに伴う剥片も若干検出されている。石質は、玉髄が多く、それらは搔器が占める。そのほかの石材としては、安山岩も製品は少ないが一定量あり、黒曜石も約10点存在する。

(5) V区 (図32・33)

(a) 第5地点 (図33)

B・C-5に位置する。周囲が攪乱を受けていたのと、調査区西端部のため、5m×2.5mの小範囲に約35点検出された。本地区の出土層準はIII層中に入っており、他地点より多少のレベル差が認められた。

出土遺物は全て安山岩製で、尖頭器・搔器などが含まれる。

(b) グリット出土 (図32)

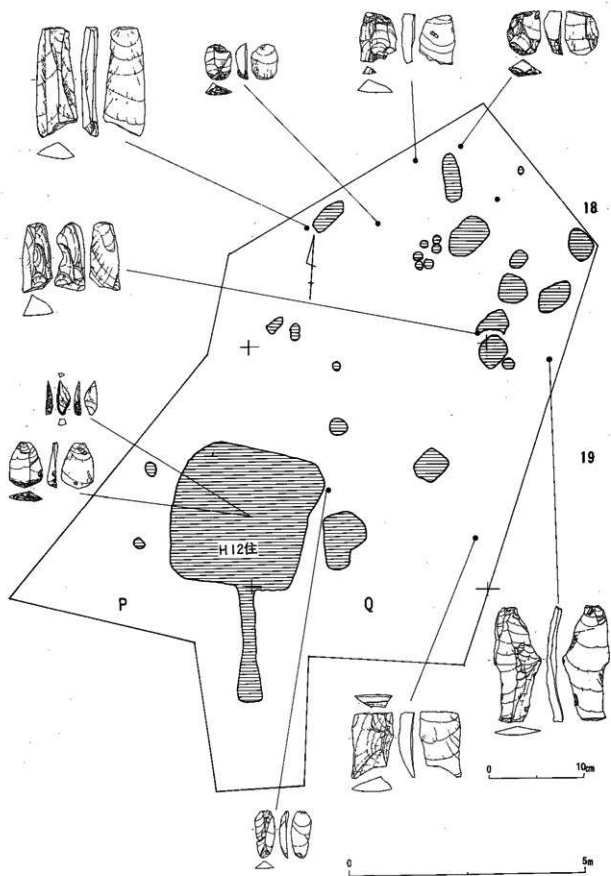


图23 第1地点遗物分布图 (1:80)

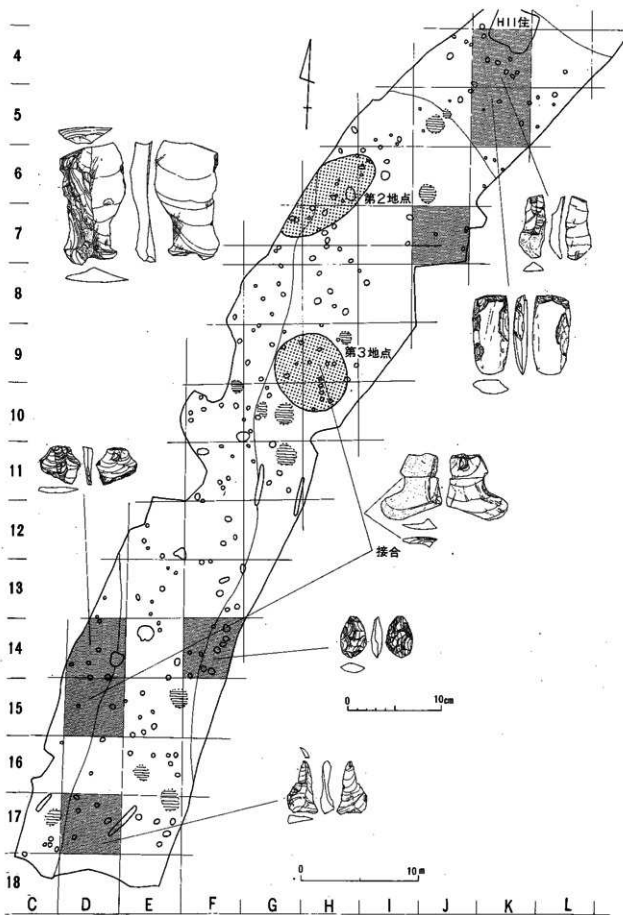


图24 II区遗物分布图 (1:160)

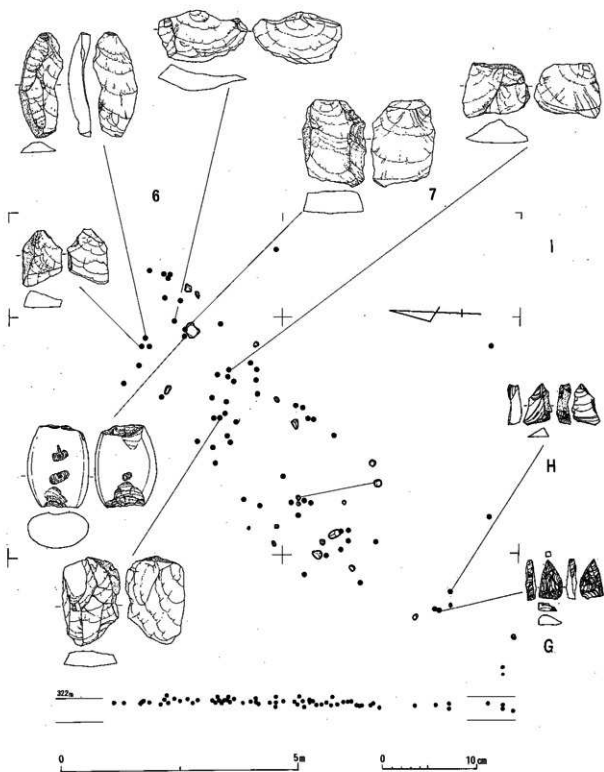


图25 第2地点遗物分布图 (1:80)

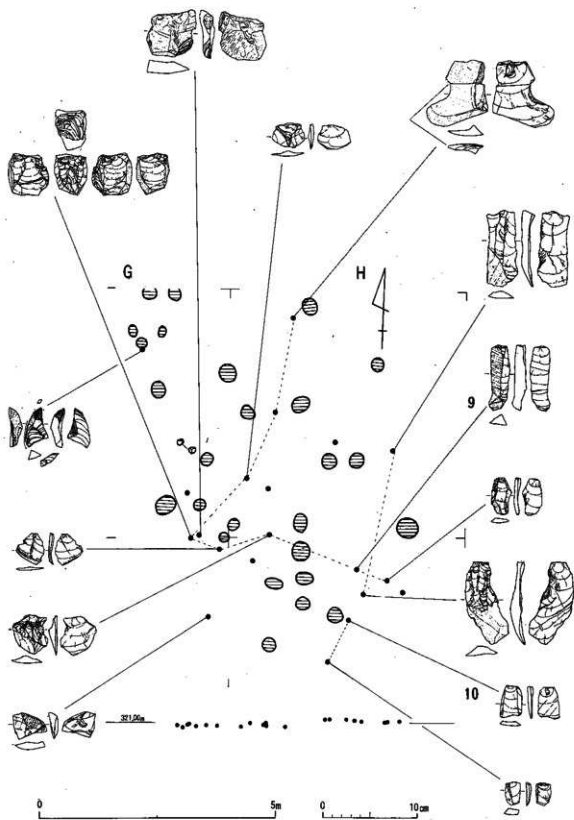


图26 第3地点遺物分布图 (1:80)

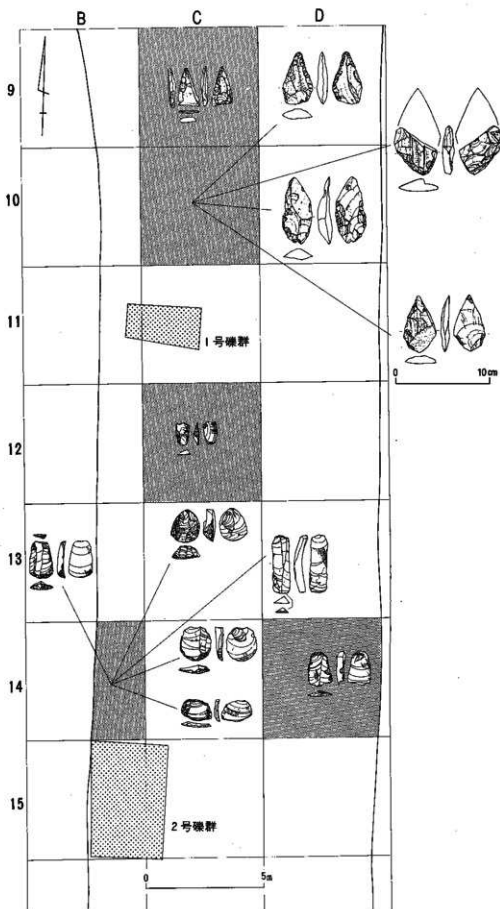


图27 III区遗物分布图 (1:160)



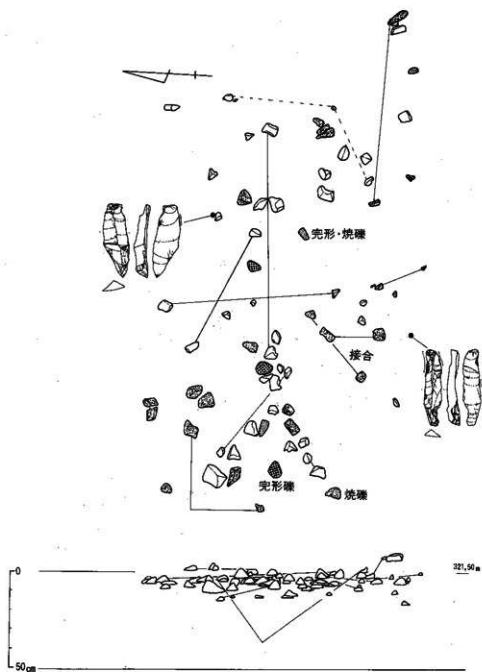


图28 1号遗址群遗址分布图 (1:20)

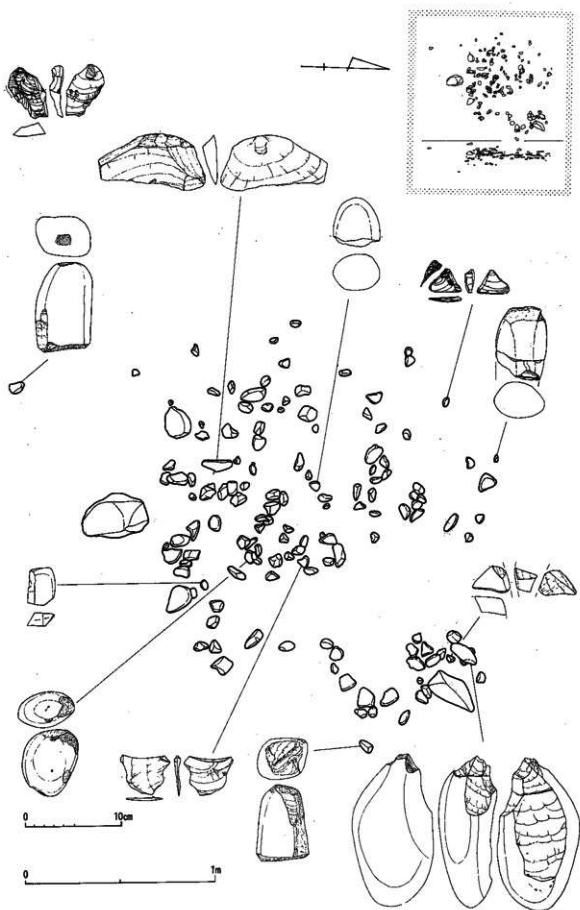


图29 2号遗址群遗址分布图 (1:20)

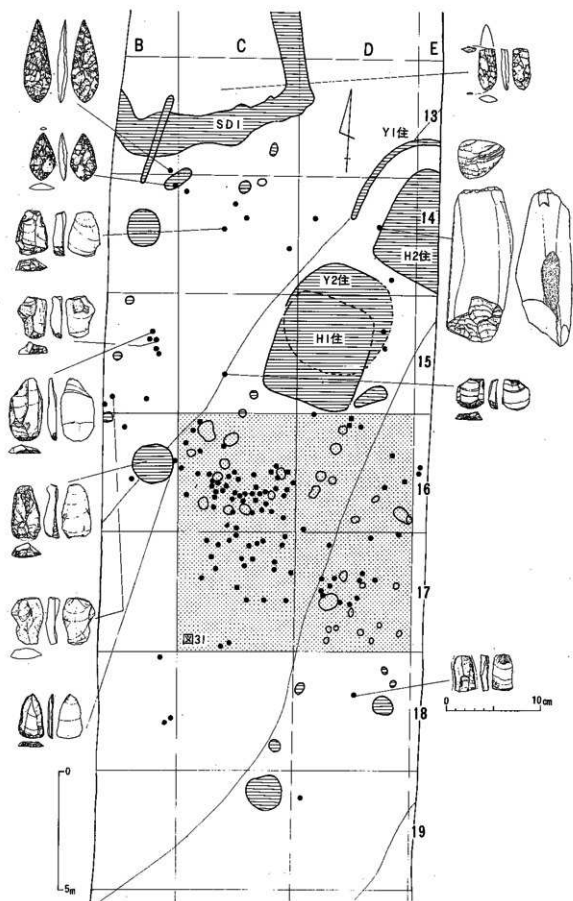
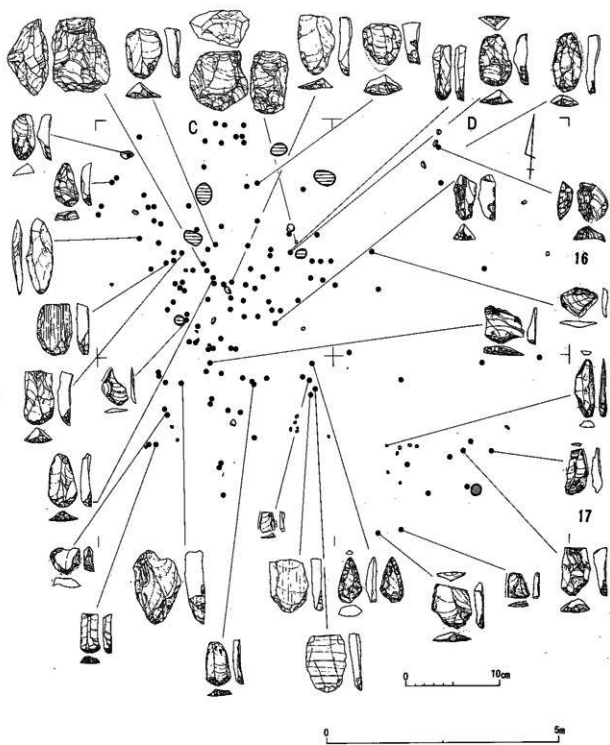


图30 第4地点遺物分布图 (1:160)



321.90 m

图31 第4地点集中部遺物分布图 (1:80)

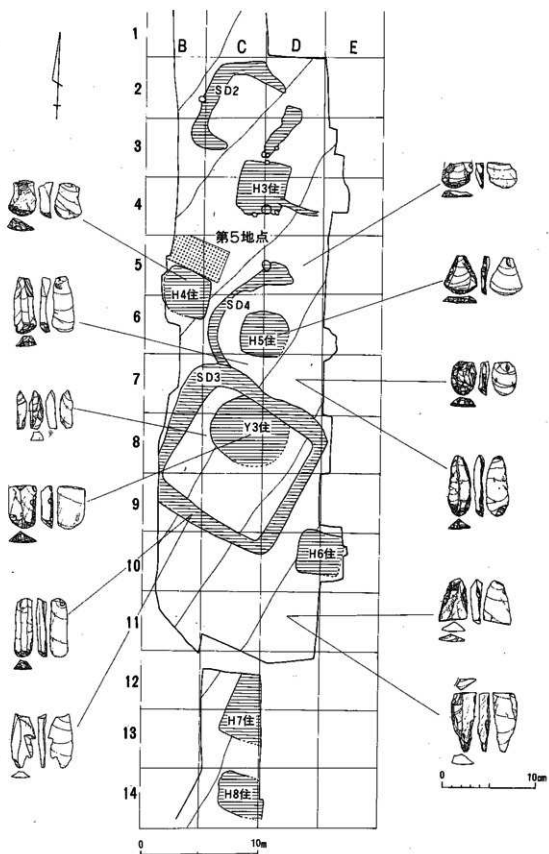


图32 V区遗物分布图 (1:320)

グリット出土

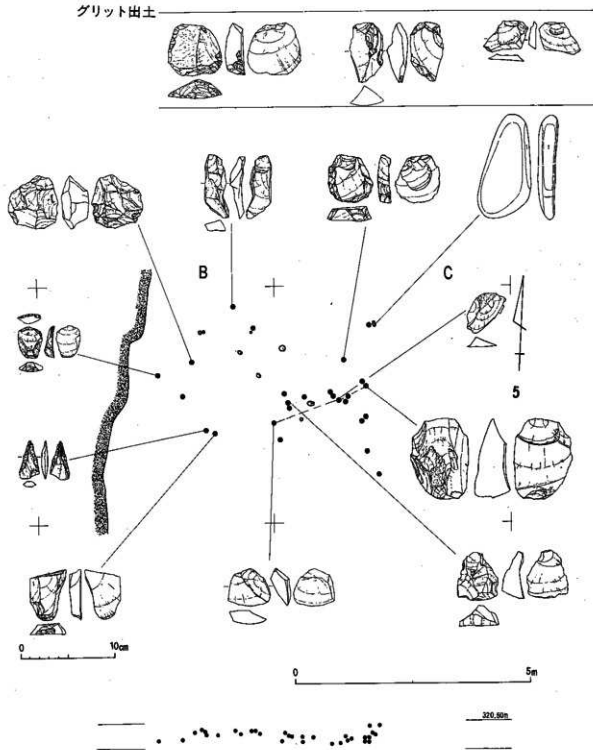


図33 第5地点遺物分布図(1:80)

図32のように後世の遺構内よりの出土であり、二次的移動を受けた出土状態である。玉髓・黒曜石製の搔器が多い。これらの搔器は、第4地点出土石器と等しい。

## B 出土遺物

### (1) 石器形態 (図34)

石器名称(器種)については、技術形態・機能形態の別によって多少の差異がある。本稿では両者の混在した石器名称としたが、この点については概念とともに今後検討すべき課題と考えている。

出土した石器(tool)には、尖頭器・搔器・彫器・ナイフ形石器・石錐・磨製石斧・敲石・小剥離痕のある剥片などがある。他に石核・剥片・碎片なども検出されている。以下、各器種別に説明を加える。

#### (a) 尖頭器

「槍先」に使用したと考えられる石器で、剥片の両面あるいは半両面に加工を施し、端部が尖頭状になるように細部加工を施したものである。本遺跡では、Ⅲ区グリット及びⅣ区(第4地点)・Ⅴ区(第5地点)で計11点出土している。

形態的には、木葉形で最大幅が胴中央部よりやや下にある「横倉型」と呼ばれる尖頭器で、5cm以上8cm未満の中形(A<sub>1</sub>類)と5cm未満の小形(A<sub>2</sub>類)がある。また、A<sub>2</sub>類に似るが左右非対称の形態を示すB類、柳葉形のC類がある。石材には安山岩が最も多く、1点黒曜石製が出土している。

#### (b) 搔器

剥片の長軸上の端部に急斜度調整で刃部を設けたエンド・スクレイパーと呼ばれる石器が大部分を占める(A類)。細部分類の検討を行っていないので、刃部再生による形態変化も考えられるが、基部側を意識的に尖頭状にしたA類の亜種(A<sub>1</sub>類)、刃部が尖頭状となる(A<sub>2</sub>類)、ノッチ状を呈する(B類)が少量認められる。また、両側に刃部をもつ複刃搔器(B類)も数点ある。

搔器総数は約60点で、Ⅰ～Ⅴ区の各地点・グリットより出土している。石材は、玉髓が圧倒的に多く、他に黒曜石・安山岩が使用されている。玉髓の多用は本遺跡の大きな特徴のひとつとして考えられるだろう。

#### (c) 彫器

剥片の縁辺に楯状剝離を施して、刃部作出を行ったと考えられるもので、Ⅱ区・Ⅴ区より各1点出土している。

#### (d) ナイフ形石器

ブランディング加工によって素材を調整加工した石器である。Ⅲ区・Ⅳ区(第4地点)より各1点出土している。

#### (e) 錐

錐状の突出した刃部をもつ石器で、ドリルの機能を想定したもの。第3・4地点より計3点出土している。

#### (f) 磨製石斧

本時期に含められるか微妙ではあるが、Ⅱ区グリットより出土した磨製の斧形石器である。

#### (g) 敲石・磨石

礫の端部に潰れ痕をもつもので、ハンマーの用途が考えられる。敲石およびすり潰して面が扁平になったものを磨石とする。特に第2礫群において多く出土している。

#### (h) 小剥離痕のある剥片

目的剥片・調整剥片を問わず、使用によると思われる小剥離痕のある剥片を指す。肉眼によるため黒

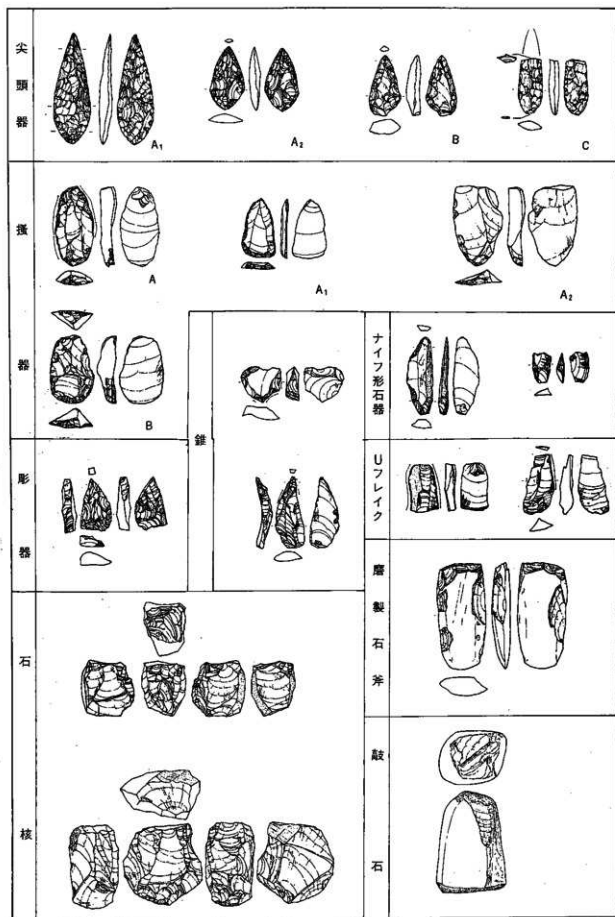


図34 先土器時代石器形態分類図 (1:3)



曜石製が多い。本稿のなかでは剥片の項に一括している。

(2) 出土遺物 (図35~68)

区と地点の名称は前項でも触れたが、I区~V区は100m毎に便宜的に分割したもので、地点の名称は特に集中して石器が出土した場所に与えた。したがって、グリットで単独に近い出土状態の石器は区グリット出土と呼称した。以下にその概要を示し、その順序で出土石器の説明を行うこととする。

I区 一第1地点

II区 一第2地点

一第3地点

一各グリット出土

III区 一第1礫群

一第2礫群

一各グリット出土

IV区 一第4地点

V区 一第5地点

一各グリット出土

(a) I 区

第1地点 (図37~39・PL30)

ナイフ形石器 (1)

H12号住居址覆土から出土したものである。風化面はオレンジ色をした奇麗な玉髓を用いており、やや寸詰まりで左右非対称の二側縁加工品である。

搔器 (2~4)

2は刃部がやや尖頭状となっている。3は母指状に近い形態で、長さは3.8cmと小型である。4はやや分厚い剥片であるためか、左側縁には表・裏両面より二次加工が施されている。また、基部側は折り取られている。石材は全て玉髓が用いられている。

剥片 (5~10)

5は玉髓製で、多方向から剥離されている。一部に表皮を残しており、打面作出剥片とも考えられる。7は石核の上端から下端まで突き抜けた剥片と考えられ、全長12.2cmを測る。縁辺には小剥離痕が認められ tool として用いられたものであろう。玉髓製である。8は安山岩製の刃器状剥片で、下端部は折り取られている。打面は調整されていない。9・10も安山岩製で、10は稜部より剥離されており、石核残つき剥片と思われる。

(b) II 区 (図40~46・PL30・31)

K-4・5グリット (11~12)

図示した2点以外数点安山岩製の剥片が出土している。

剥片 (11)

表皮を残すチャート製の剥片で、やや湾曲する。打面調整された石核より作出されている。

磨製石斧 (12)

ハンレイ岩を用いている。表・裏面とも丁寧に磨かれているが、縄文時代のそれに比べ艶はない。基部側・両側縁には剥離痕が認められるが、これは磨かれる以前の剥離と考えられる。したがって、正式には斧形刃部磨製石器とすべきかもしれない。

## 第2地点 (13~21)

### 彫器 (13)

両面加工の尖頭器状石器をブランクとして用い、下端部は左側に3回、上端部両側は斜めに各1回の槌状剥離が行われている。形状は、左側縁がほぼ直線的な彫刻刀面を形成し、平面形は斜角彫刻刀と称される形態を示すが、両面加工品を使用する点は男女倉型彫器の範疇に含められるだろう。

### 剥片 (14~20)

14のみ黒曜石製で、他は安山岩製である。14は細部加工が若干認められるが、剥片剥離以前の石核調整時のものと考えられる。15~20は接合関係にはないが、同一母岩から剥離されたもので、石核自体かなり大型であったと思われる。15は打面調整の施された横長剥片である。16も打面調整が施されているが、正面左側縁には自然面を残す。17は打面及び下端に自然面を残しており、石核調整時の最初の剥片であろう。18は多方向からの剥離面を有し、形状からも目的剥片とは考えられない。

### くぼみ石 (21)

前記15~20の安山岩の剥片集中部からの出土で、同一時期と考えられる出土状況である。石質は花崗岩で、正面に2か所、裏面に1か所のくぼみが認められる。上・下端は敲击演されており、敲石の用途も共有したものと推定される。花崗岩は第2碟群中からも出土している。

### J-7グリット (22)

1点単独で出土した玉髄製の剥片である。基部側は稜部より折れているが、現存長12.7cmを測る大型品である。正面左側には小剥離痕が認められる。

## 第3地点 (23~36)

### 錐 (23)

黒曜石製で、先端部に加工を施して尖頭状の錐に仕上げている。左側縁は小剥離痕をとどめるが、自然面を残し細部加工は施されていない。右側縁は先端部のみ加工が加えられ、稜部および縁より細部調整が施される。基部側は、打面・バルブが2回の剥離によって取り除かれている。

### 搔器 (25)

チャート製の搔器である。正面はほとんど自然面を残し、端部の一部分に急斜度調整を施し刃部を作出している。裏面は捺理面であり、二次加工は施されていないが、ほぼ平坦面となっている。

### 剥片 (24・26~32、34~36)

脈岩・チャート・ハンレイ岩を用いている。32はD-15出土資料との接合資料であるが、段階的な工程のある接合関係ではなく、1点の石核調整剥片が折れたものである。なお、全ての資料は、打面調整の施された剥片である。

### 石核 (33)

円筒状を呈する小形の石刃石核である。下端からの剥離が行われているが、目的剥片の剥離面は認められず、調整剥離のみと考えられる。基本的には、上端からの単一方向からの剥片作出であったと推定される。本資料と同一母岩と考えられる剥片は、24・26・27・32であるが、接合しなかった。

### F-14・D-14・D-17グリット (37~39)

### 尖頭器 (37)

黒曜石製の木葉形尖頭器で、F-14より単独で検出された。現存長4.4cmで小型品である。最大幅は、胴部中央よりやや下にある。調整加工は、特に裏面に細部加工が施されている。

### 搔器 (38)

やや茶色を呈す黒曜石製で、打面の一部に自然面を残している。先端部側は、正面からの細部加工を施

して刃部としているところから、尖頭状の搔器と考えている。

剥片 (39)

不純物を含まない黒色の黒曜石を用いている。

(c) III 区 (図47～51・PL32・33)

C-9・10・12グリット (40～45)

尖頭器 (40～44)

40は自然面を残す横長の剥片を素材とし、周辺に若干の細部加工を施して尖頭器としたものである。41も横長の剥片を用い、40より入念に細部加工が施されている。43は尖頭器の破損品と思われる。44は裏面側は先端部のみ調整が施されているが、他は第一次剥離面をとどめる。なお、42は両縁辺にファシットを有する小型の尖頭器で、楕状剥離を行った後細部調整が施されている。

以上の尖頭器は全て安山岩が用いられている。42のみC-9、他はC-10より出土したものである。

ナイフ形石器 (45)

長さ2.4cmと小型の黒曜石製ナイフ形石器である。横長状の剥片を素材とし、切り出し状のナイフ形石器に仕上げている。C-12より単独出土している。

第1号礫群 (46・47)

削器 (46)

先端部左側縁に細部加工を施したサイド・スクレイパーで、ノッチ状にえぐれているために、挟入石器としたほうが妥当かもしれない。チャート製。

剥片 (47)

脈岩製であるが、一見頁岩と変わらない。裏面基部側に小剥離痕が認められる。

B-14・D-14グリット (48～53)

搔器 (48～52)

48はほぼ全面に急斜度調整を施し、ラウンド・スクレイパーに近い形態を呈している。49はやや薄型で、先端部を中心に刃部が作出されているが、形状は円形に近い。50はエンド・スクレイパーで、刃部は弧状を呈している。51は幅広の搔器である。両端部に刃部が作出されており、複刃搔器と考えられる。52は先端部が欠損しているために、削器の可能性も残るが、50と同形態のエンド・スクレイパーと考え搔器とした。以上の搔器は全て黒曜石製で、52がD-14で他はB-14より出土している。

剥片 (53)

石刃状の形の整った剥片である。裏面に小剥離痕が認められる。石材は黒曜石。

第2号礫群 (54～66)

搔器 (54)

不定形な剥片を素材とし、第一次剥離面の基部側に刃部を作出している。

剥片 (55～57・62)

55は縁辺に小剥離痕がある。55は打面調整剥片であろう。ともに黒曜石を用いている。57は安山岩の剥片で、基部側は欠損している。62は横長の剥片である。打面部に調整加工が加えられ、おそらく剥片剥離以後と考えられることから、あるいは、打製石斧とした可能性がある。

敲石・磨石 (58～61・63～66)

58は砂岩を用い、頭部が扁平に磨られている。その周辺には敲打痕が認められ、両者の機能をもつものと考えられる。59はハンマーの機能を有するものであろう。赤色化しており、礫群中のなかで火熱を受けたものと思われる。60は花崗岩質の礫で明瞭な使用痕跡は認められない。61は磨石であろう。63・64は典

型的な敲石で、両者は接合する。約19cmの細長い石を半割し、折れ面を丁寧にたたき潰して、2個体の敲石を作り出している。65は破損品であるが、同様の石材が数点出土しており、磨石として使用されたものと考えられる。66は大型の敲石で、機能部に数回の調整刻痕を加えて、尖頭状の刃部を作り出している。

#### (d) IV 区

##### 第4地点 (図52~64・PL33~35)

###### 尖頭器 (67~70)

全部で4点出土している。集中部より出土したのは70のみであって、他はやや離れて出土している。67・69は時期不詳(おそらく弥生時代か平安時代)の土坑確認面よりの出土であって二次的に移動したものと考えられる出土状態であった。

67は優美な木葉形の尖頭器である。最大幅をやや胴部下半におき、しもぶくれの形態を呈す。調整刻痕は特に裏面が平坦な刻痕によって覆われる。68は先端部を欠損し、基部側も若干欠けている。やや軟質の頁岩を用い、現存長4.4cm、幅1.9cmの柳葉形を呈す。69はやや幅広の木葉形尖頭器であるが、長さは5cmとやや小型である。最大幅が胴部中央の下にある点は67と等しいが、形状的にはやや角張っている。70は安山岩製の小型品である。基部側は左右非対称となっているが、二次加工を観察する限り加工時の失敗によるものと思われ、意識的には69例のような形状を目的としたものであろう。

###### ナイフ形石器 (71)

唯一1点出土している。基部側と先端部左側縁にプランティング加工を施したものである。玉髓製。

###### 錐 (72・108・109)

72は黒曜石製の縦長剥片を用い、先端部左側縁に細部加工を施して刃部を作出している。108は当初ノッチド・スクレイパーと考えたが、刃部の形態を考慮して錐としておく。玉髓製である。109は黒曜石製で、やはり錐と考えられる。

###### 搔器 (73~106)

第4地点で最も多量に出土した器種である。73~90・106が玉髓製であり、黒曜石は91~96、安山岩が101~105で、玉髓が60%を占めている。

玉髓製の搔器は、長さ7~5cm、幅2~5cm内にあり、標準的な形態は、長さ5.5cm、幅3cmのエンド・スクレイパーである。刃部形態はやや円弧状となるものが基本で、刃部再生によって形状の変化は幾つかの資料に認められる。76・77・83・90などはその例と思われる。黒曜石製搔器は、資料的に少なく統計的な数値は出せないが、93・94例のように玉髓製搔器と相違しない。安山岩製搔器は、長さ5cm以上、幅5cm以上あり、明らかに玉髓製搔器より大型となっている。刃部形態は102・105例のように尖頭状になっている例が存在する。

###### 剥片 (110~128)

110~114は使用痕と思われる小剥離痕を有する剥片で、全て黒曜石である。いずれも両側縁の一部に認められるものであるが、114例のように連続的に認められるものもある。125は大型の剥片である。

###### 石核 (129~130)

安山岩製の石核が2点出土している。129は円筒状を呈するが、打面は一か所に限られている。130は両設打面を有する石核で、いずれも所謂石刃石核である。

###### 敲石 (131)

長さ16.6cmを測る大型品で、ハンマーと磨石の両方の機能を備えた石器である。

#### (e) V 区 (図65~68・PL36)

##### 第5地点 (132~143)

#### 尖頭器 (132)

石鎌状の尖頭器で、長さ4.1cmを測る。調整剥離は縁辺周縁のみで、全面を剥離面で覆ってはいない。

#### 搔器 (133~136)

133はあるいは石核かもしれない。134は小型の複刃搔器である。135・136はやや大きめの円形搔器に似た形態を呈する。以上の搔器は全て安山岩製である。

#### 剥片 (137~139・141~143)

いずれも不定形な剥片で、合計7点出土している。142および143の2点は接合している。いずれも安山岩製である。

#### 各グリット出土 (144~155)

V区の各グリットおよび遺構覆土から出土した資料をまとめて報告する。

#### 搔器 (144~155・153)

144・145は細身のエンド・スクレイパーで、144は先端部のみ急斜度調整が加えられ刃部が作出されている。145はさらに基部側にも調整加工が施される。146は刃部を欠くが、搔器とした。147は刃部が最大幅となる特徴的な形態を呈している。150・151は黒曜石製で他は玉髓が用いられている。

#### 彫器 (155)

玉髓製で、裏面側に第一次剥離面にたいして斜めに櫛状剥離が行われている。基部側は二次加工が加えられ、細身の基部を作り出している。

#### 剥片 (152・154)

いずれも玉髓製である。本遺跡において玉髓の剥片は少ない。

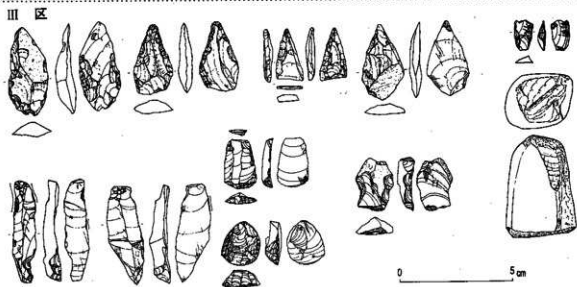
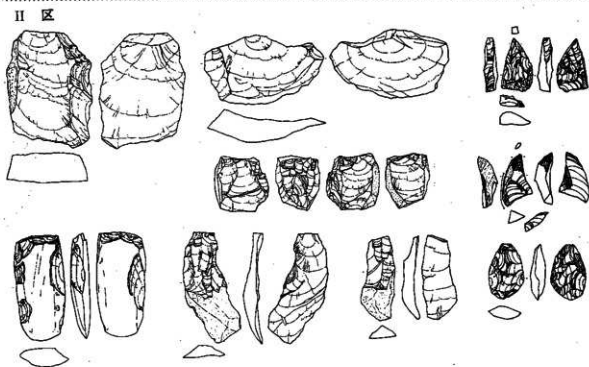
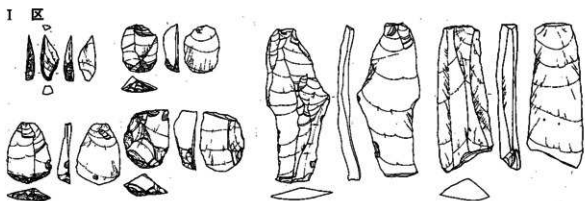


图35 各区出土先土器时代主要石器一览(1) (1:3)

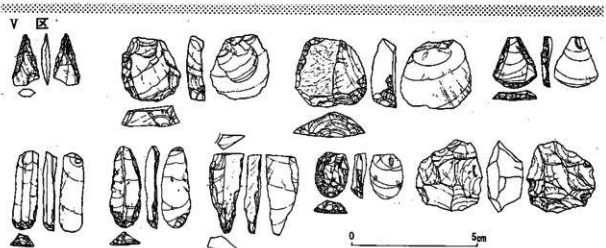
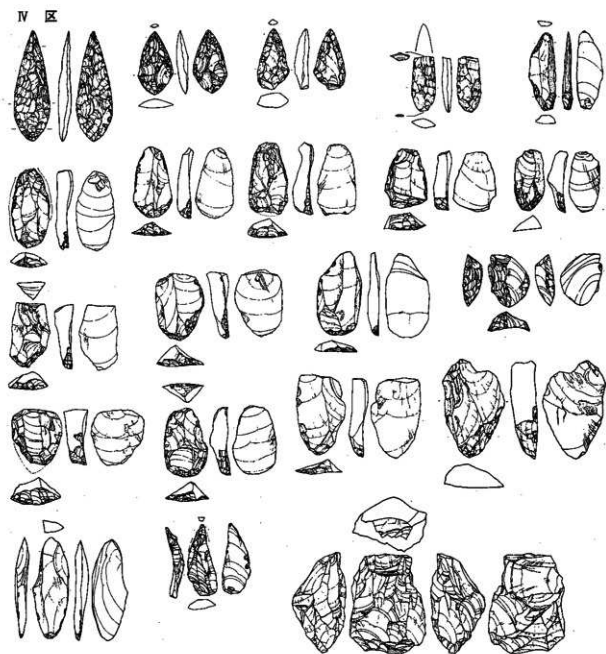


图36 各区山土先土器时代主要石器一覽(2) (1:3)

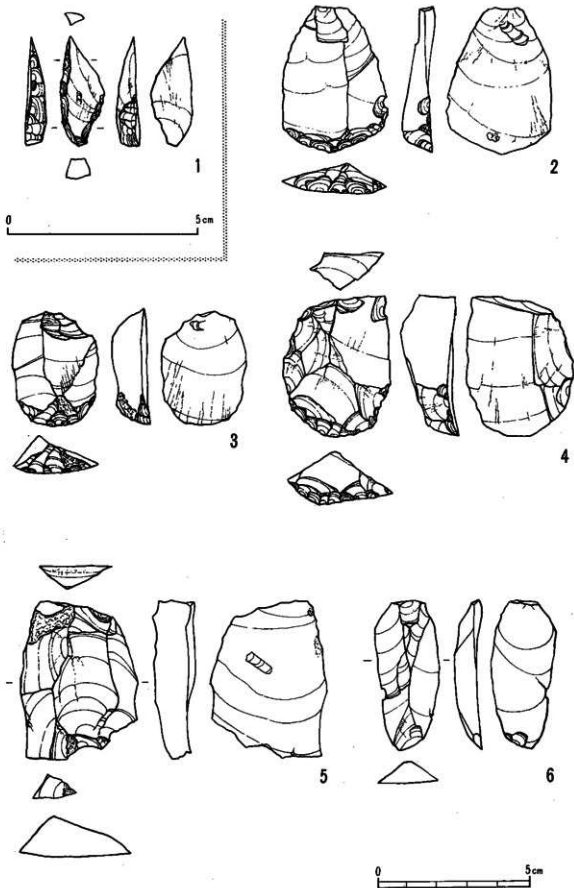
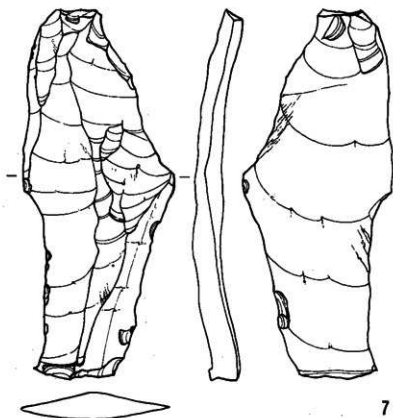
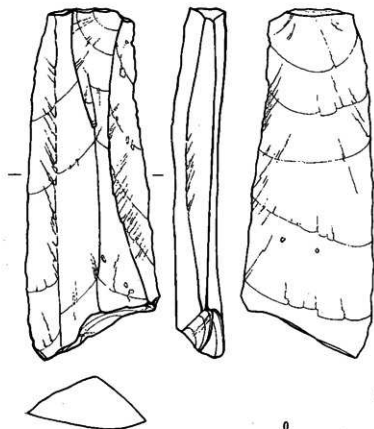


図37 先土器時代の石器 1 (1 : 1 4 : 5) I区(第1地点)





7



8

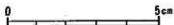


図38 先土器時代の石器 2 (4 : 5) 1区(第1地点)

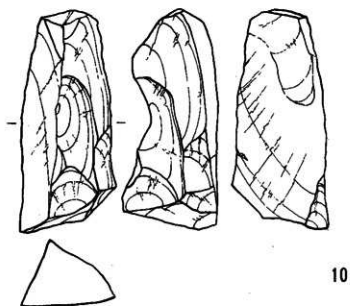
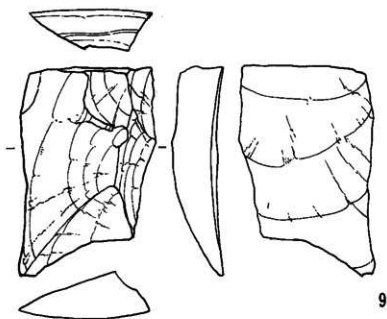


図39 先土器時代の石器 3 (4 : 5) I区(第1地点)

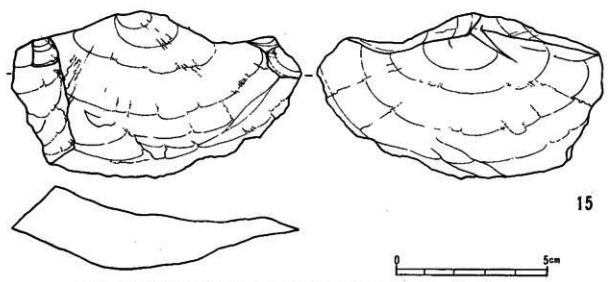
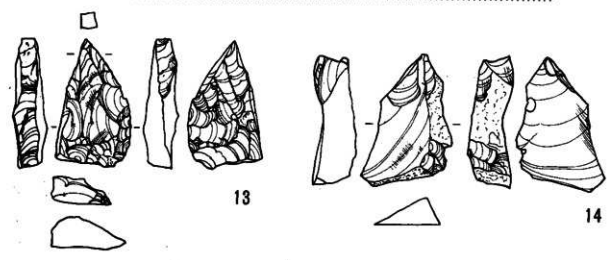
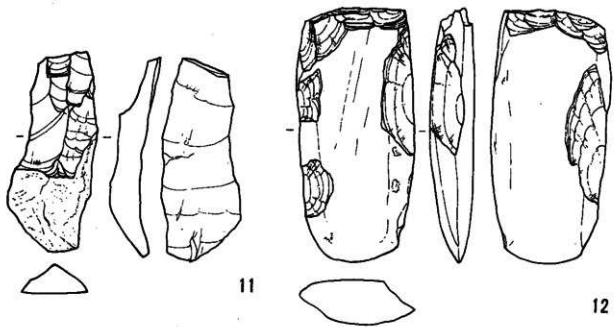
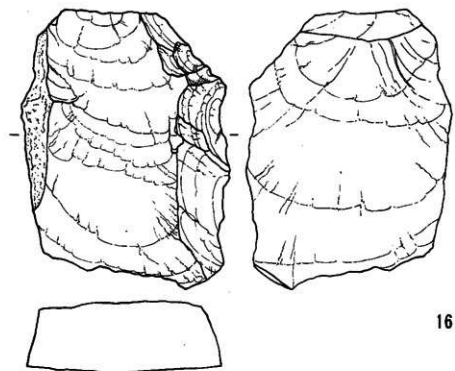
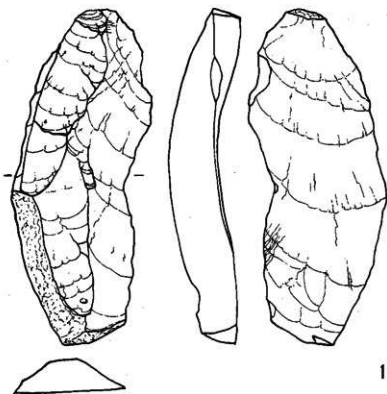


図40 先土器時代の石器4(4:5) II区(11・12各グリット・13~15 第2地点)



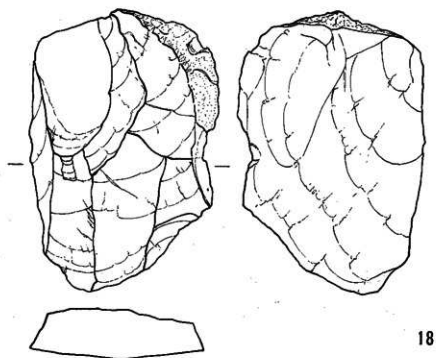
16



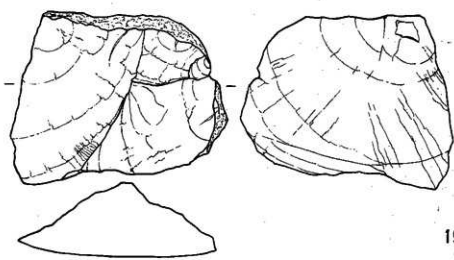
17



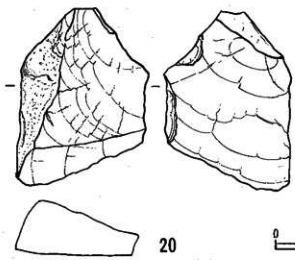
图41 先土器時代の石器 5 (4 : 5) II区(第2地点)



18



19



20

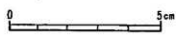
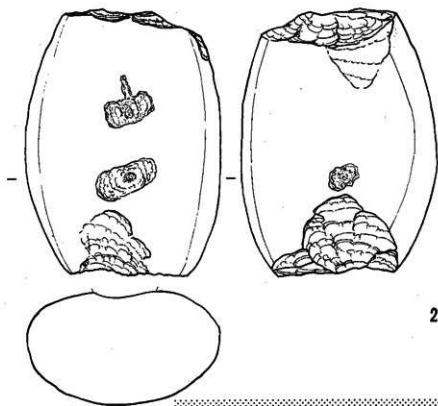
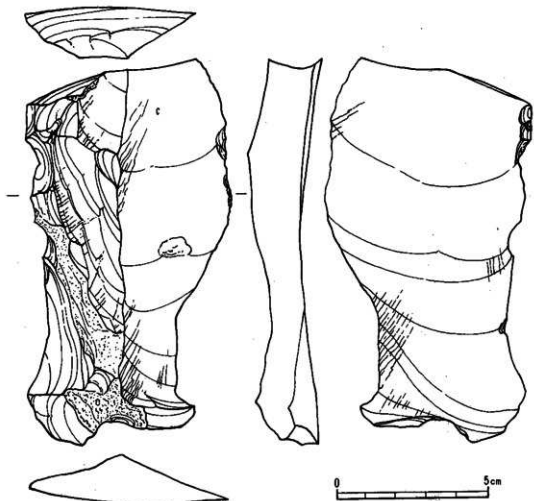


図42 先土器時代の石器6 (4 : 5) II区(第2地点)

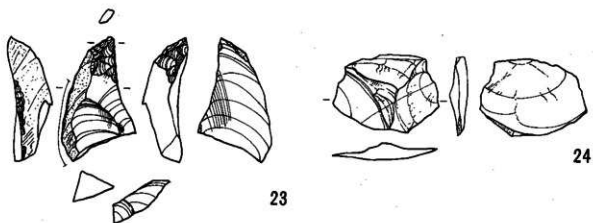


21



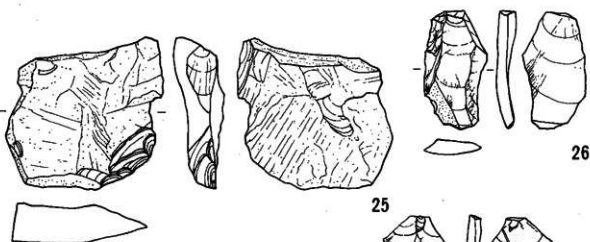
22

図43 先土器時代の石器 7 (4 : 5) II区(21第2地点・22J-7)



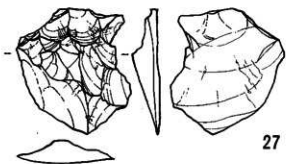
23

24



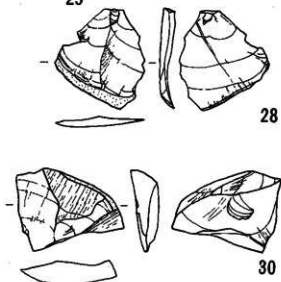
25

26

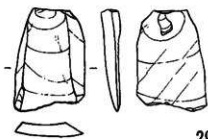


27

28



30

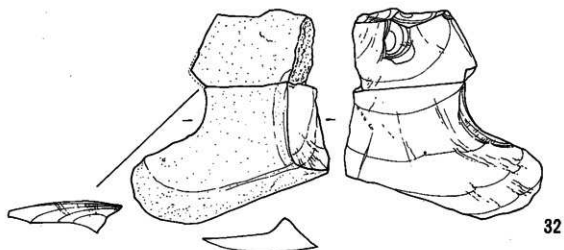


29

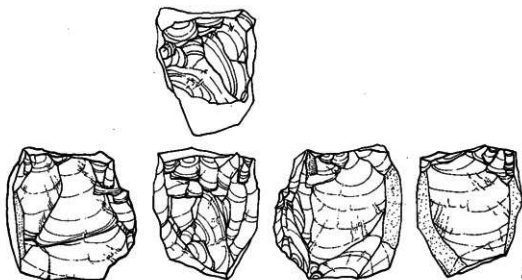
31



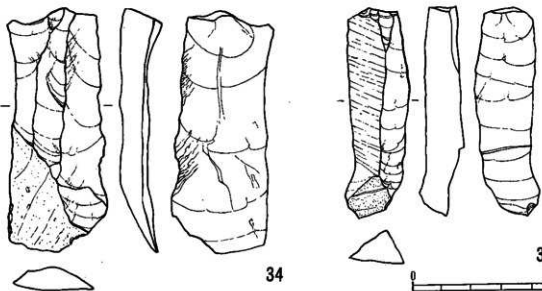
図44 先土器時代の石器 8 (4:5) II区(第3地点)



32



33

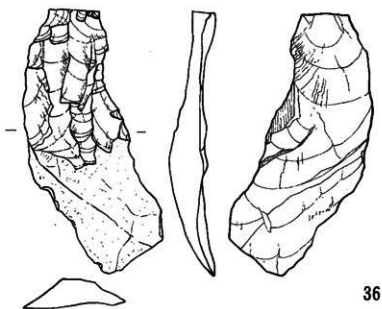


34

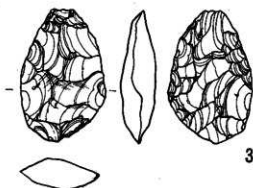
35

図45 先土器時代の石器9 (4:5) II区(第3地点)

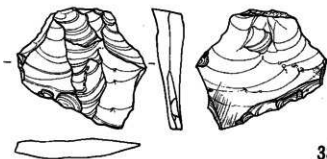




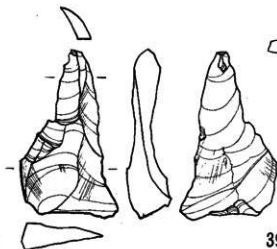
36



37



38



39

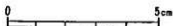


図46 先土器時代の石器 10 (4 : 5) II区(36第3地点・37~39各グリット)

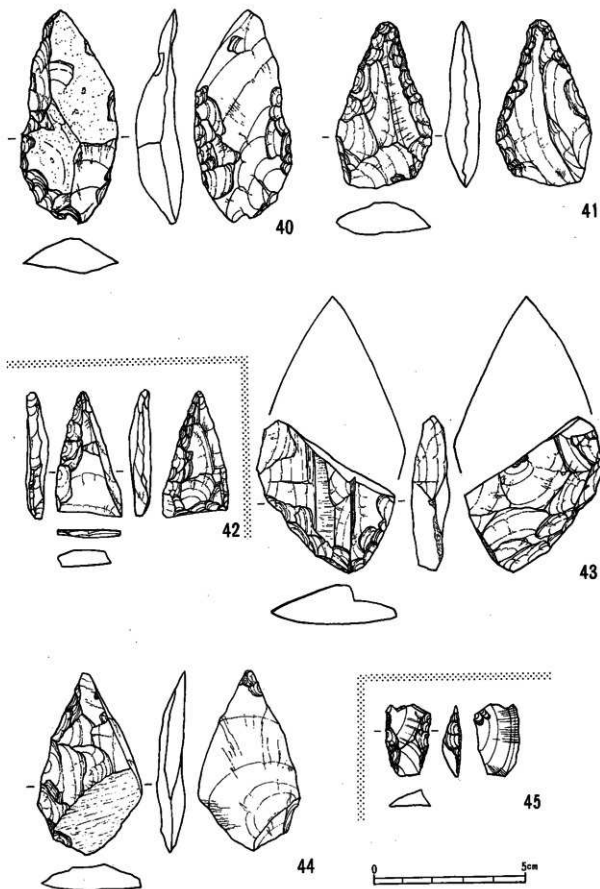


図47 先土器時代の石器 11 (4 : 5) III区(40・41・43・44 C—10 42 C—9 45 C—12)

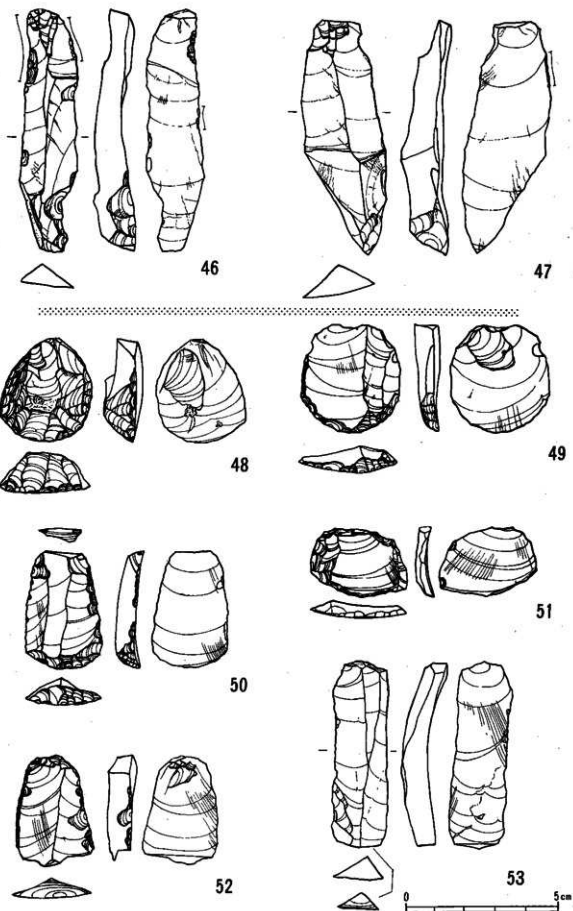


図48 先土器時代の石器 12 (4 : 5) III区(46・47 1号礫群 48~53 B—14)

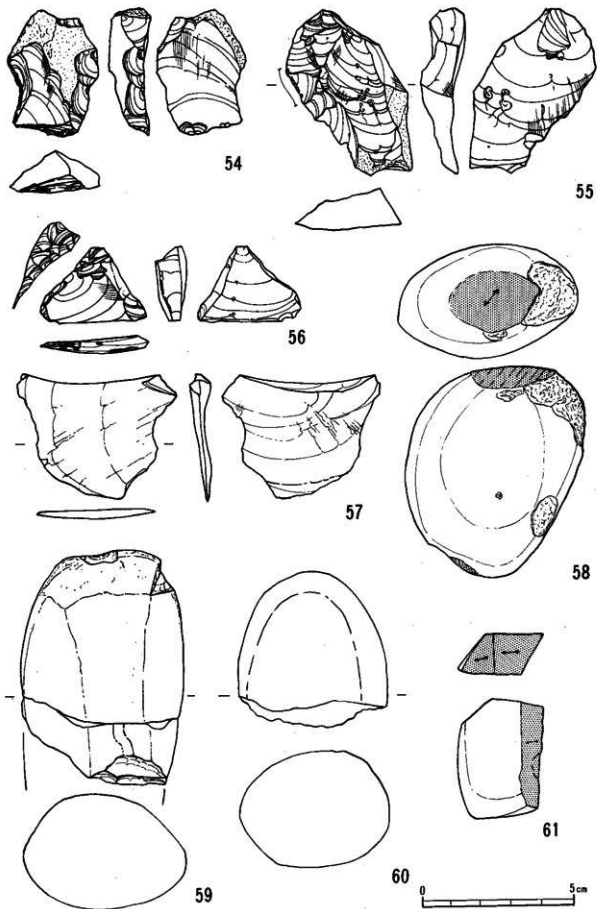
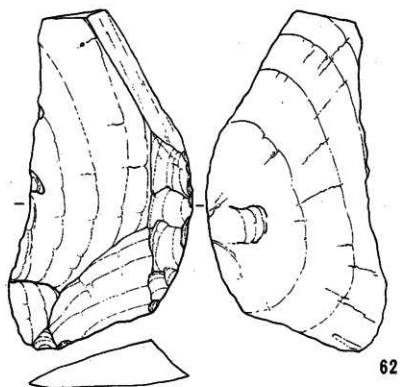
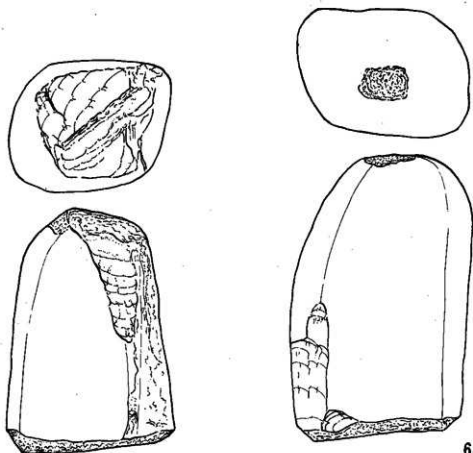


図49 先土器時代の石器 13 (4:5) III区(2号磯群)



62



63

64

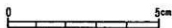
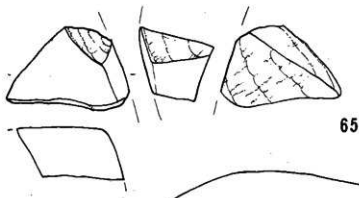
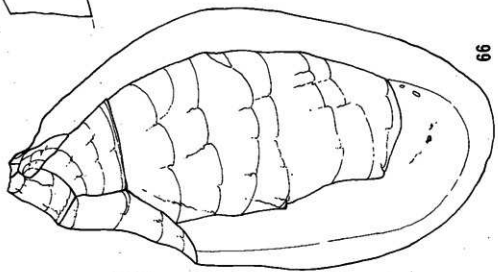


图50 先土器時代の石器 14 (4 : 5) III区(2号塚群)



65



66

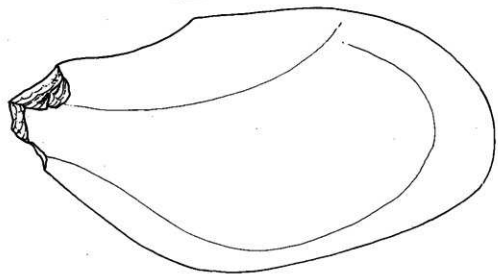
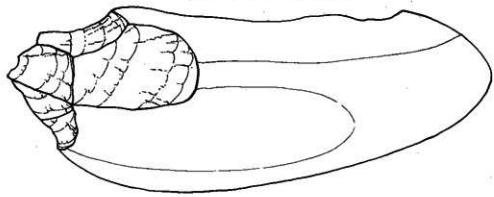


図51 先土器時代の石器 15 (4 : 5) III区(2号燧群)

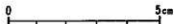
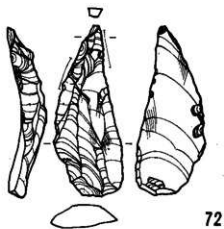
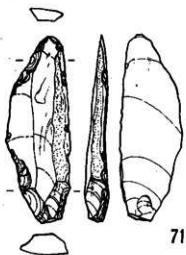
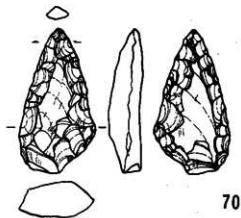
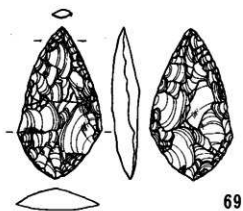
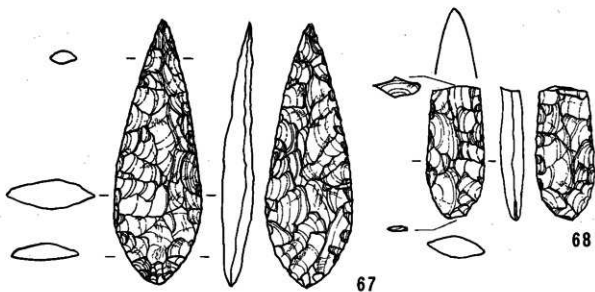


図52 先土器時代の石器 16 (4 : 5) IV区(第4地点)

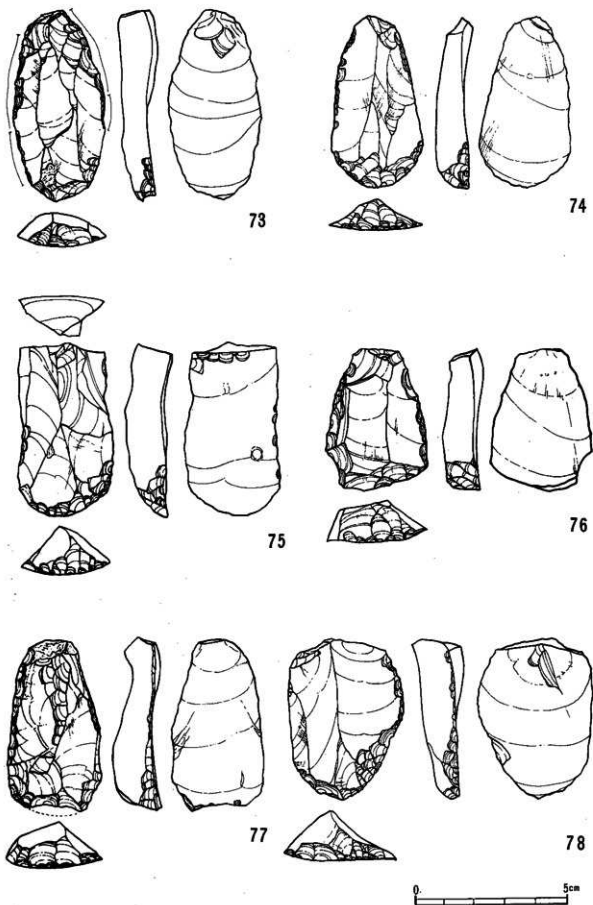


図53 先土器時代の石器 17 (4:5) IV区(第4地点)



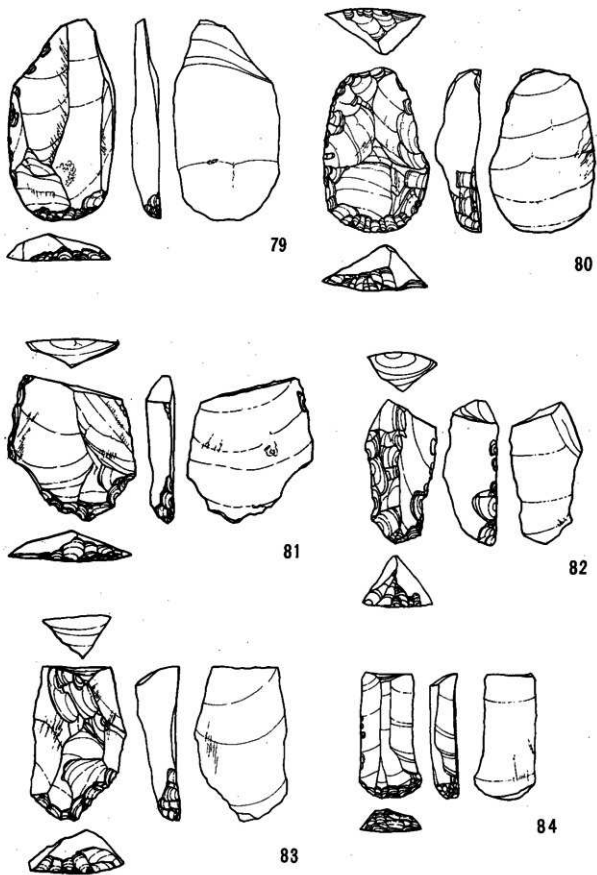
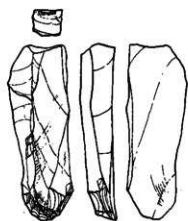
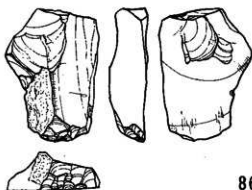


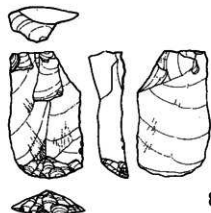
图54 先土器時代の石器 18 (4 : 5) IV区(第4地点)



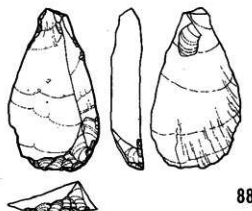
85



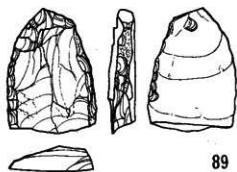
86



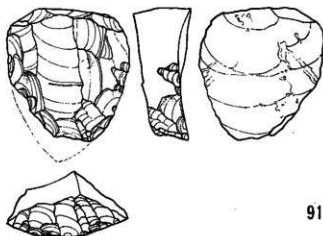
87



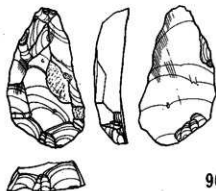
88



89



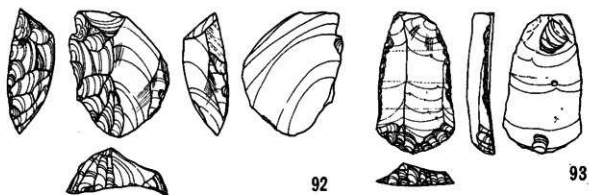
91



90

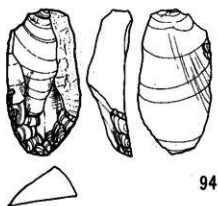


図55 先土器時代の石器 19 (4 : 5) IV区(第4地点)

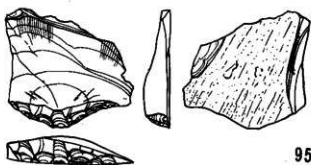


92

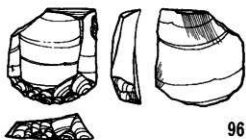
93



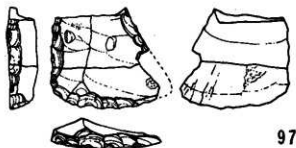
94



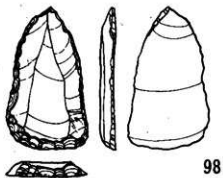
95



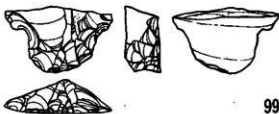
96



97



98



99



図56 先土器時代の石器 20(4:5) IV区(第4地点)

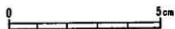
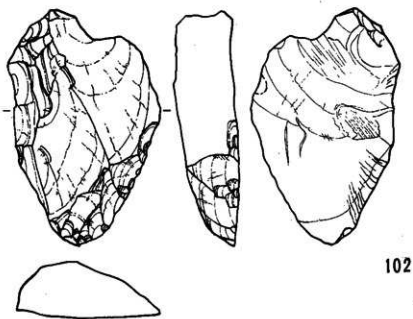
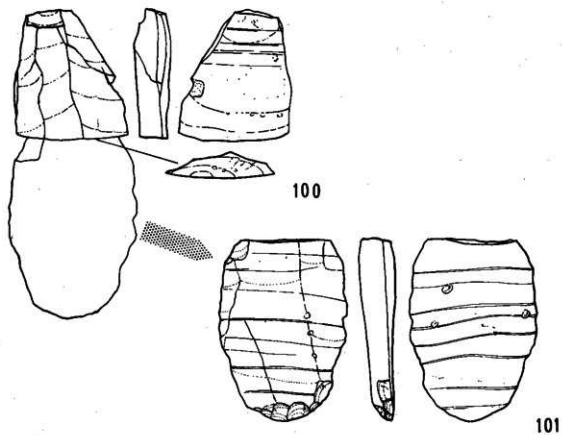


図57 先土器時代の石器 21 (4 : 5) IV区(第4地点)

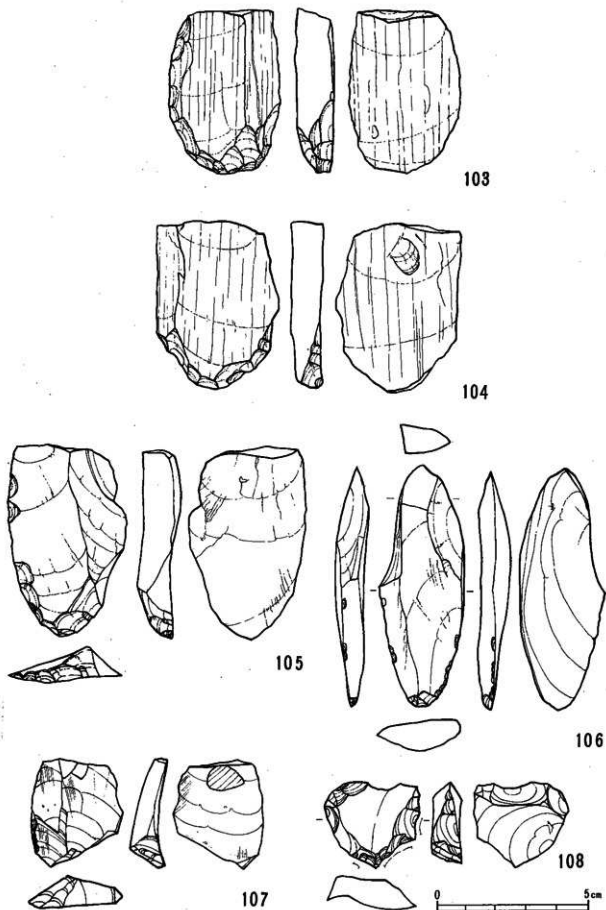


図58 先土器時代の石器 22 (4 : 5) IV区(第4地点)

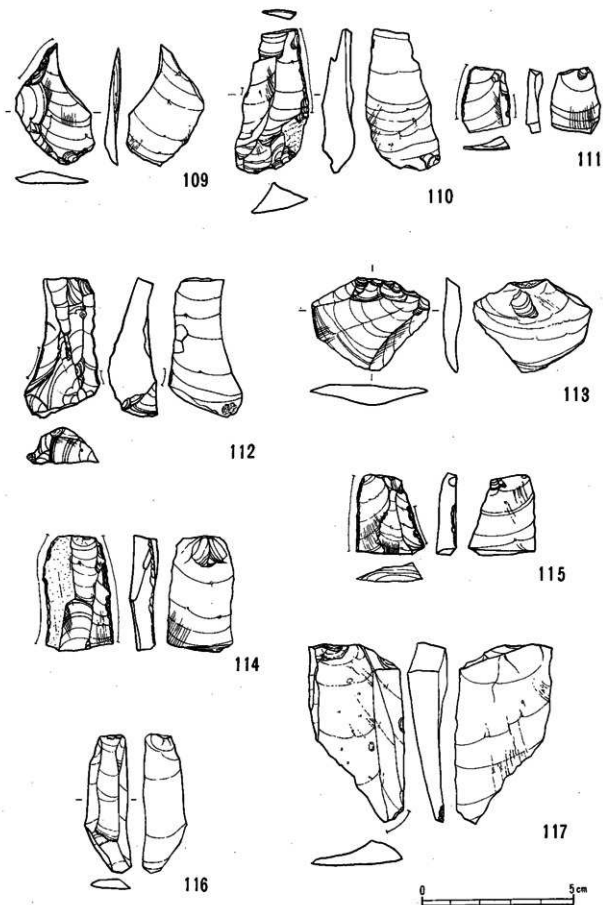
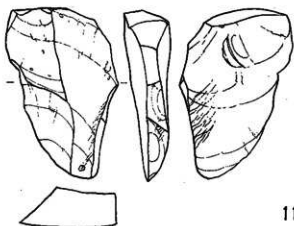
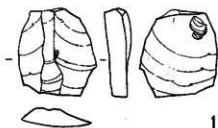


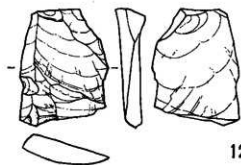
図59 先土器時代の石器 23 (4 : 5) IV区(第4地点)



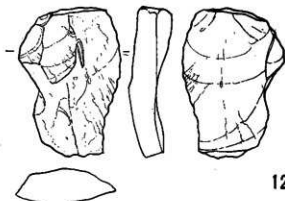
118



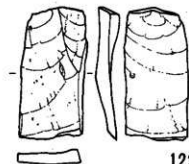
119



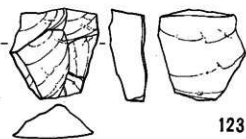
120



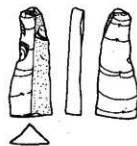
121



122



123



124

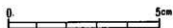


図60 先土器時代の石器24(4:5) IV区(第4地点)

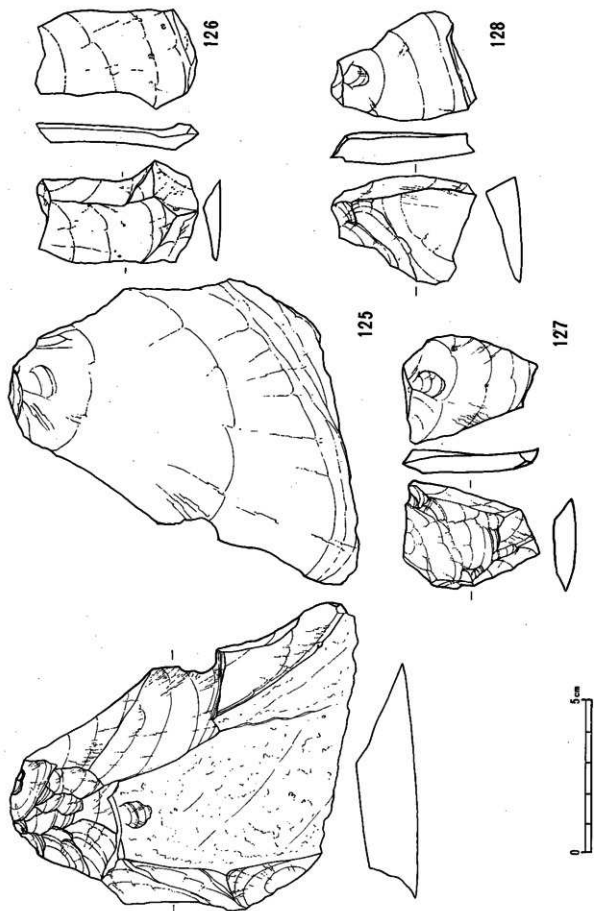


図61 先土器時代の石器 25 (4 : 5) IV区(第4地点)



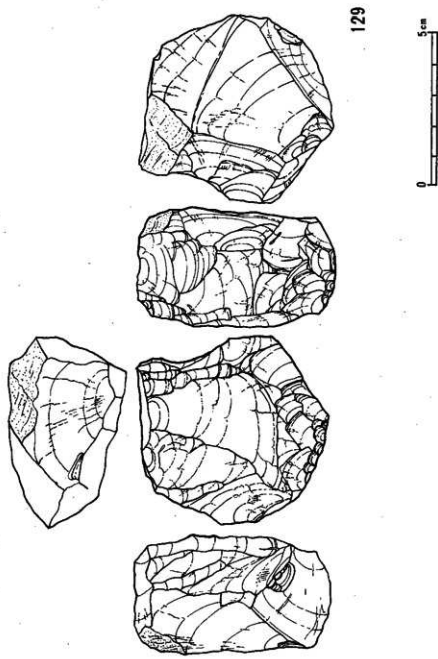


図62 先土器時代の石器26(4:5) IV区(第4地点)

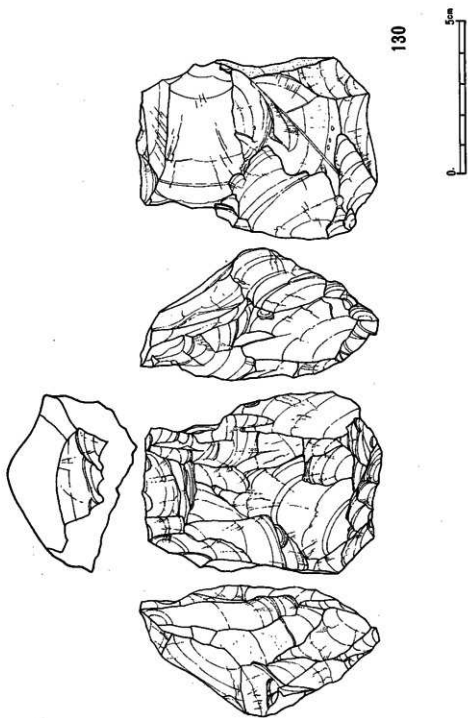


図63 先土器時代の石器 27 (4 : 5) IV区(第4地点)

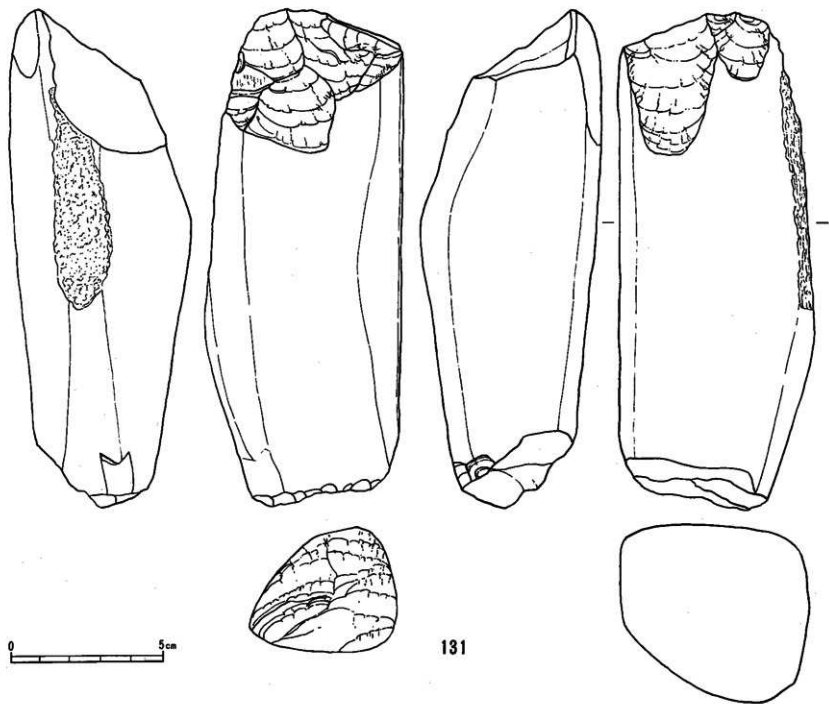


図64 先土器時代の石器 28 (4 : 5) IV区(第4地点)

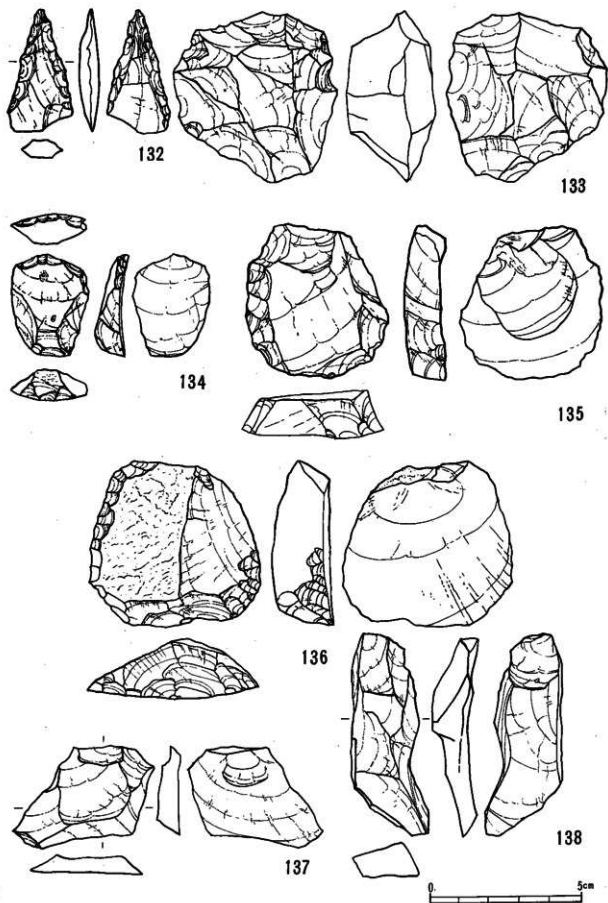


図65 先石器時代の石器 29 (4 : 5) V区(第5地点)

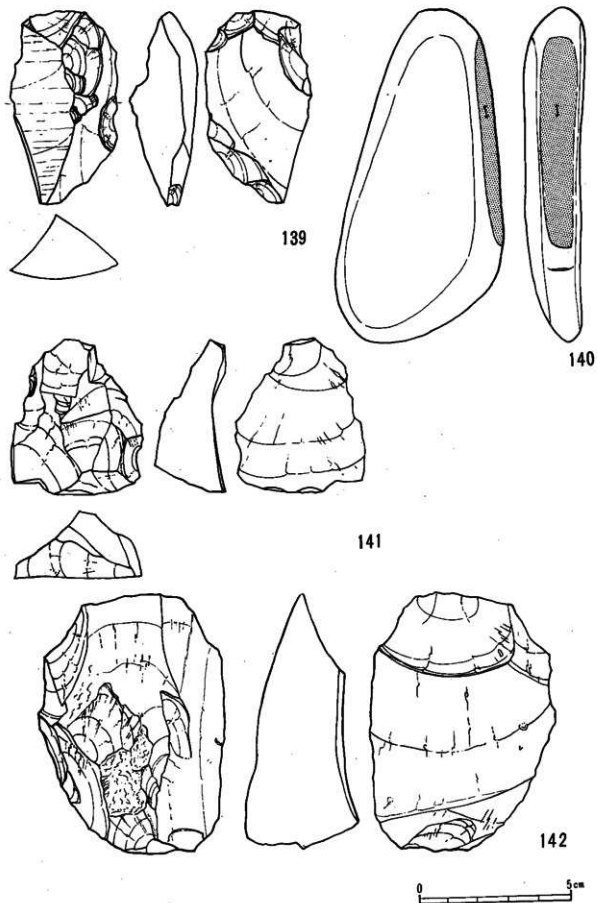


図66 先土器時代の石器 30 (4 : 5) V区(第5地点)

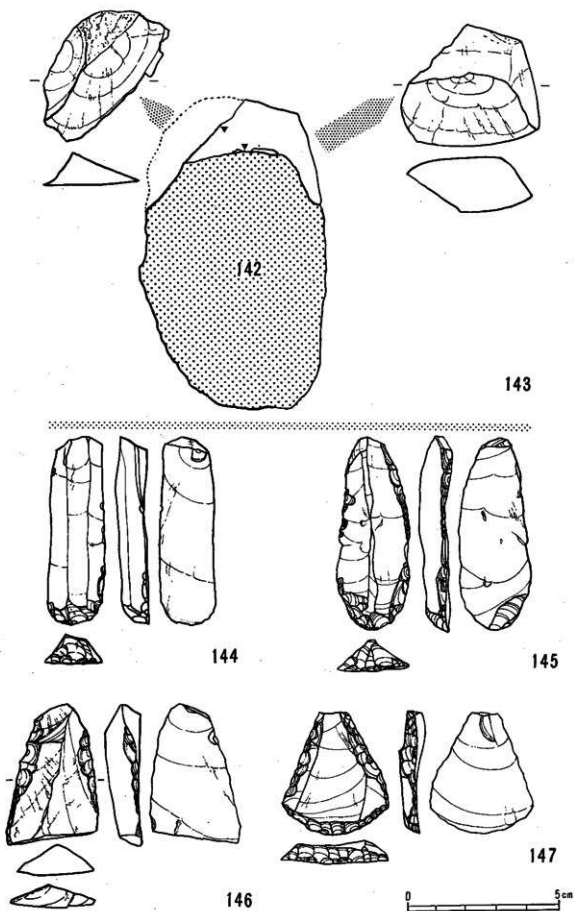


図67 先土器時代の石器 31 (4 : 5) V区(143 第5地点)

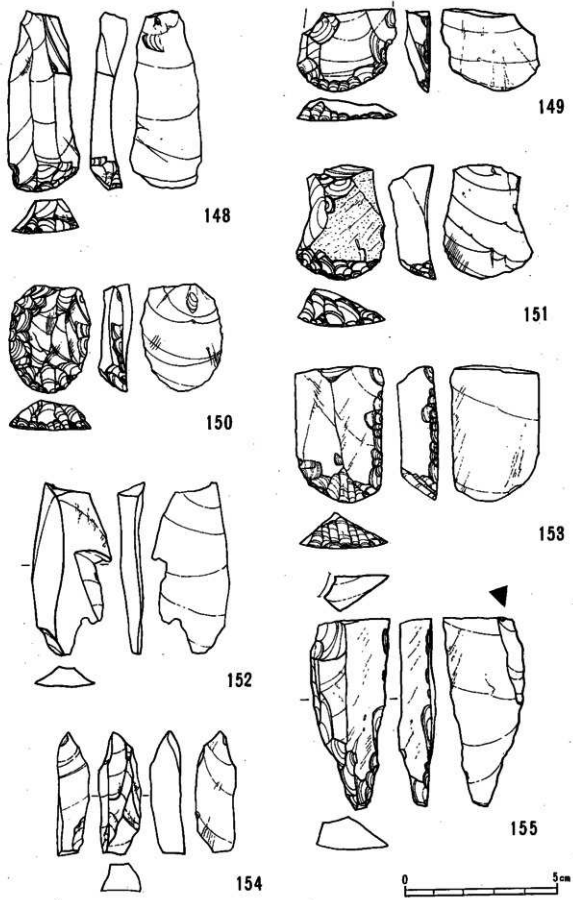


図68 先土器時代の石器 32 (4 : 5) V区

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
1	ナイフ形石器	1	玉髓	2.9	1.2	0.6	1.5			H12住 1
2	掻器	1	玉髓	4.9	3.5	1.0	13.3			H12住 1
3	掻器	1	玉髓	3.8	2.9	1.2	12.8			I Q-18 2
4	掻器	1	玉髓	4.7	3.6	2.0	27.0			I Q-18 3
5	刃器状剥片	1	玉髓	5.2	3.8	1.8	25.7			I Q-18 1
6	刃器状剥片	1	頁岩	5.0	2.1	0.9	6.5			I Q-19 2
7	刃器状剥片	1	頁岩	12.5	5.0	1.7	48.7			I R-19 1
8	刃器状剥片	1	安山岩	11.5	4.5	1.8	85.6			I K-18 3
9	刃器状剥片	1	安山岩	6.9	4.6	1.7	47.0	○		I Q-19 1
10	剥片	1	安山岩	7.3	3.2	3.2	61.3	○		I R-18 1
11	剥片	II区	チャート	6.8	2.3	1.4	17.2	○		II K-4 1
12	磨製石斧	II区	結晶片岩	8.4	3.9	1.5	85.8			II K-5
13	彫器	2	黒曜石	4.3	2.6	1.2	10.0			II G-7 7
14	剥片	2	黒曜石	4.4	3.0	1.5	12.4			II G-7 9
15	剥片	2	安山岩	5.4	9.5	2.7	108.9			II H-5 8
16	剥片	2	安山岩	9.3	6.8	2.5	160.4			II H-6 9
17	剥片	2	安山岩	11.1	4.7	2.5	84.9			II H-6 4
18	剥片	2	安山岩	9.5	6.1	1.8	109.9			II H-6 25
19	剥片	2	安山岩	5.7	7.1	2.5	93.0			II H-6 14
20	剥片	2	安山岩	5.8	4.0	1.7	42.4			II H-6 3
21	くほみ石	2	花崗岩	8.9	6.3	3.8	326.7			II H-6 10
22	剥片	II区	玉髓	12.7	6.6	2.5	14.2			II I-7
23	石錐	3	黒曜石	4.1	2.4	1.5	5.7			II G-9 4
24	剥片	3	脈岩	2.6	3.5	0.6	3.9			II H-9 5
25	掻器	3	チャート	5.1	5.1	1.7	47.7			II G-9 5
26	剥片	3	脈岩	3.9	2.1	0.7	4.7			II H-10 2
27	剥片	3	脈岩	4.2	3.8	0.9	9.3			II H-9 7
28	剥片	3	チャート	3.4	3.0	0.6	3.3			II G-10 2
29	剥片	3	チャート	3.3	2.4	0.6	4.0		同一母岩	II H-10 5
30	剥片	3	チャート	2.8	3.7	1.0	7.8			II H-10 5
31	剥片	3	チャート	2.4	1.6	0.7	3.2			II H-10 7

表1 先土器時代石器計測表 (1)



番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
32	剥片	3	脈岩	7.0	6.6	1.1	29.5		接合資料	III-9 2+D-15
33	石核	3	脈岩	4.4	4.3	3.5	84.8			II G-9 6
34	剥片	3	硬質脈岩	8.0	3.3	1.4	25.4			II H-9 1
35	剥片	3	チャート	6.9	2.2	1.5	16.4			II H-10 4
36	剥片	3	硬質脈岩	8.6	4.7	1.5	30.0			II H-10 3
37	尖頭器	II区	黒曜石	4.4	2.8	1.2	12.2			II F-14 1
38	搔器	II区	黒曜石	3.9	4.2	1.1	11.4			II D-14
39	剥片	II区	黒曜石	5.5	3.2	1.5	19.3			II D-17 1
40	尖頭器	III区	安山岩	7.1	3.5	1.5	25.7			III C-10
41	尖頭器	III区	安山岩	5.5	3.1	1.2	18.5			III C-10
42	尖頭器	III区	安山岩	4.2	2.2	0.8	6.0			III C-9
43	尖頭器	III区	安山岩	5.2	4.3	1.3	25.0			III C-10
44	尖頭器	III区	安山岩	6.0	3.5	1.0	17.6			III C-10
45	ナイフ形石器	III区	黒曜石	2.4	1.5	0.7	1.7			III C-12
46	扶入石器	1礫	チャート	8.0	2.0	1.5	13.6			III C-11 66
47	剥片	1礫	脈岩	7.6	2.8	1.7	19.4			III C-11 34
48	搔器	III区	黒曜石	3.4	3.0	1.8	11.8			III B-14
49	搔器	III区	黒曜石	3.6	3.3	0.9	8.9			III B-14
50	搔器	III区	黒曜石	3.9	2.6	0.9	7.1			III B-14
51	搔器	III区	黒曜石	2.3	3.2	0.6	3.3			IV B-15
52	搔器?	III区	黒曜石	3.6	2.6	1.0	6.4	○		III D-14
53	刃器状剥片	III区	黒曜石	6.6	2.0	1.8	9.4	○	小剥離痕	III B-14
54	搔器	2礫	黒曜石	4.2	3.0	1.9	13.6			III礫群 7
55	剥片	2礫	黒曜石	5.5	4.2	1.5	19.9		小剥離痕	III礫群 100
56	剥片	2礫	黒曜石	2.5	3.5	1.1	6.7			III礫群 126
57	剥片	2礫	安山岩	4.2	5.3	0.8	12.9	○		III礫群 24
58	磨石	2礫	砂岩	6.9	6.1	3.7	155.9			III礫群 133
59	敲石	2礫	砂岩	7.7	5.3	3.8	174.1	○		III礫群 9
60	磨石	2礫	花崗岩	5.2	5.0	3.8	114.8	○		III礫群 22
61	磨石	2礫	砂岩	3.9	2.9	1.4	20.6			III礫群 134
62	剥片	2礫	安山岩	10.8	6.6	1.9	87.7		(石弁?)	III礫群 77

表2 先土器時代石器計測表 (2)

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
63	敲石	2磯	砂岩	8.1	5.6	4.3	314.5		(石斧?)	Ⅲ磯群 106
64	敲石	2磯	砂岩	9.8	5.8	4.2	387.8			Ⅲ磯群 45
65	磨石	2磯	砂岩	2.8	4.0	2.5	25.2			Ⅲ磯群 54
66	ハンマー	2磯	砂岩	16.1	8.4	6.0	1048.4			Ⅲ磯群 55
67	尖頭器	4	安山岩	8.8	2.9	1.1	19.9			ⅣB-13 1
68	尖頭器	4	頁岩	4.4	1.9	0.8	23.6			ⅣC-13
69	尖頭器	4	黒曜石	5.0	2.8	1.0	8.9			ⅣB-14 1
70	尖頭器	4	安山岩	4.8	2.5	1.2	13.6			ⅣC-17 1
71	ナイフ形石器	4	玉髓	6.1	2.0	0.9	9.9			ⅣD-17 4
72	石錐	4	黒曜石	5.6	2.3	1.3	8.8			ⅣC-16
73	搔器	4	玉髓	6.2	3.0	1.8	21.9		小剝離痕	ⅣD-16 3
74	搔器	4	玉髓	5.7	3.1	1.2	17.5			ⅣC-16 70
75	搔器	4	玉髓	5.6	3.0	1.7	27.9			ⅣC-16 13
76	搔器	4	玉髓	4.7	3.4	1.3	22.2			ⅣC-14 2
77	搔器	4	玉髓	5.6	3.2	1.7	23.6			ⅣSK5
78	搔器	4	玉髓	5.3	3.8	1.7	26.6			ⅣC-16 18
79	搔器	4	玉髓	6.5	3.4	1.0	20.5			ⅣB-15 1
80	搔器	4	玉髓	5.4	3.4	1.6	24.7			ⅣC-16 32
81	搔器	4	玉髓	4.8	4.1	1.0	16.0			ⅣD-17 22
82	搔器	4	玉髓	4.8	2.4	1.9	17.3			ⅣC-16 29
83	搔器	4	玉髓	5.1	3.1	1.7	18.3			ⅣD-17 5
84	搔器	4	玉髓	4.1	2.1	1.0	7.6			ⅣC-17 35
85	搔器	4	玉髓	5.9	2.1	1.2	15.1			ⅣC-16 32
86	搔器	4	玉髓	4.4	3.0	1.4	15.8			ⅣB-15 3
87	搔器	4	玉髓	4.2	2.5	1.2	8.5			ⅣC-16 73
88	搔器	4	玉髓	5.4	3.0	1.0	13.5			ⅣC-17
89	搔器	4	玉髓	4.1	3.0	0.9	13.8	○		ⅣC-16
80	搔器	4	黒曜石	4.5	2.5	1.1	10.6			ⅣC-16 1
91	搔器	4	玉髓	4.9	4.2	1.9	34.0			ⅣC-16 102
92	搔器	4	黒曜石	4.1	3.4	1.5	15.5			ⅣD-16 2B
93	搔器	4	黒曜石	4.6	2.6	0.9	9.6			ⅣC-17 22

表3 先土器時代石器計測表 (3)

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
94	搔器	4	黒曜石	4.9	2.5	1.6	12.9			IVC-16 42
95	搔器	4	黒曜石	3.9	4.1	1.0	12.2			IVC-17 40
96	搔器	4	黒曜石	3.3	2.9	1.0	7.2	○		IVC-15 1
97	搔器	4	頁岩	3.3	3.7	1.1	6.9	○		IVB-15 7+D16
98	搔器	4	頁岩	4.8	2.7	0.5	7.9			IVB-16
99	搔器	4	頁岩	2.2	3.5	1.2	8.2	○		IVC-17
100	剥片	4	安山岩	4.3	3.8	1.3	21.0	?		IVC-16 38
101	搔器	4	安山岩	6.0	4.2	1.2	32.2	?	}接合	IVC-17 4
102	搔器	4	安山岩	7.9	5.0	2.0	62.5			IVC-17 19
103	搔器	4	安山岩	5.4	3.6	1.3	35.5			IVC-19 9
104	搔器	4	安山岩	5.1	4.1	1.2	27.1			IVC-17 3
105	搔器	4	安山岩	6.3	3.9	1.4	30.9			IVC-16 22
106	搔器	4	玉髓	8.0	2.8	1.1	23.7			IVC-16 5
107	剥片	4	黒曜石	3.5	3.1	1.2	8.2	○	小剥離痕	IVC-16 60
108	搔器	4	玉髓	2.8	3.2	1.0	8.6			IVC-17 20
109	石錐	4	黒曜石	4.0	2.5	0.6	3.1			IVC-16 83
110	剥片	4	黒曜石	4.8	2.5	1.2	7.3	○	小剥離痕	IVD-17 7
111	剥片	4	黒曜石	2.1	1.6	0.6	1.6		小剥離痕	IVC-17 5
112	剥片	4	黒曜石	4.7	2.5	1.7			小剥離痕	IVD-16
113	剥片	4	黒曜石	3.1	3.9	0.7	5.9		小剥離痕	IVD-16 11
114	剥片	4	黒曜石	3.8	2.4	1.0	6.9	○	小剥離痕	IVD-18 1
115	剥片	4	黒曜石	2.7	2.3	0.7	3.7	○	小剥離痕	IVD-17 21
116	剥片	4	玉髓	4.6	1.5	0.4	2.6			IVB-15 5
117	剥片	4	安山岩	5.9	3.2	1.3	16.7			IVC-16 90
118	剥片	4	安山岩	5.6	3.7	1.6	26.8			IVC-16 19
119	剥片	4	黒曜石	2.9	2.6	0.9	5.7			IVC-16 26
120	剥片	4	安山岩	3.8	3.0	1.0	8.3	○		IVC-16 32
121	剥片	4	安山岩	4.9	3.4	1.1	19.2			IVB-15 5
122	剥片	4	安山岩	4.3	2.2	0.8	6.5	○		IVC-16 32
123	剥片	4	安山岩	3.0	2.9	1.3	9.9	○		IVC-16 103
124	剥片	4	黒曜石	3.1	1.4	0.7	2.5	○		IVC-17 29

表4 先土器時代石器計測表 (4)

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
125	剥片	4	安山岩	11.6	10.1	2.1	225.3			VC-16 49
126	剥片	4	安山岩	5.2	3.4	1.0	12.1			VC-16 20
127	剥片	4	安山岩	4.4	3.6	0.9	11.6			VC-16 35
128	剥片	4	安山岩	4.8	3.6	1.2	16.1			VC-16 24
129	石核	4	安山岩	6.6	6.2	3.9	171.1			VC-16 37
130	石核	4	安山岩	8.0	6.1	4.4	221.6			VC-16 19
131	ハンマー	4	砂岩	16.6	6.5	6.0	922.5			VD-14 1
132	尖頭器	5	安山岩	4.1	2.2	0.7	4.2		未製品	VB-5 11
133	搔器	5	安山岩	5.7	5.4	3.0	81.7			VB-5 9
134	搔器	5	安山岩	3.3	2.5	1.1	8.8			VB-5 13
135	搔器	5	安山岩	5.0	4.7	1.4	46.2			VC-5 8
136	搔器	5	安山岩	5.4	5.6	2.1	68.1			VC-5
137	剥片	5	安山岩	3.3	4.6	0.6	10.8			VB-5 2
138	剥片	5	安山岩	6.6	2.5	1.5	18.9			VB-5
139	剥片	5	安山岩	6.4	3.5	2.3	42.4		未製品	VB-5
140	磨石	5	砂岩	11.0	5.7	2.1	159.4			VC-5 10
141	剥片	5	安山岩	5.1	4.2	2.3	37.3			VC-5 3
142	剥片	5	安山岩	8.7	6.7	3.9	193.9			VC-5 23
143	剥片	5	安山岩							
144	搔器	V区	玉髓	6.2	1.9	1.1	12.6			SD 3
145	搔器	V区	玉髓	6.3	2.5	1.1	14.7			VD-7
146	搔器	V区	玉髓	4.6	3.0	1.3	14.2	○		VD-11
147	搔器	V区	玉髓	4.0	3.6	0.9	11.2			H 5 住
148	搔器	V区	玉髓	6.0	2.4	1.3	12.9			VB-7
149	搔器	V区	玉髓	2.7	3.3	0.6	6.3	○		VD-5
150	搔器	V区	黒曜石	3.6	2.2	1.2	10.7			VD-7
151	搔器	V区	黒曜石	3.7	2.9	1.5	12.0			H 4 住
152	剥片	V区	玉髓	5.7	2.6	0.9	7.9			SD 3
153	搔器	V区	玉髓	4.5	2.9	1.2	18.1			Y 3 住
154	彫器	V区	玉髓	4.0	1.4	1.2	5.8			VC-8
155	彫器	V区	玉髓	6.3	2.6	1.3	18.8			VD-11

表5 先土器時代石器計測表 (5)

## 第3章 縄文時代

### 1 遺構

#### A 概要

今回の調査によって、確実に縄文時代に位置づけられる遺構は存在しない。各区において2列ないし3列に並んだ溝状土壇が計17基検出されている。これらの溝状土壇は、「Tピット」「溝状ピット」などとも呼称されているものである。本遺構内よりの出土遺物は全く無かったが、本稿では以下の理由により縄文時代の遺構としておく。

- 1 中世の遺構に切られている。(大倉崎館跡内の14・16・17号溝状土壇)
- 2 平安時代の住居址(H12住)に切られている(1号溝状土壇)。
- 3 方形周溝墓(SD1)に切られる(13号溝状土壇)。
- 4 弥生時代住居址(Y6住)と新旧関係ははっきりしないが、切られている可能性がある。
- 5 溝状土壇はほぼ方位が一致しており、検出された17基が一時期に構築された可能性が高く、上記の切りあい関係にある遺構の時代より全基とも古い可能性がある。

#### B 溝状土壇(図69・70)

##### (1) 1号溝状土壇(図69・MSK1)

I区、O・P-19に位置し、H12号住居址に切られる。340cm×30cmを測り、確認面からの深さ(以下「深さ」という)は114cmである。

##### (2) 2・3号溝状土壇(図69・MSK2・MSK3)

II区、G-11に並列して位置する。2号溝状土壇は360cm×40cm、深さ60cmを測る。3号溝状土壇は、320cm×25cm、深さ60cmで、2号より細い。両者の距離は約3mで、方位もN10°Eではほぼ一致する。

##### (3) 4・5号溝状土壇(図69・MSK4・MSK5)

II区、C-E-17に位置し、約6.5m離れて並列する。4号溝状土壇は、190cm×30cm、深さ60cm。5号溝状土壇は、340cm×40cm、深さ95cmを測る。4号例は小形である。

##### (4) 6・7・8号溝状土壇(図69・MSK6・MSK7・MSK8)

III区、B-D-3・4に並行して構築されている。6号と7号、7号と8号との距離はそれぞれ2.8m、3.6mである。規模はほぼ同様で、270cm×30~40cm、深さ80~100cmである。8号溝状土壇の縦断面の観察を行ったが、覆土は分離することが難しく、一層と考えられた。ただ端部には壁の崩れと考えられるイ層を分離できた。人為的埋土はなく、狭い遺構であるので、比較的短期間で埋没したのではあるまいか。

##### (5) 9号溝状土壇(図69・MSK9)

III区、B-9に位置し、Y6号住居址に一部重なるが、切り合い関係は明確でない。調査区西端にあるため一基のみで存在していたかどうかは不明である。規模は、340cm×40cm、深さは110cmを測る。

##### (6) 10・11号溝状土壇(図69・MSK10・MSK11)

III区、C・D-13・14に並列している。11号は調査区外へ延びるため規模は不明である。10号は、370cm×50cmで、深さは70cmを測る。10・11号間は約8m離れているが、方位はN20°Eで一致する。

##### (7) 12号溝状土壇(図69・MSK12)

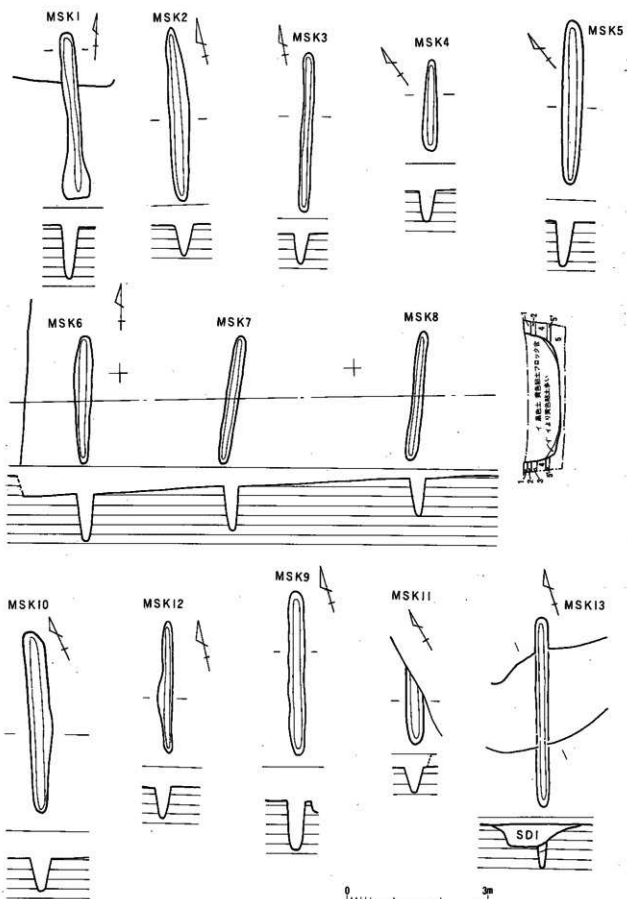


图69 溝状土坑 1 : 80

Ⅲ区、C-19に位置し、SB5に近接する。  
380cm×20cm、深さ60cmを測る。

(8) 13号溝状土坑 (図69・MSK13)

Ⅳ区、B-13に位置し、1号方形周溝墓(S  
D1)に切られている。規模は、394cm×28cm  
で、深さは100cmを測る。

(9) 14号溝状土坑 (図70・MSK14)

Ⅵ区(大倉崎館跡内)の補遺調査による。  
内堀によってほとんど破壊されていた。本地区  
周辺には、前年度の調査によって3基検出され  
ている(SK06-08)。今回の調査によって、多  
くの類例が検出されたので、遺構番号を統一す  
ることにした。すなわち、SK06をMSK17、  
SK07をMSK16、SK08をMSK15とする。  
(図70)。

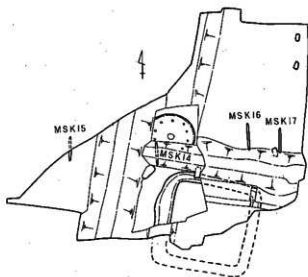


図70 溝状土坑MSK14~17位置図 1:550

## 2 遺物

今回の調査によって出土した縄文時代の遺物は、土器のみで僅かであった。これらの土器は、遺構にも  
なっていない出土したものではなく、特に大倉崎館跡内土壘下層およびⅣ区1号方形周溝墓周辺よりの出土であ  
った。したがって、以下に文様別に分類し、一括して報告することとする。

(1) 縄文時代前期の土器 (図71・1~17)

(a) 第1類 (1)

コンパス文を特徴とする土器で、1個体分のみ出土している。小突起の連続する小波状口縁を有する、  
口縁部がやや内湾する深鉢である。口唇部直下に半載竹管を用いて平行沈線を2列2条めぐらし、その間  
及び下位にコンパス文が2条付されている。胴部は、半載竹管による平行沈線が縦位および斜位に施され  
ている。胎土は赤褐色を呈し、焼成は良い。

(b) 第2類 (2・3)

2・3は同一個体と思われる。内湾する平縁の深鉢形土器で、口縁部に有節の平行竹管文が付され、胴  
部以下が単節斜縄文となる文様構成をとるものである。胎土・焼成は良い。

(c) 第3類 (4~8)

縄文のみが文様として付されるものを一括した。器形はやや外反する口縁を呈するもの(4・5・8)  
とはほぼまっすぐに立ち上がるものがある。口縁部の形態も波状口縁となる例(4・6・8)と、平縁の  
もの二者がある。なお、6・7は斜縄文であるが、他は羽状縄文が施文されている。本類は、黒褐色を  
呈し焼成も良くない。

(d) 第4類 (9・10)

半載竹管により、平行沈線の施された土器である。9の下段はその上に右開きの半載竹管が連続して刺  
突されている。

(e) 第5類 (11・12)

浮線文の施された土器を本類とした。胎土に砂粒を含み、焼成は悪い。

(f) 第6類 (13)

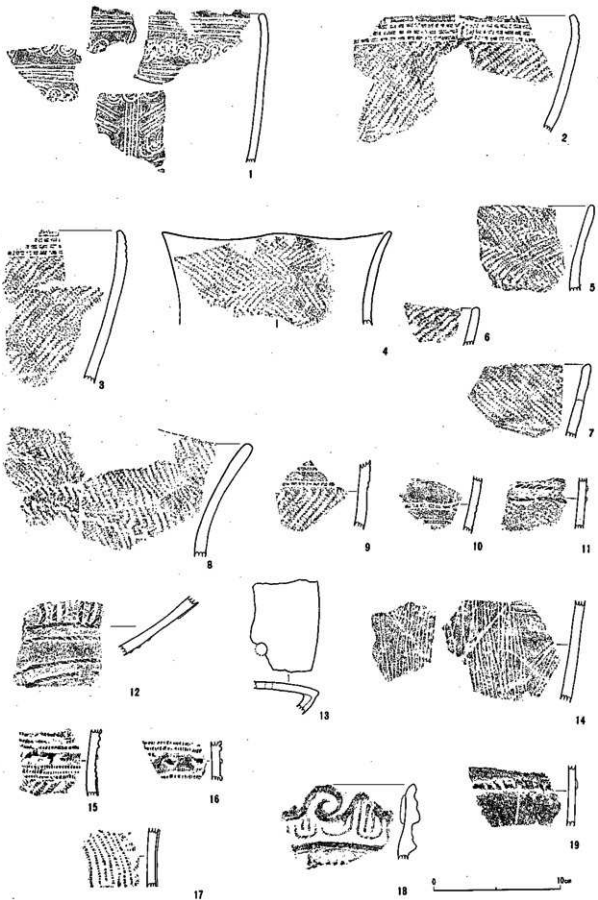


图71 绳文時代の土器 1 : 3



無文の有孔浅鉢形土器である。口縁部が強く屈曲し、口唇部は不明であるが直立するものと考えられる。孔は破片部分では1か所のみで少ないものと思われる。胎土は緻密で、表面はよく整形されている。

(g) 第7類 (14)

羽状の集合沈線文をもつものである。胎色はやや白っぽく、焼成は良い。

(h) 第8類 (15-17)

結節隆帯文をもつ一群である。15はさらに貝殻状突起をともない、16は2個一対のボタン状突起を伴う。焼成は総じて良好である。

以上、出土点数は僅かであったが、文様構成には多くの類が存在している。これらの土器の編年的な位置づけについて、少し触れることとする。

1・2類としたコンパス文や有節並行沈線などによって代表とされる文様は、関東地方の黒浜式に比定される。長野県においては、有尾式が並行するとされる。標式遺跡に近接している本遺跡で、有尾式と相違する文様構成は1・2点のみでは推定もできないが、興味あることである。4～6類は、竹管文・浮線文・無文の有孔浅鉢形土器で、諸磯b式土器の特徴を具備している。7・8類は、羽状の集合沈線・結節隆帯文で、諸磯c式に比定されよう。なお、3類とした縄文のみの土器は、斜縄文の組合せによる羽状縄文土器が多いので、諸磯a式以降のb段階に伴うものであろうと思われる。

(2) 中期・後期の土器 (図71・18・19)

各1点のみの出土である。18は中期中葉の土器で、渦巻文・隆起線文・蓮華文によって構成されている。19は無文地に隆帯を貼りつけ、その上に刻み目を施している。後期の所産であろう。

## 第4章 弥生時代

### 1 遺構

今回の調査によって発見された弥生時代の遺構は、Ⅲ・Ⅳ区及びⅥ区（大倉崎館跡下層）を中心に竪穴住居址8軒、掘立柱建物址4軒、土坑7基である。いずれも平安時代の遺構などによって破壊を受けているものが多く、遺存状態はかならずしも良くない。

#### A 竪穴住居址

竪穴住居址は、Y1～8の8軒確認されている。ただしY4住は、Ⅳ区D-11の調査区隅において住居址周溝と思われる一部を確認したにすぎず、弥生時代の竪穴住居址と断定はできない。

##### (1) Y1号住居址 (Y1住・図72)

Ⅳ区D・E-13・14で検出される。一部調査区外にかかり、H2号住居址に切られる。遺構は周溝、柱穴の一部の確認で、周溝は途中で切れる。柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が斜めに掘り込まれている。P<sub>2</sub>は深さ51cmを測る。遺物は周溝内より、弥生中期の破片が出土している。また、P<sub>2</sub>覆土上部より勾玉が検出されている。

##### (2) Y2号住居址 (Y2住・図73)

Ⅳ区D-14を中心に検出された。H1住・SB3に切られる。規模は径約4.5mの円形プランを呈するものと推定され、西側に小さな周溝がめぐる。壁の立ち上がりはほとんど確認できず、確認面からの深さ（以下「深さ」という）は、6cmにすぎない。主柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の4本と思われる。ほぼ中央に位置するP<sub>3</sub>は、深さ18cmをはかり、本住居址に伴う土坑と考えられる。

遺物は、H1住に切られているために、土師器と混在して出土しているが、主柱穴・土坑を中心として、弥生時代中期の土器片が出土している。

##### (3) Y3号住居址 (Y3住・図74)

V区C・D-7・8より検出される。東北側を方形周溝墓(SD3)によって切られ、東南側の立ち上がりは確認できなかった。

規模は径約6.5mの円形プランを呈するものと推定され、壁は不明である。周溝は2～3本検出され、柱穴も2重になる箇所があった。調査所見では、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>などの外側に位置する柱穴が容易に検出され、内側のP<sub>5</sub>～P<sub>6</sub>などは黒色の貼床状の下部より検出されていることなどから、周溝とともに家屋の拡張によるものと推定される。なお、ほぼ中央に位置する土坑であるP<sub>7</sub>は、H2号住居址の構造と等しい。

遺物は、周溝上より完形の甕形土器(図81・7)が出土している。また、覆土中より、土器・石器が多量に出土している。

##### (4) Y5号住居址 (Y5住・図75)

Ⅲ区C・D-7・8に位置する。規模は、6.6～7mの楕円形プランを呈す。周溝は5～10cmの深さで全周をめぐる。柱穴は合計26検出されたが、中央のP<sub>9</sub>は土坑としての機能をもつものと考えられる。

焼土は2か所で検出され、両者とも炉体と考えられる。また、東北隅の周溝際より炭化材が検出されている。

遺物は床面及び覆土から中期土器片等多く検出されている。

##### (5) Y6号住居址 (Y6住・図76)

Ⅲ区C-10を中心として検出された。切株・木根等によってプランを明確に検出することは出来なかつ



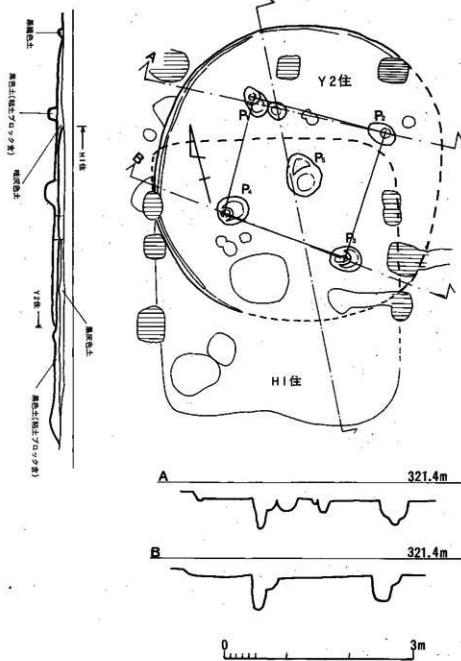


図73 Y2号住居址 1:60

Y3住

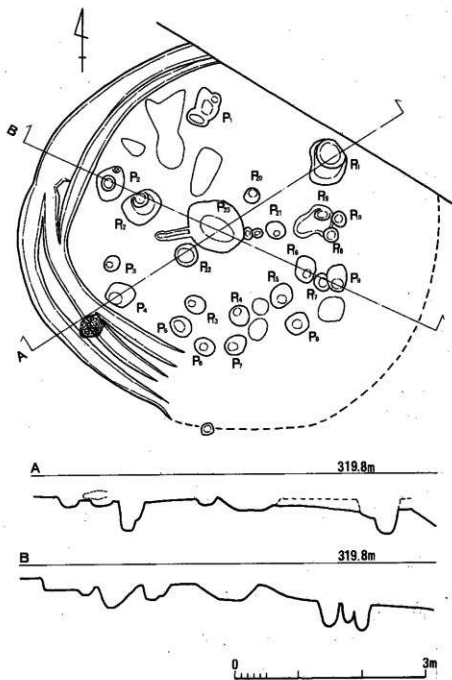


图74 Y3号住居址 1:60

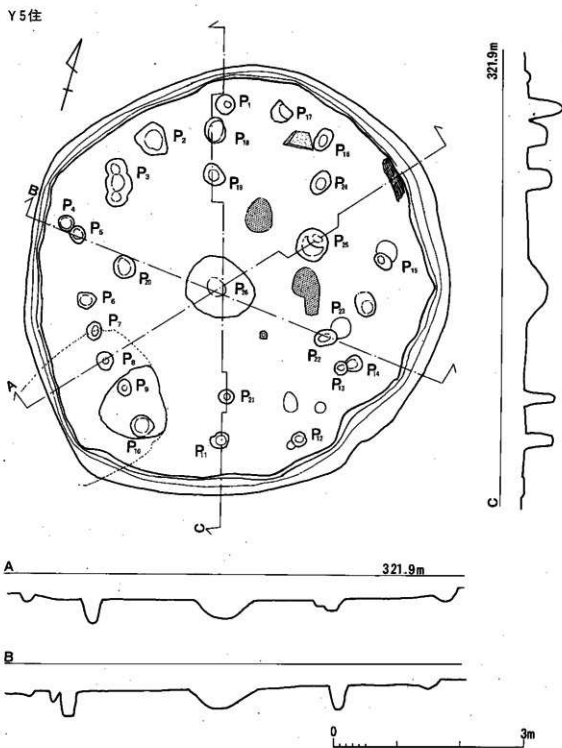


图75 Y5号住居址 1:60

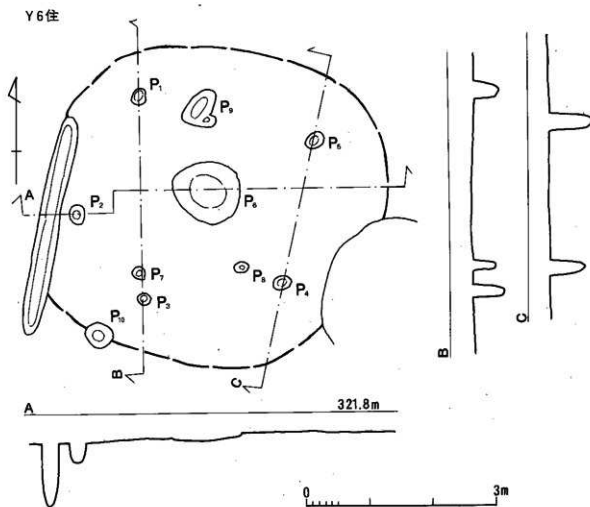


図76 Y6号住居址 1:60

た。また、東側を9号溝状土址（MSK9）重なっているが、切り合いの新旧関係は確認出来ていない。

規模は、約5mの円形プランを呈すると思われる。柱穴は、住居址中央の浅い土址P<sub>9</sub>以外、9本確認されている。焼土など炉と考えられる施設は確認できなかった。また、床面も軟弱であった。

遺物は、覆土より弥生中期土器片が多く出土している。

(6) Y7号住居址（Y7住・図77）

Ⅲ区D-7・8において検出された。Y1~8住までの住居址はほとんどⅢ層中まで掘り込んで床面としていないのにたいして、本住居址はわずかであるが掘り込んで構築している。規模・形態は、5.0×4.7mの隅丸方形プランを呈している。

主柱穴は、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本柱と思われ、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間には炉（P<sub>7</sub>）が存在している。P<sub>3</sub>とP<sub>5</sub>もしくはP<sub>11</sub>は入り口部の柱穴と考えられる。床面はほぼ平坦であるが、貼床は認められない。

(7) Y8号住居址（Y8住・図78）

Ⅵ区（大倉崎館跡）の補遺調査により、土塁上にかろうじて残っていたのが検出された。西・南側は、外堀・内堀によってそれぞれ掘削され、残存していない。

規模・形態は、径約7mの円形プランと推定される。壁面下の周溝は部分的に切れて構築されている。

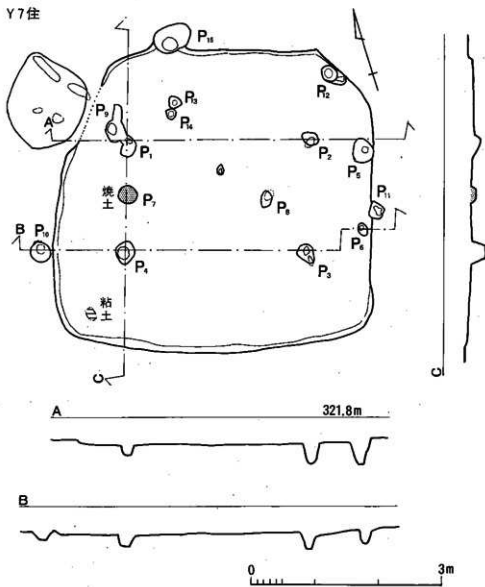


図77 Y7号住居址 1:60

炉と考えられる焼土は2か所に認められ、内1か所には甕形土器が検出されている。貼床は、中央の土坑（P<sub>7</sub>）の周辺に部分的に認められる。



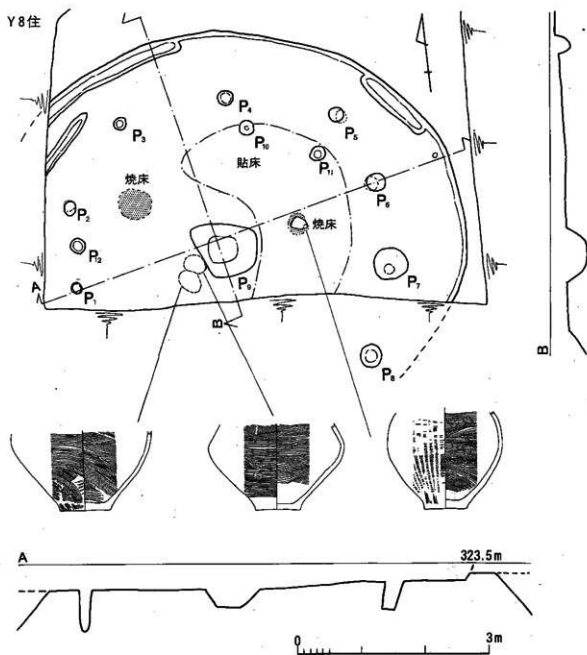


图78 Y8号住居址 1:60

## B 掘建柱建物址

弥生時代に位置づけられる明確な根拠はないが、弥生時代の竪穴住居址に接しており、平安期の遺構とは離れて存在しているために弥生時代の掘建柱建物址として2軒報告する。

### 6号掘建柱建物址 (SB6・図79)

Ⅲ区、SB7の南に接するB-13・14において検出される。調査区外に伸びるため規模等は不明である。

### 7号掘建柱建物址 (SB7・図79)

Ⅲ区Y6号住居址の南4m、C-12を中心に位置する。1間×5間で、柱間寸法は、桁行が250cm、梁行は140～180cmである。深さは約30cmで深くない。なお、P<sub>12</sub>は本遺構に伴うものであるのかははっきりしない。

#### (1) 土 城

弥生時代に比定される土城は、Ⅲ区B・C-6・7において検出された、土城墓あるいは木棺墓と推定されるものである。

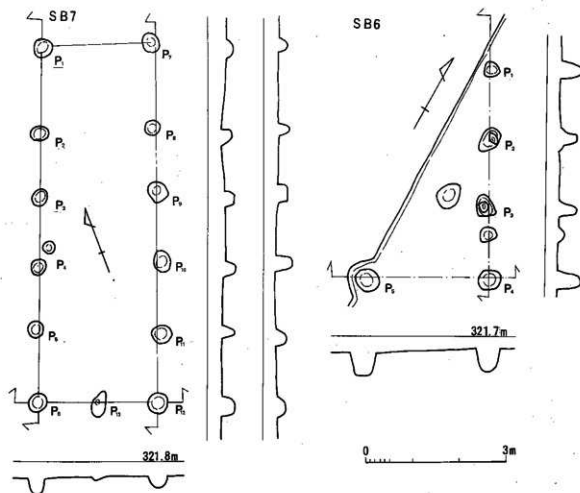


図79 掘建柱建物 SB6、SB7 1:80

11号土塚 (SK11・図80)

上層において、弥生中期土器片がややまとまって出土したために精査したが、掘り込み確認面は浅く、皿状であった。

12号土塚 (SK12・図80)

土塚の掘り込みははっきりしなかったが、木口痕と木棺の掘り込みがわずかに検出された。木口間隔は150cmで、木棺の短軸は約70cmである。木口痕は、長軸は80cm、短軸25cm、深さ38cmである。

13号土塚 (SK13・図80)

SK12とはほぼ同方位をとる。長軸137cm、短軸62cm、深さ30cmを測る。坑底は平坦で、壁の立ち上がりははっきりしている。

14号土塚 (SK14・図80)

土塚群のなかに位置するため、土塚としたが、黄褐色土掘り込みが浅いため、不明確である。

15号土塚 (SK15・図80)

SK12と同様木口痕のみ確認されている。木口痕の間隔は、75cmで、SK12例の半分である。方位はSK12・13に直交する。

16号土塚 (SK16・図80)

木口痕と類似したピットのみを検出であるが、SK12例と方位が同じことから、これを積極的に木口痕とした。間隔は約140cmである。

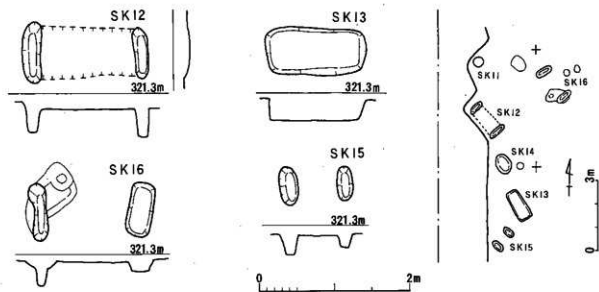


図80 弥生時代土塚墓 1:50

## 2 遺物

### A 土器

弥生時代の土器は、各壺穴住居址を中心にⅢ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区で多く出土しており、中でもⅢ区とⅤ区が多い。

年代的には中期後半のものが大半で後期に下るものは少ない。

壺穴住居出土品は、住居址検出面からの掘り込みが10～15cmと浅いことや、他の遺構と重複しているものが多いことなどから量的には多くない。Y1号住居址・Y4号住居址出土品は少片のみのため図示していない。

また、各地区出土品については、大破片を中心にピックアップしたものを図示したもので、おおよその年代や特色がうかがえるものの、詳細な分類・検討は課題として残されている。

#### (1) 住居址出土土器

Y1号住居址出土土器 図示していないが、口唇部に縄文をめぐらす甕片や、縄文を地文とし太いへら描直線文や弧状文をめぐらす甕片など中期後半の特徴をもつ土器片が、周溝内などから出土している。

Y2号住居址出土土器 (図81・1～6) 1は広口壺で、P<sub>4</sub>の上面から全体の4分の1周ほどがまとまって出土している。文様は口唇部に縄文をめぐらせ、頸部に刺突文、胴上半部に櫛描の直線文と鋸歯文をめぐらす。調整は内外面ともに粗いハケ。色調は全体に黒ずんでいる。プロポーシオン、文様ともに飯山地方では初めてのものである。

2・3は甕の口縁部片で、2は口唇部に縄文をめぐらせ、胴部に櫛描の羽状文をもつ。3は胴部に断続した櫛描波状文をもつ。

4は小型の壺で胴下半に縄文を地文とするへら描の重山形文をもつ。

5は壺胴部で文様をもたない。内外面ともハケ調整だが、内面のハケは条線が見えない板ナデ状である。1と同じくP<sub>4</sub>上面から出土しており色調、器形ともによく似てきるので1と同一個体の可能性があるが、鋸歯文がないこと、原体のちがうハケがあることから別にしておいた。

6は甕で5同様P<sub>4</sub>上面から出土している。胴部上半に櫛描羽状文をもつ。調整は内外面ともに粗いハケ。外面上半分には一面に煤が付着している。

他に図示していないが、縄文を地文として太いへら描沈線文を帯状にめぐらす甕片、へら描波状文の間を櫛描沈線でうめる壺片、へら描重弧文の間に連続する刺突文をうめる壺片、櫛描羽状文と刺突文をもつ甕片などがある。

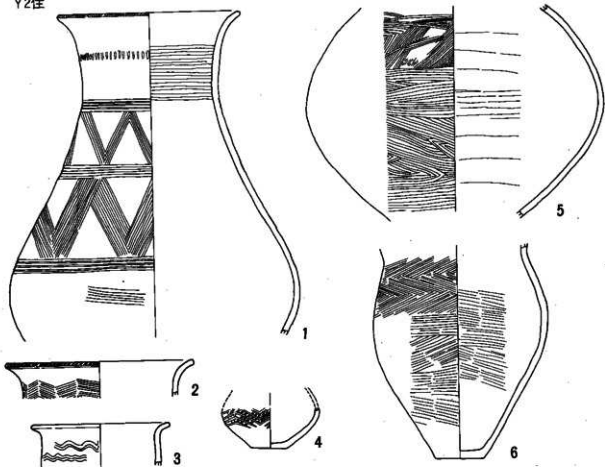
Y3号住居址出土土器 (図81・7～14) 7は完形の甕で、住居址南西端で1個体分が横位でつぶれた形で出土している。口唇部は波状をなし縄文をめぐらす。胴上半部は5ヶ所の櫛描垂下文を不等間隔に配した後に、その間を櫛描平行線文と波状文としてうめ、その下に刺突文をめぐらす。調整は外面はハケの後へらミガキ、内面はへらミガキなしナデである。胴外面上半に煤が付着している。

8～10は鉢で、いずれも口唇部に縄文をめぐらせ、頸部と胴部に太いへら描の直線文・重弧文・波状文をめぐらす。8は重弧文の頂点に円形浮文を貼りつけ刺突文をめぐらす。また、頸部に小孔(残存1/2周で1ヶ所確認)をもつ。10は縄文を地文としている。調整は8が内外面ともへらミガキ、9・10は内外面ともハケ。

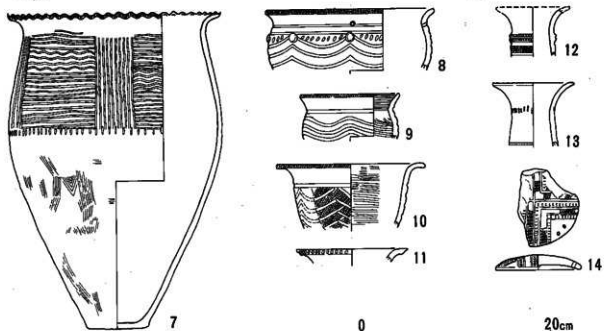
11は口唇部に刺突文をめぐらす甕ない鉢の口縁部。

12・13は小型の壺の頸部で、12は刻目刺突文と縄文を地文とするへら描沈線文をもち、13は櫛状具によ

Y2住



Y3住



0 20cm

図81 弥生時代の土器 (1) 1 : 4

る刺突文をめぐらす。

14は蓋で、天井部にへら描沈線と縄文と刺突文を組み合わせた「十」字形の文様をもち、周縁に2つ並ぶ小孔をもつ。

他に図示していないが、へら描直線文の間を縄文と櫛描文とで交互にうめる壺頸部片、中を櫛描文でうめる垂下文をもつ壺頸部片、胴部にへら描重弧文の間に縄文と連続する刺突文とを交互にうめる壺片、波状の口唇部に縄文と刻目文をめぐらせ、胴部に櫛描羽状文をもつ甕片などがある。

Y4号住居址出土土器 図示していないが甕胴部片数点が出土している。

Y5号住居址出土土器 (図82・15) 15は甕で、南隅の周溝内からはほぼ一個体分がつぶれた形で石斧とともに出土している。口縁部が直立ぎみに立ちあがり、全体的に扁平な感がする甕で、胴上半に粗雑な櫛描羽状文をもつ。調整は外面と内面上半はナデで、内面下半はハケ。外面に煤が付着している。

他に壺底部が丸と丸の間の床面から出土しているほかに、刻目突帯をもつ壺頸部片、口唇部に縄文胴部に櫛描羽状文をもつ甕片、櫛描波状文と刺突文をもつ甕片などが少量ある。

Y6号住居址出土土器 (図82・16~20) Y6号住居址は主柱穴5ヶ所と中央ピットのみ確認で、壁の落ち込みは確認されていないためか、混入品も含まれている。

16は壺体部で文様はない。調整は外面はハケのちへらミガキ、内面は下半がハケ上半がハケのちナデ。胎土は灰白色で他と異なる。また、形態は壺だが外面の所々に煤が付着している。

17は口唇部に縄文をもつ甕口縁部である。他に図示していないが櫛描羽状文をもつものがある。

18は全面磨滅の著しい小壺で、形はいびつである。弥生時代に含めて良いかわからない。混入品としておく。

19・20は混入品で、19は二重口縁の甕、20は器台の裾部で、古墳時代のものである。

他に図示していないが、へら描沈線文と刺突文をもつ壺片などがある。

Y7号住居址出土土器 (図82・21・22) Y7号住居址も出土土器はごく少なく、図示した2点のほかに十数片があるにすぎない。21は中央北辺寄りの床面から出土し、22は中央やや南寄りの床面上5cmから出土している。

21は赤彩の小壺で、内外面ともにていねいなへらミガキを施した上に赤彩されている。ほぼ完形品。

22は鉢あるいは高杯の杯部で、内外面ともへらミガキのち赤彩されている。

Y8号住居址出土土器 (図82・23~27) 23は受け口状の口縁部をもつ甕で、口縁外面にへら描波状文を、頸部にへら描直線文ないし櫛描直線文をめぐらす。外面に煤がつく。

24は口唇部に縄文、頸部に櫛描籐状文、胴部に断続する櫛描波状文をめぐらす甕である。調整は外面がハケ、内面はハケのち縦の粗いへらミガキを施す。外面に煤が付く。

25はつまみをもつ蓋で、調整は外面がハケ、内面はナデ。

26~28は壺胴下半部で、26・27が中央ピットの西、28は中央ピット東の焼床上でいずれも胴下半のみがまとまって出土している。調整はいずれも内外面ともにハケ調整だが、27は底部外面に斜方向のへらミガキを加え、28は外面全体に縦の粗いへらミガキを加えている。

他に図示していないが26~28とよく似た壺の底部が住居址東端から出土している。

小結 以上の住居址出土土器のうち、Y7号住居址のみが後期と考えられるほかは、中期後半の中におさまるものとする。そしてY1・2・3号住居址がやや古い様相をもち、Y5・6・8号住居址はやや新しい様相をもつものとする。つまり調査地南半部のⅣ・Ⅴ区の住居址が古い様相をもち、調査地北半部のⅢ・Ⅵ区の住居址がやや新しい様相をもつといえる。

## (2) 遺構外出土土器 (図83・29~47)

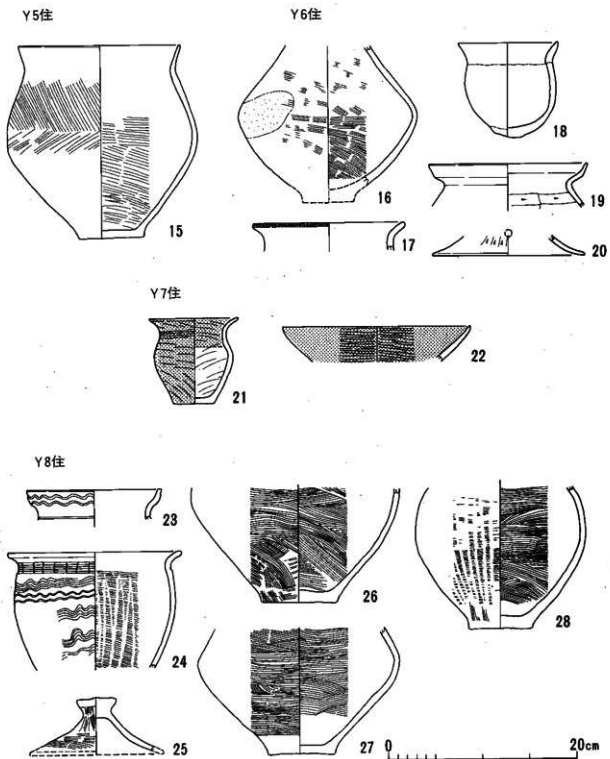


図82 弥生時代の土器 (2) 1 : 4

各 地 区

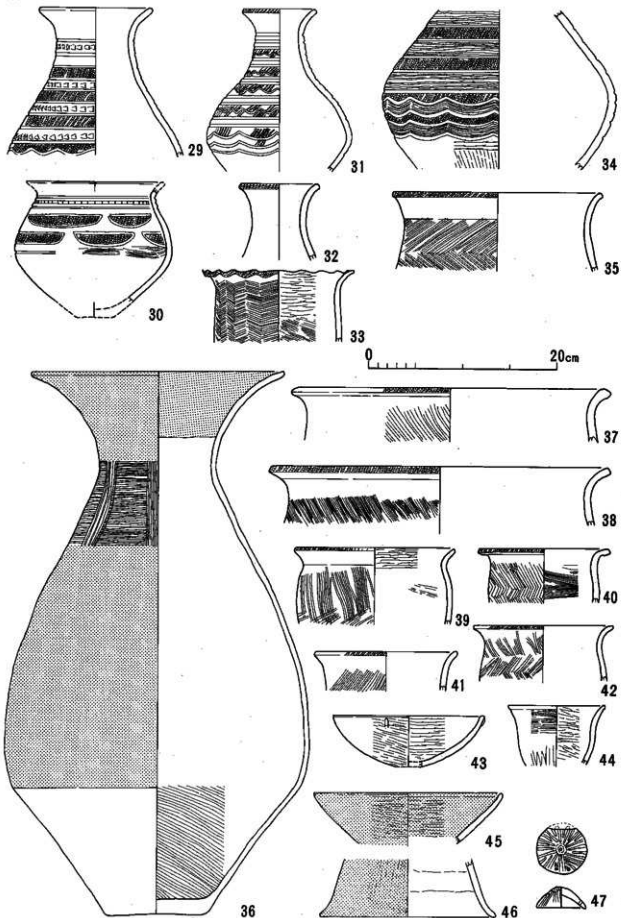


図83 弥生時代の土器 (3) 1 : 4



29・31・34は縄文を地文とし、太いへら描沈線で直線文・波状文・弧文を描く壺で、29は刺突文を、34は帯描直線文を間にうめている。32は口唇部に縄文をめぐらす。29・32はⅢB-6区、31・34はⅣC-13区出土。

30は縄文を囲む太いへら描沈線文を「工」字文風に配した鉢で、頸部にはへら描直線文と連続刺突文をめぐらす。ⅣC-13区出土。

33・35・37~40・44・45は口唇部に縄文をめぐらせ、胴部に帯描の羽状文をめぐらす甕で、口頸部は短く屈曲する。33がⅢC-11、34がⅤB-10、37がⅢB-12、38がⅢD-20、39がⅢD-14、40・44がⅢB-11、45がⅣC-13区出土。

41は鉢でていねいなヘラミガキが施されており、口唇部に突起がある。ⅢB-11区出土。

42・43は赤彩の高環である。いずれもⅢC-6区出土。

46は小型の甕で、外面はハケおよびミガキ、内面はミガキでていねいに調整されている。外面に一部煤付着。ⅢD-6区出土。

47は蓋で天井部はへら沈線で中心に円を描いた後に放射状に直線文を描いている。また周縁の相対する2ヶ所に並列する2孔があいている。同様例が長野市松原120住居址、長野市車礼バイパスD地点で出土している。ⅢC-9区出土。

36は後期の赤彩の壺で、頸部に帯描きによる「T」字文を6ヶ所施す。ⅢD-11区から約1/2個体分がまとまって出土している。

小結 以上の土器のうち、42・43・36が後期に降るほかは、中期後半と考える。中でも29~31・34は中期後半でも古相の粟林Ⅰ式の様相を呈する。

また、甕に帯描羽状文が盛行するのは本遺跡の特色であろう。

	畿 内	千 曲 川 流 域	飯 山 地 方
前期	第 1 様 式 新	(新 諏 訪 町 I)	.
	第 2 新 式	(新 諏 訪 町 II)	
中 期	第 3 様 式	古	新 諏 訪 町 III (荒山)
		新	粟 林 I 小 境
	第 4 様 式	百 瀬	鍛 冶 田 D 地 点
後 期	第 5 様 式	吉 田	田 草 川 尻 I
		箱 清 水	田 草 川 尻 II
		御 屋 敷	+
	?		柳 町

文献 1 134号23ページ表 1 および文献 2 より作成

表 6 飯山地方の弥生土器編年表

#### 参考文献

- 1 笹沢浩 1977「入門講座・弥生土器—中部高地1~3」『考古学ジャーナル』131・133-134
- 2 飯山市教育委員会 1980「長野県飯山市旭町遺跡群—鍛冶田」
- 3 飯山市教育委員会 1978「長野県飯山市田草川尻遺跡II」
- 4 飯山市教育委員会 1985「長野県飯山市旭町遺跡群—北原遺跡IV」
- 5 神村透 1988「弥生土器」『長野県史』考古資料編全1巻4

## B 石器・石製品

### (a) 概要 (図84～図87・表7)

弥生時代の石器・石製品は、竪穴住居址を中心に出土している。特に著しく出土した遺構はY3号住居址覆土からである。安山岩製の剥片が中心を占める。なお、出土量の割に定型的な石器が少ないのも特色で、Y3号住居址では盛んに石器製作を行ったにもかかわらず、定型的な石器はほとんど残さなかった。このことは、時期的にも石器製作のあり方に変化が出てきた時期とも考えられる。

弥生時代の石器についてはもとより定型的なものは少なかったが、今回の調査によって剥片石器がかなり普遍的に作られ、使用されていたことが窺える。以下に説明を加えていく。

### (b) 石 錘 (1～4)

弥生時代の遺構に伴って出土したものはないが、形態的に弥生時代の所産と考えられる。1～3は、しっかりとした茎が作られている。4は舌部が丁寧な作られ、両頭尖頭器にも似た形態をとる。

### (c) 石 錐 (5)

石錘にも似るが、基部側には加工が施されず、三角形の刃部形態をとるため錐とした。Y2号住居址の出土。

### (d) 磨製石斧 (6～12)

6・7・8は、重量のある太型磨製石斧と呼ばれるもので、いずれも破損品である。6は欠損した後も、再使用した痕跡が認められる。9・10は扁平の片刃石斧で、両側縁のほぼ中央には使用によると思われる摩滅痕が著しい。12は磨製石斧とは呼べないが、磨いてありクサビ状の磨製石器である。

### (e) 打製石器 (13～31)

名称としては具体的に挙げるのができないために、総称として用いた。

13・20などは横長の剥片の鋭い端部を刃部としているので、細かな刃部作出は行っていない。名称としては横刃形石器あるいは石包丁の用途も考えられる。14・18は縦長剥片をサイド・スクレイパーとして用いたものであろう。15・16・17・24はやや重量のある石器で、打製石斧的な機能が考えられる。なお、26は図では縦長になっているが、13例のように横刃形石器と思われる。

### (f) くぼみ石・ハンマー (33～38)

33は縄文時代のくぼみ石とは形態が相違する。34～38は手頃な楕円盤を用い、長軸の端部にたたき打痕を明瞭にとどめる。36は正面にも線状の擦痕が認められる。

### (g) 石 弾 (40)

ほぼ球状に仕上げている。

### (h) 石 錘 (41)

安山岩の扁平礫を用い、両端部に加工を施して石錘にしている。

### (i) 浮 子 (42・43)

両方とも孔は認められないが、デイサイトの軽石を用いている。

### (j) 石包丁 (44・45)

44は、Ⅳ区C-19ビット上面より検出されたもので、優品である。ほぼ全面が丁寧に磨かれており、刃部は両刃状になっている。基部側は中央に1孔穿たれている。

45は遺跡周辺調査によって採集されたものである。44例と同様全面が磨かれている。2孔穿たれている。

### (k) 勾 玉 (46)

Y1号住に属するビットの覆土上部より出土した。緑色を呈す碧玉製である。推定1.2cmの非常に小さなもので、孔が穿たれる部分より欠失している。

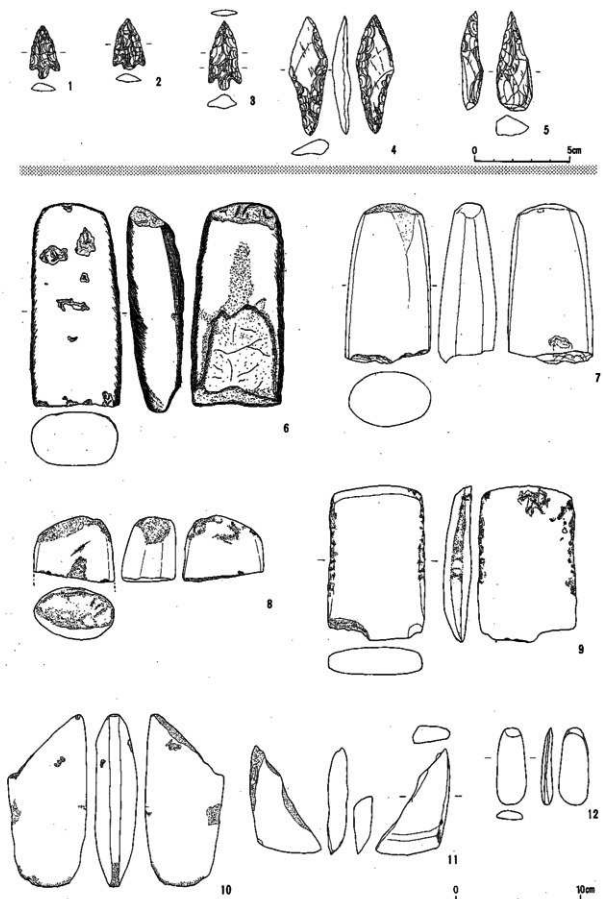


図84 弥生時代の石器 (1) 1 : 2、1 : 3

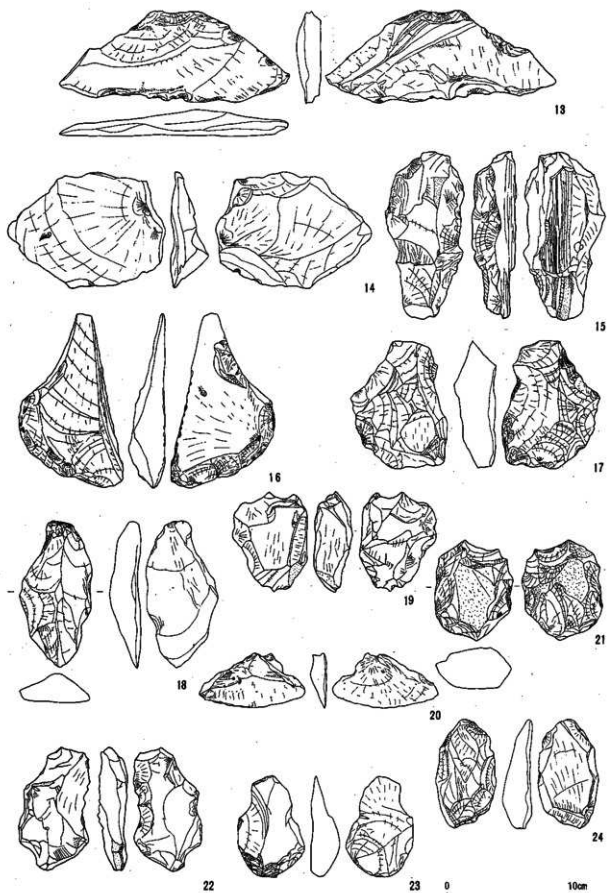


図85 弥生時代の石器(2) 1:3

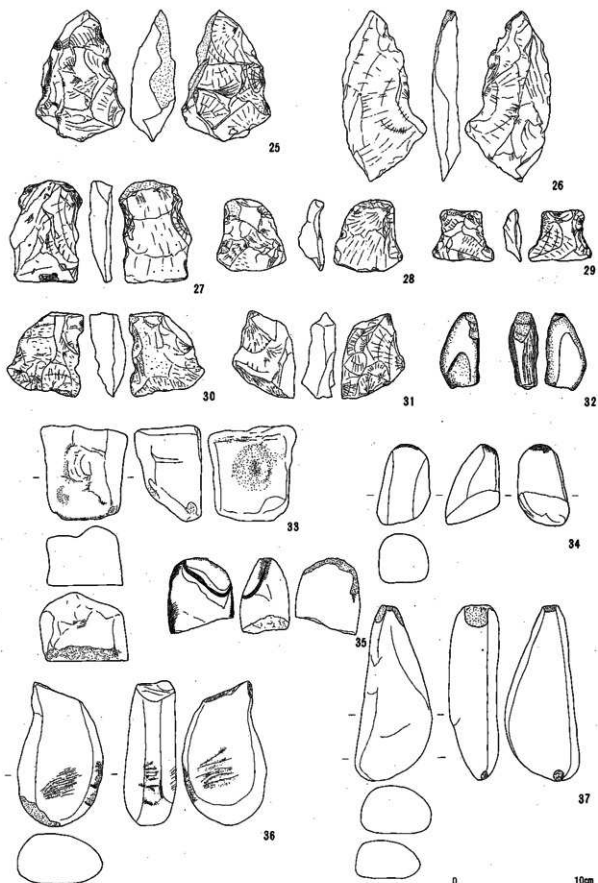


図86 弥生時代の石器 (3) 1 : 3

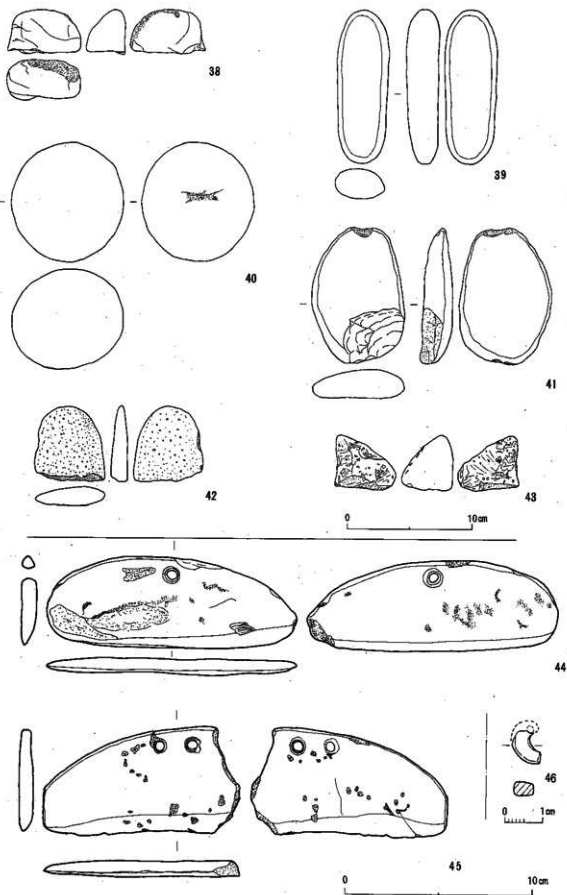


図87 弥生時代の石器 (4)・石製品 1:3, 1:2, 1:1

番号	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	備考	石器固体番号
1	石 鎌	安山岩	2.8	1.5	0.5	1.6			H 3 住
2	石 鎌	黒曜石	2.7	1.7	0.5	1.4			S X 1-112
3	石 鎌	安山岩	3.6	1.8	0.8	3.0			S D 3
4	石 鎌	安山岩	6.2	2.0	1.0	8.5			D-17
5	石 錐	安山岩	5.3	1.8	1.2	10.0			H 1 Y 2 住
6	磨製石斧	蛇紋岩	16.2	7.4	4.7	942.7	○		Y 3 住-1
7	磨製石斧	蛇紋岩	12.8	6.9	4.8	693.1	○		Ⅳ D-12
8	磨製石斧	蛇紋岩	5.3	6.5	4.3	229.6	○		Ⅲ C-10
9	磨製片刃石斧	蛇紋岩	12.5	7.9	2.2	384.3		両側縁密減	Y 5 住
10	磨製石斧	蛇紋岩	13.8	6.3	3.2	439.1	○		Ⅲ D-7
11	磨製石斧	蛇紋岩	5.2	3.7	1.2	75.5	○		V C-10
12	磨製石器	不 明	4.0	1.6	0.7	17.2			Ⅵ
13	打製石器	安山岩	4.8	12.2	1.4	223.9			Y 5 住
14	打製石器	安山岩	12.6	9.2	3.0	256.1			Y 3 住20
15	打製石器	安山岩	13.4	6.4	3.5	290.9			Y 3 住3
16	打製石器	安山岩	14.0	8.4	2.5	272.8			Y 5 住
17	打製石器	安山岩	6.6	5.2	2.3	232.1			Ⅲ D-11
18	打製石器	安山岩	7.8	3.8	1.7	124.9			V E-8
19	打製石器	安山岩	5.2	4.0	2.0	161.5			Y 3 住79
20	打製石器	安山岩	4.45	8.5	1.3	38.5			Y 5 住
21	打製石器	安山岩	5.3	4.1	2.2	194.0			V E-8
22	打製石器	安山岩	9.9	5.55	2.4	127.1			Y 3 住19
23	打製石器	安山岩	5.4	3.5	1.6	66.3			Ⅲ C-11
24	打製石器	安山岩	5.8	3.2	1.6	89.0			V B-8
25	打製石器	安山岩	10.4	7.1	3.35	238.0			Y 5 住
26	打製石器	安山岩	6.75	13.7	2.2	173.6			Y 5 住
27	打製石器	安山岩	5.5	3.9	1.3	994.9			B-12
28	打製石器	安山岩	5.75	5.4	2.1	75.8			Y 3 住333
29	打製石器	安山岩	4.4	5.04	1.45	25.2			Y 3 住
30	打製石器	安山岩	6.7	6.0	2.8	78.9			Y 3 住
31	打製石器	安山岩	4.9	3.3	2.1	78.9			Y 3 住
32	打製石器	安山岩	6.2	3.2	2.3	67.5			Y 3 住326
33	くぼみ石	砂 岩	7.6	7.1	5.4	262.1			Ⅳ B-13
34	ハンマー	—	4.2	2.9	2.6	133.5			Ⅲ C-10
35	ハンマー	—	6.1	5.2	4.5	182.8	○		Y 3 住
36	ハンマー	—	7.7	4.5	2.8	432.1	○		Ⅲ D-12
37	ハンマー	—	14.0	6.2	4.0	423.5			Ⅲ D-13
38	ハンマー	—	3.6	5.9	3.1	87.7	○		V C-9
39	磨 石	—	12.3	4.2	2.6	182.4			V C-10
40	石 弾	—	6.3	6.0	5.3	968.0			Y 6 住
41	石 錘	安山岩	7.1	5.1	1.7	228.1			Ⅲ D-20
42	浮 子	デイサイト	6.0	5.55	1.4	55.0	○		Ⅱ I-5
43	浮 子	デイサイト	4.4	4.9	4.0	18.2	○		Y 3 住
44	磨製石庖丁	—	13.4	4.8	1.0	78.4			Ⅳ C-19ピット
45	磨製石庖丁	—	10.6	5.8	1.1	72.2	○		表 採

表7 弥生時代石器計測表

C 土製品 (図88)

土製品として紡錘車およびその未製品がある。古墳時代前期のH9号住居および3号方形周溝墓周溝からの出土品も含めて、すべて弥生土器を用いているのでここで説明することとする。

1・2は未製品で、中央の孔をあけるに両側から開けていることがよくわかる。しかも一方から深く、他方からは浅くあけているようだ。1はY8号住居址出土、19.9g。2はH9号住居址出土、19.8g。

3・4・5は製品でいずれも

土器片を転用しており、3は襲胴部、4は赤彩の壺か、5は口唇に縄文をめぐらす襲口縁部片を転用している。また孔のあけ方も3・4は両面穿孔と考えられるが、5は片面穿孔と考えられる。3・4はⅥ区(大倉崎館跡土壘下層)出土で、3が13.9g、4が6.8g。5は3号方形周溝墓(SD3)出土、7.9g。

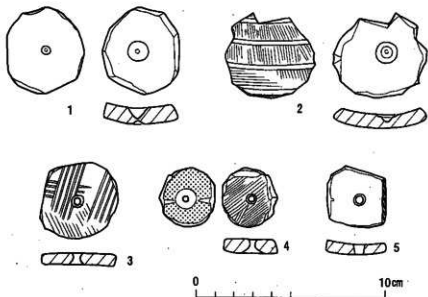


図88 紡錘車 1:2



## 第5章 古墳時代

### 1 遺構

古墳時代に属する遺構は、竪穴住居址1軒、掘建柱建物址1、方形周溝墓4基である。このほか時期がはっきりしない土趾があり、本時期に含まれる可能性のある遺構も存在している。

#### A 竪穴住居址

##### H9号住居址(図89・H9住)

Ⅳ区C・D-9、Ⅲ層上面において検出される。北側に墓地跡があったため、周辺を拡張できなかったが、比較的遺構の稀薄な地区である。

規模は、4.9×4.2mの長方形プランを呈し、北側の短辺の一部が破壊を受けている。床面は、黄褐色土にしっかり掘り込まれ、約30cmを測る。周溝は、北側部分を除き壁下をめぐる。柱穴はほぼ中央に2検出され、深さはそれぞれ35cm、20cmと比較的浅い。床面はほぼ平坦で堅緻であるが、貼床は認められなかった。

覆土は、5層認められ、自然堆積の状況を呈している。

遺物は、略完形・破片土器がまとまりをもって出土しているが、床面より約10cm上位で出土している。

#### B 掘建柱建物址

##### 第5号掘建柱建物址(図90・SB5)

古墳時代住居址(H9住)に近接すること、付近より若干の古墳時代土器片が出土したことにより、本時期に属する遺構として報告する。

Ⅲ区B~D・19・20において検出された。

用水路が埋められているため不明な部分が多いが、不規則な配列であるが、1軒×5軒と推定される。柱間寸法は桁行2.8m、梁行1.2~1.8mである。

#### C 方形周溝墓

Ⅳ区・Ⅴ区およびⅥ区(大倉崎館跡下層)より検出された方形周溝で、計4基存在している。いずれも主体部は検出されなかったが、方形周溝墓として取り扱う。時期に関しては、2・4号方形周溝墓より略完形土器が出土していることにより、全て古墳時代前期の所産とした。

##### 1号方形周溝墓(図17・90・SD1)

Ⅳ区B・C-12・13において、Ⅲ層上面で検出された。西・北溝の一部が調査区外へ延びるため調査できていない。また、南溝西隅において溝状土趾(MSK13)を切る。

検出できた部分においては、ブリッチ部は認められていない。中軸の全長は溝を入れて10mほどである。東溝の全長は7.6m、最大幅は1.3m、深さ38cmを測る。南溝はやや深く50cmである。壁は、溝底までほぼ直線的に急斜に掘り込まれている。溝底の幅は約60cmである。

遺物は、覆土中より小破片が出土したのみであった。

##### 2号方形周溝墓(図19・SD2)

Ⅴ区B~D-2・3において、Ⅲ層で検出された。掘り込みが浅いために、周溝上部のほとんどが欠失

H9住

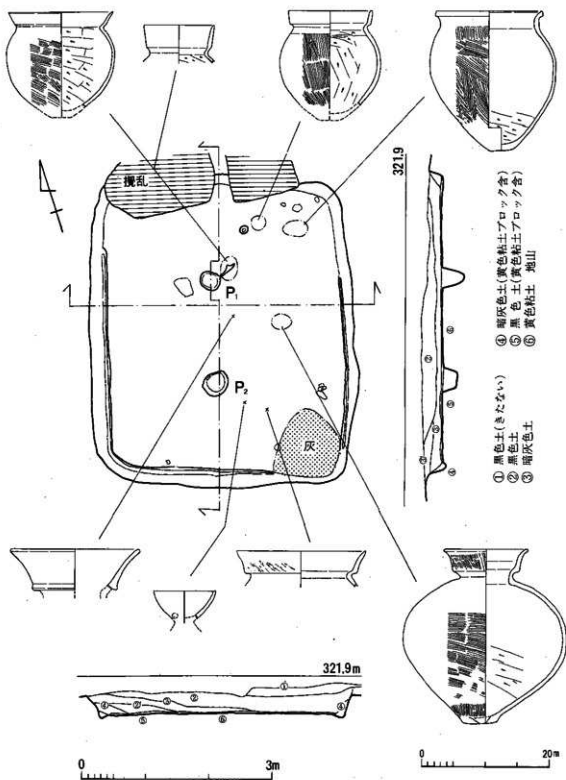


図89 H9号住居址 1:60

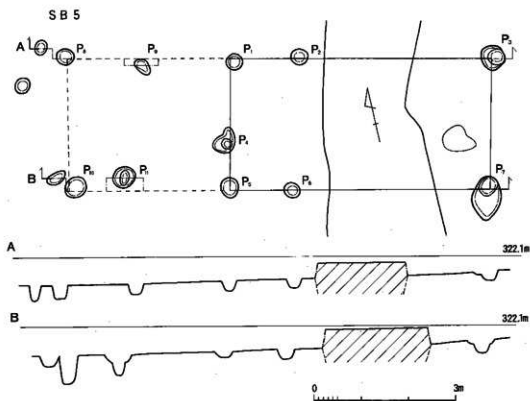


图90 掘立柱建物址 SB 5

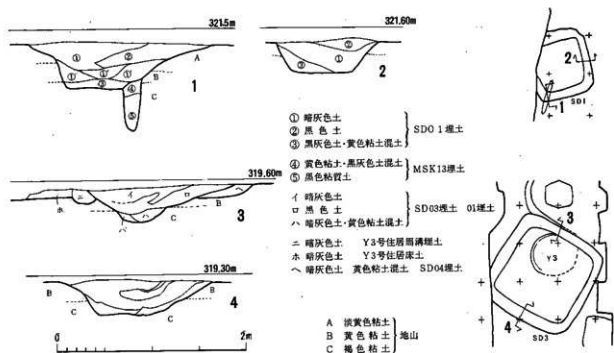


图91 方形周溝墓周溝土層圖 1:40

している。

中軸の全長は約8.6m、溝の幅約1.3m、深さ20cmである。形状は、検出面においては東に開口するコの字状を呈し、東側は独立した1本の溝が構築されている。ただし、溝下部の構造であるため、本来の形状であったかどうか不明である。周溝内側にはビットなど認められるが、本遺構に伴うものであるかわかない。また、主体部と思われる遺構は認められない。

### 3号方形周溝墓(図20・90・SD3)

V区B~D-7~10において検出された大型の方形周溝墓である。北溝でY3号住居址を切る。西南溝コーナーは調査区外のため調査できなかった。

中軸は13.6m測り、SD2とはほぼ方位を同じくする。溝の幅は、北・南溝でそれぞれ150cmを測る。壁は上部でややなだらかに下部で急斜で溝底となるが、西溝では上部より急斜で溝底に至る。溝底は西溝で約80cmの平坦な面を作るが、南、北・東溝はやや湾曲している。

本遺構が発見された地区は、旧地主の小出大映氏によれば、墳丘のように盛り上がっていたという。

遺物は土師器壺形土器が、南溝のほぼ中央部において、溝底より口縁部を上にして潰れて検出されている。

### 4号方形周溝墓(図9・SD5)

VI区、大倉崎館跡の補遺調査により、土層下層より一部検出したものである。

西北コーナーより西溝の一部および北東コーナーを検出したのみで、他は調査地区外であったり、居館造営の際に破壊されている。規模は東西の中軸は約16mとなる。西溝の上面の幅は約2.6m、溝底で1.6m、壁は急斜となっている。

遺物は、北東コーナーより有段口縁をもつ土師器壺形土器1個体分が、散乱した状態で検出されている。

## 2 遺物

古墳時代の土器は良好な一括資料としてH9号住居出土品がある。また方形周溝墓周溝から略完形品が出土しているほかに、III区を中心に遺構外からも出土している。

### (1) 竪穴住居・方形周溝墓出土土器

H9号住居出土土器(図92・1~15) 1は卵形の胴部に短くゆるやかに屈曲するD縁部がつき、口縁端部が横ナデによって端面をなし上下にやや肥厚する甕で、いわゆる越後系の甕と呼ばれるものである。調整は外面がハケ、内面はヘラケズリによって器壁を薄く仕上げたのち、胴中半以上をナデている。ほぼ完形品。

2~4は球形に近い卵形の胴部に短く「く」の字形に屈曲する立ちあがりの長い有段口縁がつく甕で、いわゆる北陸系の甕と呼ばれるものである。口縁部の形態に2種あり、上方に垂直に近く立ちあがるもの(2)と、外に開くもの(3・4)がある。調整はいずれも外面はハケ、内面はヘラケズリで、口縁部は内外面とも横ナデである。

5~7は短く「く」の字形に屈曲する立ちあがりの短い有段口縁をもつ甕である。いわゆる東海系の「S」字口縁台付甕に類似しているが、そのものでなく有段口縁の立ちあがりがやや長く厚さも厚いことや、胴内面をヘラケズリしていること、台部分の出土をみないことから、北陸系の口縁部の立ちあがりが短いものとしてとらえた方がよいかもしれない。

8・9は肩の張った胴部と頸部が短い有段口縁をもつ壺だが、8の胴外面全体に煤が付いており用途は甕かもしれない。調整は外面がハケ、内面がヘラケズリ。有段口縁の壺は畿内の布留式の影響下で成立するといわれているが、その形態は各地方ごとに特色をもつ。当遺跡例は新潟県西山町高塚B遺跡<sup>(註1)</sup>・同三条

市狐崎遺跡・同長岡市横山遺跡などに類例がある。

10は大きく開く有段口縁をもつ壺の口縁部と思われるが有段口縁の屈曲部は下方に肥厚させ突帯状をなしている。

11～13は小型の高環ないし器台であるが、11は環部と考える部分に小孔があり何かの脚かもしれない。12・13は内外面ともにていねいなヘラミガキが施され、色調も明るい橙色を呈し、いわゆる小型精製土器群を意識して作られたものかもしれない。

14・15はやや扁平な胴部から細く直立きみに立ちあがる長い有段の口頸部と脚台をもつ、加賀を中心として北陸地方に分布する「月影式」を象徴する「小型飾壺」の口縁部(14)と胴部(15)と思われる。14は内外面ともに、15は外面に赤彩される。15は刻み目をもつ三本の突帯がめぐる。調整は14がていねいなナデ、15は外面がミガキ、内面はナデ。

4号方形周溝墓(SD5)出土土器(図93・16・17) 16は周溝北辺の北東角よりの約2m範囲内からほぼ1個体分が散乱して出土した。外方に長く開く有段口縁をもつ壺で、頸は短く、胴は球形に近い。口縁部は稜が鋭角的である。調整は口頸部が横ナデ。胴部はハケ。越後を含む北陸系の壺と思われる。

17は周溝西辺中央部底面から上半分の半周分が出土した。ゆるやかに外反する短い口縁部をもつ壺で、内外面ともに磨減がはげしい。越後系か。

2号方形周溝墓(SD2)出土土器(図93・18) 18は単純に外反する口縁部をもつ壺で、周溝南辺中央で口を上にしてつぶれた拾好で約1個体分出土した。調整は外面がハケ、内面は石の動きが目立たないハケ状のケズリと思われる。胴部は球形に近く、16に比べ底部は突出せず小さい。

## (2) 遺構外出土土器(図93・19～31)

遺構外出土品はⅢ区を中心にⅣ・Ⅴ区で少量あるが、十分な分類をして図示したものではない。

19～22は越後系の壺で、口縁端部に横ナデを加えて面をもたせている。調整は外面はハケだが、内面はケズリのもの(22)とハケのもの(19・20)がある。

23・24は器台および高環脚部と思われるもので、両方とも磨減がはげしい。

25～30は有段口縁の壺で、27・29が東海系のS字口縁壺に類似したもので、他は北陸系のもと思われる。30は口縁外面に縦凹線をめぐらすいわゆる月影式の壺である。胴内面の調整は25・26がヘラケズリ、他はナデあるいはハケである。

31は有段口縁をもつ小型の鉢で、内外面ともにていねいにヘラミガキされる。月影式の影響をうけたものか。

## (3) 小 結

当遺跡の古墳時代の土器は、越後を含む北陸系の土器が主体をなしているといつてよい。それは口縁部の形態や、内面のヘラケズリ手法の盛行によく表われている。

そして弥生時代後期の箱清水式の糸譜をもつ土器はほとんどみとめられない。

また、H9号住居址の12・13を小型器台ないし高環と考えれば、古墳祭式に強くかかわるとされる小型精製土器をもつこととなる。

以上のことを考えると、当遺跡の古墳時代の土器は『長野県史』のⅡ期古段階に相当するものとする。

注1 『新潟県史』資料編1 原始・古代1983 図版535 7・10

2 同上図版527 1

3 同上図版531 4

## 引用参考文献

坂井秀弥「古墳出現期の新潟県」『第5回三原シンポジウム古墳出現期の地域性』1984

『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター 1986

『長野県史』考古資料編全1巻4 1988

H9住

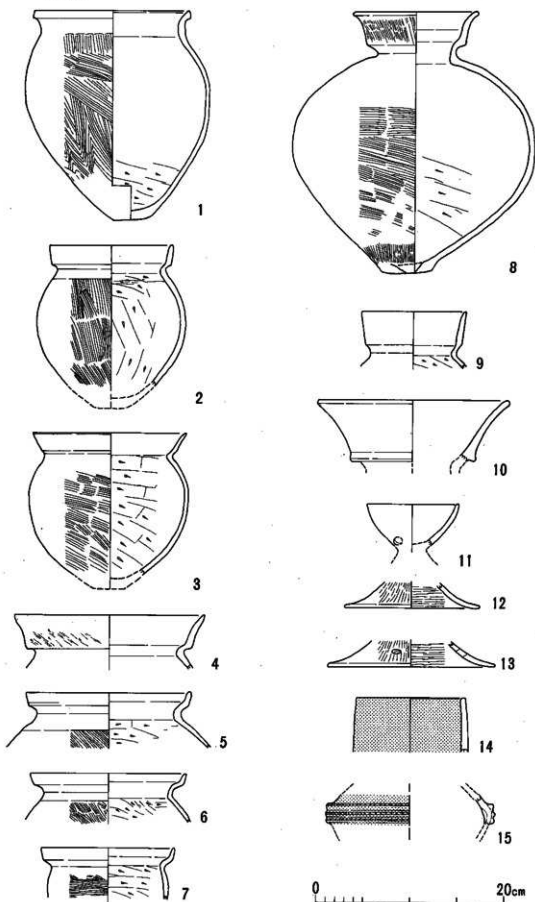


図92 古墳時代の土器 (1) 1 : 4

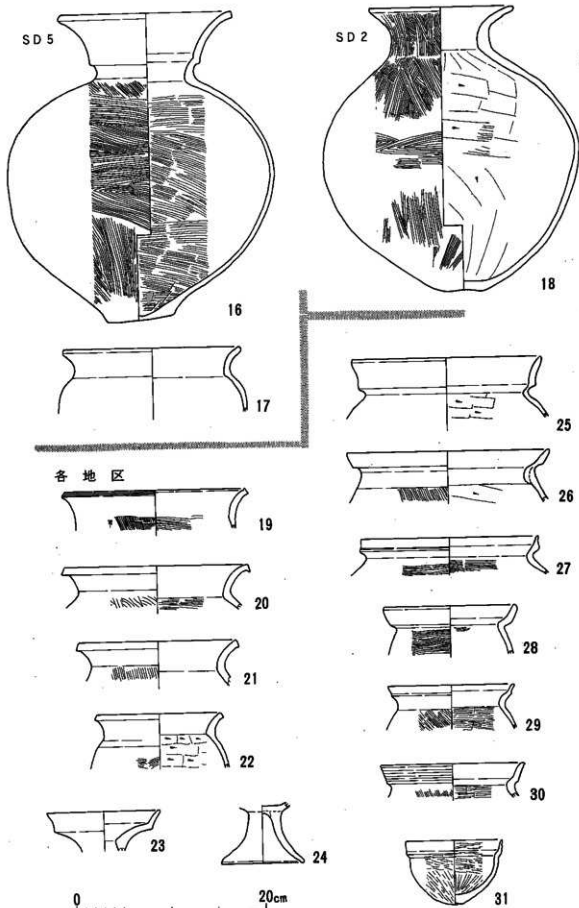


図93 古墳時代の土器 (2) 1 : 4

## 第6章 平安時代

### 1 遺構

平安時代に属する遺構は、調査区北側のⅥ区・Ⅰ区・Ⅱ区の一団（以下「北群」）と、南側のⅣ区・Ⅴ区の一団（以下「南群」）とにまとまっている。その距離は約250mであって、時期的もしくは集落内の単位集団に分離できる可能性がある。

北群には、竪穴住居址2軒（H11・12住）、Ⅵ区の大倉崎館跡下層より検出された土壇墓群（前年調査分を含め4基）がある。南群は、竪穴住居址8軒（H1～H8住）、掘建柱建物址4軒がある。このほか土壇の幾つかは、本時期に含まれるものも存在するかもしれない。

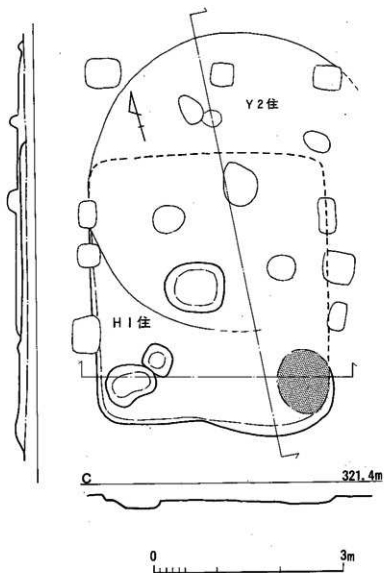


図94 H1号住居址 1:60



## A 竪穴住居址

### (1) H1号住居址 (図94・H1住)

南群、Ⅳ区C・D-15区に位置し、Y2号住居址を切り、3号掘建柱建物址(SB3)に切られている。表土より浅いところに構築されていたために、壁はほとんど不明である。

4.10m×3.80mの長方形プランを呈すると思われる。カマドは東南コーナーに構築されるが、袖石など無く焼土のみ認められた。柱穴は、ほぼ中央及び西南隅に土坑状のピットが認められるが、主柱穴と思われるものは検出されていない。床面は軟弱で、貼床等はなされていない。

遺物は、覆土中より黒色土器・土師器などが出土している。

### (2) H2号住居址 (図95・H2住)

南群、Ⅳ区D・E-14区、H1号住居址の北東に近接する位置にあり、Y1号住居址を切る。東約半分が調査区外に延る。規模は4.40m×3.50mの長方形プランと推定される。壁はなだらかな傾斜で床面に続くが、西・北側の壁下には周溝がめぐっている。

カマドは東南隅の焼土の認められる部分と思われるが、施設等はない。柱穴も西側の周溝部分に1か所あるのみで、主柱穴は発見されなかった。床面は平坦で、堅緻である。

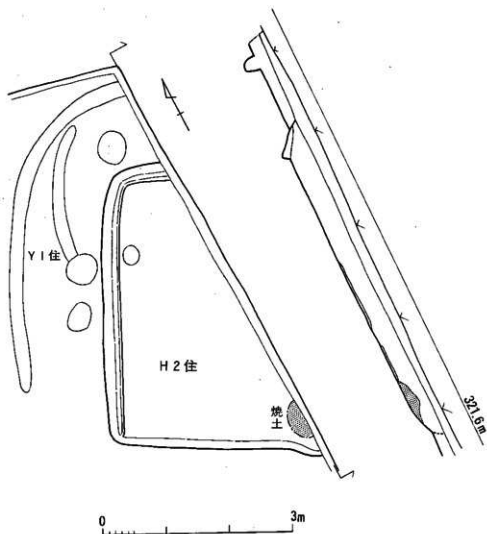


図95 H2号住居址 1:60

(3) H3号住居址 (図96・H3住)

南群、V区C・D-3・4に位置し、2号方形周溝墓を切る。規模は、4.50m×4.10mの長方形プランを呈し、住居址外に溝が延びる。東・西・北側の立ちあがりは急斜な壁となっているが、南側はなだらかに立ちあがる。西壁下よりL字状に東側の住居址外へ延びる溝は本住居址に伴うもので、焼土、炭を多量に含む。特に西壁下の部分は、底面・壁まで焼けている。柱穴は小さな浅いピットが多く、主柱穴と考えられるものはない。カマドは、東南隅に近い南壁に構築されている。粘土・小破礫が認められるが、破壊された状況であった。床面は平坦で、堅緻である。

遺物は、黒色土器・灰釉陶器・土師器など出土している。

(4) H4号住居址 (図97・H4住)

南群、V区B・C-5・6に位置し、西南部分は調査区外のため検出出来なかった。規模は、4.10m×3.80mとやや小型の住居址で、平面はほぼ長方形プランを呈す。耕作が深いために壁はほとんど検出でき

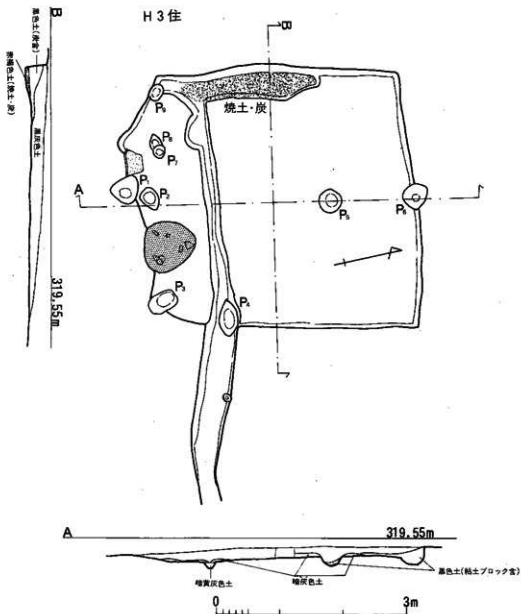


図96 H3号住居址 1:60

なかった。カマドは、東南コーナー寄りの東壁にあり、焼土のみが検出されている。柱穴は、 $P_1$ ・ $P_2$ が最もしっかりしており、深さは約20cmを測る。

遺物は、黒色土器環・土師器環・甕が出土している。

(5) H5号住居址 (図97・H5住)

南群、V区C・D-6、H5号住居址の東4mに位置する。一边約4mのやや膨らみをもった方形プランを呈す。東側は、斜面の関係で掘り込み面を確認できなかった。東壁を除く三辺には壁下に周溝がめぐる。カマドは東南コーナーにあり、構築材の石が散乱していた。また、覆土中に焼土・粘土が認められ、カマド破壊が行われた痕跡と思われる。柱穴は3か所に認められるが、 $P_1$ ・ $P_2$ は深さが約30cmあり、しっかりしている。床面もほぼ平坦で、堅緻である。

遺物は、カマド西側の南壁周溝寄りの地点で、床面よりわずか浮いたレベルより、墨書土器2点が伏せた状態で重ねられて出土している。(カマド廃棄に伴う祭祀的な行為に関係するかもしれない)。その他、土師器環・甕が出土している。

(6) H6住居址 (図97・H6住)

南群、V区D・E-10において検出された。黒色土が厚いために検出面ではほとんど壁が不明であった。規模は、3.40m×3.20mで、ほぼ方形プランを呈する。周溝は西辺壁下のみ構築されている。 $P_1$ は周溝に付属するものであるか不明である。カマドは、焼土1・2がその可能性がある。ただし、いずれも焼土・炭のみで、若干の掘り込みが認められているが、他に構築物は認められなかった。柱穴は、主柱穴となるものは認められないが、 $P_2$ ・ $P_3$ ・ $P_4$ は住居址のほぼ中央を通り、H3・H5号住居址例のように、1本ないし2本で竪穴部分を支えていたのかもしれない。

遺物は、黒色土器・土師器・灰釉陶器などが出土しており、土師器環形土器の底部調整は手持ちヘラケズリである。

(7) H7号住居址 (図99・H7住)

南群、V区C-12・13に位置する。約半分の調査で、全体を確認できていない。本地区は、かつて地ならしを行ってたおり、表土より1m以上地下に包含されていた。検出された部分は西壁・南壁で、北・東辺は不明である。プランは、長方形を呈し、西南コーナーを中心とした部分に周溝がめぐる。床面は平坦であるが、やや軟弱である。

遺物は、土師器環・甕など出土しているが、いずれも小片で実測可能な土器は1点のみであった。

(8) H9号住居址 (図99・H9住)

南群、調査区の最南端に位置し、千曲川新規河岸段丘面に急傾斜で至る直前にあたる。大型機械で土地改良を行ったと思われ、南北に約15cm間隔、幅30cmで溝状に掘削されており、遺構もかなり破壊を受けていた。プランは明確でないが、柱穴は、かなり深い例もありそれぞれしっかりしている。また西・北コーナーに焼土がある。これをカマドとするには、他の平安時代カマドと正反対の位置にあることもあり、やや疑問である。住居址覆土からフィゴの羽目、鉄滓など鍛冶に関する遺物が出土していることから、本焼土は鍛冶遺構に関係すると見たほうが妥当かもしれない。なお、焼土部分はわずかに掘り込まれているが、他に構築された痕跡は認められなかった。

(9) H11号住居址 (図100・H11住)

北群、II区K-3・4区に位置する。3.60m×3.50mのほぼ方形プランを呈し、深さは確認面より12cmを測る。ピットはほぼ中央に深さ18cmのピット( $P_1$ )および径は小さいが、深さ60cmを測るピット2本がある。また、焼土を伴う $P_1$ ・ $P_2$ は、柱穴とは考えられず作業用の土趾と思われる。床面は平坦で堅緻である。カマドは、東南コーナーにあり、石組みカマドであった。構造は、人頭大の扁平な石をやや掘り込ん



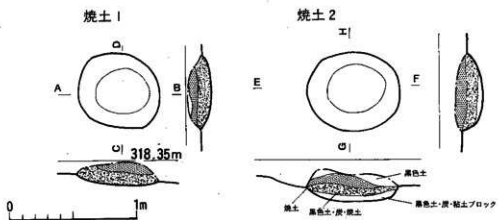
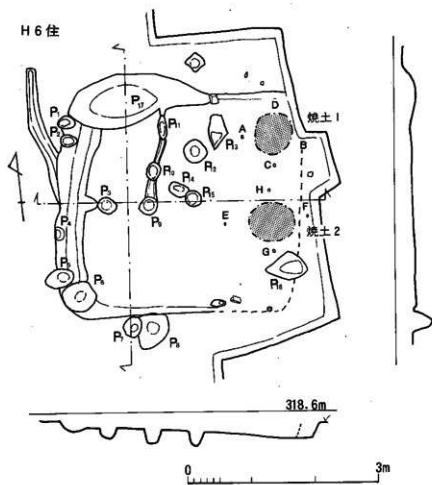


図98 H 6 号住居址 1 : 60

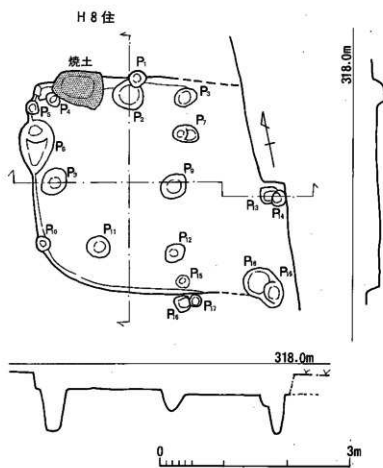
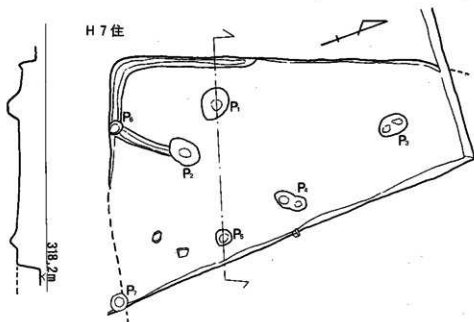
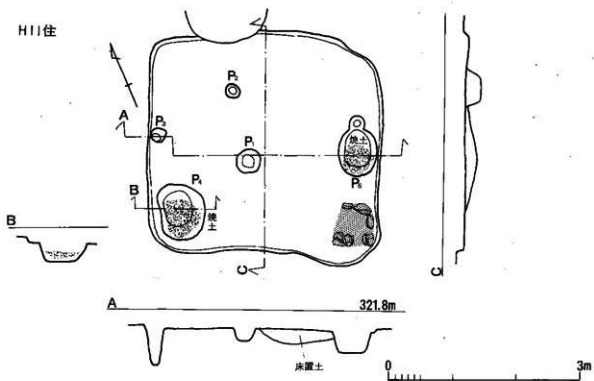


图99 H 7 · 8 号住居址 1 : 60



同カマド

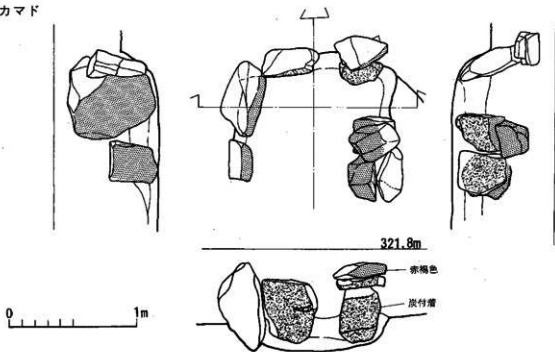


図100 H11号住居址 1 : 60 1 : 30

でコの字形に組み立てており、カマド内面は使用によって煤及び火熱により赤褐色をおびている。

なお、掘り方は、一部において検出されている。かなり凹凸があったと思われる、凹地に黄褐色土を置き平坦な床面を作っている。

遺物は、黒色土器・土師器・灰胎陶器など出土しているが、他に灰胎陶器椀の転用硯や、鉄製鎌も出土した。

#### ⑩ H12号住居址 (図101・H12住)

北群、I区O・P-19において検出された。H11号住居址の北30mに位置し、1号溝状遺構を切っている。規模は一辺2.90mの小型の方形プランを呈し、深さは19cmを測る。主柱穴は認められず、土塚と考えられる $P_1$ ・ $P_2$ がある。床面は平坦であるが、やや軟弱である。

遺物は、黒色土器・土師器など存在するが、黒色土器環の器高の浅い土器が目立つ。

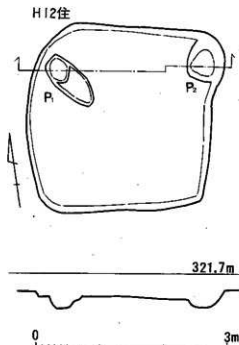


図101 H12号住居址 1:60

## B 掘建柱建物址

掘建柱建物址は南群において4軒検出されているが、他にも推定される遺構が存在している。本稿では充分な検討を加える余裕がなかったので、今後の課題としておく。

### (1) 1号掘建柱建物址 (図102・SB1)

南群、V区D・E-5・6において検出された柱穴群である。調査区外に延びるため規模については不明である。 $P_1$ ~ $P_2$ の柱列については、間隔1.5~1.7mで並んでいるが、 $P_3$ ・ $P_4$ の列は全体が不明であるため、掘建柱建物址になるかどうか微妙である。

本遺構が、H5号住居址に東接していることから、櫛列になる可能性も残されている。

遺物は、柱穴より土師器片をわずかに検出している。

### (2) 2号掘建柱建物址 (図102・SB2)

南群、V区D・E-3・4において検出された。1号掘建柱建物址と同様に調査区外にかかるため、全体については不明である。

$P_1$ ~ $P_2$ は、柱間寸法が1.5~1.9mであるが、 $P_3$ との間隔は2.9mと広い間隔になっている。本遺構はH3号住居址の東に近接しており、このあり方はH5住とSB1の関係と同様であることから、やはり柱列の可能性も残されている。

遺物は、 $P_4$ より土師器片が出土している。

### (3) 3号掘建柱建物址 (図103・SB3)

南群、IV区C・D-13・14に位置し、Y2号住居址、H1号住居址を切る。

規模は、4号掘建柱建物址との関係もあり、はっきりしないが、2間×2間の建物と思われ、柱間寸法は1.5~1.7mである。掘り方は30~50cmの長方形で、1・2号掘建柱建物址と相違する。

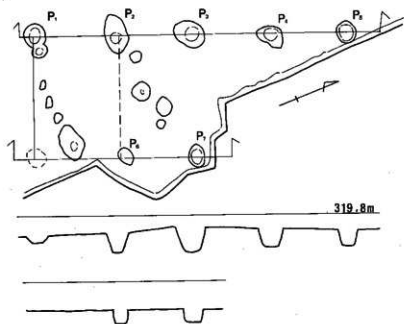
### (4) 4号掘建柱建物址 (図103・SB4)

南群、IV区C・D-15・16において検出され、3号掘建柱建物址の南に接している。

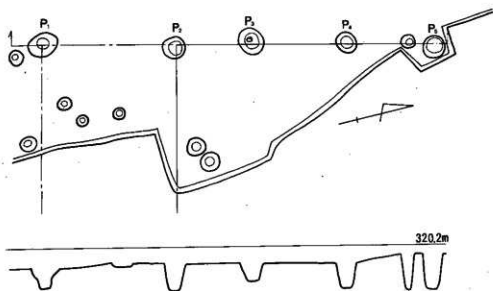
規模な、2間×2間の建物と思われるが、はっきりしない。柱間寸法は1.40~2.00mである。 $P_1$ より土



SB 1



SB 2



0 3m

图102 掘立柱建物 SB1、SB2 1:80

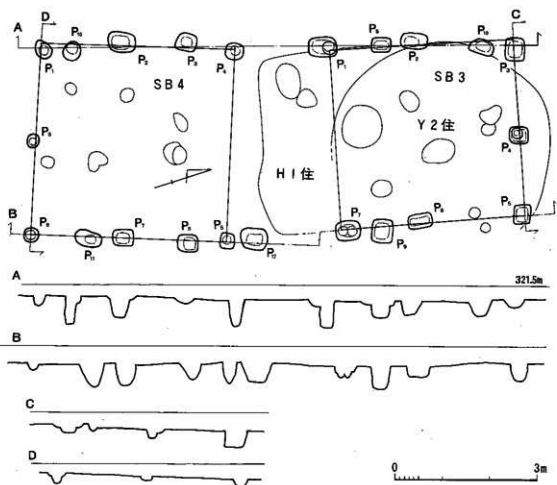


図103 掘立柱建物SB3・SB4 1:80

師器片が出土している。

### C 土 塚 墓

#### 19号土塚 (図104・SK19)

共献されたと考えられる遺物の出土状態により、明らかに土塚墓であろう。北群、VI区(大倉崎館跡郭内)より検出された。内掘によって北側を破壊され、南側は方形周溝墓を切っている。規模は、長軸が破壊されているためにはっきりしないが、150cm程×75cmの長方形を呈するものと思われる。深さは、確認面より約45cmを測り、壁は急斜に掘り込まれている。坩底は平坦で、特別な施設は認められなかった。なお、主軸はN7°Wである。

遺物は、長軸の南・西隅より、坩底より約25~30cm上位のレベルより黒色土器・土師器4点が出土している。坩底中央部に向かってずり落ちるような状態であり、木棺外にあった遺物が朽ちることによって中に入れたと考えるのが妥当であろう。

なお、前年度調査実施の大倉崎館跡の調査のなかで、平安時代の土塚墓と考えられる土塚が3基検出されている(図104)。今回の土塚墓の発見により遺構番号を図の通り今次の番号と続けることに変更した。22号土塚の遺物出土状態は、今回の検出土塚墓の遺物出土状態と似ている。21・22号土塚との相違は、おそらく棺内・棺外との差が出土状態に表われているのではないかと。

このほか土塚墓状の遺構に、20号土塚がある。遺物は全く出土せず時期判定できないことと、土塚墓と考えられる他の遺構より大型であることにより、今回は除外している。

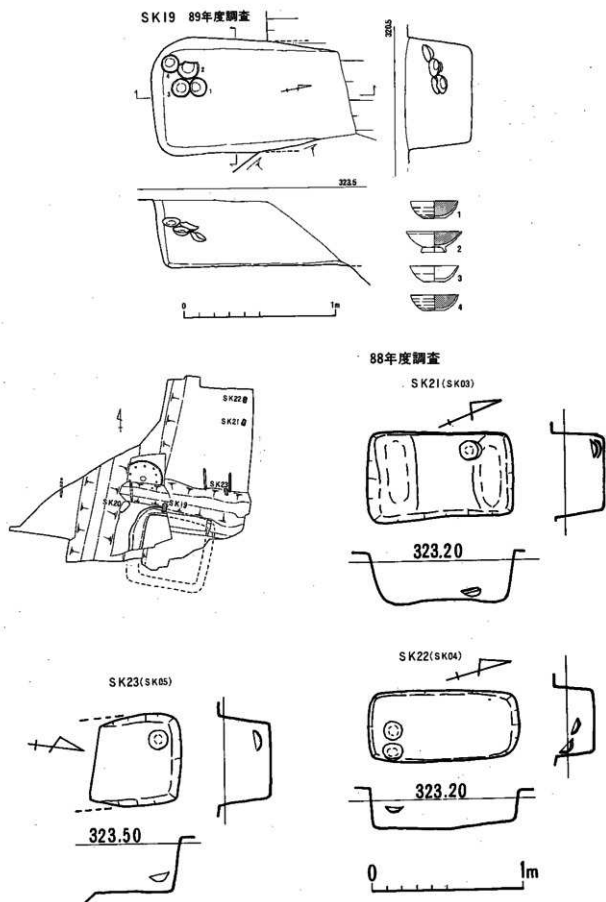


图104 平安時代土塚墓 11 : 25

## 2 遺物

### A 土器

平安時代の土器は竪穴住居址および土壇出土品のみを報告する。遺構外出土品も量的には少なくないが、遺構出土品と基本的に等しい。

#### (1) H1号住居址出土土器(表8・図105)

黒色土器碗<sup>(註1)</sup>、土師器碗・甕、灰釉陶器碗ないし皿・瓶がある。

黒色土器碗は深くて体部が内湾し底部をヘラケズリするもの(1)と、体部が直線的で底部に糸切り痕を残すもの(3)とがある。なお3には口縁部に油膜状のものが付着している。灯明皿として使われたのか。

土師器碗(4)は浅い形態のもので糸切り痕を残している。

土師器甕は大型品(5)と小型品(6・7)とがあり、いずれもロクロ成形される。5は口縁端部がやや内傾し、胴下半にヘラケズリが加えられる。7は底部外面に糸切り痕が残る。

灰釉陶器は碗ないし皿と思われる小片と、瓶の肩部小片がある。

#### (2) H2号住居址出土土器(表8・図105)

黒色土器碗、土師器碗・甕、灰釉陶器碗がある。

黒色土器碗は大型のもの(8)があり、体部は大きく開いている。底部は糸切り痕残す。

土師器碗は底部片で糸切り痕を残す。

土師器甕(10・11)は、内湾ぎみに立ちあがり端部がやや外方に外反する口縁部をもつ。

灰釉陶器碗(9)は口縁部の小片である。施釉方法はよくわからない。

#### (3) H3号住居址出土土器(表8・図105)

黒色土器碗・皿、土師器碗・甕・小型鉢、灰釉陶器皿がある。

黒色土器碗は高台の付かないもの(12~16)と、高台の付くもの(17)とがあり、高台のつかないものはいずれも口径13.0cm前後のもので体部は内湾する。底部調整はロクロケズリのもの(12)と糸切り痕の残るものがある。

黒色土器皿(18)は高台が付くものと思われる。

土師器碗(21~23)は頸部の横ナデが強いためか口縁部が2段に見えるもので、口縁端部は丸くおさめる。21・22は外面のヘラケズリが肩部にまで及んでいる。

小型鉢(19)は内湾ぎみの体部と高台状をなす底部をもつもので、外面にハケが施される。混入品の可能性が高い。

灰釉陶器皿(20)は、ほぼ完形品で出土した。釉は漬け掛けされており、高台は三ヶ月形。見込みに重ね焼きの痕跡が残る。東濃大原2号窯式期のものと思われる。

#### (4) H4号住居址出土土器(表8・図106)

黒色土器碗、土師器碗・甕がある。

黒色土器碗は口径16.5cmのもの(24)と、口径12.0cm前後のものがある。いずれも体部は内湾する。底部調整は25がヘラケズリ、24・26は糸切り痕が残る。

土師器碗(27・28)も体部が内湾する形態のものである。27は糸切り痕を残す。ただし28は内面がやや黒く、黒色土器の黒色処理の甘いものかもしれない。

土師器甕(29~31)は口縁部が2段になるもので、端部はやや外側に肥厚する。体部外面下半にヘラケ

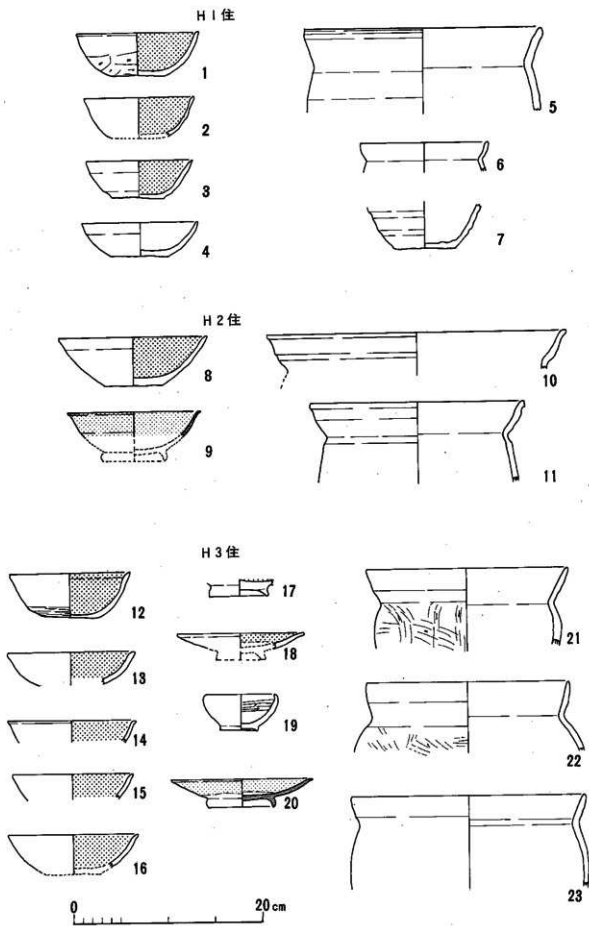


図105 平安時代の土器 (1) 1 : 4

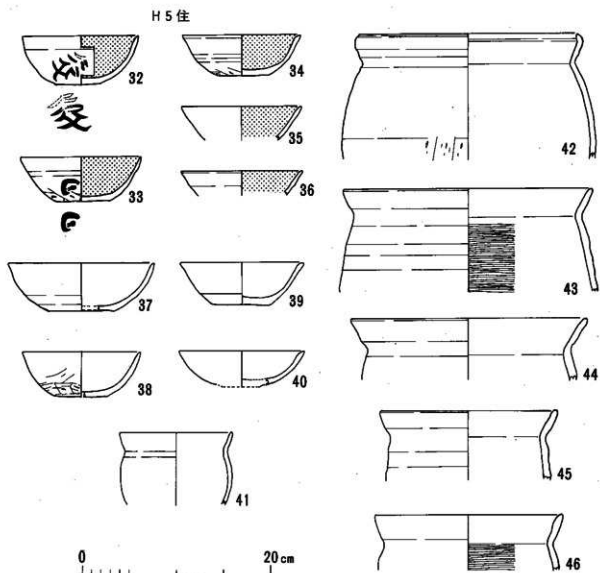
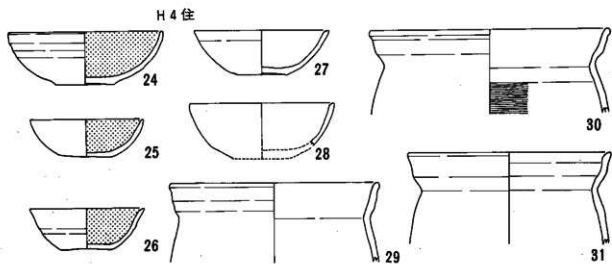


図106 平安時代の土器 (2) 1 : 4

ズリを施す。底は丸底になる。

また、図示していないが小型で平底の甕の底部と口縁部片がある。

(5) H5号住居址出土土器(表8・図106)

黒色土器椀、土師器椀・甕・小型甕がある。

黒色土器椀(32~36)はいずれも口径12~13cm前後のもので、体部が内湾するもの(32~34)と直線的なもの(35・36)がある。底部調整は34がへラケズリ、32・33は糸切り痕を残す。なお、32・33には墨書があり、32は長野市立博物館で赤外線カメラで判読していただいた<sup>(P.51)</sup>(PL51)が何という字なのかはよくわからない。

土師器椀(37~40)は口径15.6cmのもの(37)と、口径12~13cmのもの(38~40)がある。体部は内湾するもの(37・38)と、直線的なもの(39)と、浅く内湾するもの(40)とがある。底部調整は37がロクロケズリ、38がへラケズリ、39は糸切り痕を残す。

土師器甕(41~46)は口径24~26cm前後のもの(42~44)と、口径19cm前後のもの(45・46)と、口径12cmの小型甕(41)がある。いずれも口縁部は肩の強い横ナデによって2段に見えるもので、口縁端部は内傾するいわゆる越後型のもの(42)と、丸くおさめるものがある。胴部外面下半は図示されている42だけでなく他もへラケズリされるものであろう。

(6) H6号住居址出土土器(表8・9・図107)

黒色土器椀、土師器椀・甕、灰釉陶器椀、須恵器壺がある。

黒色土器椀(47~49)は口径12cm前後のもの(47)と9.5cmのもの(48)がある。体部は47がやや直線的であるほかは内湾するものである。底調整は48がへラケズリ、47・49が糸切り痕を残す。なお図示していない底部片をみると、へラケズリが1、ロクロケズリが1、糸切り痕を残すものが4、高台が付くもの1である。また48の口縁部には油膜状のものが付着している。

土師器椀(50・51)は高台のつかないもの(51)と、高台のつくもの(50)がある。底調整は51がへラケズリで、他図示していないものが2点あり2点とも糸切り痕を残す。

土師器小型甕(52・53)は「く」の字形に口縁部が屈曲する薄手のもので、ロクロ成形されている。

土師器甕(54~59)は、口端端部が内傾するいわゆる越後型の甕(54)の他、頸部の強いナデにより口縁部が2段のように見えるもの(55~59)がある。後者は胴下半にへラケズリを施す。

灰釉陶器椀(60~62)は口径14cmのもの(60)と17cm前後のもの(61・62)がある。施釉方法はいずれも漬け掛けである。口縁端部は外方に引き出されている。

(7) H7号住居址出土土器(表9・図107)

図示した63の他も小片が少量あるにすぎない。63は土師器椀で、やや突出する底部と浅い内湾する体部とをもち、口縁端部は外方に丸く肥厚する。底部は糸切り痕をそのまま残す。

(8) H8号住居址出土土器(表9・図107)

黒色土器椀、土師器甕、灰釉陶器椀・瓶・須恵器瓶・大甕・壺がある。

黒色土器(64~68)はいずれも口径13.0cm前後のもので、体部が内湾するもの(64・66・67)と、やや直線的で口縁部が外反するもの(65)とがある。底部調整は64がロクロケズリ、65・66は磨減がひどく不明。

土師器甕(69)は小型甕である。他に図示していないが普通の甕もある。

灰釉陶器椀(70)は漬け掛けされている。また図示していないが灰釉陶器瓶の肩部片もある。

須恵器は、図示したもの(71)は壺ないし瓶の底部だが、他に甕、瓶等の破片がある。

(9) H11号住居址出土土器(表9・図108)

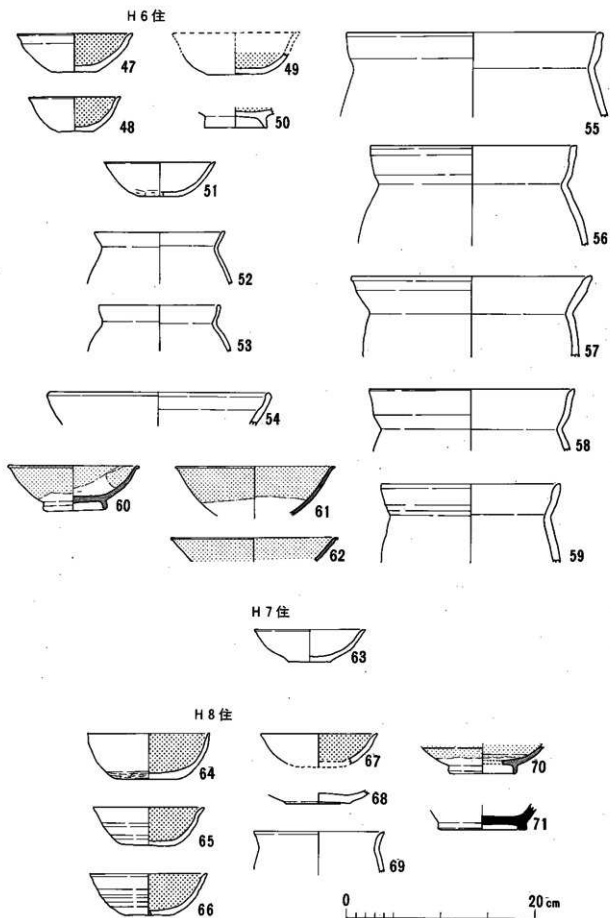


図107 平安時代の土器 (3) 1 : 4



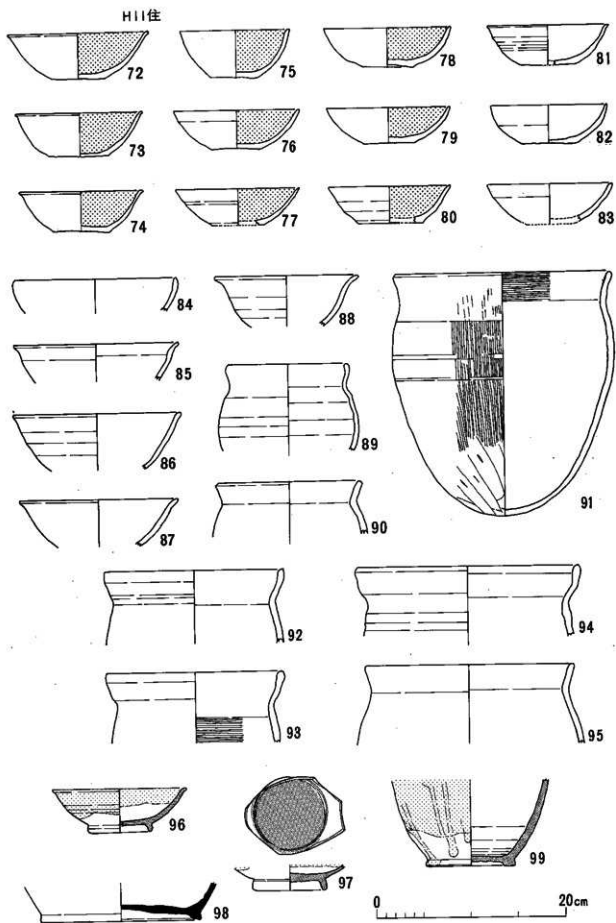
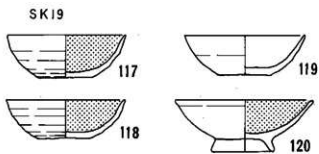
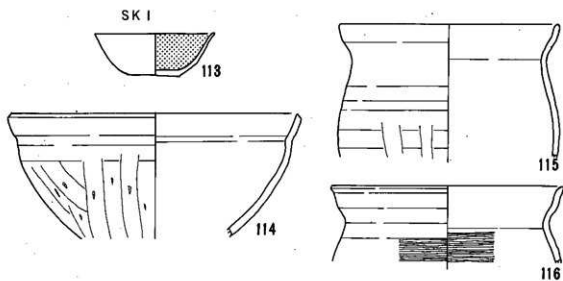
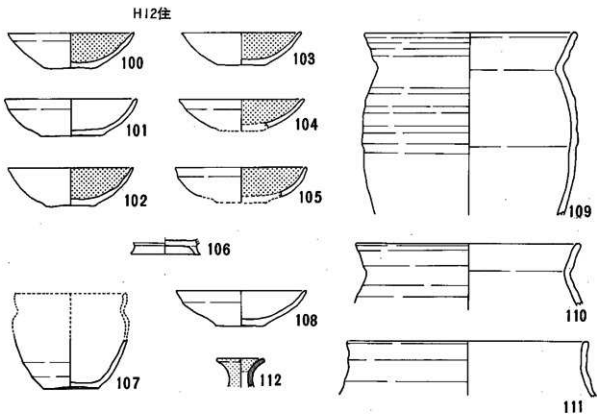


図108 平安時代の土器(4) 1:4



0 20cm

図109 平安時代の土器 (5) 1 : 4

黒色土器碗、土師器碗・鉢・甕、灰釉陶器碗・瓶、須恵器壺ないし瓶・甕がある。

黒色土器碗は図示したものを含めて13個体あり、口径15cmのもの(72)と、13cm前後のもの(73・74・76~80)と、11cm前後のもの(75)があり、それぞれ1・7・2個である。体部の形態は基本的には内湾するものであるが、直線的なもの(80)もある。口縁端部は外側につまみ出し灰釉陶器のようになるもの(72~74)とそうでないものがある。底部調整は73と図示していない1点を含めて2点がヘラケズリ、7点が糸切り痕をそのまま残し、2点が磨滅のため不明である。

なお、74・75には口縁部に油膜状のものが付着している。

土師器碗(81~83)は土師器碗としたが、黒色土器の黒色処理が甘いものないし、二次的な火をうけて炭素がとんだものかもしれない。81は口縁端部が外に肥厚する。口径は黒色土器碗よりやや小さめの12.2~13.0cmである。底部調整は81が不明、82が糸切り痕を残す。

土師器鉢(84~88)はこの住居址だけに見られるもので、84は口縁部が内湾し、他は口縁部が外反する。口径は15.4~17.0cm。ロクロ成形されている。

土師器小型甕(89・90)は口縁部が内湾するもの(89)と外反し端面をもつもの(90)とがある。

土師器甕(91~95)は口縁端部が内傾し、胴部が砲弾形のいわゆる越後型のもの(91)と、頸部の強い横ナデによって口縁部が2段になるもの(92~94)、単純に外反するもの(95)がある。

灰釉陶器には碗(96・97)、瓶(99)があり、碗はいずれも潰け掛けで、口縁部は外側につまみ出されている。97は転用硯で、見込み一面に磨痕があり墨が付いている。瓶(99)はハケ塗りされたもので、ヒードロ状に釉が流れている。99はH12号住居出土の破片と接合した。

須恵器には壺ないし瓶の底部(98)と、甕体部片がある。

#### (10) H12号住居址出土土器(表10・図109)

黒色土器碗、土師器碗・甕・灰釉陶器小壺・瓶がある。

黒色土器碗は9個体あり、高台をもつもの(106)が1点ある。他はいずれも高台の付かないもので、口径は13cm前後で他の住居址出土品に比べると扁平である。底調整は確認できたもの6点すべてが糸切り痕をそのまま残す。

土師器碗(108)は2個体あり、いずれも小さな突出した底をもつ。底調整は糸切り痕をそのまま残す。

土師器甕(109~111)は、口縁部が2段になるもの(109・110)と、頸部が不明瞭なもの(111)がある。107は小型甕と思われる。

灰釉陶器には小壺(112)と、瓶の胴部片があり、瓶胴部片はH11号住居出土品と接合した。

#### (11) SK1出土土器(表10・図109)

黒色土器碗、土師器碗・鉢・甕がある。

黒色土器碗(113)はやや深い形態のもので底部は糸切り痕がそのまま残る。

土師器鉢(114)は口縁端部が内傾する越後型のものである。胴部外面はヘラケズリされる。甕(115・116)は口縁部が2段に見えるもので116は口縁端部がやや肥厚する。

土師器碗は図示していないが、底部片が2個体ありいずれもヘラケズリされている。

#### (12) SK19出土土器(表10・図109)

SK19は土塚墓であり、出土した4点は副葬品である。黒色土器碗3と土師器碗1がある。黒色土器碗(117・118・120)は高台の付くものと付かないものがある。底部調整は117・118ともにロクロケズリで、120は高台をつけるためのナデである。117は外面にもヘラミガキを施している。

土師器碗(119)は残りの状態が悪い。黒色土器の内面の黒色がとんだものかもしれない。底部は糸切り痕をそのまま残す。

### (13) 小 結

平安時代の遺構出土土器は、供膳形態では黒色土器碗を主体としており、そこに少量の土師器碗や灰釉陶器碗が加わる。須恵器の坏はない。

黒色土器碗は15cm以上のもので、13cm前後のもの、11cm前後のもの大きさに3種あり、13cm前後のものはヘラケズリやロクケズリされるものが13cmより少し小さく、糸切り痕を残すものは13cmよりやや大きくなり、浅くなる傾向がある。ちなみにロクケズリされるSK19出土品では口径12.6cmで器高は4.2~4.5cm、糸切り痕の残るH12号住居出土品では口径12.8~14.0cmで器高は3.3~4.0cmとなる。

今この傾向を年代的傾向とみれば、H1・2・3・5・8号住居址、SK1、SK19が古く、H11・12号住居址が新しい様相をもつといえる。

絶体年代では、少量ながら各住居址に1~2点ある灰釉陶器碗が、漬け掛けで三ヶ月形の高台をもつことから折戸53号窯式期(東濃大原2号窯式)とすれば、10世紀末~11世紀代の年代<sup>(註1)</sup>が与えられる。

煮沸形態では土師器碗が主体である。口縁部が頸部の強いナアによって2段に見えるものが多いが、越後型とされる口縁端部が内傾し胴部が砲弾形をなすものも少量ある。

いずれにしても、今回出土した土器は、平安時代後期(10世紀末~11世紀)の土器群といえよう。飯山<sup>(註2)</sup>編年では長者清水、鍛冶田A段階から鍛冶田C段階にかけての土器群となる。

注1 年代観については笹沢浩「古代の土器」『長野県史』考古資料編全1巻4 1988に従った。

注2 望月静雄・高橋 桂「平安時代の土器編年について」『長野県飯山市旭町遺跡群北原遺跡IV』飯山市教育委員会 1985

注2 赤外線カメラによる判読にあたっては長野市立博物館 山口 明氏 にお世話になった。その時には「處」のくずし字ではないかとのことであった。

注1 土師器と黒色土器については、「平安時代の食器の変遷は須恵器・黒色土器・灰釉陶器とロクロ成形の土師器の消長で示されるものであり、この変化こそが平安時代の土器の変遷でもある」(笹沢浩「古代の土器」『長野県史』考古資料編全1巻4 1988)に従い、形態は同一でも内面の黒色処理がなされていないものを土師器とし、黒色処理がなされているものを黒色土器として呼びかけた。しかし実際には内面の遺存状態が悪いものや、黒色処理が完全でないものについては識別がむずかしい。今回も黒色の破片とまったく黒色でない破片とが接合した事例がある。

また、土師器・黒色土器の碗あるいは坏の名称についても、碗と坏の区別が明らかでないため今回は碗と呼んでおくこととした。平安時代の土器の詳細な分類については今後の課題である。

## H 1号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	1	12.8	4.5	5.6	ヘラケズリ	残90%
	2	11.6	4.1	—	—	—
	3	11.3	3.9	5.5	糸切り残る	口縁に油膜状品付着 残95%
	—	13.0	—	—	—	—
—	—	—	—	—	ヘラケズリ	—

## 土師器

椀	4	12.4	3.5	6.1	ヘラケズリ	残90%
甕	5	25.0	—	—	—	口縁端内傾
	6	13.6	—	—	—	小型甕
	7	—	—	6.6	糸切り残る	#
	—	—	—	—	—	—

## 灰釉陶器

柄のない皿片1、瓶肩部片1

## H 2号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	8	15.7	5.1	6.0	糸切り残る	残25%
	—	—	—	—	—	他2個体以上

## 土師器

椀	2	2個体あり、うち1個は糸切り残る				
甕	10	30.8	—	—	—	口縁部2段
	11	22.6	—	—	—	#

## 灰釉陶器

椀	9	14.2	—	—	—	施釉方法不明
—	—	他に皿片1片				

## H 3号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	12	12.9	4.7	5.7	ロクロケズリ	残90%
	13	13.6	—	—	—	口縁部片
	14	13.6	—	—	—	#
	15	13.0	—	—	—	#
	16	13.8	—	—	—	#
	17	—	6.2	—	—	高台付
	—	—	—	—	—	糸切り残る
皿	18	13.8	—	—	—	—

## 土師器

椀	—	—	—	4.8	糸切り残る	—
甕	21	—	—	—	—	口縁部2段
	22	—	—	—	—	#
	23	—	—	—	—	#

## 灰釉陶器

皿	20	15.0	3.0	7.0	—	漬け掛け
---	----	------	-----	-----	---	------

## H 4号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	24	16.5	5.5	6.2	糸切り残る	残50%
	25	12.0	4.0	5.5	ヘラケズリ	残90%
	26	12.4	4.2	5.0	糸切り残る	残40%
	—	—	—	—	ヘラケズリ	底部片

## 土師器

椀	27	14.2	4.6	5.2	糸切り残る	—
	28	15.3	—	—	—	—
甕	29	22.2	—	—	—	口縁部2段
	30	25.4	—	—	—	#
	31	21.4	—	—	—	#
	—	他に小型甕片1				

## H 5号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	32	12.5	5.1	4.8	糸切り残る	完形墨書あり
	33	13.0	4.7	5.8	ヘラケズリ	完形墨書あり
	34	12.5	4.3	5.5	ヘラケズリ	残50%
	35	12.8	—	—	—	—
	36	13.0	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	ヘラケズリ

## 土師器

椀	37	15.6	5.1	6.8	ロクロケズリ	—
	38	12.4	4.7	5.4	ヘラケズリ	—
	39	13.2	4.5	6.4	不明	磨滅著しい
	40	13.4	—	—	—	—
	—	—	—	—	ヘラケズリ	—
甕	41	12.0	—	—	—	小型甕
	42	23.8	—	—	—	口縁部内傾
	43	26.6	—	—	—	—
	44	25.2	—	—	—	—
	45	18.6	—	—	—	—
	46	19.8	—	—	—	—

## H 6号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	47	12.2	4.0	5.7	糸切り残る	—
	48	9.8	3.6	3.8	ヘラケズリ	口縁に油膜状品付着
	49	—	—	5.7	糸切り残る	—
	—	—	—	—	ヘラケズリ	—
	—	—	—	—	ロクロケズリ	—
	—	—	—	—	糸切り残る	—
	—	—	—	—	#	—
	—	—	—	—	#	—
	—	—	—	—	#	—
	—	—	—	—	—	高台付

表8 平安時代土器計測表(1)(表中数字 単位 cm)

## H 6号住居址

## 土 師 器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
碗	50	—	—	6.5	—	高台付
	51	11.6	3.6	4.6	ヘラケズリ	
	—	—	—	—	糸切り残る	
	—	—	—	—	〃	
甕	52	14.0	—	—	—	小型甕
	53	12.8	—	—	—	〃
	54	23.6	—	—	—	口縁端部内傾
	55	36.6	—	—	—	口縁部2段
	56	21.6	—	—	—	〃
	57	25.4	—	—	—	〃
	58	21.6	—	—	—	〃
59	18.8	—	—	—	〃	

## 灰釉陶器

碗	60	14.0	4.7	6.6	—	漬け掛け
	61	16.8	—	—	—	〃
	62	17.8	—	—	—	〃

## H 7号住居址

## 土 師 器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
碗	63	11.8	3.4	4.5	糸切り残る	底突出

## H 8号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
碗	64	13.0	5.0	6.0	ロクワケズリ	
	65	11.9	4.1	5.1	不明	磨減著しい 完形
	66	12.6	4.3	5.0	不明	〃
	67	12.4	—	—	—	〃
	68	—	—	6	糸切り残る	

## 土 師 器

甕	69	13.6	—	—	—	小型甕 他に2個体以上
---	----	------	---	---	---	----------------

## 灰釉陶器

碗	70	—	—	7.3	—	漬け掛け 他に煎煎部片1
---	----	---	---	-----	---	-----------------

## 須 恵 器

瓶	71	—	—	9.4	—	他に甕片・瓶片がある
---	----	---	---	-----	---	------------

## H11号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
碗	72	15.0	4.8	5.6	糸切り残る	完形
	73	13.2	4.6	6.0	ヘラケズリ	完形
	74	13.1	4.2	6.0	不明	完形 口縁部に油膜状が付着
	75	11.6	5.0	5.0	〃	〃
	76	13.6	4.0	5.0	糸切り残る	
	77	13.2	3.9	5.7	〃	
	78	13.4	3.9	5.3	〃	
	79	13.0	3.8	5.4	〃	完形
	80	13.0	3.9	6.8	〃	
	—	—	—	—	ヘラケズリ	
	—	—	—	—	糸切り残る	高台突出

## 土 師 器

碗	81	12.4	4.3	5.8	糸切り残る	
	82	12.2	4.0	5.6	不明	
	83	13.0	—	—	—	
	—	—	—	6.4	指によるナデ?	
鉢	84	17.4	—	—	—	口縁部内湾
	85	17.6	—	—	—	口縁部外反
	86	18.0	—	—	—	〃
	87	16.8	—	—	—	〃
	88	15.4	—	—	—	〃
甕	89	12.6	—	—	—	小型甕
	90	15.8	—	—	—	口縁「く」字形
	91	22.4	22.4	—	調整23.8	完形 口縁端部内傾
	92	19.0	—	—	—	口縁部2段
	93	18.8	—	—	—	〃
	94	23.6	—	—	—	〃
	95	22.2	—	—	—	〃
—	—	—	—	—	91と同形同大	
—	—	—	—	—	底部片	

## 灰釉陶器

碗	96	14.0	4.5	6.6	—	漬け掛け
97	—	—	7.8	—	—	漬け掛け 転用碗
瓶	99	—	—	9.3	—	ハケ裏り H12住居と兼合

## 須 恵 器

瓶	99	—	—	17.0	—	他に甕調部片あり
---	----	---	---	------	---	----------

表9 平安時代土器計測表(2)(表中数字 単位 cm)

## H12号住居址

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	100	13.3	3.7	5.2	糸切り残る	完形
	101	13.8	3.8	6.2	#	#
	102	13.2	4.0	5.0	#	#
	103	12.8	3.3	4.9	#	#
	104	13.4	-	-	-	-
	105	14.0	-	-	-	-
	106	-	-	7.2	-	高台付
	-	-	-	-	糸切り残る	
	-	-	-	-	#	

## 土器器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	108	13.8	3.8	5.2	糸切り残る	底突出
	-	-	-	-	#	
甕	107	-	-	5.9	糸切り残る	小型甕
	109	22.6	-	-	-	口縁部2段
	110	23.6	-	-	-	#
	111	25.2	-	-	-	#

## 反輪陶器

小壺	5.0	-	-	-	-	
他に砥削部片がありH11号住居出土品(99)と接合した						

## SK1

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	113	12.8	4.4	5.6	糸切り残る	

## 土器器

椀	-	-	-	-	ヘラケズリ	
	-	-	-	-	#	
鍋	114	30.8	-	-	-	口縁部内傾
甕	115	23.4	-	-	-	口縁部2段
	116	24.6	-	-	-	#

## SK19

## 黒色土器

器形	図番号	口径	器高	底径	底調整	備考
椀	117	11.6	4.5	5.6	ロクロケズリ	残80%
	118	12.6	4.2	5.6	ロクロケズリ	完形
	120	14.8	5.4	6.8	-	完形

## 土器器

椀	119	12.9	4.1	5.6	糸切り残る	残95%
---	-----	------	-----	-----	-------	------

表10 平安時代土器計測表 (3) (表中数字 単位 cm)

番号	石器名	材質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	備考	石器固体番号
1	砥石	頁岩	11.0	4.2	3.0	227.1			H11住 79
2	砥石	頁岩	15.2	5.2	3.9	28.0	○		H 8 住
3	縄物石	玢岩	10.9	3.8	2.9	417.6			H 8 住
4	縄物石	砂岩	14.1	3.9	3.0	158.2			H12住 6
5	縄物石	砂岩	4.8	2.6	1.8	216.7			H 8 住
6	縄物石	砂岩	18.0	5.7	4.2	613.9			H12住 53
7	縄物石	砂岩	14.8	5.3	4.5	463.4			H11住 2
8	カマド支脚?	砂岩	15.6	6.8	5.5	700.5		スス付着	H 8 住
9	不明石製品	泥岩	5.3	3.0	3.0	58.8		磨製	H 9 住
10	浮石	浮石 (アイサイト)	6.8	6.2	4.5	53.1			H 8 住
11	浮石	浮石 (アイサイト)	11.0	3.9	8.1	99.5			
12	土鎌	土製	6.2	2.6	2.4	37.5			V C-11
13	羽口	土製	5.9	7.5	3.9	96.8	○		V
14	羽口	土製	4.4	5.8	2.5	36.6	○		V
15	鎌	鉄製	22.0	-	0.4	68.1	○		H11住
16	鎌	鉄製	6.9	-	0.3	15.7	○		H 8 住
17	蟹	鉄製	6.8	1.9	1.2	34.0	○		
18	金具	鉄製	3.6	2.8	0.2	8.4		四角の孔	
19	釘	鉄製	4.0	0.7	0.5	6.5	○		III B-2
20	鉄滓	鉄	9.5	7.2	4.5	172.7		アノ状	V

表11 平安時代石製品・土製品・鉄製品計測表

## B 石製品 (図110・表11)

各住居址および遺構外より該期の石製品がいくつか検出されている。

### (a) 砥石 (1・2)

1はH11号住居址より出土したもので、頁岩製の仕上げ砥である。正面および裏面には、使用痕と思われる線条痕が認められる。2も頁岩製である。破損品であるが、使用によりずい分と小形となっている。

### (b) 礪物石 (3～7)

明確な使用痕跡は認められないが、全体的に磨滅している。重量にもバラツキがあり、すべてが本類に含まれるとは限らないだろう。

### (c) カマド支脚 (8)

煤が付着しており、いかにもカマド支脚に使用されたと考えられるものである。下端は欠けているが、ほぼ平坦な面となっている。また赤化も認められヒビ割れがある。

### (d) 磨石

H9住より出土した泥岩製の磨石である。青色をしており、全面が磨かれている。先端部は鋭く円錐状になっている。磨石としたが、特殊な用途であったと思われる。

### (e) 浮子 (10・11)

孔は認められないが、軽石を利用した浮子であろう。

## C 土製品

12は土錐である。13・14はV区南端より比較的多く出土したフイゴ羽口片で、H8号住居址に関係するものと思われる。先端部は熱により熔変している。

## D 鉄製品

### (a) 鎌 (15・16)

飯山市で発見されるのは初めてである。15は基部・刃部とも欠損しているため身部長は不明であるが、約20cmと思われる。刃部の柄に対する角度は約50°、比較的細身、薄手である。16は小形の鎌で、基部側のみ残存する。折り返し部分が認められ、基部の長さは約6.5cmを測る。

### (b) その他

17は鋳と考えられる鉄製品で、長方体を呈し、先端部分が細くやや曲っている。18は、薄い孔のある鉄製品であるが、用途は不明。19は、断面方形の鉄釘である。頭部が折り曲っている。20は、V区南端において、フイゴ羽口等とともに出土した鉄滓である。多くが凹凸が激しい粗雑で多孔質の残滓であったが、本例のみ一部に鉛状を呈して流動性をもった鉄滓である。



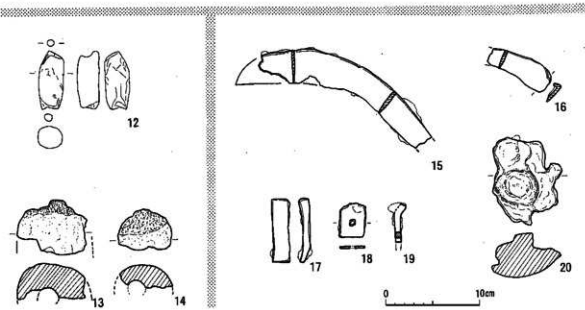
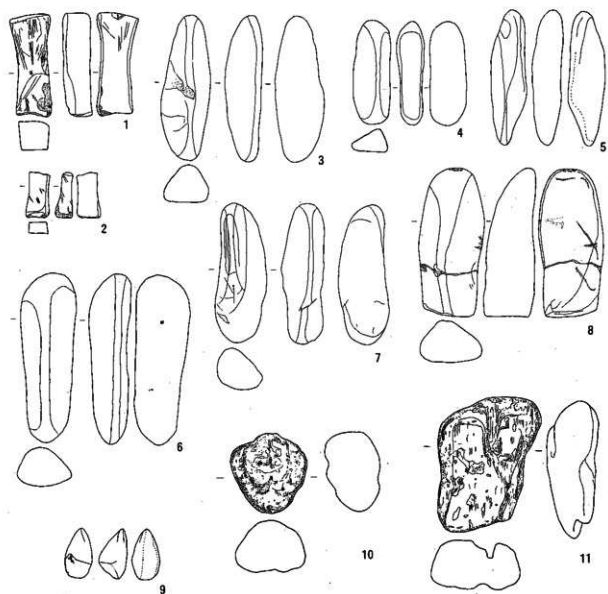


図110 平安時代の石製品・土製品・鉄製品

## 第7章 大倉崎館跡の補遺調査

大倉崎館跡は昨年度末調査であった郭内堀の東延長部分と土塁の調査を行った。これについては昨年度の発掘調査途中で館跡の保存問題が提起されたので、現状破壊となるため土塁の断ち割りや土塁下層遺構の調査を行わなかった。しかし計画どおり道路が通ることがやむを得ないこととなったため、今年度に調査することとなった。調査時にはすでに橋台と橋台工事用進入路によって東・北側が削られており、土塁部分だけが突出した状態であった。

### (1) 郭内堀の調査 (図112)

郭内堀は昨年度の調査で、ある時期には外堀までつきぬけており、その後土塁として東端部が埋め戻されたことが確認されていたが、今年度はその埋め戻された所を発掘した。

埋め戻された所は、南側はそのまま傾斜しているが北側は2段になっており、上段はゆるやかに傾斜している。

埋め土は基本的に黄色粘土ないし黒色土の混じった黄色粘土を水平に積み重ねて土塁としているが、下層には外堀までつきぬけていた時期に堆積したと思われるシルト質の土が両側に認められた。

底面は東側でやや高く、途中で段をもって20cm程下がりあとは西端まではほぼ水平である。幅は上端で8.4m、底で1.6~2.0m。

この郭内堀については性格が未だはっきりしないが、入口兼通路とする考え方もある<sup>(註1)</sup>。底面の高さがちよつと外側の高さにほぼ等しいことを考えれば、通路説も興味ある説である。しかし、後に西端が土塁として埋められた後も郭内部分に使われているから、通路であったとしても後に性格が変わったといえる。

### (2) 土塁の調査 (図113)

土塁は2ヶ所で断ち割り、盛り土の状態を観察した。Bでは途中に松根油採集の際と思われる攪乱址があってやや不明瞭だが、Aでは土塁の盛り土の状態が良くわかる。

土塁の構築方法を盛り土の状態から類推すれば、まず土塁構築予定線上の黒色土を約30cmほど掘り下げてから、その上に外堀側から黄色粘土および黒色土の混じった黄色粘土を30cmぐらいつつ層をなすように積み上げ、最後に郭側に黄色粘土を水平に積んでいる。積み込まれている土は基本的に黄色粘土なので、おそらく外堀を掘った土を使用したのであろう。そうとすれば、外堀を掘るのと併行して土塁が構築されたものと考えられる。

### (3) 出土遺物

今年度の調査では館にかかわる遺物は、越前系と思われる寝体部片が1片郭内堀埋土中から出土したのみである。今回掲載した図(114~116)は昨年度調査出土品である。

注1 今清水陽光氏ご教示。氏によれば千葉県国付台遺跡に同様例があって、そこでも当遺跡同様に郭の中央に郭内堀状に通路があるそうである。

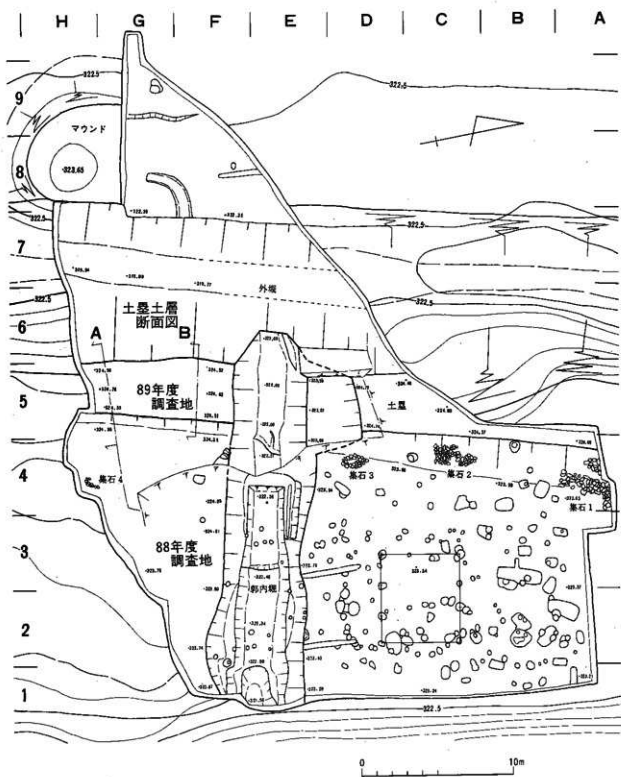


図111 大倉崎館跡調査地実測図 1:250

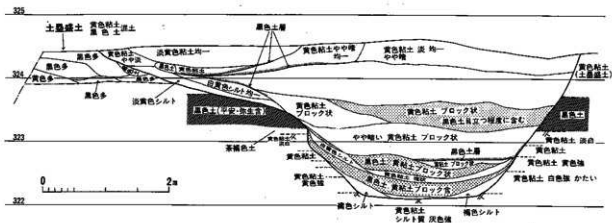


図112 郭内畑土層図 1:60

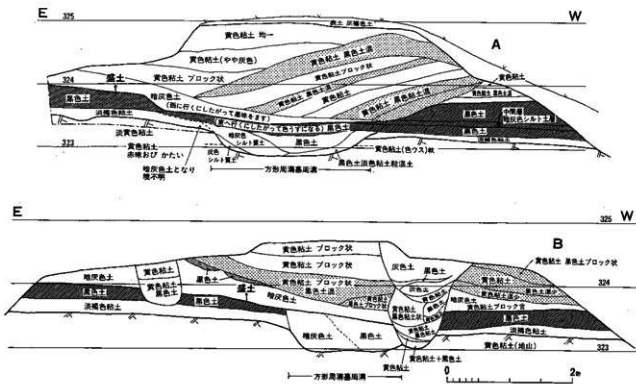


図113 土畠断面土層図 1:60

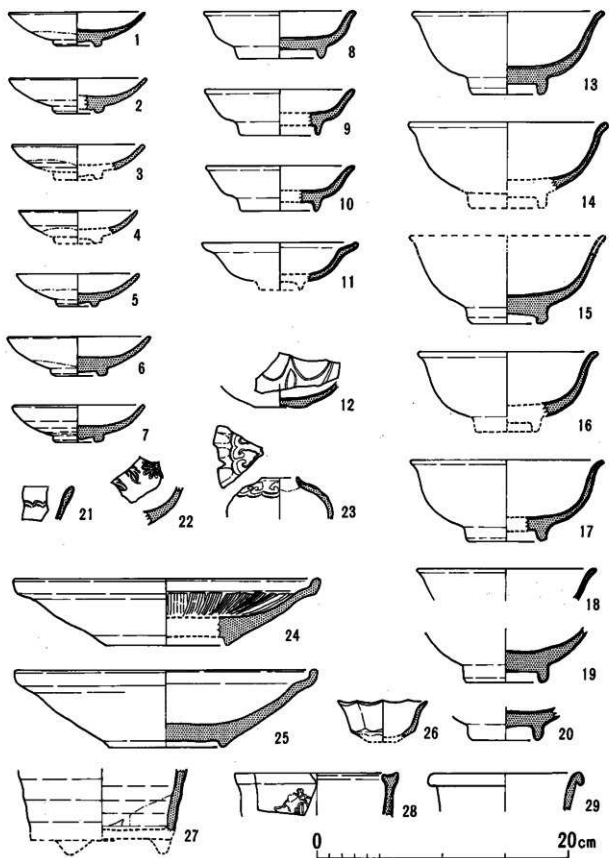


图114 88年出土遺物 (1) 輸入磁器 1:4  
 白磁 1~7·23·26·29 青磁 8~22·24·25·27·28

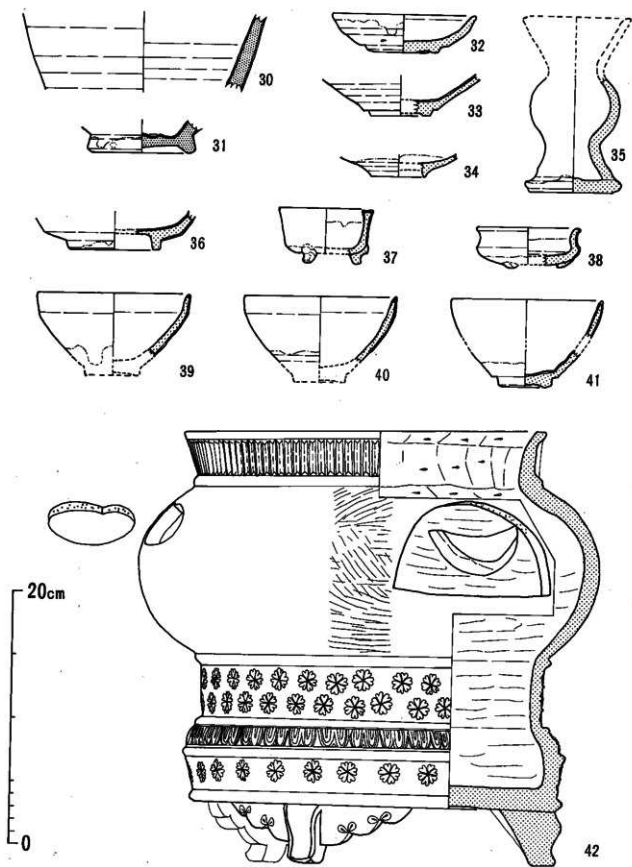


图115 88年出土遺物(2) 1:4  
 輸入磁器・国産陶器  
 青磁 30・31 美濃瀬戸系陶器 32~41 瓦質火炉 42

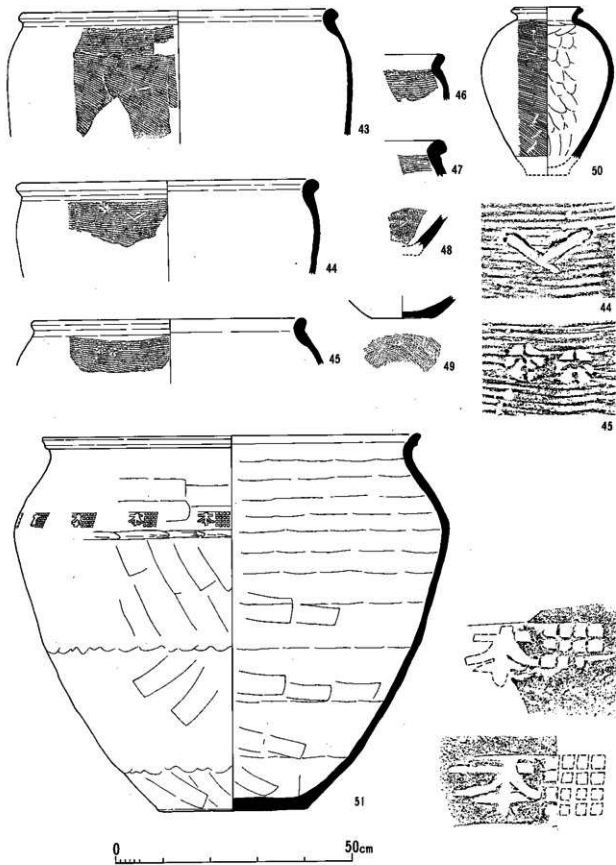


图116 88年出土遺物(3) 1:8 拓本は1:2  
 珠洲系 43~50 越前系 51

## 第8章 結 語

遺跡の所在する丘陵地帯は、古墳、大倉崎館址、弥生時代中期の太形蛤刃石斧の出土地として古くから知られている。地元飯山市立常盤小学校に現在も上野遺跡出土の石器類が保存されている。

昭和40年代後半、飯山地方にも開場整備事業等開発の波がおしよせ幾多の貴重な遺跡が無残にも破壊されていった。そこで、少しでも遺跡の破壊を防ごうと飯山北高等学校地歴部が、飯水岳北地域の遺跡分布図の作成にとりかかった。分布図作成のために各地域をくまなく踏査しつづけた。たまたま常盤地区を担当した太田文雄氏は、上野遺跡で玉髓製の搔器数点を採集し、先土器時代の遺跡地であることも判明した。

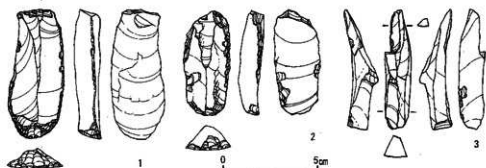


図117 上野遺跡採集の搔器・彫器 (1:2)

更に大倉崎館址の西北の溜池付近から平安時代の土師器を採集し、本遺跡が先土器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の各時代にまたがる重要な遺跡として認知されるにいたったのである。

このような重要な遺跡が存在する丘陵のほぼ丘頂部を縦断して国道117号線のバイパス道路が敷設されることとなった。そのため私達は、昭和64年度に橋台部分にあたる大倉崎館址の調査を行った。このことは是非や保存運動については、「小沼湯滝バイパス関係遺跡調査報告I」の報告書で触れてあるので省略するが、多大な成果をあげた反面、当地方にとって重要かつ稀少価値のある中世城館址の主要部分が、永久に消え去ってしまった悲しみを忘れ去ることができない。地域開発とひきかえに市民共有の大切な文化財を失ってしまったからである。

発掘調査は、飯山地方特有のむし暑さからはじまる6月13日から秋風のたつ9月19日までの約3ヶ月間にわたって行った。調査の結果予期以上の成果があった。以下各時代ごとに簡単に記述してゆこう。

### 1. 先土器時代

石器は、尖頭器、搔器、彫器、ナイフ形石器、石錐、磨製石斧、剃片等バラエティに富んでおり、出土点数も多い。第1区から第5区の各区にまたがっており、集中して出土した地点はごく僅かであり、大部分はまばらに出土した。恐らく縄文時代以降の住居址、建物址造成のために破壊されたためと思われる。それほど本丘陵が、千曲川に面した人々の生活の場として最適であった証左であろう。

地層的には、Ⅱ・Ⅲ層の出土がほとんどであり、先土器時代終末期に近い所産であることを窺わせる。器種的な面では横倉形の尖頭器が出土しており、今後千曲川下流域で該種の石器がまとまって出土する可能性が高いことを私達に示してくれた。発見されるとすれば本遺跡を中心とした近辺の千曲川兩岸の段丘面であろう。横倉遺跡は20kmしか隔たっているだけである。次に玉髓製の搔器が多量に発見されたことで



ある。出土遺物の項で触れているとおり、玉髓製の搔器の多用は本遺跡の大きな特徴といえよう。果してこの玉髓製搔器を中心とする石器類がどのような年代的位置にあるのか、そして製品が圧倒的に多く剥片がきわめて微量であるところから他地域より製品として持ち込まれた可能性が高い。そうだとすればどの地域から搬入されたのであろうか。また、石材の原産地はどこであろうか今後の重要な研究課題であろう。

いずれにしても本遺跡所在付近の千曲川兩岸には、日焼、関沢、千苺、太子林、瀬付等先土器時代の遺跡が多く所在する。まさに先土器時代の宝庫といえよう。同時に生業を考える上に重要であろうと思われる。

## 2. 縄文時代

所属時期が判然としている遺構は検出されなかった。縄文前期後半の土器が出土している。木遺跡と指呼の間にある大倉崎遺跡との関連を示すものであろう。弥生時代以降の活動によって破壊されたか、または地点を異にして住居が営まれたのかも知れない。また若干であるが、中・後期の土器片も出土している。

## 3. 弥生時代

中期所属の住居7軒が検出された。石器としては、太形蛤刃石斧、石庖丁、扁平片刃石斧、剥片等が発見されており、本丘陵が弥生中期に盛んに利用されたことを裏付けている。敷設道路部分がほぼ丘頂になり、東側は若干の緩傾地をもって千曲川に急崖で接している。西側は、緩傾斜で比較的広大な面積をもって後背湿地たる常盤平に接している。この西側斜面では、畑耕作中多くの弥生土器破片が発見されており、また調査中西側斜面一帯を踏査した折に、農家の軒先で石庖丁を一点発見した。このようなことから遺跡の中心部は、西側の傾斜面に存在するものと考えられる。一般に千曲川下流域では、栗林遺跡、笠倉遺跡、田草川尻遺跡等大規模な遺跡が千曲川に面し立地している。後背地あるいは近辺の湿地帯を稲作地として使用したことは勿論であろうが、稲作以外に千曲川との深いかかわり合いを示しているものと思われる。

常盤平を挟んで1kmほど距てた長峰丘陵上と外様平を挟んだ関田山脈山麓の湧水地帯に弥生中期の遺跡が多く分布し、飯山地方の弥生中期の集落構成を考える上で非常に興味深い。本遺跡出土の弥生中期は、現在調査旅行中の長峰丘陵上にある小泉遺跡群出土土器と合せ研究することで、飯山地方の弥生中期中半から後半にかけての土器型式がより鮮明化されるであろう。

弥生後期については、住居址は一軒のみであり、遺物出土量も少ない。

## 4. 古墳時代およびそれ以降

古墳時代では、方形周溝墓と考えてよいもの4基検出された。恐らく古墳時代前期には丘頂付近が墓域として取りあつたわけではないだろうか。飯山地方の古墳時代前期の墓制を考える上で非常に貴重な資料となるであろう。飯山地方では、類例の乏しい前期所属の北陸系の土器が出土しており、古墳時代前期土器形式の研究が一步前進することであろう。そして、従来から指摘されているように古墳時代前期に北陸地方と深いかかわり合いをもって来たことが改めて認識された。

飯山地方では、現在までのところ奈良時代の土器は検出されていない。その理由は不明である。平安時代に入ると各地に再び生活が営まれるようになる。本遺跡も例外でなく、奈良時代の遺構、遺物は検出されなかった。平安時代の遺構としては、住居址が8軒検出された。そして住居址に付随すると思われる建物址も検出されている。更に土壇も検出された。特筆すべきは鉄製の鎌が住居址内から発見されたことである。飯山地方では初めてのものである。

そのほか、羽口も出土しており鍛冶址が存在したことを裏付けているが、後世の破壊が著しく遺構は検出されなかった。

以上、今回調査の成果の一端をのべてきた。これらの成果が飯山地方の原始、古代の解明に果す役割は、はかり知れない。と同時に国道が開通した場合、周辺地域の開発のテンポが急速に進展し、地下に眠っている貴重な遺跡が次々と破壊されることと思われる。今回調査地域は、上野遺跡の一部分であり大部分は全くの処女地である。今後、周辺地域の開発には関係機関をはじめ、市民全体が充分注意してゆくことが肝要であろう。更に一昨年調査の大倉崎館址残存部分の保護活用についても真剣に考慮すべきであろう。

末尾ながら本調査について、指導助言をいただいた県文化課指導主事小林秀夫、見玉卓文両氏、地質について玉稿をおよせ下さった早津賢二、小島正巳両氏、物心ともにご協力いただいた上野区長稲崎實氏、同副区長小林祐幸氏、更に災天下黙々と調査に従事された作業員の皆さんに調査団を代表して深甚なる謝意を表する次第である。

## 飯山市上野遺跡の地質

— 旧石器群の層位と段丘形成年代 —

早津賢二・小島正巳

## 1. はじめに

上野遺跡は、千曲川左岸に接する、標高320～325m、幅約500m、長さ約1,500mの小規模な丘状をなす段丘上に位置する。この段丘は、千曲川の氾濫原からの比高10～15mで、川にのぞむ東側は明瞭な段丘崖を有するが、他の部分では明瞭な段丘崖を欠き、ゆるやかに高度を下げて氾濫原と接する。段丘の西側には、旧氾濫原の低地帯が広がる。

筆者たちは、上野遺跡のある段丘の形成時代と、遺物と示標テラフ層との層位関係を明らかにする目的で調査をおこなった。その結果を、以下に報告する。

## 2. 段丘と遺跡の地質

段丘の最高地点にある大倉崎跡の崖(図1)の地質柱状図を、図2-aに示す。この図から明らかなように、下位から、礫層(層



図1 段丘の断面がみえる崖  
(図2-aの柱状図の地点)

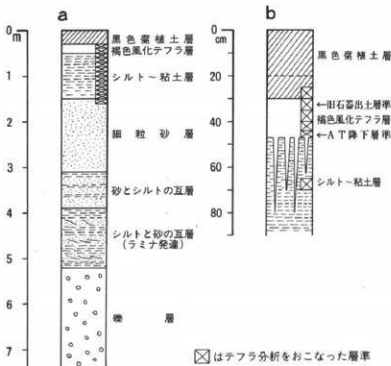
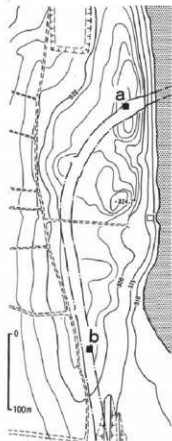


図2 段丘構成層(a)と発掘グリッドの断面(b)の地質柱状

厚2m以上)→砂とシルト～粘土の互層(約4.5m)、褐色風化テフラ層(20～30cm)→黒色腐植土層(数10cm)、の順に重なる。褐色風化テフラ層は、厳密にはテフラ性の土壌で、この中から、約2.2万年前の始良Tn火山灰(AT)(町田・新井,1976)が混交した状態で産出する。

遺跡の発掘グリッド(図2-b)では、下位より、シルト～粘土層(層厚40cm以上)→褐色風化テフラ層(約20cm)→黒色腐植土層(約30cm)の重なりが、観察される。最下位のシルト～粘土層の上面には、乾裂(乾底、sun crack)とみられる不規則な多角形～亀甲状(平面形)の割れ目が発達し、間を上位の褐色風化テフラ層が埋めている。割れ目は、クサビ状に深さ最大40cmに達する(図3)。褐色風化テフラ層中には、館址地点の崖の場合と同様、AT粒子が普遍的に含まれており、特にテフラ層の下部や上記割れ目の間に、より多く含まれる傾向がある。



図3 発掘グリッドで認められる乾裂の縦断面

### 3. 旧石器の出土層準と段丘の形成年代

上野遺跡の旧石器は、黒色腐植土層直下の褐色風化テフラ層上部に集中して出土する傾向を示す。一方、ATは、すでに述べたように、褐色風化テフラ層(テフラ性土壌)の全層準に分散して含まれており、特にその下限部に多く濃集することから、テフラ性土壌の堆積機構(早津,1988)を考慮すると、ATの降下層準は褐色風化テフラ層の下限にある、と考えられる。したがって、上野遺跡の旧石器群の層準は、ATのかなり上位にあることになる。

なお、柴村小坂遺跡など、千曲川(信濃川)のより下流域域で見い出されている(早津・新井,1985; 早津・佐藤,1988; 早津・小島,1983; 早津ほか,1983; 佐藤,1987,1988)浅間草津軽石層(As-YPk,1.0～1.1万年前)(新井,1971; 町田,1987)は、ここでは見い出されなかった。しかし、信濃川流域におけるAs-YPkの一般的産状(早津・新井,1985)から判断すると、As-YPkの降下層準は褐色風化テフラ層の上限にあると考えられるので、この遺跡の旧石器の層準は、As-YPkの直下にくる可能性が大きい。

上野遺跡のある段丘面の離水の時期、つまり段丘の形成年代は、最上位の水成堆積物であるシルト～粘土層の上に重なる乾陸成の堆積物、褐色風化テフラ層の下限の年代によって与えることができる。既述したように、褐色風化テフラ層の下限には、ATの降下があったことを示している。したがって、段丘の形成年代は、AT(約2.2万年前)の降下直前、約2.2～2.5万年前頃と推定される。

上野遺跡のやや下流対岸に位置する日焼遺跡も、上野遺跡と同様、ATの降下直後に離水した。この地域の最も低位の段丘群の上になる。ATの層準や褐色風化テフラ層の厚さから判断すると、厳密には、日焼遺跡のある段丘面の方が、若干離水の時期が早かったようである。

#### (まとめ)

1. 上野遺跡の旧石器群の出土層準は、AT(約2.2万年前)のかなり上位にある。また、As-YPk(1.0～1.1万年前)の直下にくる可能性が大きい。年代は、1.0万年前～1.5万年前の間(1.2～1.3万年前か?)にあると推算される。

2. 上野遺跡ののる段丘面の離水は、ATの降下直前(約2.2～2.5万年前頃)になされた。これは、日焼遺跡の段丘面の離水の時期と、ほぼ等しい。

**【引用文献】**

- 新井房夫（1971）：北関東ロームと石器包含層——とくに前期旧石器文化層の諸問題——。第四紀研究、10、317-329
- 早津賢二（1988）：テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフラクロノロジー——ATにまつわる議論に関係して——。考古学研究、34巻4号、18-32。
- 早津賢二・新井房夫（1985）：妙高火山群テフラ地域のテフラ層。早津賢二著「妙高火山群——その地質と活動史」、第一法規出版；p. 253-305。
- 早津賢二・新井房夫・小島正巳・望月静雄（1983）：信濃川流域における先土器時代遺物包含層と示標テフラ層との層位関係。信濃、85、813-822。
- 早津賢二・小島正巳（1983）：(壬遺跡の)土壌分析。国学院大学文学部考古実習報告第5集「壬遺跡1983」；p. 57。
- 早津賢二・佐藤雅一（1988）：(大刈野遺跡の)基本土層と広域テフラ。湯沢町埋蔵文化財報告第9輯「大刈野遺跡」、湯沢町教育委員会；p. 12-14。
- 町田洋（1987）：火山・テフラ・巨大崩壊。日本第四紀学会編「日本第四紀地図解説」；p. 11-16。
- 佐藤雅一（1987）：湯沢町埋蔵文化財報告第7輯「岩原II遺跡」、湯沢町教育委員会。
- 佐藤雅一（1988）：川口町埋蔵文化財報告第2輯「西倉遺跡——第2次発掘調査——」。川口町教育委員会。

## 第3編 大倉崎遺跡の調査

蘇州府志卷之四十五

# 第1章 調査の方法と経過

## 1 調査方法

### (1) 調査方法

大倉崎遺跡は大倉崎丘陵全体に広がる遺跡で、過去にも発掘や土取りの際に遺構が確認されている。したがって遺跡内の調査地点を過去の調査に従ってアルファベットで整理した(表1図2)。

今回の調査地は国道117号線バイパス部分(E地点)と、同バイパス通過に伴う大倉崎区墓地移転用地(D地点)である。調査時にはD地点をOZ Iとし、E地点をOZ IIとしている。

まず、墓地移転用地(D地点)は、大倉崎区の南端にある美妙寺のすぐ裏(北側)の約1100㎡で、現状は原野であるが、かつて耕作したことがあり、しかもイモ貯蔵穴3ヵ所掘られた跡が残るなど、一部攪乱されていた。表土の腐葉土など30cm前後の厚さで表土を重機ではぎとってから、西側の墓地隣接地から調査を開始した。

ジョレン、スコップ等で遺物等に注意しながら掘り下げて、遺構を検出していったが、掘り下げを開始した当初から、黒色土層の上層からも予想外に多数の縄文土器が出土したため、調査日程や調査面の高さ等を考慮して遺物は、グリット毎に一括して取り上げた。黒曜石(2ヵ所)や五輪塔の水輪なども同じ面でも検出した。

調査地の中央部は小丘の頂上となっているが、東西両側については斜面となっており、黒色土の厚さや遺構の有無を確認するために適宜幅50cm程度の断ち割りを行った。当初SXとし、後にJ3号住居跡とした遺構はこの断ち割りによって確認されたものである。

遺物のとり上げについては、住居跡等の遺構が確認されるか、もしくはその可能性があるところの出土遺物は、一つひとつラベルをつけ、位置およびレベルを記録して取り上げた。その他の出土品は、状況に応じてグリット毎あるいは遺構毎に取り上げたものもある。

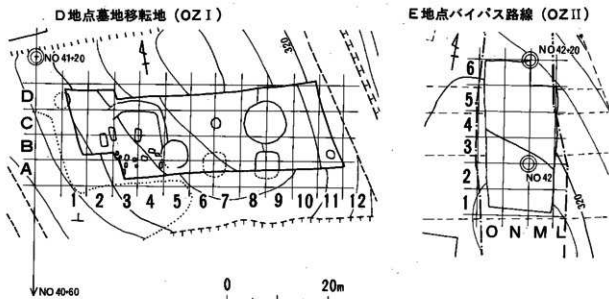


図1 地区割設定図 1:750



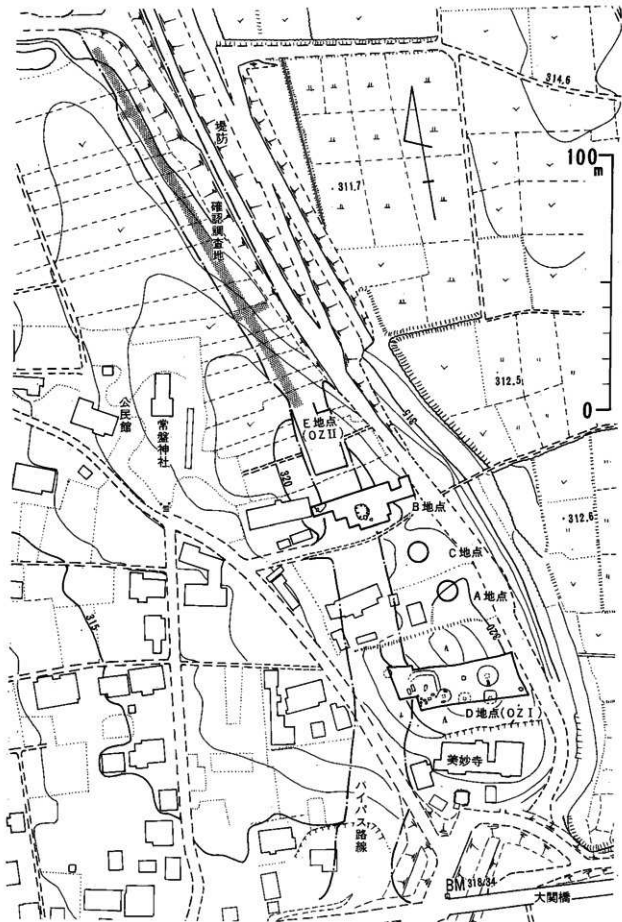


図2 調査地周辺の地形 1:1500

地点	概 要	文 献
A 地点	1970 (昭和45) 年11月発掘 縄文前期土器出土	2
B 地点	1973 (昭和48) 年10月発掘 縄文前期住居址 2 軒検出	2
C 地点	1948 (昭和23) 年堤防の土取り作業中に竪穴住居址らしきものが 2ヵ所出たようである。	1
D 地点	1989 (平成元) 年9～11月発掘 大倉崎区墓地移転地 (OZ I)。 縄文前期住居址 5 軒検出	本報告
E 地点	1989 (平成元) 年10・11月発掘 117号線バイパス路線 (OZ II)。 縄文前期土器出土	本報告

- 清水亨・森山茂夫「下水内郡常盤村大倉崎瀬附遺跡」『下水内郡遺跡発掘調査報告書』1950
- 高橋桂・中島庄一・金井正三「北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告」『信濃』28-4 1976

表1 大倉崎遺跡地点一覧表

また、道路用地部分 (E地点) については、東向きにゆるく傾斜して千曲川の段丘面へと続いているため、堤防沿いの約 100 m 程を重機で耕作土をはぎとって遺構・遺物の確認調査を行った。その結果、遺構・遺物がほとんど検出できず、精査を省略した。従って精査したのは、その南側の約 400 m<sup>2</sup> であった。南から精査に入ったが遺構では柱穴とするにはやや不安のある浅くあやふやな穴多くとイモ貯蔵穴以外は検出できなかった。

また、今回調査地とB地点との間については、古く削平されたとのことで調査を行わなかったが、発掘終了後重機による確認を行ったところ耕作土直下が地山となっておりやはり削平されていることがわかり、遺構も検出されなかった。

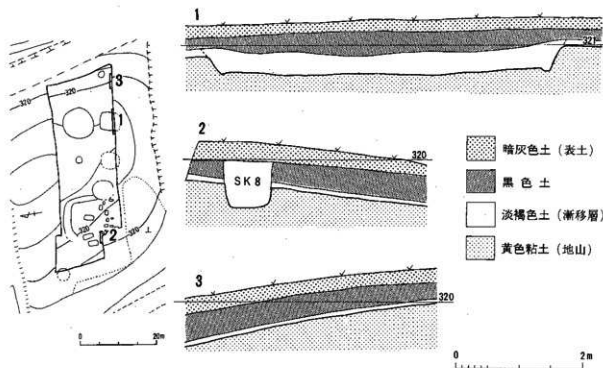


図3 土層模式図 1:60

調査地の測量については、平面図40分の1を作成し、必要に応じて遺構や遺物の実測を行った。大倉崎遺跡の調査は晩秋にかかってしまい、不順な天候、北風による落ち葉に悩まされ、写真撮影や測量には難渋した。

## (2) 調査区の設定 (図1)

**墓地移転用地** 設定は道路中心枕No.41+20からNo.40+60を見通して、そのラインを基準に5m方眼を設定し、西から東へ1、2、3～、南から北へA、B、C、Dと地区を決めた(図2)。

**道路用地** 同じく中心枕No.42+20とNo.42のラインを基準に5m方眼を組み、東から西へL、M、N、Oとし、南から北へ1、2～と設定した。

両調査地の基準レベルは、大関橋の西もとにあるBM 318.34mを使用した。

## (3) 層序 (図3)

大倉崎遺跡の基本的な層序は、上から暗灰色土(表土)、黒色土、淡褐色土(漸移層)、黄色粘土(地山)となる。暗灰色土は腐蝕土および耕作土であり、厚さは20～30cm。黒色土は丘頂部で厚さ20cm、斜面では下方ほど厚く20～40cmである。黄色粘土はSK17の壁面でみると厚さ約70cmをはかり、深くなるほど黄色に褐色が強くなる。黄色粘土の下はSK17壁面でみると砂礫層となっている。

遺構の埋土は黒色土となっているが、縄文時代の住居址では下層が淡褐色土である。

最終的な遺構検出面は黄色粘土面だが遺構の切り込み面は、中・近世のものは表土直下であり、縄文時代のものは土器の出土状態などから淡褐色土と黒色土の間よりやや上であろうと考えるが、肉眼の断面観察では確認できなかった。

## 2 調査経過

今回の調査は1989(平成元)年9月26日から11月17日までが墓地移転用地(D地点)、道路用地(E地点)については同11月13日から11月21日まで実施した。

調査は西端の墓地に隣接するところから開始した。黒色土層が厚く、縄文前期の土器が予想外に早く出土しはじめ、しかも数量的にも大変多かったため黒色土の掘り下げに多く時間をついやした。

2日目の9月27日には五輪塔が重ねて埋められているのを検出した(SK1)。

10月6日ジョレンかけによって黒色土層下に遺構が検出され始めた(方形1m前後の大きさのもの数カ所)。中から宝篋印塔が見つかる。

A5区において住居の貼床らしき固く踏みかためられた2㎡位の大きさの場所が検出され当初J2号住居址と命名しておいたが、踏み固められた道かも知れないという観察もあって、はっきり貼床だと特定できなかった。住居址ということも確認できず、最終的には住居址ではないと結論した。

調査地の中央部が小高くなってゆるやかな丘状を呈しているが、その中央から東部分の落ち込みについて、幅50cmで東西・南北の十文字に試験掘りをした結果、真ん中の最も深いところで90cm、周りで15cmと鍋底状をした大きな遺構があることがわかった(J3号住居址)。この住居址から検出した土器類について例外なく表面がボロボロと欠け落ちるようなろい状態を示した。図19～34の有孔浅鉢形土器も非常に表面がボロボロくずれ薄くなって復元作業には時間がかかった。3号住居址の北隣2カ所から土器がまとまって出土したので、SK20とSK21の土壇として処理した。

3号住居址のすぐ南隣からは5軒目の縄文時代の住居址が確認された。6号住居址の北側地山床面から10cm位上面より黒曜石の破片が多量に検出された。これはかなりの範囲で認められ場所によって敷きつめたような感じのところもあった。非常に細かい網をつかって土と分離しようとしたが、ほとんど流失してしまった。

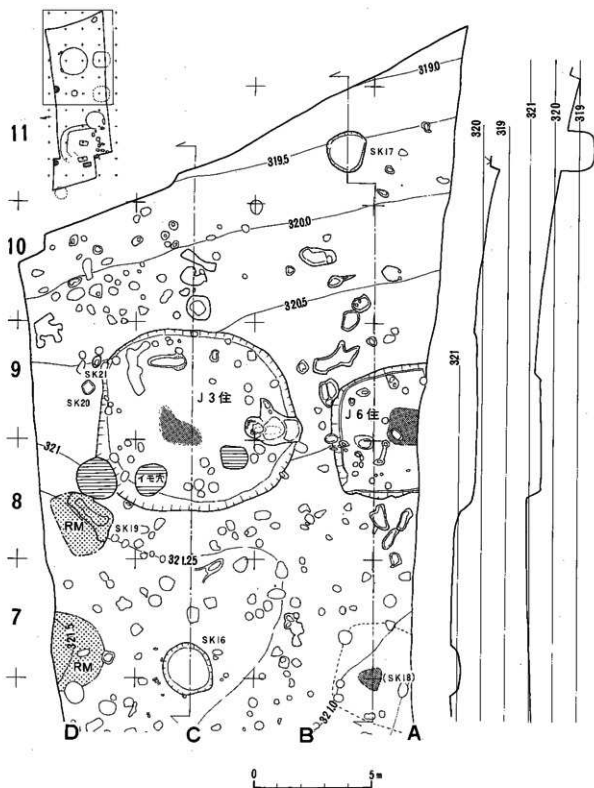


図4 D地点(OZI)調査地実測図(Ⅰ) 1:160

東端のSK17は、黒色土中に土器片のまとまりが検出され、その下数cmのところには炭を含む黒色土が直径50cm位の範囲であり、さらに3～4cm下層には12cmの厚さで突き味のような固い土層が確認された。なお掘り込んでいくと墓地移転用地内では最も大きな土壇となった。

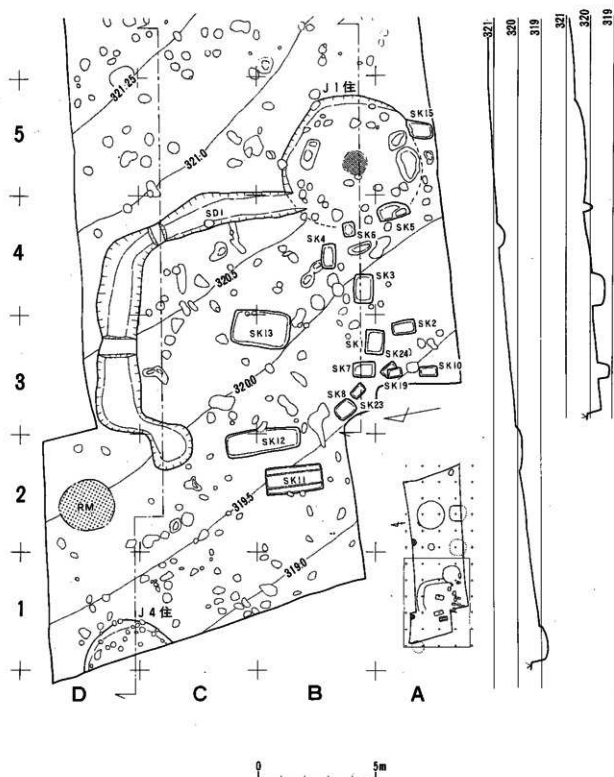


図5 D地点(OZI)調査地実測図(2) 1:160

11月6日には1～3区までの平面図とレベル測量を終る。同8日に3・4区の平面図とレベル測量を終了した。同10日には5～7区の平面図とレベル測量を終了。17日8～11区の平面図・レベル測量を完了。

道路用地部分については11月13日からジョレンがけ等を開始した。またまった土器片が2ヵ所から出土した以外は、遺物類の散在的出土があったのみである。11月21日平面図とレベル測量を完了して、現地作

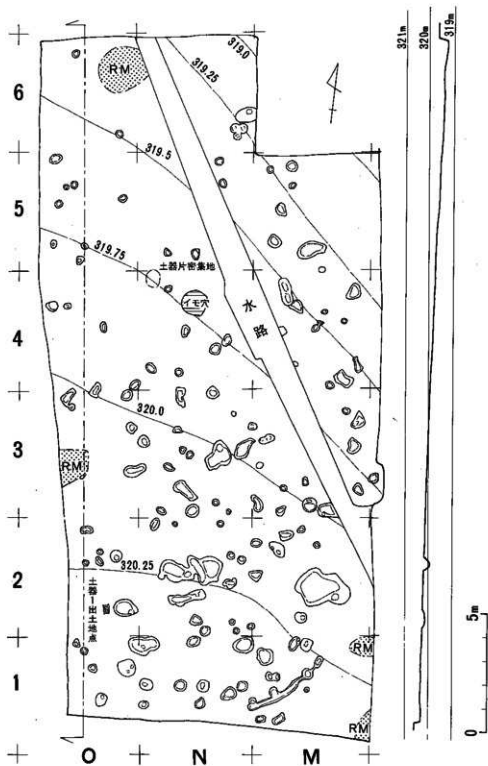


図6 E地点(OZII)調査地実測図 1:160

業を全部終了した。

なお、調査期間中に、調査の進捗や出土遺物の紹介、作業員の状況等を地元に応援する目的で「かわら版大倉崎」を3回発行し、上野・大倉崎地区を中心に配布した。配布にあたっては両区長さんおよび区の皆様のご協力を得た。

## 第2章 縄文時代

### 1 遺構

縄文時代の遺構はD地点（OZ I）でのみ認められ、竪穴住居址5軒と土坑がある。

#### A 竪穴住居址

##### (1) J1号住居址（図7・8）

J1号住居址はA・B-4・5地区にあり、南西にゆるやかに傾斜する斜面に構築されている。

直径約6mの円形プランの住居址と考えられるが、斜面に造られているため、掘り込みの肩は高位である東北半分でしか確認していない。高位の肩からの深さは約40cmであるが壁は垂直に落ち込まずゆるやかに傾斜する。

柱穴は壁肩部のものもあわせて36ヵ所確認されているが、今、その深さをみるとP12・18・30~32が10

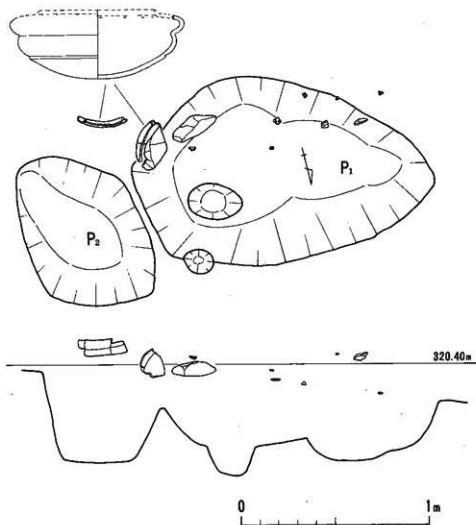


図7 J1号住居址 P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub> 1:20

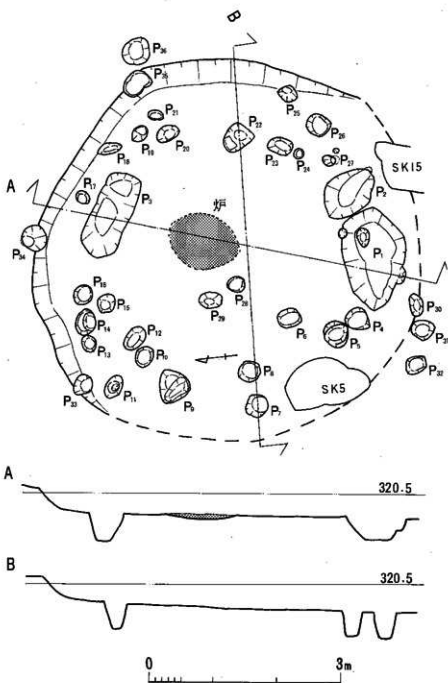


図8 J1号住居址 1:60

cmと浅く、深いものとしてP4・5・7・8・10・16・20・22・27が約40cmをはかり主柱穴と考えられる。壁層部のP34・35・25は64~80cmと深い。他は深さ約20cm前後である。補助的な柱か。

P1・P2・P3は土壇状の大きな穴で、P1・P2の上面からは有孔浅鉢形土器が約2分の1個体分出土している(図7)。しかしそれ以外はほとんど遺物はなく、今のところ何の穴かわからない。牟礼村の丸山遺跡2号・17号土壇では同様の有孔浅鉢形土器が完形で出土しており、土壇墓としての性格が強く想定できるが、当例は、出土位置が上面でありまた土器も完形ではない。貯蔵穴であろうか。

中央には焼土が堆積した所があり炉と考えられる。

埋土は、上層として黒色土がレンズ状に中央で約15cmの厚さであり、下層は地山とよく似たやや灰色が



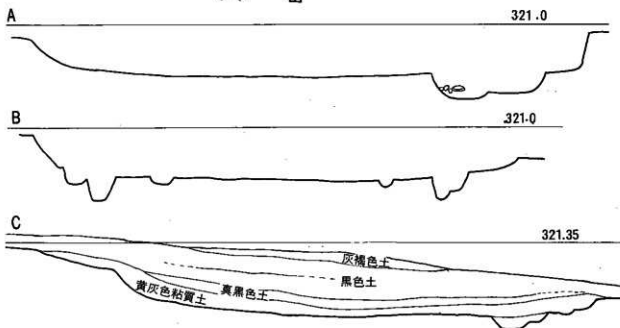
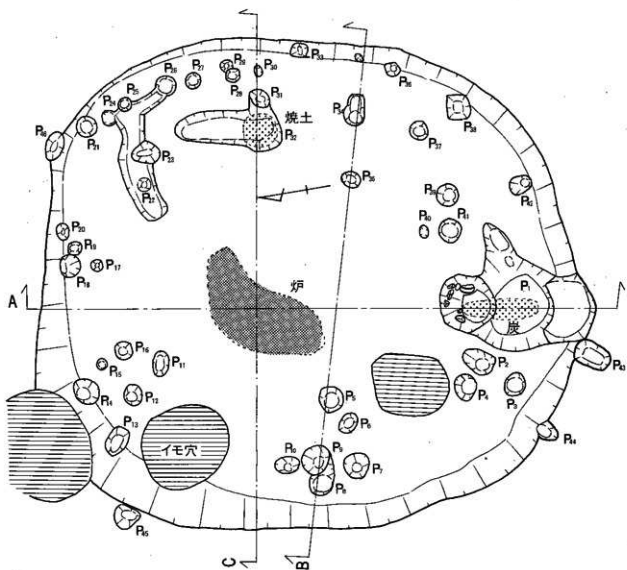


图9 J 3号住居址 1:60

かった黄褐色土である。なお、上層の黒色土の途中に踏み固められたようなかたい所があったが、住居址を埋め戻した後に踏みかためたのであろうか。

遺物の出土状態は、上層の黒色土中に集中しており、下層には小片が散在的にある程度である。上層でも一個体分がまとまっているのではなく多数の個体が小破片となって散在的に出土している。この状態は住居址以外の所と変わりがなく、遺物量としてはむしろ調査地西部の斜面の方が密度が高かった。

### (2) J 3号住居址 (図9・10)

J 3号住居址はB-D-8・9地区にあり、東に傾斜する斜面に構築されている。

南北8.3m、東西7.7mの南北にやや長い楕円形プランの住居址で、これまでの大倉崎遺跡で確認されたものでは最大である。ちなみに床面積は南北7.5m×東西7mで計算すると約50㎡となり、畳約30畳分の広さとなる。

壁面はゆるやかに傾斜し、その深さは高位の西側で約70cmをはかり、低位の東側で20cmをはかる。

柱穴は外周にかかるものを含めて46ヵ所あり、西側ではP 2~4、5~10、11~16、17~20と3~5個ずつのまとまりをもってある。東側ではまとまりは顕著ではないが、あえて分けるならば、P 21~26、27~33、34~38、39~42に分けられ、西側と合わせて8群に分けられる。これらの群の中でも柱穴の深さに差があり、平均的には20cm前後だが群中に1つ以上は30cmをこえるものがあり、それを主柱穴とすれば主柱穴はP 2、P 9、P 12、P 19、P 23、P 32、P 34、P 41となる。なお、柱穴がこのように群としてあるのは建て替えではなく主柱穴の補助として用いられたと考えられる。肩部に接するP 43~46はいずれも深さ10~15cmと浅い。

住居址南端の壁に接して三段に深くなる土壇状のP 1は、埋め土の状態から1つのものと判断した。中段下層から下段にかけて炭の多量に混じった層が認められ、下段ではその下から有孔浅鉢形土器の4分の1周分が伏せた状態であるほかに栗石が6個同じレベルであった(図10)。性格としては位置的には貯蔵穴と考えられるが、当遺跡で最大の住居址であることや炭を多量に含んだ層の存在、有孔浅鉢形土器や栗石の出土状態を考えれば、何か特殊な土壇かもしれない。

中心部分に広く認められた焼土は炉と考えられる。

住居址の埋土は基本的には2層で、上層が黒色土、下層が地山とよく似た黄灰色粘質土である。なお、J 1号住居址と同様に黒色土の中間にややかたい部分があったが、1号住居址ほど踏みつけられたようではない。

遺物の出土状態は、1号住居址と同じく床面ではなく、下層にもとばしい。黒色土中に小破片が住居址内一面に散在している。出土量は南半分がやや多めである。

### (3) J 4号住居址 (図11)

J 4号住居址は調査地西端のC・D-1地区にあり、南西へゆるやかに傾斜する斜面に構築されている。

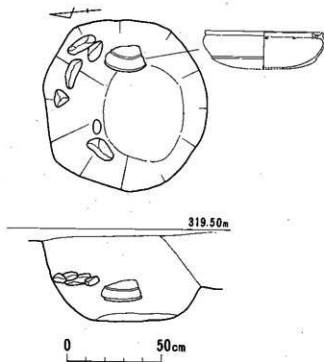


図10 J 3号住居址P下段 1:20

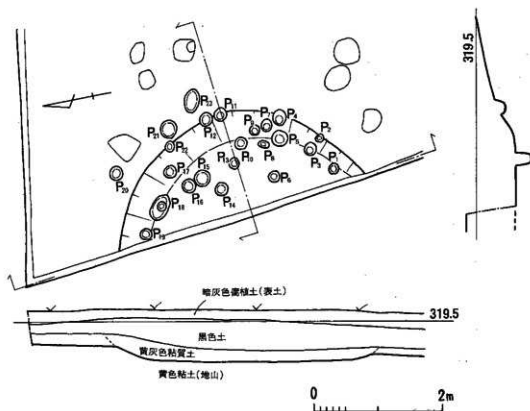


図11 J 4号住居址 1:60

東側半分を確認した。

推定直径約4mの円形プランの住居址と推定され、これまでの大倉崎遺跡で確認された住居址では最小のものである。

壁面はJ1・J3号住居址同様ゆるやかに傾斜しながら落ち込んでおり、肩からの深さは高位の東側で35cm、北側で20cm、南側で10cmである。

柱穴は外周のものを含めて23個確認されているが、P3・P5・P10・P15・P18が30~40cmと深いものの、他は10~20cmと浅い。深いものを主柱穴とすればその間隔は30~60cmとせまい。

埋土はJ1・J3号住居址と同様に基本的には2層で、上層は黒色土、下層は地山によく似た黄灰色粘質土である。ただし黒色土は住居址の内と外で差が認められなかった。

遺物の出土状態は上述したように住居址の内と外で黒色土に差が認められなかったことと同じく、とりたてて住居址内に多量にあったわけではなく、住居址外と同様、小片が散在していた。下層の黄灰色粘質土からの遺物の出土は数片のみである。

炉と考えられる所は認められていない。

#### (4) J5号住居址(図4)

J5号住居址は当初SK18と命名したA・B-6・7地区の焼土を、後に住居址の炉と解釈したものである。堅穴の掘り込みや主柱穴も明確でなく、住居址でない可能性も高い。

焼土は他の住居址とよく似た状態で、焼土と炭が約5~7cmの厚さで認められ、下は焼床となっている。

(5) J 6号住居址

J 6号住居址は調査地東部のA・B—8・9地区にあり、丘頂部から東に傾斜し始める所に構築されている。他の住居址がいずれも斜面にあるのに対し、J 6号住居址のみは丘頂近くにある。北半分を確認している。

隅丸方形プランで東西約5.4m、南北3.8m以上をはかる。隅丸方形プランの住居址は、これまでの大倉崎遺跡の調査でも初めてである。

壁はJ 1・3・4号住居址に比べてやや垂直に近いが、傾斜をもって落ち込んでおり、下端に幅10~15cm、深さ5~10cmの周溝をもつ。周溝をもつことも他の住居址にはみられない特色である。深さは30~40cm。

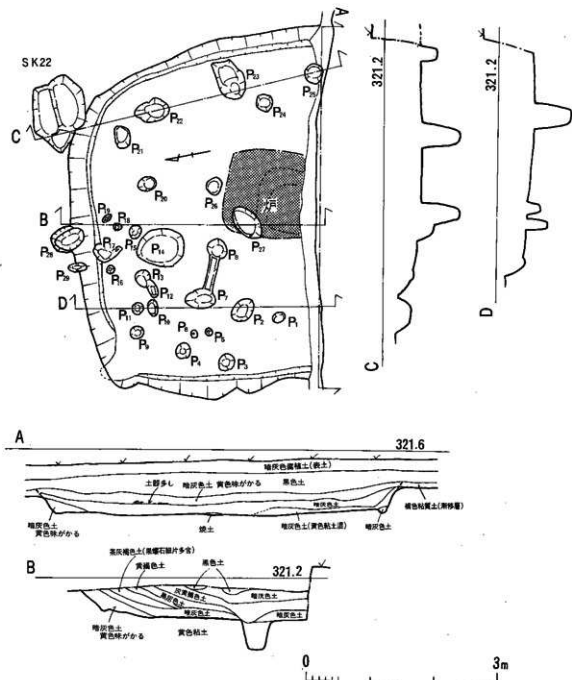


図12 J 6号住居址 1:60



埋土は大きく3層に分かれ、上層は深さ約70cmまでの凸レンズ状に堆積している層で、かたくしまっている。中層は深さ約1mまでの層で暗灰色土を基本としておりやわらかい。下層はボロボロの土で水分を多く含む下面には当地方で「ソブ」と呼んでいる鉄分が一面に認められた。

出土遺物は土壇上面から格子目文をもつ第4類の土器(図22-1)が、半径約50cm内にかたまって出土している他は、土壇内から土器小片が少量と、5~15cm角の自然石がコンテナ2箱ほど出土している。

当土壇の性格としては滞水層を思わせる砂礫層まで掘り込んでいることや、下面にソブが一面に認められたことから井戸とする考え方もある。

## (2) SK19・SK20・SK21・SK22(図4)

SK19はロームマウンドに重複して掘られた2m×1mの長方形プランの土壇で、深さは約50cm。土器片が少量出土している。

SK20・21はJ3号住居址北方にある小土壇で、SK20からは第4類の土器(図22-7)がまとまって出土している。

SK22はJ6号住居址北東に接してある土壇で、土器片が少量出土している。

注1 高橋桂・金井正三・太田文雄・他『牛乳村丸山遺跡発掘調査報告書』上水内郡牟礼村教育委員会 1978

## 2 遺物

### A 土器

#### (1) 土器の分類(図14~17)

今年度調査したD・E地点出土縄文土器の分類については、1970(昭和45)年のA地点および1973(昭和48)年のB地点の調査で出土した土器と基本的に変わらないので、1976年報告の金井正三氏の10分類案を踏襲し、新たに11類を加えた。また、今回掲載した分類図(図14~17)についても金井氏の原因を借用させていただいた。

以下、金井氏の分類を76年報告から抜粋引用することとするが、後に述べるように今回の調査で出土していない類(6類)や、今回出土品の観察で新知見が得られた類もある。また、前述したように11類は今回新たに加えたものである。

#### (a) 第1類土器

縄文のみの土器を本類とした。右傾及び左傾の縄文を交互に横位回転した羽状縄文が大部分で、結束をもつものはほとんどない。斜縄文のみのものも若干あるが、相対的に少量である。一般的にみて縄文の撚りは良好である。

器形は深鉢形で、口縁がほぼ外反する傾向をとるが、底部から口縁部にいたる間にはほとんど屈曲がない。底は平底で、若干上底気味のものもある。口縁部は小波状を呈し、口唇部には刻目を施しているものも少量ながらある。全体的に大形で、中には口径40~50cmにおよぶものもある。

#### (b) 第2類土器

器面全体に撚りのきわめて良好な縄文を施している。縄文施文においては第1類土器と同じであるが、相違点は器上半部に半載竹管による曲線及び弧線が描かれていることである。半載竹管の施文手法は、まず上下を区画し、しかる後に区画し、その区画内に弧線を施している。稀に縦に連弧文を施しているものもある。器形は深鉢形をとり、平縁あるいは小波状を呈する。

(c) 第3類土器

斜縄文及び半載竹管による平行沈線文をもつ土器を本類とした。縄文を器面全体に施し、半載竹管による平行沈線文はきわめて単純に横走りさせているが、波頂部では渦文となっている。器形はキャリバー状を呈する深鉢形土器である。胴部はほぼ垂直に立ち上り、口縁部で大きく外反し、波状を呈している。

(d) 第4類土器

口縁部から頸部にかけて、半載竹管による平行沈線で格子目文を施していることを特徴とする土器である。この種の土器の施文のテクニックは、第一段階で口縁部文様帯を構成し、第二段階で右下りに平行沈線文、第三段階で左下りに平行沈線文を施して格子目文を作る。第四段階で同一の原体を用い2条の平行沈線文を横走りさせて上下の区画をする。第五段階で区画線上に右開きの爪形文を施し、第六段階で格子目文の交点に円形竹管文を挿入する。中には、更に篋状工具で刻目を付加するものもある。胴部以下には羽状縄文、斜縄文が施文される。若干であるが、縄文が口縁部におよぶものもある。器形は、口縁部が「く」字状に外反し、頸部以下はほとんど屈曲なく底部に至っている深鉢形土器である。

(e) 第5類土器

器体上半部に半載竹管による集合条線を垂下させ、口唇部直下に水平に同一原体を横走りさせている。器形は、口縁部が強く外反する深鉢形土器。口唇部は円棒で刻目が施され鋸歯状を呈する。

(f) 第6類土器

半載竹管による平行沈線文のみをもつ土器である。きわめて細片であり、かつ出土数も少量であるので詳細は不明である。

(g) 第7類土器

篋状工具で文様を構成している浅鉢形土器を本類とした。文様は篋状工具に爪形文を施しているものとしからざるものの2種がある。器形の全体は窮知でき得ないが、口縁部が強く内湾するものと思われる。

(h) 第8類土器

無文の浅鉢形土器である。器形は胴部が2乃至3段に張り、最上段が最大径である。口縁部はほぼ水平で、口唇部は直立する。口唇部直下には焼成前に穿孔された孔が10から20ヶある。最上段の張りは「く」字状に折れるものと弧線を描いて湾曲するものがある。例外として罍のついた釜状を呈するものが1例ある。器面は比較的滑らかであるが、薄く剝離するものも認められることからある種の化粧土を施しているのではないと思われる。底部は丸底をとるものが多いが、平底のものもある。

(i) 第9類土器

浮線文土器を本類とした。出土量はきわめて少である。

(j) 第10類土器

摺糸文土器である。いずれも細片であって出土量はきわめて少量である。 (以上76年報告より)

(k) 第11類土器

半載竹管による連続爪形文が施される土器を本類とした。出土量は少ない。

注1 高橋桂・中島庄一・金井正三「北信濃大会館遺跡発掘調査報告」『信濃』28-4 1976 337-339ページ

(2) J1号住居址出土土器 (図18)

第1類土器 (1-3) 1は右傾の斜縄文で、中央部は縄文の山が摩滅しており、焼成やや悪い。黄茶色の胎土に比較的大粒の石英等が認められる。2は斜縄文を施文してある口縁部。赤茶色を呈し胎土に不純物多い。焼成も悪く割れやすい。3は縄文の山がだいぶ摩滅している。黒茶褐色を呈し、不純物が少ないものの焼成が不良。

**第2類土器** (4-8・12) 4は焼成が良く、半截竹管による弧線もはっきりわかる。黄茶褐色を呈す胎土も良好である。5は暗茶褐色で不純物がかなり認められる。6は赤茶褐色を呈し不純物多く焼成も悪い。7は黒茶色の胎土にはかなりの不純物を含む胎土となっている。焼成悪い。8は暗茶褐色で胎土に不純物目立つ。焼成悪く、手の中で粉化しながらくずれる。12は茶褐色で胎土はあまり精選されていない。

**第4類土器** (10) 10の胎土は不純物が多く焼成も悪い。色調は茶褐色を呈す口縁部で、口唇部へラ仕上げとなっている。

**第5類土器** (9) 9は赤茶褐色を呈す口縁部である。胎土は精選されて焼成も良い。表面はよく研磨されている。

**第8類土器** (16・17) 16は住居址から20点、A5区から16点、SK16から1点——出土したものを復元した。口唇部と孔間隔は想定して復元したことをお断りする。焼成は概して良好で、部分によってもろい破片もあった。内外面ともにへらで入念に研磨されており暗茶褐色を呈す。器高14cm、肩部の最大径38cm。17は底部の一部で、器肌をよく研磨してある。色は灰茶褐色を呈し胎土は精選されている。

### (3) J3号住居址出土土器 (図19)

**第1類土器** (1-5) 1は口縁部で暗茶褐色を呈し、表面は比較的研磨されている。胎土には不純物認められる。2は表裏面ともに不純物が浮き出しているが、焼成はそう悪くない。3は黄茶褐色の胎土で不純物は少ない。焼成悪くポロポロくずれる。4は表裏面ともにヒビ割れが走りくずれやすい。胎土は精選されている。5は赤茶褐色を呈し胎土にはかなりの不純物を含む。表裏面ともにポロポロとくずれる。

**第2類土器** (7・8・9) 7は不純物の露出が著しく、かろうじて施文がわかる程の口縁部。茶褐色を呈す。8は黄茶褐色を呈す。7同様に不純物が露出して表裏ともポロポロとくずれる。9は黒茶褐色を呈し、3号から出土した土器の中で最も焼成が良い。胎土は精選されている。

**第3類土器** (19-22) 19は赤茶褐色で胎土中に不純物多く、石英の粒子も散見される。表裏ともに焼成がきわめて悪く、粉状になって指につく。20は黒茶褐色を呈し、胎土中の不純物が表裏面ともに浮き出ている。厚みのある口唇部はへら仕上げ。21は茶褐色、表裏とも細かにヒビ割れが目立つ。胎土は不純物が多い。22は茶褐色を呈し、表裏面が荒れ焼成が悪い。不純物の浮きも目立ちポロポロとはがれる。

**第4類土器** (23-32) 24は黄茶褐色の色調をもち、表裏ともに不安定である。胎土中の不純物も多い。25は茶褐色を呈し、第4類の中では表面がよく研磨されている。不純物が多く表面のヒビ割れとはげ落ちが目立つ。口唇部は円棒で刻目を施し鋸歯状を呈す。26は黒茶褐色を呈す表面と茶褐色の裏面ともに比較的よく研磨されている。胎土中の不純物も多い。27は薄茶褐色、胎土には不純物多い。28は淡茶褐色の胎土で不純物が表裏面ともに浮いている。29は口唇部で指による押圧が表裏面から施され、小波状を呈す。茶褐色の胎土中には不純物が少なくない。表面のヒビ割れも目立つ。30は赤茶褐色を呈す。口唇部はヒビ割れてはがれ落ちているため施文が不明。焼成悪く表裏とも細かいヒビが走る。32は口唇部に突起した飾りが認められるが破損が激しいため詳細不明。明茶褐色を呈し、やはり焼成悪い。

**第8類土器** (33・34) 33は赤茶褐色を呈し、肩部が頸への発展途上を思わせる。孔間は不明。肩部等よく表面が研磨されているが焼成は悪い。34は口唇部が二叉に分かれ、内唇に近い所に孔が穿たれている。孔間隔が5cm、器高8cmある。赤茶褐色を呈し表裏面ともヒビ割れからはがれ落ち器壁がうすくなっている。

### (4) J4号住居址出土土器 (図20)

**第1類土器** (1・2) 1・2とも平口縁部、2の裏面はよく研磨されている。色調は茶褐色を呈す。1は黒茶褐色を呈す。

**第3類土器** (3) 3の口縁部が「く」字形で、色調は灰黒色を呈す。器裏面はよく研磨され、胎土に



は大粒の不純物もみられるが焼成良好である。

(5) J6号住居址出土土器(図20・21)

第1類土器(4~11) 6は灰白色を呈す。羽状細文を施したゆるく外反する口縁部である。焼成良好で胎土には石英粒なども混じる。内面はよく研磨されている。9は波状を呈す口縁部である。焼成は悪く色調は黄赤色。11は黒茶色を呈す口縁部である。口唇は円棒で刻目を入れ鋸歯状となっている。

第2類土器(12) 12は黄茶色を呈す。胎土中には不純物多く焼成も悪い。表裏面ともろい。

第4類土器(16・18~25) 18は器裏面がよく研磨されているが焼成は悪い。色調は薄茶色の口縁部である。胎土はあまり精選されていない。22は濃茶褐色を呈す口縁部である。胎土中の不純物が少ないものの焼成が悪く、器表面のヒビ割れが目立つ。23は赤茶褐色の口縁部である。器表面のヒビ割れがポロポロくずれ、焼成悪い。表面の半截竹管による平行沈線文や爪形文などの保存は良好、平口縁を呈し、ゆるやかに外反する。25は格子目の下部に施文された爪形2連続文と縄文の接する頸部である。明茶色を呈す。縄文部の磨滅が著しく焼成やや悪い。

第5類土器(13~15・17) 13は濃茶色の口縁部である。口唇部が鋸歯状を呈しその下部には横に平行沈線が走る。さらに垂直方向に半截竹管による沈線文が施文されている。胎土中の不純物が表裏ともに浮き上がり、焼成も悪い。14は頸部で茶褐色を示す。表裏ともよく研磨されており、焼成が良好。ゆるやかな外反をみせる。15は口唇部の磨滅が激しく施文状況は不明。器表裏の口唇部にちょっとした突起が認められる。色調は明茶褐色を呈す。焼成悪い。17はゆるやかな外反を呈す。色調は明茶褐色で焼成悪く器表裏面には不純物の露出が多く認められる。

各地区出土底部(図21・26~35) なお、26~35は地区出土の底部を示す。35は暗茶褐色を呈す。最下部には半截竹管による沈線文を、くし描き文風に施しその上部に斜縄文、さらに沈線文を施しており、3類の底部と思われる。

第9類土器(図21~36・38) 38の口唇部には平行した浮線が施され、その間には直径5mm前後の孔が5~7mm間隔で穿たれてある。器面の表裏ともあれている。焼成は口縁部・底部ともに悪い。肩部は無文である。底部は台付で、台から10cm前後の所に浮線文を認め、その間には斜縄文が施文されている。38は口唇部が内屈する。口唇部には浮線文を施す浅鉢形土器。色調は黒茶色、器表裏ともにもろい。

第8類土器(図21~37) 37は無文の浅鉢形土器の底部である。底部は丸い形で出土している。胎土の色調は濃茶褐色を呈し、器表裏面ともにもろい、ポロポロとはかれる。

(6) 土壇出土土器(図22)

1はSK17出土土器であり、第4類土器に属する大形の深鉢で口縁部径40cm高さ約45cm位であろうと推測される。作りは、内外部とも丁寧に指でなでて表面を整え、外部には上部に半截竹管文をほどこしそこから下は比較的太い縄文をつけて仕上げられている。まず口縁部を見るに、端部は棒状の用具を押し当てたと思われる波状形を作り、その下に半截竹管による文様がある。それは口縁部のすぐ下に二本、7.8cm下に三本の平行沈線を引き、半截竹管の断面を小刻みに刻きさし滑らすように移動してつけたと思われる爪形文をつけている。上部二本と下部三本で区切られた間は、半截竹管による平行沈線を最初に右上から左下へ書き、後に左上から右下に書いて格子目文をつけている。平行沈線の間隔は一定ではない。また線と線の交点には丸い竹棒の断面を押し当てた文様がつけられているが、規則性はない。竹管文より下は左から右下りの縄文がつけられている。胎土には不純物が混じるが焼成は良い方で器の色は内外部とも赤褐色を呈しており外部の下方は黒褐色を呈している。

2~6はSK18出土のものであり、2は第1類、3・5・6は第4類、4は第5類に属する。焼成はと

もに良好である。2は赤褐色を呈し外部には細かい羽織文がつけられている。また煮たきによると思われる焦げつきが見られる。3は6と同個体かと思受けられるが竹管文部分は1と同様の手法を用いているが、上下二本の平行沈線に半截竹管断面による右開きの爪形文を押捺した文様によって区画され、その間に先ず右下りの線を引きその後左下りの線を引きさらに格子目文の交点に竹管断面を押しあてている。口縁部は平縁である。内部表面は丁寧になでて作っており、焼成は良く焼きしまっている。色は赤褐色を呈している。5の文様はほとんど同一技法を用いているが、横方向に走る平行沈線上に押捺されている文様は2本の細い棒状用具での突刺文様であるところが前者と異なる点である。つくり、焼成とも差異なく、色もほとんど同じで良好である。4は第5類に属する土器と思われる土器片であるが、口縁部付近のものとと思われる。半截竹管で上下横の沈線文で区画された間に同一竹管での集合条線を垂下させ文様を画いている。胎土もほとんど同一と思われるが焼成条件が多少異なるのか色は黄褐色を呈している。7は、S K 20よりの出土土器片であるが接合したタテの線より右と左の部分で表面の荒れ方に差異があり、右部分より左部分に表面の荒れが顕著に現われている。外側縁部にわずかに焦げつき様の炭化部分が見られることから推察するに、割れてからも煮焼き等に使用された結果ではなからうか。8・9・10についても第4類に属する土器片であり、つくり、胎土、色、文様に差異がないが、10については胎土が他と比べて不純物がかかなり多く竹管文も他と比して彫りが浅く平面的に見えることから考察すると、ある種の模倣製品の様に思われるのであるが、技術的に未熟な作り手によるものではなからうか。

#### (7) グリット出土土器 (図23～図31)

ここで述べるグリット出土土器は、遺構外出土土器及び発掘調査の段階に於いて遺構検出以前に一括して取り上げたものであり、その数は極めて多量であるため、類別に分類し、その一部についてのみここに記述することとする。

##### (a) 第1類土器 (1～37)

本類は縄文のみの土器であり、右傾及び左傾の縄文が縦方向に交互に文をなしている羽状縄文が大部分である。深鉢形の土器が多いと思われる。付されている縄文は、大形の土器には太めの縄を用い、小形の土器には細目の縄を用いて施文している。縄文の燃りは良い。口縁部分は平口縁のもの、棒状用具を押し当てた小波状を呈する口縁のもの、大きく波を打つ波状口縁のものなどが見うけられる。口唇部がわずかに内反するもの外反するものがあるが大きく反るものはない。胴部はほぼ直直で、脹みや折れのないものが多いと思われる。

1は平口縁の部分と、口唇部に指又は棒状用具を用いて刻目を施し小波状を呈す部分とが見られる。縄文は羽状文であるが、平口縁部分の斜縄文は左傾であり、小波状部分は右傾につけられており、その接する部分に於いて左右の傾きが正反する羽状文を形成しているが、規則制があるかは定かでない。作りは、表面をナデで作られている。胎土は砂を混ぜているが、混入されている砂は比較的大きく砂塵は取り除かれている。焼成は良く黄褐色及び赤褐色を呈している。

2は細い縄による羽状文であるが、施文した単位が細かく横方向の斜縄文が左右入れかわっているのが見られる。外側施文部分に、焦げつきと思われる炭化物が付着している。つくりはやや薄く内側は表面にナデが見られ平口縁であり、胎土は細かい砂が混入されており焼成は良好。色は黄赤褐色を呈す。

3は赤褐色を呈し、胎土は白い砂が混入されている。焼成は良好で、つくりは内外ともナデで作られている。4は黄褐色を呈し平口縁胎土にやや不純物が混じり、焼成が悪いが、つくりには差異はない。

6は、黒っぽい黄褐色を呈し外側施文部分に炭化物が付着し、内側は表面荒れが目立つが使用のためのものと思われる。口唇部は平らでなく不規則な小波状形である。胎土には砂が混入されている。9は、口径約15cm位の小形の深鉢で厚さ約4mm、外側は黒褐色を呈し平口縁。胎土は砂混じりであるが焼成良く、

つくりは表面ナデている。口唇部外側に少し炭化物が付着している。口縁やや外反する。11は、平口縁と棒状用具で刻目を施した小波状の口唇部とで作られ、外側口唇部施文部分に炭化物が付着する。胎土にはやや多目の砂が混入されているが、焼成は良い。16も9と同様の口唇部で基本的には平口縁であるが、口唇部に棒状用具で刻まれた小波状をなす部分が見うけられる。19は、口唇部断面が角張っている。22は、口径15cm内外の小形深鉢の口縁部分と思われるが一度外反し口唇部付近で薄くなりながら垂直の角度に近づいていると思われる。黒褐色を呈するが、焼成は良好である。24も、やや大形の土器であるが、口唇部分が薄くなっている点は同様であるが、口縁部が外反するに止まっている。表面のナデは少なく外側施文部分や内側表面に混入の砂がのぞいている。27は口縁部が外反する波状口縁深鉢土器と思われるが、外側口縁部分に炭化物が付着している。黄褐色を呈し、やや細目の縄文が施文されている。28も同様に口縁部が大きく波うつ波状口縁であることがうかがわれるが、作りが薄くやや小形の深鉢土器の口縁部であろう。胎土に砂が混じるが焼成は良い。29は、羽状文が細目の縄を用いて細かく施文されている。外側は黄褐色を呈し、内側はやや赤味を帯びる。外側にかすかに炭化物が付着する。胎土に砂塵が混入する。焼成はあまり良くない。30は、口唇部が角張っている。外側に炭化物が付着する。31は間隔が細かい羽縄文が施されているが、作りは内外とも整形が雑であり、ヒモ作りと思われる凹凸がとれていないが焼成は良い。外側施文部に炭化物が付着している。32は、波状口縁であるが、波頂部分をやや下げて水平に削り取ってその口唇部にへら状用具を用いて小波状の刻目を入れている。施文に使用されている縄は一種類ではなく、一度施文した後に、撚りの良いやや細い縄で再度施文している。土で目づまりし、きれいに施文出来ないため縄を替えたのであろうか。作りが薄くやや小形の深鉢と思われる。胎土は白っぽい小砂が混ぜられている。色は焼成による黒色を呈している。35は、32とほぼ同じ口縁にデザインされているが、土器は大形のものである。施文に使用されている縄もそれなりに太いものが使われ、胎土にも粒目が大きいものが混入されている。赤褐色を呈し、焼成も良い。

以上第1類土器について記述したが、注目すべき点は、いずれの土器にも口縁部外側に炭化物の付着が見うけられる点である。縄文のみで派手さはないが、土器表面をナデにより丁寧に仕上げている点や、熱効率の良いメガホン形の器状などから考えると、この1類土器は煮炊き用として作られたものであろう。

#### (b) 第2類土器 (38~80)

本類は縄文施文においては第1類土器と同じであるが器上半部に半載竹管による曲線及び弧線が描かれている。半載竹管による施文は、上下を2、3本の横の平行沈線を引いて区画し、その区画内に縦に数本の平行沈線を垂下させて区画し、その区画内に弧線を描いている。稀に連弧文や、ヒョウタン形文を施しているものもある。器形は深鉢形をとり、胴部は張りをもたせてほぼ垂直に立ち上げ、半載竹管で区画される上部をやや外反させ、口唇部分をわずかに内側にしぼり込んでいる。口縁はゆったりと波うたせた波状形か平線を呈している。

施文は先ず、器に斜縄文又は羽状文を施し、半載竹管により口縁部にそって走らせた数本の平行沈線と、外反する頸部の括れる部分に走らせた平行沈線とで上下の区画をし、数本の平行沈線を垂下させた部分と、弧線の部分とに区画している。

38は右開きの羽状文の上に半載竹管により平行沈線を2本走らせているが、最初引かれた2本の沈線の片方にダブらせて次の2本の沈線を引いて、計3本ずつの平行沈線を仕上げている。口唇部の丸みを帯びた波状口縁である。胎土は不純物が混じりやや黄色っぽい赤褐色であるが、外側より内側の方に荒れがある。39は平口縁で、口縁部に4回による5本の半載竹管による平行沈線を横に走らせ、下に引かれた平行沈線とによって区画された中に、左右2回ずつ引いた弧線によって全凸レンズ形の施文を施している。縦に引かれた垂線は、半載竹管で引かれた2本の平行沈線をダブらせず、等間隔に垂下させ描いている。胎

土に白色の軟かい砂粒が混じり赤褐色を呈している。表面は内側に剥落が目立つ。40は、波状形口縁で、口唇部に縄文を施している。口縁部には5度にわたって6本の半載竹管を横に走らせ下方には2度引き3本の平行沈線を引き、上下区画された中には、5度に引かれた10本の垂線と、2度引きにより描かれた弧線によって全凸レンズ文様が描かれている。胎土には軟かい白砂粒が含み、やや不純物も混入する。焼成は良いが、39同様に外部施文部より内面表面に剥落はないが荒れが目立つ。41は、波状口縁で口唇部に施文は見られない。半載竹管による施文技法は同一である。赤褐色を呈し、焼成は良好である。43は、口唇部に細かく刻目を入れた小波状文が見られ、口縁部には1度引きによる2本の平行沈線を走らせ、2度引きによる弧線をもって全凸レンズ文様が描かれている。内側表面に作りの時の削り痕が見られる。44は口縁部に1度引きによる2本の平行沈線を走らせ、膨らみの大きい全凸レンズ形文様を描いている。内側には削り痕が見られる。46は平口縁であるが左側にわずかに低く段がついている。64と同一個体であり、細い半載竹管を用いて描かれた弧線は、右側に4回、その後左側に数回の平行沈線を引いて凸レンズ形を描いているが、技法は洗練されていない。黄褐色を呈し、焼成もあまり良くない。内面はナデている。49は片凸レンズ形弧線が見える。羽状縄文の上から力強く半載竹管により平行沈線を引いている。縄文部にわずかに炭化物が付着している。口縁はゆるやかな波状形を呈する。50は弧線に特徴があり、上下を区画する平行沈線は半載竹管で引いているが、弧線は竹管を使用して描かれたものと思われるが、平坦な平行線で描かれている。やや小形土器と思われるが、外部表面にわずかに炭化物の付着が見られる。51は、口唇部にも縄文を施し、口縁部に2度引き4本の平行沈線を走らせている。弧線は連弧文であり、中がくびれたヒョウタン形の弧線で描かれている。半載竹管により先ずヒョウタン形の上半分を左から右の順に1度引き2本の線で描き、次に下半分を左から右へ描いた後、その外側に最初に描いたヒョウタン形の外側の沈線にダブらせて弧線を垂下させて連弧文を仕上げていく。口縁はやや内湾し、さらに口唇部が縄文を押し込めた力での内側に押し込まれている。56は、半載竹管による平行沈線が丁寧に押捺されており、平行沈線内凸部分の縄文痕はすり消されている。内側表面に剝離痕があるが、つくりの過程で表面にナデつけた土の剥落したものである。焼成はよい。55・57・67は同一個体と思われるが、波状口縁を呈し、上1度、下2度引きによる半載竹管による平行沈線で区画された中に、連弧文様が描かれているが、へら状用具を用いて下書きし、その上から1本ずつの沈線を引いて文様を描いている。先ず2本の線を垂下させその外側にヒョウタンの下半分を右に2本、左に2本の弧線で描き、次に上半分を右から左の順に描いて文様を完成させている。内部は赤褐色、外部は黄赤褐色を呈している。胎土に不純物を含み、焼成やや悪い。65は、器内部表面にケズリが見られる。66は、連弧文である。胎土に砂粒が混じり、器内表面は黄褐色を呈し荒れている。外部は焼成による炭化で黒色を呈す。焼成はやや甘い。70は上下区画された幅がせまく弧線文部分が窮屈である。内側は赤褐色であり、外側は焼成による炭化色を呈している。73は文様の形が他と異なるが施文方法は同一である。75・76・77・78は上下区画された中の施文が横文様である。75の外部は黄土色、口縁部・内部は焼成炭化色を呈する。胎土は不純物が混じりよく精選されていない。76は、3本の弧線が半載竹管で描かれているが、胎土に可燃性の不純物が混じり、焼成後それが焼失したと思われるピンホール痕が多く見られる。焼成もやや甘い。77は横文様の弧線が描かれている口径の小さい鉢と推察される口縁部である。赤黒褐色を呈す。胎土に不純物が混ざるが焼成は良い。78は赤褐色を呈し、胎土に不純物が多く、焼成も甘い。79は半載竹管による平行沈線の変形文であるが、半載竹管を小刻みに滑せながら押さえて描いた連続爪形文である。80は、半載竹管を並走させて渦巻文を描いている。

### (c) 第3類土器 (81-94)

斜縄文及び半載竹管による平行沈線をもつ土器である。縄文を器面全体に施し、器上部に半載竹管による平行沈線を施しているが、波状形口縁や、角度をつけて内湾するもの、クツ先状突起をもつものなど口

縁部に多様性が認められる。

81は波状形口縁波頂部であるが、その波頂部にボタン状突出物をポイントに付けている。半載竹管による平行沈線を口縁部に2本、下方に2本横に引いて区画し、その間に渦巻文を描いている。焼成は良いが、胎土にかなり多くの砂粒が混入されている。器面にその砂粒が浮き出て荒れている。外側は黒灰色を呈し内部は黄灰褐色を呈している。82は半載竹管を4～5本ずつ横走させて上下数段に区画している。区画内に数本の平行沈線を垂下させたり×印文を半載竹管によって描いている。胎土は細かい砂粒を含み黄灰黒色を呈し焼成はやや悪い。84は、82と同一個体かと思われるが、内側表面が使用痕と思われるが、かなり荒れている。87～89は半載竹管を2～3本ずつしっかり押さえながら横走させて描いた平行沈線で、上下数段に区画されている。胎土に砂粒が混入するが、焼成は良い。87は黄褐色を呈す。88は内部が灰黒色で、外部は黄灰黒色を呈する。外部縄文凹部に炭化物が付着する。89は外部が赤褐色を呈し、内部焼成炭化色であるが、焼成は良好。小形土器である。90～95ははいわゆるキャリバー形を呈する数少ない形状をもつ深鉢の口縁部であるが、91・92・95は同一個体のもと思われる。内湾した波状口縁の波頂部に2段のボタン形突起をつけ、それを囲むように半載竹管で渦巻文を描いている。口唇部には竹べら工具で交錯させながら刻目を入れている。胎土に砂粒を混入している。焼成は良く黄褐色及び焼成炭化色を呈する。93・94は口縁部分か靴先状に突出した形状を呈する。靴先部分で93は左巻、94は右巻の渦文が半載竹管による平行沈線で描かれている。93には突出部と口縁波頂部の中間に豆形ボタン状突起をつけている。93は黄灰色、94は赤褐色を呈し、焼成は良い。

#### (d) 第4類土器 (96～121)

1～3類が器全体に先ず縄文を施し、その上に半載竹管で施文しているのに対して、本類の特徴は、胴部以下は斜縄文が施されるが、半載竹管が平行沈線が施される頸部から口縁部にかけては縄文がなく、丁寧にナデた表面に竹管文が施されていることである。又、形状も口縁部の外反が大きい。口縁は平口縁のもの(97～99・102～109)、丸棒工具で刻目した小波状を呈するもの(100・110～116)、平口縁の一部に竹節形があるもの(101)、片波状を呈するもの(117)などがある。半載竹管文は口縁部と頸部に2～3本横走させて上下の区画をし、その間に先ず左下りに平行沈線を施し、次に右下りに平行沈線を施して格子目文を作る。まれに逆から施された格子目文も存在する。次に格子目の各交点に竹管切断面を押捺している。まれに押捺の無いものや、ところどころに押捺されるものなども存在する。口縁端部および格子文部と縄文との間に横走りして区画される半載竹管文には3種類ある。半載竹管を圧接させて横走させ、竹管断面を右向き方向に刺突し爪形文を施しているものが多いが、まれに左開きの爪形文(102・121)や、平行沈線のみもの(97・98)も存在する。

97は浅い沈線文が施されている。器内面は丁寧にナデられている。黄白灰色を呈す。焼成は良い。98は不純物の多い胎土であるが、焼成は良く、白灰色を呈す。格子目交点の竹管断面の押捺はない。100は赤褐色を呈し胎土に細かい白砂粒が混入している。101は白灰褐色を呈し、器内表面はへら状工具でナデられている。104は白赤褐色を呈する。表面は丁寧にナデられ、焼成は良好である。105・106は口縁外側に炭化物の付着がある。胎土に白砂粒が目立つ。同一個体かと思われる。107は作りが薄く小形の土器であろうか。口縁の外反が大きい。器内面が使用のため荒れている。黒褐色を呈し、焼成は良い。108は内外表面とも摩滅し荒れている。灰褐色を呈す。110・114・115・121は口縁部の外反が大きく、口唇部がすこぶる薄くなっている。胎土に雲母粒が目立ち暗赤褐色を呈し、ほぼ同一個体のもと思われる。111は軽く圧接して平行竹管文を描いており、格子目交点は半載竹管により、状の刺突文が施されている。内部表面はへら状工具によるナデが見られる。灰褐色を呈し焼成は良い。112はつくりが薄く、口唇部に棒状工具で刻目された小波状は、器内側から外側に押圧されたものである。白褐色を呈し焼成は良好である。

113は白褐色を呈しているが外側表面に炭化物が全体に付着する。焼成は良好である。116は外側に比して内側の磨滅が多く表面が荒れている。焼成は良い。120は頸立に横走する平行沈線が3本引かれているが、施文のテクニックが半載竹管断面を刺突することによって施されたのではなく、半載竹管を左から右方向に押すように押し、滑らしながら小刻みに移動して施した連続爪形文である。外側表面は黄褐色を呈し、内側はやや赤味を帯びている。焼成は良い。

(e) 第5類土器 (126~132)

半載竹管による集合条線をもつものを本類としている。器形は外反するものと(126・127・130・~132)、ほぼ直立ぎみに立ち上がる例(128・129)とがある。

126は半載竹管による集合条線を垂下させ、口唇部直下及び条線下端に同一原体により平行沈線を横走させて区画している。集合条線の間には、竹管工具により逆「U」字形の刺突文が押捺される。胎土は黒褐色を呈し、焼成も良好である。127・128は口唇部に棒状工具により刻目が施されている。127は棒状工具により、128は半載竹管による集合条線がそれぞれ施される。口唇部直下には有節の平行沈線が2段横走し区画されている。129は、口唇部に刻目が施される点は127・128と同様であるが、区画はなされず口唇部直下より竹管工具により条線を垂下させている。130・132は平行沈線による区画がなされ、131は沈線により上下を区画している。いずれも集合条線は半載竹管によっている。128・129・132は胎土は黒褐色を呈し、焼成も良好である。127・130・131は褐色を呈し、やや軟質である。

(f) 第7類土器 (133)

1点のみを図示したが、ヘラ状工具による文様が施された、口縁が内湾する浅鉢形土器である。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。

(g) 第9類土器 (134~137)

浮線土器を一括している。器形はほぼ直線的に立ち上がる深鉢形土器(134)と、直線的に立ち上がり口縁部が大きく内湾するもの(135・136)とがある。134は平坦な口唇部状に1条の浮線文を波状に貼りつけしている。また、口唇直下にも2条の浮線文が貼りつけられ横走している。胴部は文様がはっきりしないが、部分的に斜縄文が施されるようである。胎土には砂粒を多く含み、器肌は荒れている。135は、2条の浮線文を横走させ、さらにその上に緩杉状に刻目を施している。胴部には木ノ葉文・爪形文が施され、文様構成は7類に似る。136は強く内湾する器形を呈し、口唇部に2条の浮線文が貼りつけられる。口縁部には、同じく2条の浮線文を横走させ、その下部にはやはり浮線文が貼りつけられている。137は浅鉢形の器形を呈するものかもしれない。2条・3条の浮線文が貼りつけられている。136と同様に、浮線文上には緩杉状に刻目が施される。本類は、砂粒を多く含んでいるためかややもろく、茶褐色を呈している。

(h) 第10類土器 (138)

燃糸文が施される土器で、1個体のみが出土している。直線的に立ち上がる円筒形を呈する小形の深鉢形土器である。口唇部上及びその直下に隆帯をつくり、細い棒状工具により刻目が施される。隆帯の下は棒状工具による太い沈線で区画され、その直下より燃糸文が施文されている。また、胴部には把手状の隆帯が貼りつけられるが、中は貫通していない。褐色を呈し、焼成も良好である。

(i) 第11類土器 (139~144)

半載竹管による連続爪形文が施される土器で、6点ある。器形は、ほぼ直線的に立ち上がる器形(139)と強く外反する(140)深鉢形とがある。いずれも直線・曲線の連続爪形文で、140は横の連弧文状を呈す。139・141・143は黒褐色を呈し、特に堅緻に焼成されている。

(j) 第8類土器(図29-31)

無文の浅鉢形土器(鈎状を含む)は、全部で100を超える口縁部が検出された。このうち、肩部の張りか①弧を描いて湾曲するもの、②「く」の字状に折れ曲がるもの、③屈曲部がやや外側に膨らんで「鈎」付への発展移行を感じさせるもの——など、肩部の状態が判明できる50個分について分類を試みた。

①については肩部から真直ぐ延びて口縁部を構成しているものもあるが、口縁が立ち上がっているものも同類として数えた。11点。このうち図示したのが1~6までである。1はうす茶褐色で、孔間3.5cm間隔、口縁はゆるやかな立ち上がりとなっている。出土土器の中では胎土・焼成とも良い方。2は茶褐色、口縁の立ち上がり部分はへら等でていねいに仕上げている。不規則な孔が2ヵ所縦にあげられており、使用法等は不明。

3は表面は黒色、裏がうす茶色、この土器片部分では孔が認められない。4の表面がうす茶色、裏面が黒色。孔間隔4cmある。口縁が内側におち込む。5は茶褐色で焼成悪い。6は表面の焼成悪く、キレットがかなりある。茶灰色で、裏は黒色。

②については7点あった。7の孔間隔は2.5~3cmで穿ってある。肩の「く」の字部は、内側から補強ぬりをしてあるのが割れ口から伺える。15はこの分類に入るかどうかははっきりわからない。

③は32点ある。8~14・16・17をここに整理した。17は口縁部と肩部はへら等で入念に仕上げているが、とくに肩部の製作には苦心している様子がうかがえる。

19・20・23は底部であるが、23は台付底部で、今回検出されたのはJ6号住居址出土のもの2点あるが、J6号住居址出土品は浮線文および縄文があるので9類とした。

21は濃茶褐色の表裏同色を呈す。肩の部分が厚く突出する。胎土は石英まじりだが、焼成はそうよくない。器形は鈎形か？

22は太い沈線に肉厚の口縁部である。うす茶色、胎土はかなり微細な石英粒子が認められる。焼成は表面に細かいヒビが走るなどややあまい。

参考文献 「縄文時代の酒道具」—有孔鈎付土器展—(1984 山梨県立考古博物館)

(8) E地点(OZII道路用地)の出土土器

E地点の出土土器はそう多くなかったので、一括して扱うことにした。

第1類土器(図28-1~7) いずれも深鉢形の器形である。1と3は右傾の、4~7は左傾の斜縄文を施している。2は羽状縄文を施し、口縁は波状を呈す。1の口縁は四隅が突出した波状で、口唇部には半載竹管状の工具による連続した刻目が施されている。器面全体に右傾の斜縄文を1単位2~4cm幅で施文している。器高は37cmあり底部から口縁まで続く部分が出土し復元した。胎土には石英等の微粒子を含むが焼成は良好である。7は波頭部が「山」状を呈す。

第2類土器(図28-8・9) 8は口縁部で、上が平行沈線文、その下に平行沈線を横に弧線を描いている。あざやかな茶色を表裏とも示す。胎土は良好で焼成もよい。

9は半載竹管による曲線および弧線が描かれる。くすんだ茶色が表面、裏面はヒビ割れの目立つ茶褐色で焼成はあまりよくない。胎土の不純物も目立つ。

10は撚りの良い羽状縄文を施し、くし状工具のようなものによる平行沈線を横走させる。胎土に石英等がまじっているが焼成はよく、きれいな茶褐色を呈す。

第3類土器(図28-12・13) 12は半載竹管による施文。表面は黒茶色を呈し、裏面はへら仕上げで焼成は良好である。

13は波状口縁部の波頭に突起があるが、その突起の下部に半載竹管による沈線文が認められる以外は不明。胎土に不純物がまじっているものの焼成は良好。

第8類土器(図28-15-19) 15は肩部が「く」の字に屈折する無文の有孔土器である。胎土に不純物多く焼成もあまりよくない。茶褐色を呈す。

16は黄茶色で、胎土の不純物が表面に浮き出ている。焼成悪い。

17は白茶色を呈し、焼成は良好。孔の間隔は4.5cmある。胎土もよく精選されている。

18・19は有孔土器の底壁部にあたる。18の表面が黒、裏面は茶黒色、胎土に不純物多いが焼成はよい。19は補強した厚みのところから板のように薄くはがれていたものを接着した。底部の製作上の工夫ぶりが伺える。表裏とも濃茶褐色、焼成はよい。

## B 石 器 (表2・図33-43)

出土した石器は鎌・錐・石匙・スクレイパー・斧・槍・くぼみ石・ハンマー・磨石・石皿・小形異形石器などがあり、図示したものは定形的な石器およびその未製品で106点である。磨石については一部を図示した。剥片は図示していない。

出土は住居址等の遺構出土品が約半数あり、残りはグリット出土品である。

### (1) 打製石器

#### (a) 石 鎌 (図33 1-19)

石鎌は、基部に抉入のある凹基無茎鎌(1-3・7-11・13)、基部が直線的な平基無茎鎌(6・12)、有茎で基部が直線的な平基有茎鎌(14)がある。凹基無茎鎌の抉入りは浅めである。5は有茎鎌の未製品と考えられる。15-19は無茎鎌の未製品と考えられ、製作工程が15-18へ推移したものと想定される。石質は安山岩が主体で、黒曜石が少しある。

#### (b) 石 錐 (図34 20-26)

石錐は7点あり、つまみを持ち先端部を細身に尖らせたもの(20-22・24)と、不定形な剥片の一端に錐部を作り出したもの(23・25)がある。24はつまみをもつものの典型的なものである。23・25は大形品である。20・22は先端部を欠く。

#### (c) 小形異形石器 (図34 27・28)

27は石匙を模倣したものと考えられる。28はチャート製品で「人」字形のものである。いずれも把手状の小突起をもつ。

小形異形石器については、獣・魚・鳥などの動物を模したものの、X状・Y状・U状などの抽象的なもの、釣針・石匙などの道具類に類似したものに大別され、獣・魚・トカゲなどを模したものは東日本、特に奥羽地方に多く、これらの多くは縄文後期ないし晩期の遺跡から発見されていると言われるが、富山県では前期の遺跡からの出土が多いことを指摘されている。

#### (d) 石 匙 (図35 29・31-38)

石匙は9点あり、いずれも横形のものである。形態は基本的には三角形で刃部が直線的なもの(31・32・34・36・37)であるが、やや横長のもの(33・38)や、刃部が丸いもの(35)がある。29は石匙の未製品としておいたが、形態的には「三脚石器」と呼称される石器に似ている。

#### (e) スクレイパー (図35 30・39・40 図36 41-50 図37 51-59)

急角度に調製された刃部をもつ剥片石器をスクレイパーとして一括した。形態や技法などによってさらに細かく分けることもできる。51は上部につまみ状のものを作り出しており片側にしか刃はないものの形態的には縦形石匙によく似ている。

58は「石距」に形態的によく似ている。

44は刃部が作り出されておらず、未製品であろう。



(f) 打製石斧 (図38 60~65)

打製石斧は6点あり、一番重い62でも134gと大形品はない。60~62は短冊形を呈するもので、61は未製品かもしれない。

63は左右非対称の撥形のもので、断面形はやや反っている。64・65は破片で、65は先端部片であろう。

(g) 横刃形石器 (図38-66)

打製石斧を横にした形態のもので、刃は図示した下方にのみ作り出される。B地点の調査でも3点出土している。

(h) 石 槍 (図38 67・68 図39 69・70)

石槍は4点あり、67・68は下部を欠損している。69・70は、67・68に比べて刃先部をていねいに作り出していない。

(i) 石 核 (図39-71)

安山岩の石核である。

(2) 磨製石器

(a) 磨製石斧 (図39 72~74)

図示した3点のほか、B-4地区から中形品の刃先部片が、B-6地区から、大形品ですどく獲の立ったものの胴部片が出土しており全部で5点ある。

72・74は定角式石斧で長さ7cm前後の小形品である。両者ともに刃部の一部を欠く。

73は復元長約10cmの中形品で、胴部断面形は楕円形に近い。刃部を欠く。

(3) 石 製 品

(a) くぼみ石 (図40 70~83 図41 84・85)

ちょうど手に持つに具合のいい大きさの円形ないし楕円形の石の表裏・側面にくぼみのある石で、敲石ともよぶ。図示したものの他に10数点あり、25点以上出土していることとなる。

(b) ハンマー (図41 86~90)

ちょうどにぎりやすい太さの棒状石で、両端ないし一方の端に打痕がある。剣のように一方の端を持ってもう一方を打点としているが、86は堅杵のようににぎって何かを叩くことに使われた痕がある。88は下部を欠損している。図示したものは5点だが、他に数点ある。

(c) 磨 石 (図41 91~93)

石皿とセットで使われるもので、河原石が使用されており、全面が磨かれている。91は敲石としても使用されている。

(d) 石 皿 (図43 105・106)

2点あり、105は楕円形で三方に縁をもつ。磨面はきわめて平滑である。106は破損品だが105と同様三方に縁をもつものと思われる。

(e) その他 (図42 94~102 図43 103・104)

94~104はくぼみ石ないし磨石と思われるものである。明瞭な打痕・磨痕がないのでその他としておいた。

注1 石器の名称については鈴木道之助『図録石器の基礎知識田嶋文』1981 柏書房によった。

注2 吉久登「富山県における小形異形石器の一例」『大境』5 1974 富山考古学会

注3 中村孝三郎『越後の石器』1978 学生社 第146図2

1 類

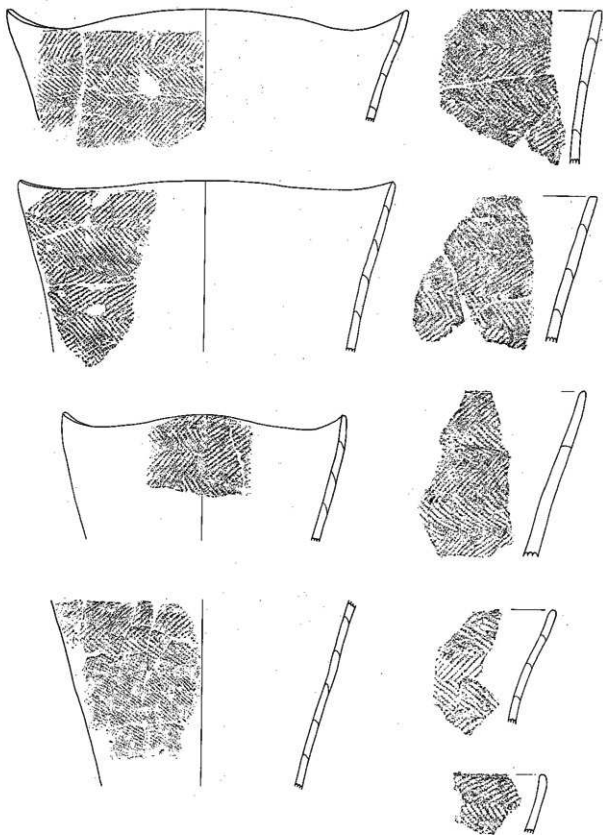


図14 縄文土器分類図 1類 1:4 拓本 1:3

1~10類はA地点・B地点出土品(金井正三氏厚図)を掲載。11類は1989年度出土品。

2 類

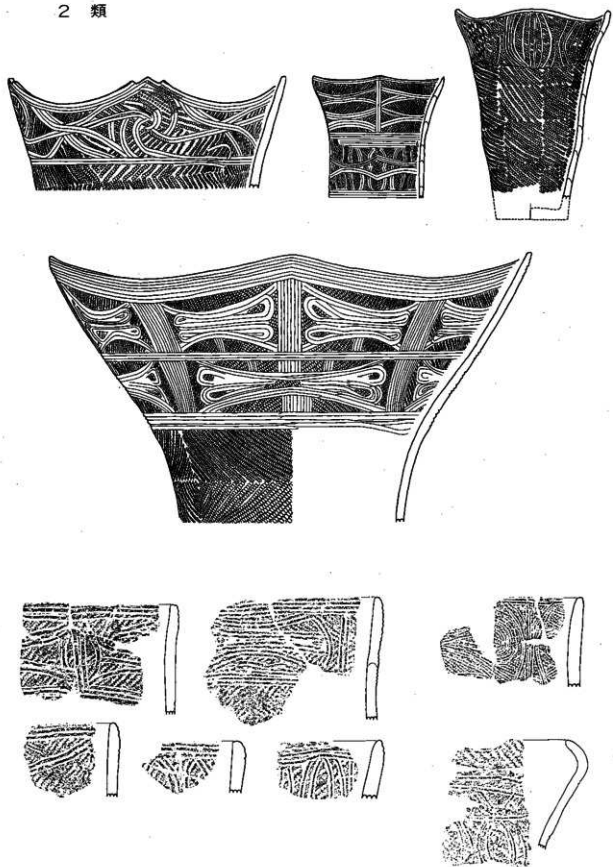
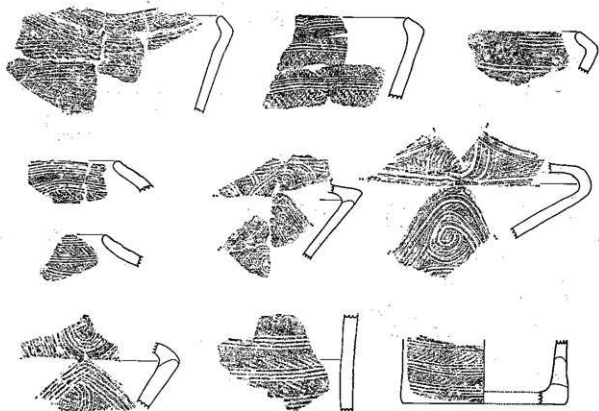


図15 縄文土器分類図 2類 1:4 拓本 1:3

3 類



4 類



5 類

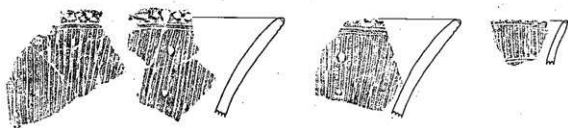


圖16 編文土器分類圖 3~5類 1:3

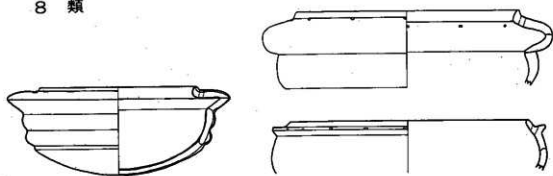
6 類



7 類



8 類



9 類



10 類



11 類



図17 縄文土器分類図 6~11類 1:4 拓本 1:3

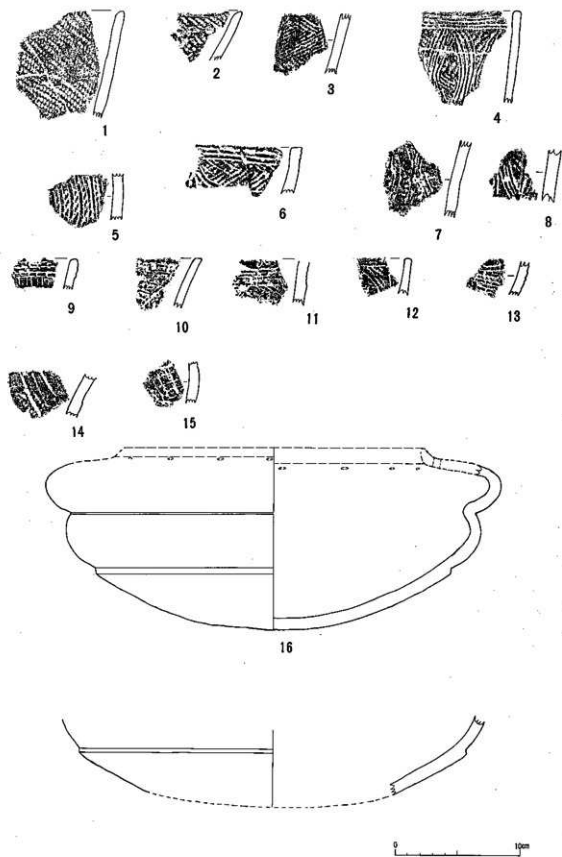


图18 1号住居址出土土器 1:3

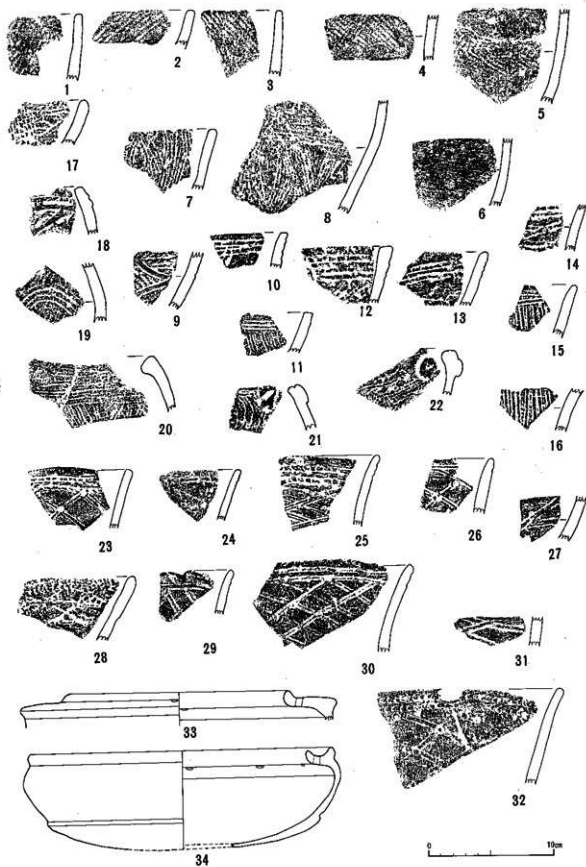


图19 3号住居址出土土器 1:3

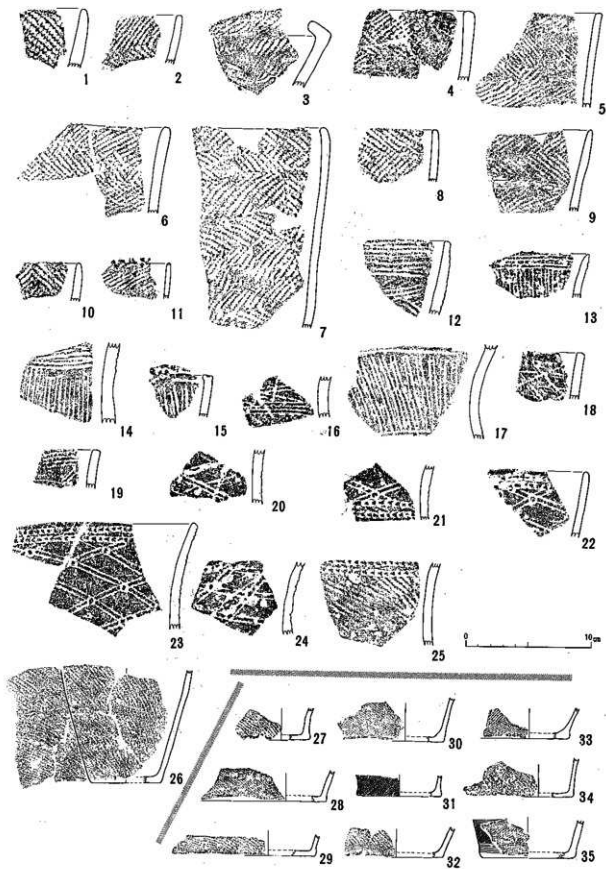


图20 4·6号住居址出土土器(1)



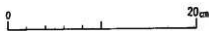
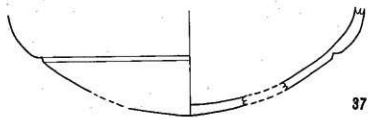
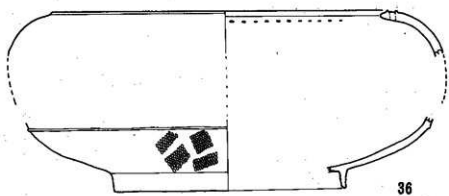


图21 6号住居址出土土器(2) 1:4

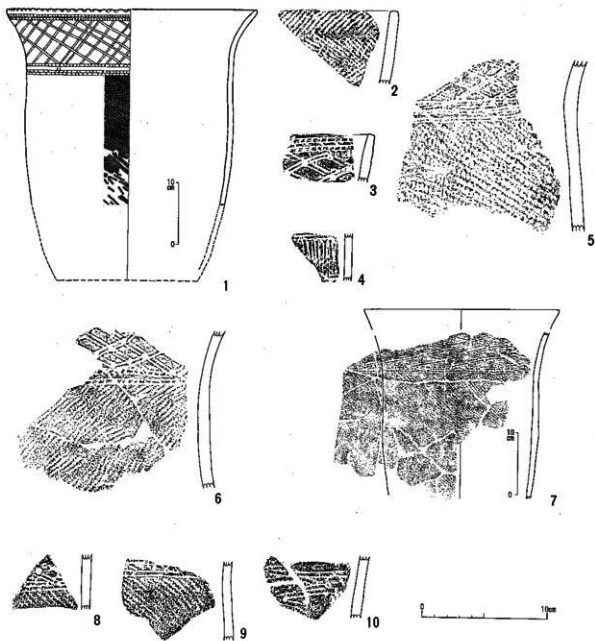


图22 土城出土土器

(1 SK17·2-6 SKJ518·7 SK20·8-10 SK21) (1.7 1:6. 2-6 8-10 1:3)

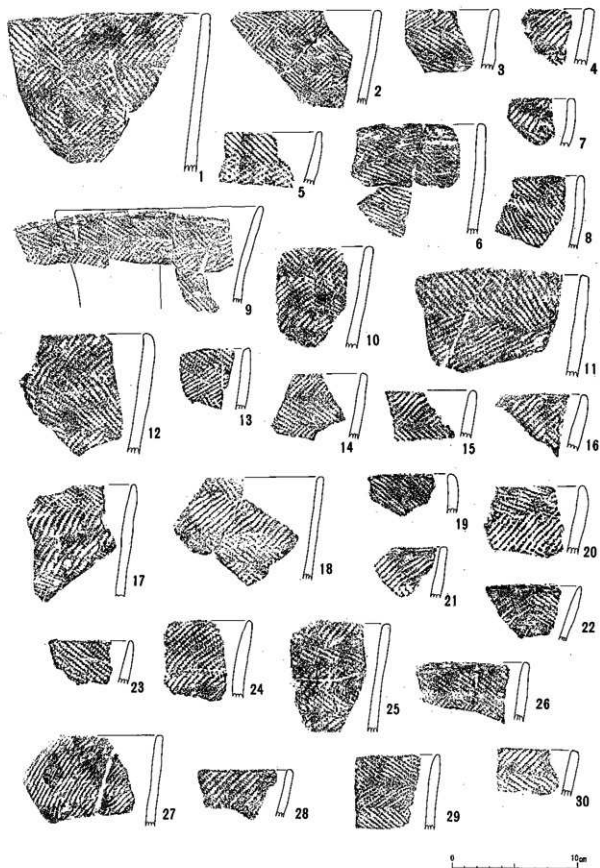


图23 道桥外出土土器(1) 第1类 1:3

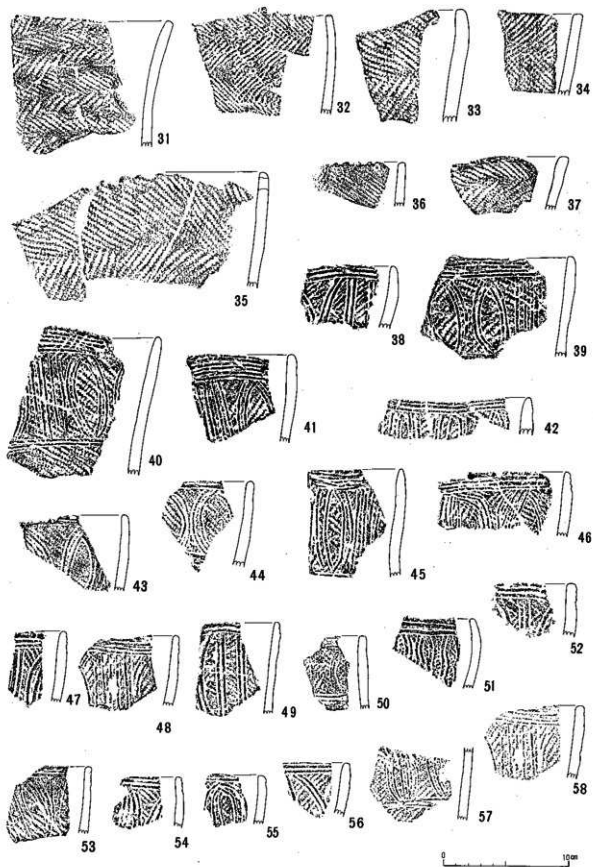


图24 遺構外出土土器(2) 第1類(31~37) 第2類(38~58) 1 : 3

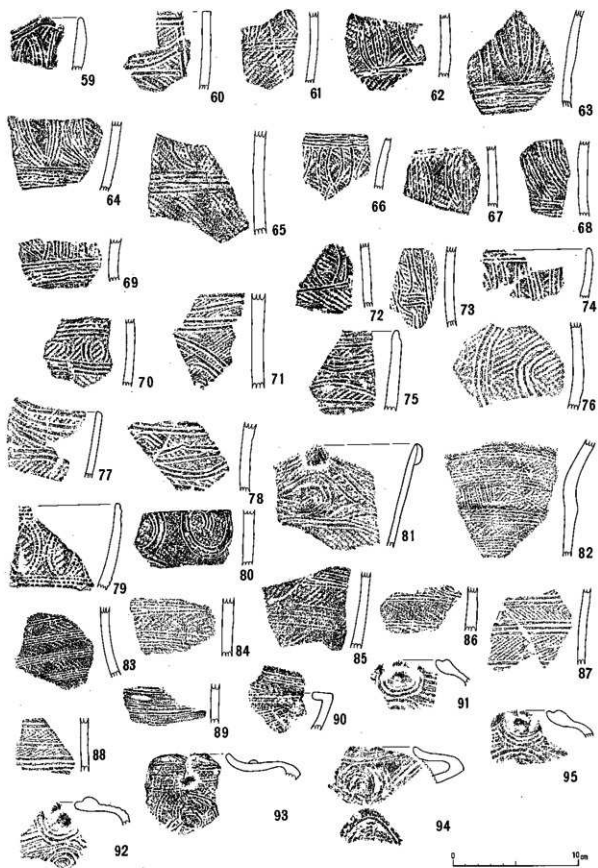


圖25 遺構外出土土器(3) 第2類(59-80) 第3類(81-95) 1 : 3

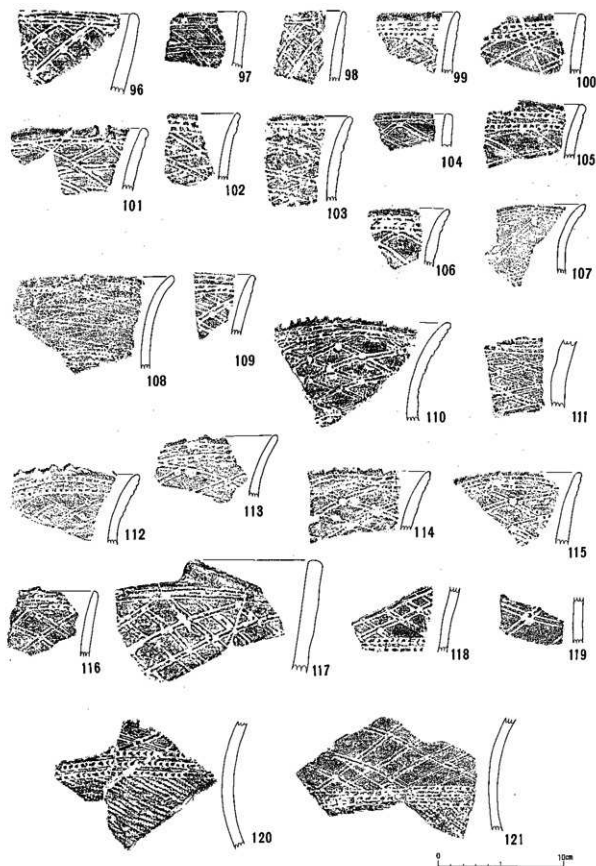


图26 遺構外出土土器(4) 第4類 1:3

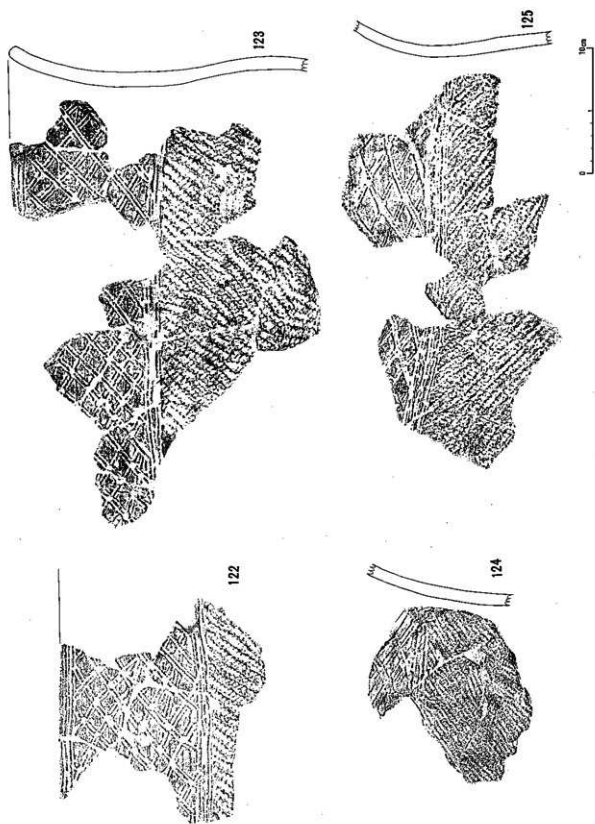


图27 遺構外出土土器(5) 第4類 1:3

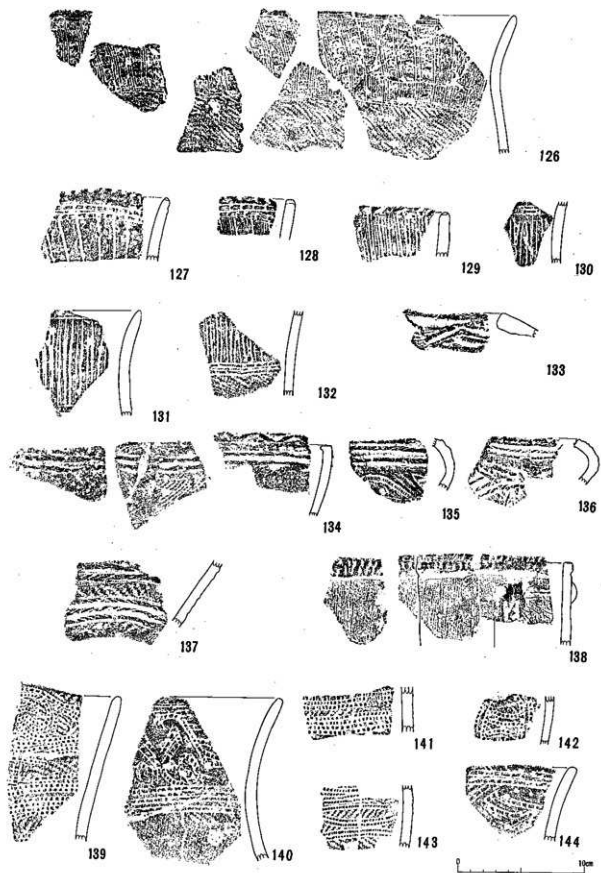


图28 遺構外出土土器(6) 第5類(126-132) 第7類(133-135) 第9類(134-136-137) 第10類(136) 第11類(137-144) 1 : 3



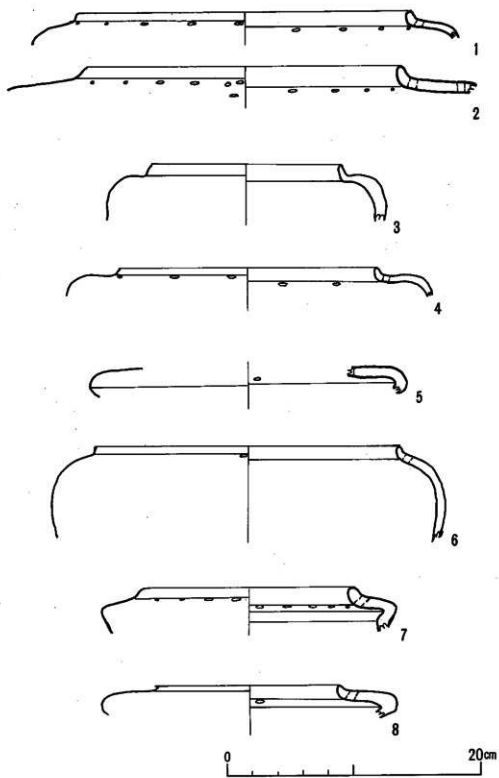


图29 滇彝外出土器(7) 第8类(1) 1:3

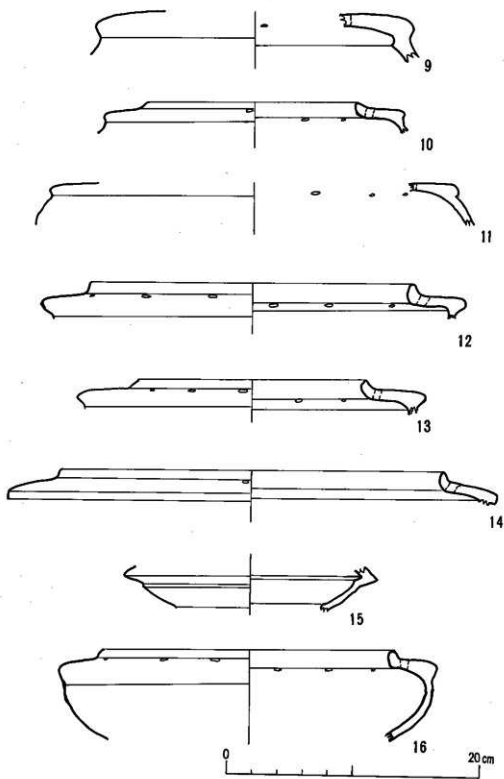


图30 滇彝外出土兵器(8) 第8类(2) 1:3

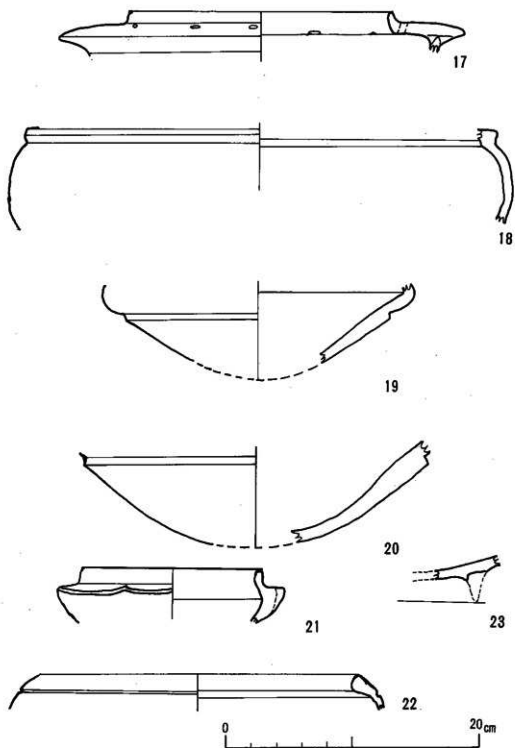


图31 遼構外出土土器(9) 第8類(3) 1:3

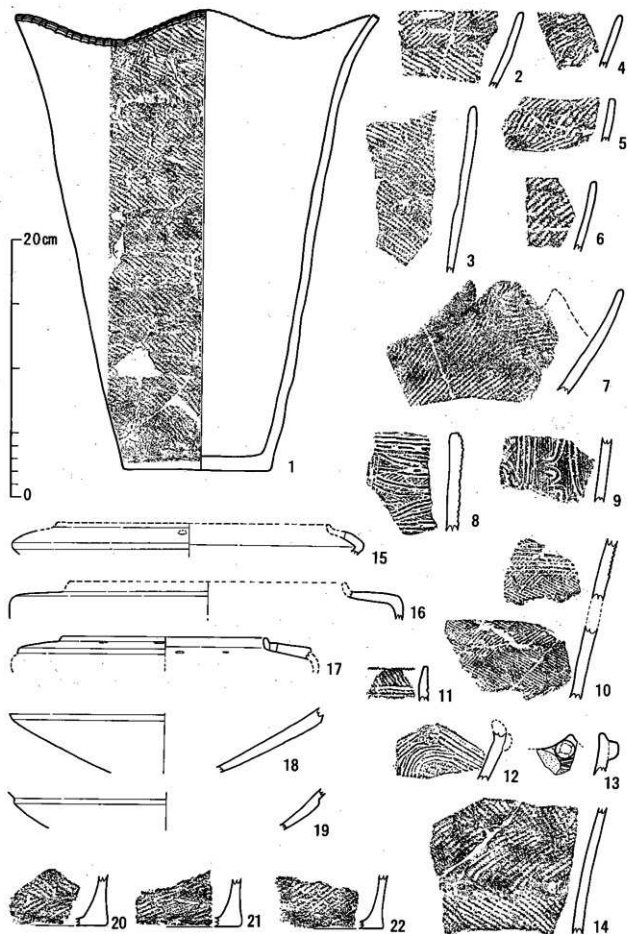


图32 E地点(OZ II区)出土土器 1:3

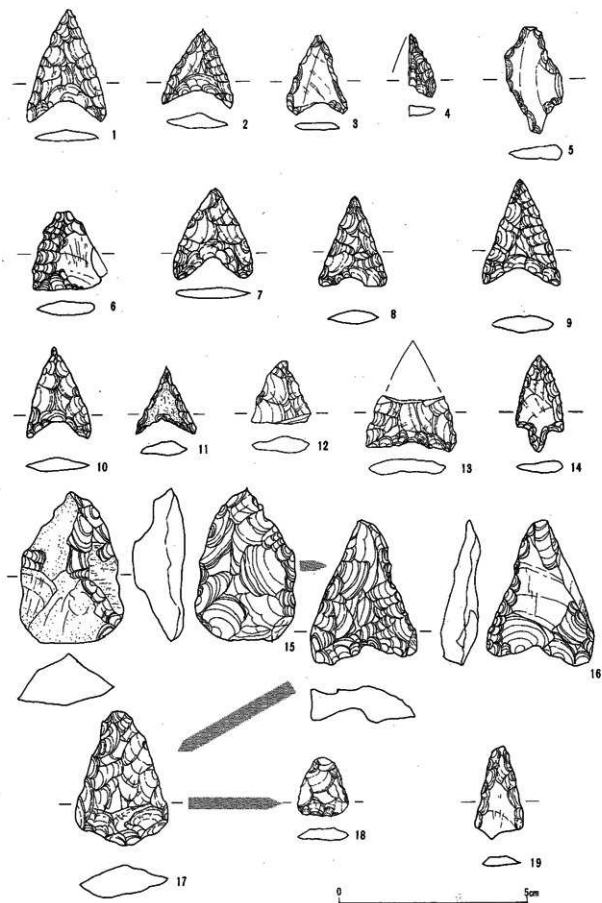


图33 出土石器(1) 1:1

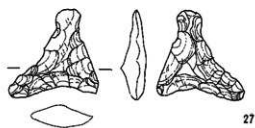
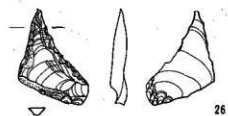
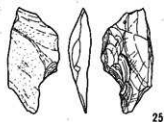
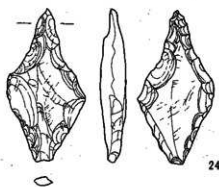
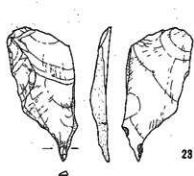
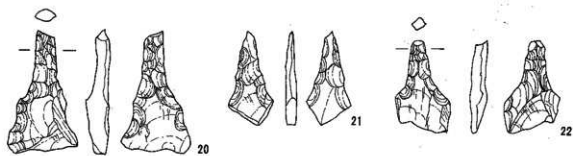


圖34 出土石器(2) 1:1 23-25 1:2

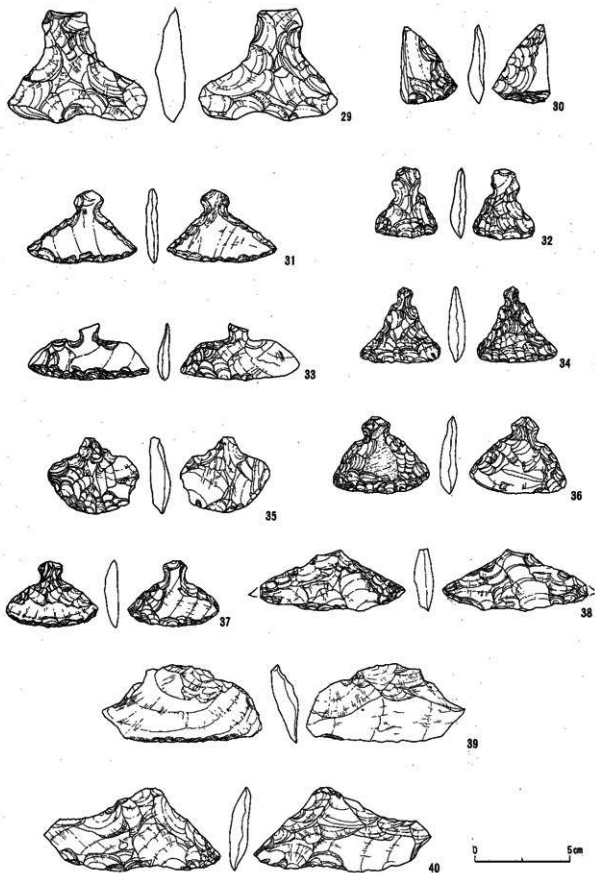


圖35 出土石器(3) 1:2

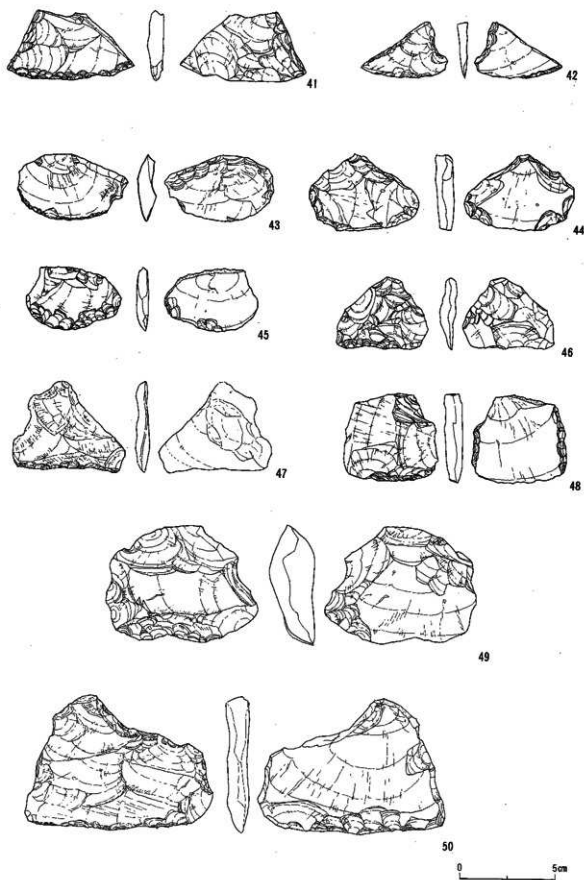


图36 出土石器(4) 1:2



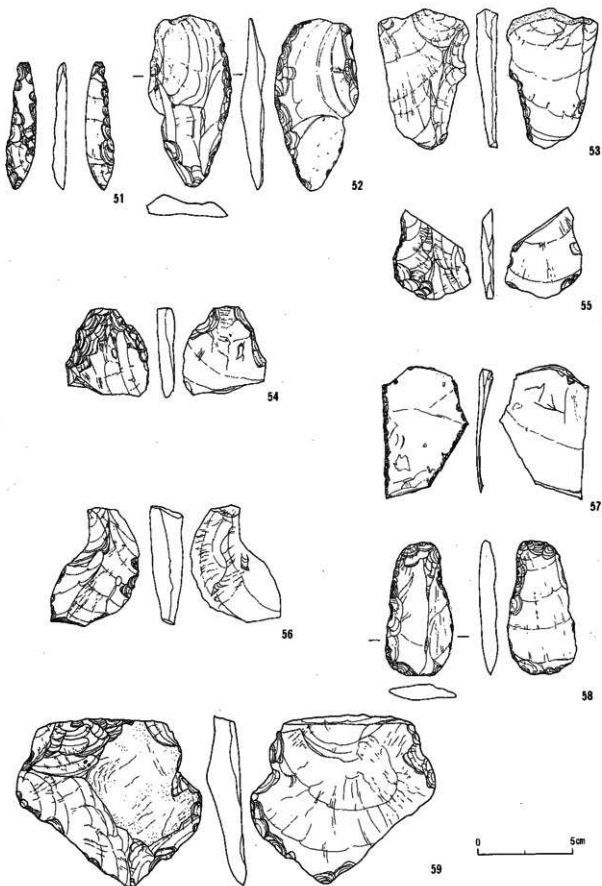


圖37 出土石器(5) 1:2

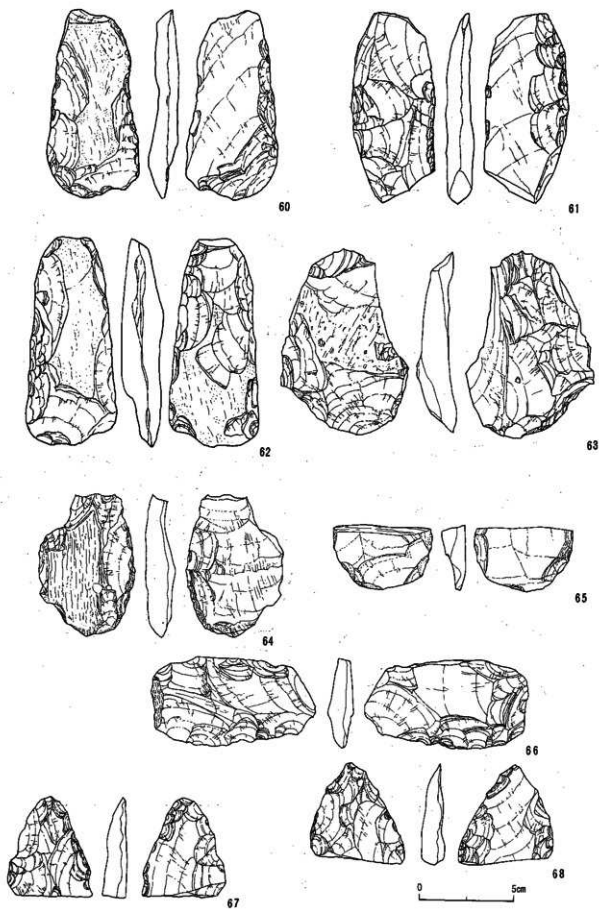
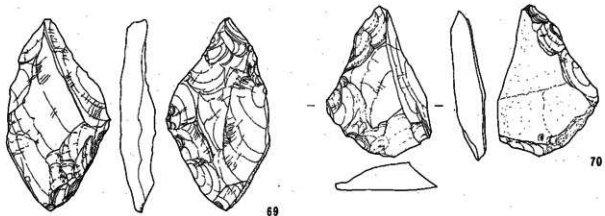
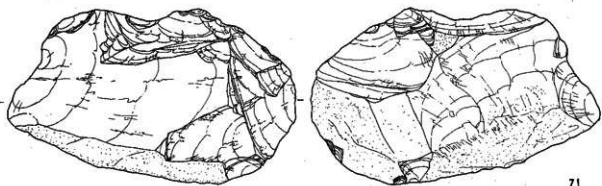


图38 出土石器(6) 1:2

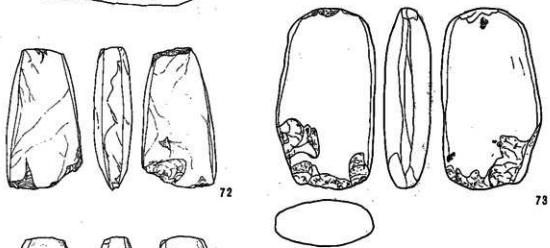


69

70



71



72

73

74



圖39 出土石器(7) 1:2

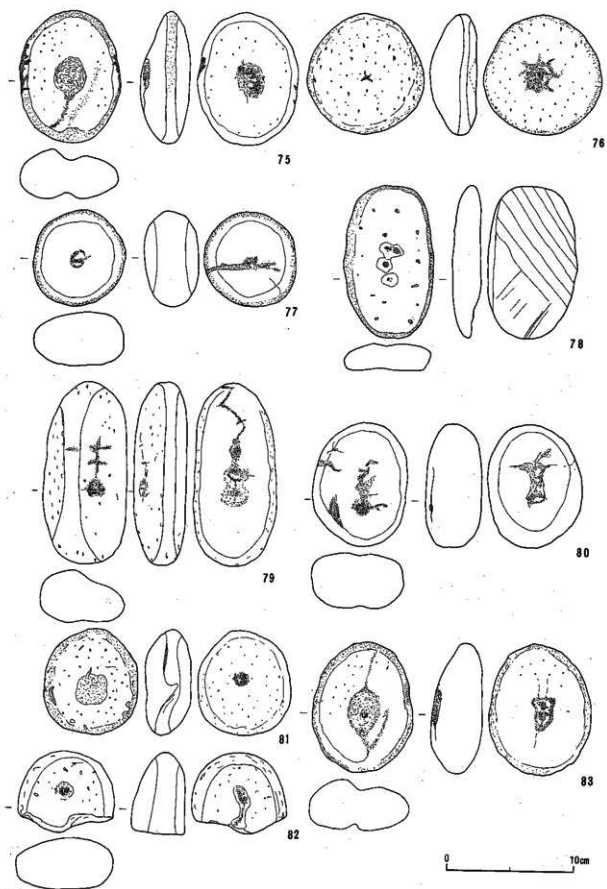


圖40 出土石器(8) 1:3

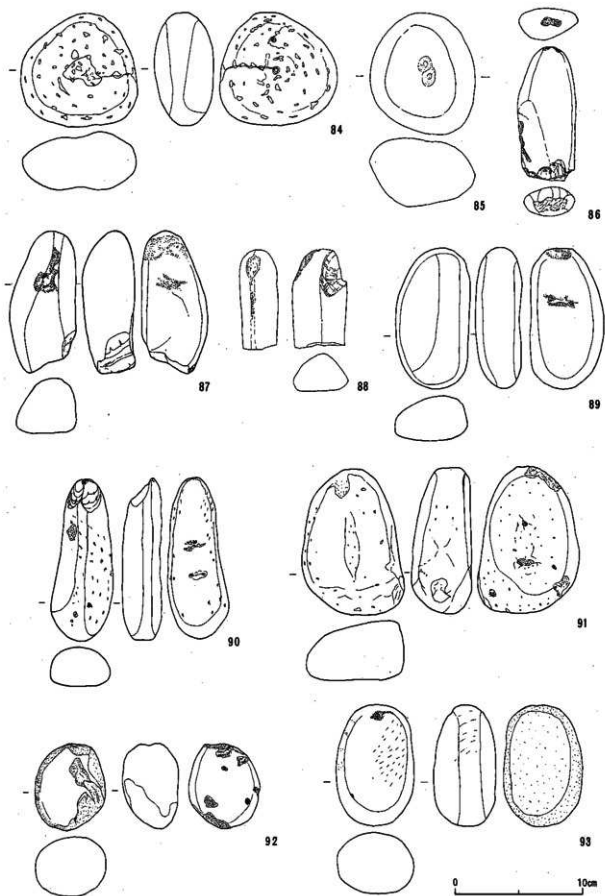


图41 出土石器(9) 1:3

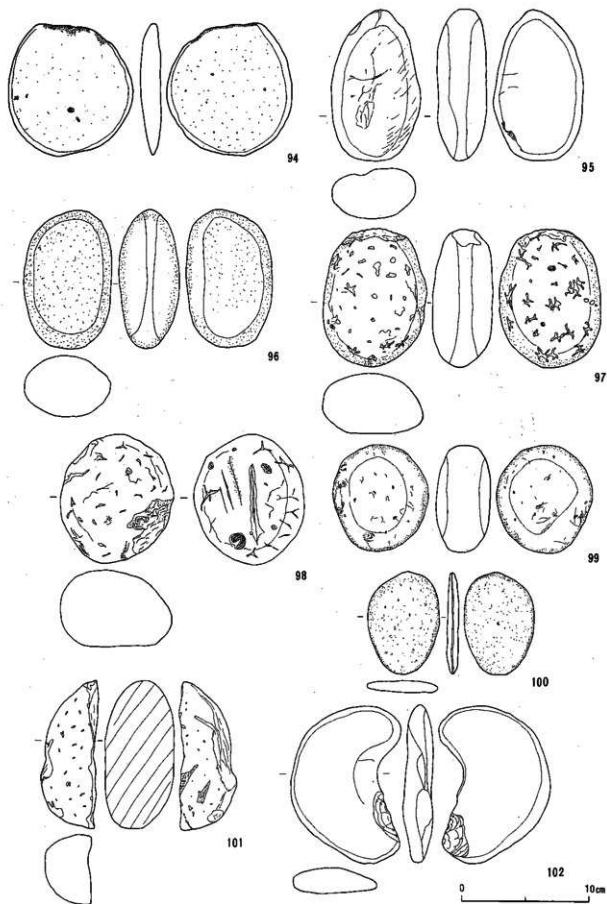


图42 出土石器(94) 1:3

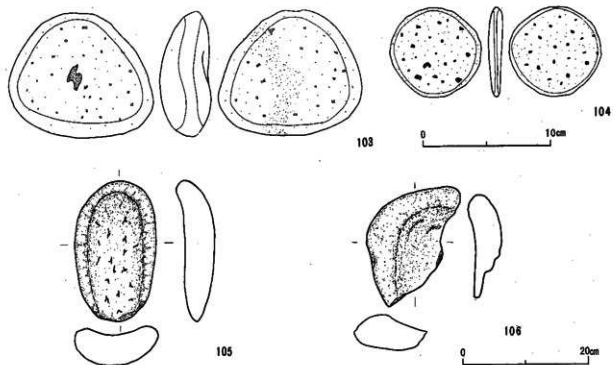


图43 出土石器 ① 1:3, 1:6

番品	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	備考	石器団体番号
1	石 鎌	安山岩	2.9	2.1	0.3	1.2			J 3住 668
2	石 鎌	安山岩	2.0	1.9	0.4	0.9			J 3住 812
3	石 鎌	安山岩	2.0	1.6	0.2	0.7			J 3住 522
4	石 鎌	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.0	○		J 3住
5	石鎌未製品	安山岩	2.8	1.6	0.4	1.4			J 3住 546
6	石 鎌	黒曜石	2.1	1.8	0.4	1.3			J 6住 87
7	石 鎌	安山岩	2.4	2.1	0.3	1.2			J 6 P-5
8	石 鎌	安山岩	2.3	1.8	0.4	1.2			J 6 342
9	石 鎌	安山岩	2.8	2.0	0.5	1.7			J 6住 14
10	石 鎌	安山岩	2.4	1.7	0.4	1.0			J 6住 196
11	石 鎌	安山岩	1.8	1.6	0.4	0.6			J 6住P-1
12	石 鎌	安山岩	1.7	1.6	0.4	0.7	○		J 3住 571
13	石 鎌	安山岩	1.4	2.5	0.4	1.6	○		J 3住P-1
14	石 鎌	安山岩	2.5	1.3	0.4	1.0			D-12
15	石鎌未製品	黒曜石	4.0	2.7	1.4	12.1			J 6住 304
16	石鎌未製品	黒曜石	3.8	2.9	1.1	6.9			J 6住 266
17	石鎌未製品	安山岩	3.6	2.4	0.9	6.1			J 6住 480
18	石鎌未製品	安山岩	3.0	2.8	0.7	5.5			J 3住 299
19	石鎌未製品	安山岩	2.4	1.3	0.3	0.3			J 6住 192
20	石 錐	安山岩	3.3	1.9	0.7	2.3	○		J 1住
21	石 錐	安山岩	2.4	1.2	0.3	0.8			3住P 3
22	石 錐	安山岩	2.4	1.5	0.5	1.3	○		J 3住 8
23	石 錐	安山岩	7.1	3.8	1.1	19.6			A-7
24	石 錐	安山岩	4.0	2.1	0.7	5.0			J 6住P-3
25	石錐未製品	安山岩	5.5	2.7	1.2	17.7			SK11
26	石 錐	黒曜石	2.4	1.9	0.5	1.7			J 6住
27	小形石器	安山岩	2.4	2.4	0.7	1.7			J 1住
28	小形石器	チャート	1.7	2.7	0.5	1.1			D-2
29	石 匙?	安山岩	5.9	7.3	1.5	48.7			J 2住 132
30	スクレイパー	安山岩	4.1	3.0	0.9	8.4	○		J 2住
31	石 匙	安山岩	3.8	5.8	0.7	10.0			J 6住 128
32	石 匙	安山岩	3.7	3.2	0.8	7.6			J 6住 248
33	石 匙	安山岩	8.9	9.7	2.0	127.6			A-3
34	石 匙	安山岩	4.0	4.2	0.9	10.9			C-24
35	石 匙	安山岩	4.0	4.8	1.1	15.0			C-10
36	石 匙	安山岩	4.0	5.0	0.9	15.9			C-10
37	石 匙	安山岩	3.5	4.9	0.8	8.2			J 3住 1
38	石 匙	安山岩	3.2	7.7	1.0	19.7	○		SK13
39	スクレイパー	安山岩	4.1	8.5	1.4	33.8			B-2
40	スクレイパー	安山岩	4.4	9.3	1.1	39.1			J 6住 162
41	スクレイパー	安山岩	3.6	6.6	1.0	22.5			B-6 5
42	スクレイパー	安山岩	3.0	4.5	0.6	5.8			J 3住 P18
43	スクレイパー	安山岩	3.5	5.8	1.0	20.4			J 3住
44	スクレイパー	安山岩	4.0	5.8	1.0	22.7			J 6住 444

表2 掲載石器計測表(1)



番号	石器名	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破損	備考	石器固体番号
45	スクレイパー	安山岩	3.3	5.0	0.7	12.6			J 6住 406
46	スクレイパー	安山岩	3.8	4.8	0.6	15.0			B-2
47	スクレイパー	安山岩	4.8	6.0	0.8	12.3			B-2
48	スクレイパー	安山岩	4.6	5.0	1.0	26.7			J 3住 460
49	スクレイパー	安山岩	6.2	8.1	2.5	123.6			B-8
50	スクレイパー	安山岩	7.2	10.1	1.3	90.0			D-7
51	スクレイパー	安山岩	6.7	1.5	0.8	6.9			J 6住 434
52	スクレイパー	安山岩	9.0	4.3	1.1	34.1			A-6
53	スクレイパー	安山岩	7.4	4.6	1.2	36.1			J 3住
54	スクレイパー	安山岩	4.8	4.4	1.0	17.6	○		J 3住 602
55	スクレイパー	安山岩	4.7	3.9	0.7	13.3	○		J 3住 610
56	スクレイパー	安山岩	6.2	4.7	1.7	36.8			J 3住 315
57	スクレイパー	安山岩	6.9	4.5	0.8	19.4			B-2
58	スクレイパー	安山岩	7.0	3.6	0.9	23.1			C-12
59	スクレイパー	安山岩	3.0	6.4	0.7	9.8			A-3
60	打製石斧	安山岩	10.0	4.9	1.9	63.0			A-10
61	打製石斧	安山岩	9.9	4.5	1.6	73.9			B-1
62	打製石斧	安山岩	11.1	4.8	2.3	134.2			C-7
63	打製石斧	安山岩	9.8	6.9	2.0	123.3			J 3住 109
64	打製石斧	安山岩	7.6	5.1	1.6	52.4	○		D-6
65	打製石斧	安山岩	3.4	5.3	1.3	25.4			J 3住 P 9
66	横刃形石器	安山岩	4.6	8.8	1.4	64.7			J 1住 101
67	石 槍	安山岩	5.4	4.6	1.3	27.2	○		A-4
68	石 槍	安山岩	5.3	5.0	1.2	30.8	○		C-6
69	石 槍	安山岩	10.1	5.5	1.9	84.5			J 3住 76
70	石 槍	安山岩	7.9	5.3	1.6	57.2			B-2
71	石 核	安山岩	9.7	5.3	2.5	601.7			B-2
72	磨製石斧	蛇紋岩	9.3	15.3	4.2	101.2	○		J 6住 P 5
73	磨製石斧	蛇紋岩	6.8	4.0	2.3	187.0			D-6
74	磨製石斧	蛇紋岩	7.4	4.0	2.1	87.2			C-7
75	くぼみ石	砂岩	10.4	8.2	4.2	342.8			A-4
76	くぼみ石	砂岩	9.6	9.5	3.8	302.3			C-2
77	くぼみ石	砂岩	7.6	7.4	4.4	117.9			C-2
78	くぼみ石	砂岩	12.2	7.3	2.4	230.2			B-8
79	くぼみ石	砂岩	14.5	6.9	4.3	490.2			B-7
80	くぼみ石	砂岩	9.8	7.6	4.7	401.6			A-7
81	くぼみ石	砂岩	8.5	7.4	3.8	280.0			B-25
82	くぼみ石	砂岩	10.5	8.0	4.1	251.9			A-4
83	くぼみ石	砂岩	6.6	7.8	4.4	342.8			A-4
84	くぼみ石	砂岩	9.2	9.3	4.8	448.7			J 5住 5-C
85	くぼみ石	砂岩	9.7	8.3	5.4	509.5			J 6住 156
86	ハンマー	砂岩	10.6	4.6	2.3	181.7			J 3住
87	ハンマー	砂岩	11.3	5.4	4.3	347.2			D-1
88	ハンマー	砂岩	7.8	4.6	3.0	143.1	○		J 3住 205

表3 掲載石器計測表(2)



### 第3章 中・近世

#### 1 遺構

中・近世の遺構として、墓と考えられる土塚14と溝1がある。いずれも調査地南西部にあり、現在の大倉崎区の墓地に隣接している。

##### A 土塚 (表5、図44・45)

土塚墓と考えられる土塚は全部で15基ある。大きさによって大形のもの (SK12・13) と小形のものに分けられ、大形のは群の北側にややはなれて並列している。

小形のは群の南側に群集しているが、重複するのはSK9とSK24のみで、方位をおおむね東西ないし南北にとり整然と並ぶ。そして小形のものの中でもさらに小さいもの (SK6・SK23・SK9・SK24) は、小形のもの間に位置する。

埋土はいずれも細かい黄色粒を含んだ黒色土で、黒色土との区別は困難であった。

平面形の確認面は黄色粘土 (地山) 面であったが、遺物の出土状態 (SK1) や壁面観察 (SK8) によって黒色土上面つまり表土直下から切り込まれていることがわかる。したがって確認面からの深さは0.15~0.7mと浅いが、もともとは1mないし1mをこえる深さであったと考えられる。

出土遺物はSK1をはじめとして、宝篋印塔や五輪塔などの石塔製品をもつものがある。SK1は南部に上向きに並んでいる火輪 (三角形) 3個は置かれた様であるが、北部のものは乱雑につめ込まれている。SK3・SK5・SK9・SK13は置かれているようである。SK8は図示していないが上面に火輪が上向きに置かれていた。

なおSK9からは骨が出土している。

以上の土塚の性格としては墓と考えてまちがいないだろう。大形のSK13・SK12は、確認面からの深さが浅いことを考えると伸展の土葬ないし、寝棺を用いているのかもしれない。

他の多くの小形のは屈身の土葬と考えるとしても小さすぎる感がある。火葬を考慮すべきだろうか。特に小形のは乳幼児のものであるだろうか。

年代については出土した石塔類が鎌倉~江戸時代と相当な幅があり、新・古が相伴する土塚もあって石塔類の年代をそのままではめるわけにはいかない。むしろ石塔類が使用されなくなった年代と考えた方が良

番号	長径m	短径m	深さm	備 考
SK1	1.05	0.75	0.35 (0.9)	火輪(三角形)7、水輪(円形)2、地輪(方形)1
SK2	1.2	0.6	0.7	
SK3	1.35	0.9	0.6	宝篋印塔1 水輪1
SK4	1.05	0.6	0.25	
SK5	1.3	0.7	0.4	2段 空風輪(宝珠形)2、水輪1
SK6	0.6	0.5	0.4	
SK7	0.9	0.55	0.6	
SK8	0.95	0.8	0.45 (0.9)	上面に火輪1
SK9	0.75	(0.6)	0.5	火輪1 水輪1 骨片
SK10	1.05	0.5	0.7	
SK12	3.1	1.1	0.15	
SK13	2.6	1.4	0.3	空風輪5 北宗銭2
SK15	1.0	0.7	0.15	北宗銭3 J1住を切る
SK23	0.6	0.5	0.15	
SK24	0.8	0.55	0.3	SK9と重複

表5 土塚墓一覧表

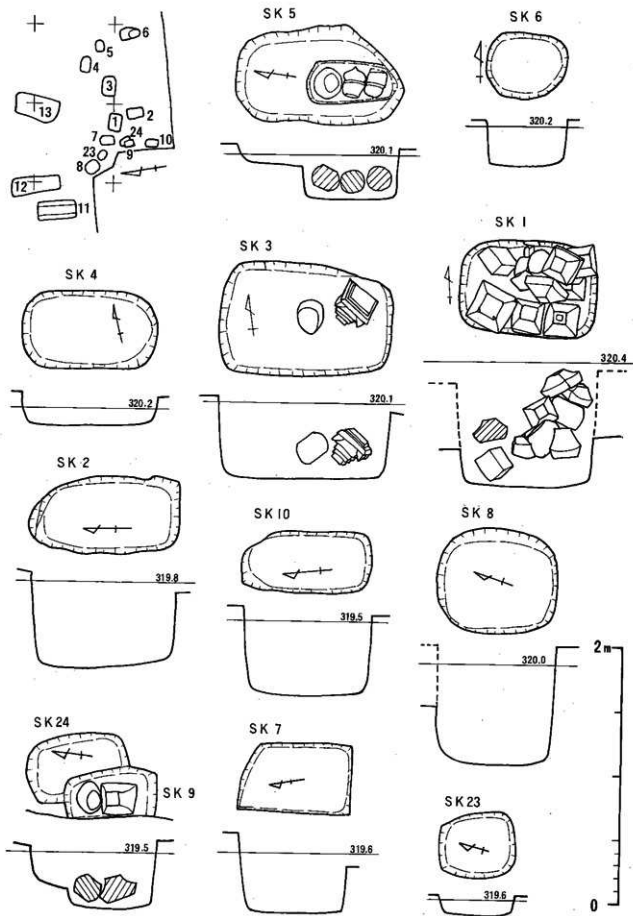


图44 土坑墓实例图(1) 1:30

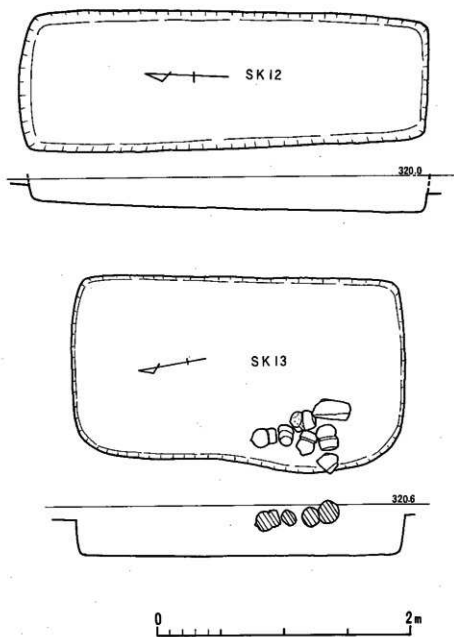


図45 土坑墓実測図(2) 1:30

いであろう。

#### B 溝 (図5)

溝(SD1)は土坑墓群の北側を方形にとり囲むような形でめぐっている。

地山面で確認された全長は約17mであるが、黒色土を切って掘り込まれていることを考えれば、南および西へさらに延びていた可能性が高い。

溝の断面形はゆるやかな船底形で深さ約40cm。

埋土は2層に分かれ、上層は暗茶褐色土で所々炭を多量に含んでいる所があった。下層は黄色粒を含む黒色土である。

出土遺物は、D-3区土層観察用アゼの西で五輪塔の水輪が底に接して検出されている。

五輪塔の出土や土層の状態、位置などからこの溝は南隣の土壇墓群と関係があるものと考えられる。

## 2 遺物

### A 石塔製品類 (表6・図46・47)

五輪塔の宝珠部分(団・半月形=空・風輪)12点、火輪(三角形)10点、水輪(円形)9点、地輪(方形)1点と宝篋印塔の笠部分1点が、それぞれ出土した。岩質は全部安山岩である。

石塔類が出土したのは調査区の5区以西の現墓地に近接する場所からであり、とくにSK1などの土壇からの検出状況を観察すると、多数の五輪塔を一度に破壊したような形となっていた点が特色といえる。

当調査地のすぐ南側に美妙寺があり、当寺と墓地在隣り合っていることから考えると、美妙寺が真言宗から真宗(本願寺派)に転宗(寛政11年=1799)したことと関係あるのかも知れない。隣接墓地には、完全な五輪塔ではないものの相当数が現在でも祀られている。

五輪塔の形式変化—五輪塔は簡素で形の整った鎌倉時代を基準とすると時代が下るに従って各輪とも幅にくらべ縦長になり、江戸時代には空輪頂上の凸起が高くなって、火輪の四隅の反りが極端にはねあがることが傾向の特徴とされている。

空輪・風輪部分についてみると、宝珠(空輪)の形が整った(図42—1~3)ものから、それからやや押しつぶしたようなもの(同4・5・7)、宝珠頂上の突起が他に比べずっと大きい(同8)ものなど時代的には鎌倉・室町・江戸の特徴点に類似している。頂上の平になっている(同10)ものについては不明。

火輪では笠の傾斜が直線的で、隅の軒先が垂直に落ちているのが最も古い鎌倉時代の作風といわれる。これに比べられるのは16番である。以降、笠の傾斜が曲線となり、室町・桃山・江戸となるにつれて曲がり具合が深くなり隅の軒先の反りかえりが著しくなってくる。図43—13は塔の安定を得るための上面に凹があるものの、作風は11~15、17~19とそう差はなく室町・桃山時代のものに似ている。

宝篋印塔の笠部については、隅飾突起が鎌倉時代には垂直に造られているが、室町・江戸と時代が下ると曲線を描いて反りかえるようになってくる。図43—23は隅飾突起がやや外側に傾斜が認められるので、鎌倉後期から室町時代の作風に比べられよう。相輪・塔身・返花座を欠いて全体像が把握できないのが残念である。

### B 銭貨 (表5・図48)

大倉崎遺跡のD地点・E地点のうちD地点から出土した古銭は6枚で、E地点では出土しなかった。

出土地点はSK15の底より3枚、SK13より2枚、B4区より1枚—の3ヵ所からの出土であった。

6枚とも渡来銭である。最も古いものが1008年(大中祥符元年)に初鑄造された祥符通寶の2枚、最も新しいものが元符元年(1098)初鑄造の元符通寶である。

### C 土器 (図50—9)

中世と考えられるいわゆるかわらけが1点(図50—9)がある。小形品で底部は糸切り痕がそのまま残る。B—5地区出土。

番号	出土地	番号	出土地	番号	出土地
1	C-5	11	SK 1	21	SK 3
2	SK-5	12	SK 9	22	D-3-2
3	SK-13-4	13	SK 1	23	C-2-5
4	D-4-2	14	"	24	B-4
5	SK13-1	15	B-3-1	25	C-4-25
6	SK13-2	16	SK 1	26	SK 1
7	SK13-3	17	SK 1	27	SK 1-7
8	B-4-1	18	SK 1	28	SK-9
9	SK 6	19	SK 1	29	SK 5-N
10	SK-13-6	20	SK 1	30	SK 3

表6 石塔出土地一覽

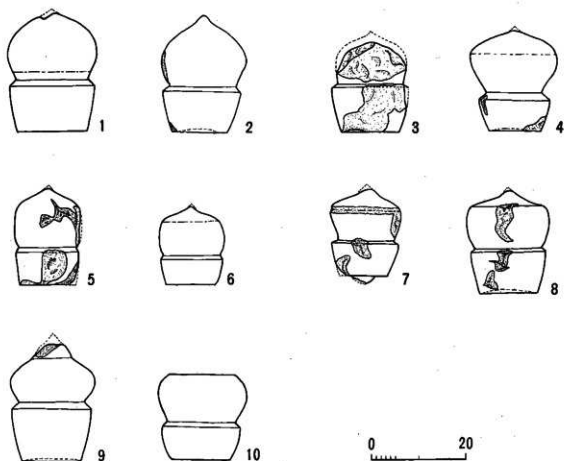


圖46 石塔製品(1) 1:8

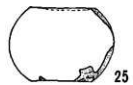
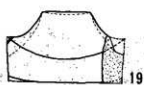
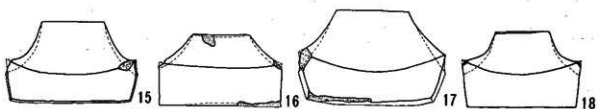
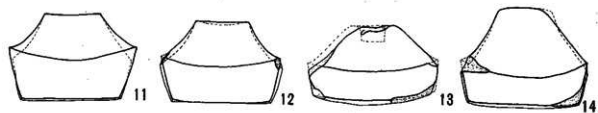


圖47 石塔製品(2) 1:8



番号	銭名(書体)	初鋳年(西暦)	時代	直径mm	重さg	出土遺構	備考
1	元符通寶(篆)	元符元年(1098)	北宋	24	2.2	SK13	保存状態は比較的良
2	嘉祐通寶(篆)	嘉祐年間(1056~63)	北宋	24	1.6	SK13	腐蝕はげしい
3	天禧通寶(楷)	天禧年間(1017~22)	北宋	24	2.6	SK15	表面腐蝕
4	元祐通寶(篆)	元祐元年(1086)	北宋	24	3.5	SK15	裏面の縁錆目立つ
5	祥符元寶(楷)	大中祥符元年(1008)	北宋	24	1.9	SK15	腐蝕はげしい
6	祥符通寶(楷)	大中祥符元年(1008)	北宋	25	3.2	B 4	腐蝕はげしい。

表7 銭貨一覧表

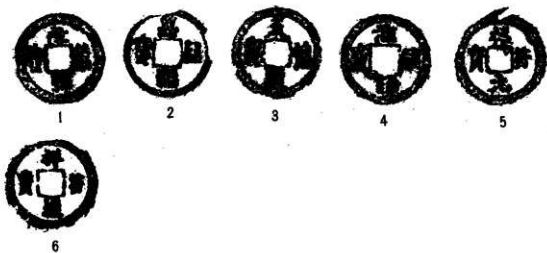


図48 銭貨 1:1

## 第4章 その他の時代

縄文時代前期および、中近世以外の遺構・遺物として、木棺墓（SK11）、弥生・古墳・平安時代の土器がある。

### (1) 木棺墓 SK11 (図49・図50—5・6)

SK11は2段に掘り込まれた木棺墓と考えられる。上段は2.4m×1.2mの長方形をなし、相對する3ヶ所に溝状にくぼんだ所がある。下段に棺をおさめた後に何か棒状のものを置いた所であろうか。

下段は2.4m×0.7mをはかる。壁は垂直に落ち、底面に枕木（棺台）を置いたと考えられるくぼみがある。このくぼみのある所の側面には、一方には弧状にへこんだ筋があり、他方には下面に接する穴が空いている。おそらく枕木を入れるための施設であろう。

**出土遺物** 出土遺物として下段南端から黒色土器碗が2個体出土している（図50—5・6）。5は口縁の一部を欠くもののほぼ完形品で口を上にして置かれた状態であったが、6は約3分の1個体分が破壊された状態で5の東横にあった。いずれも深い形態の碗で、外面は口縁端部近くまでロクロケズリされ、5では磨滅のため不明だが、6ではさらにヘラミガキされている。量は5が口径12.8cm、器高5.4cm、6は口径15.6cm、器高7.0cm。

年代的には今のところ飯山地方の平安時代の土器の中には類例がなく、形態や調整手法からすれば奈良時代に遡る可能性もある。

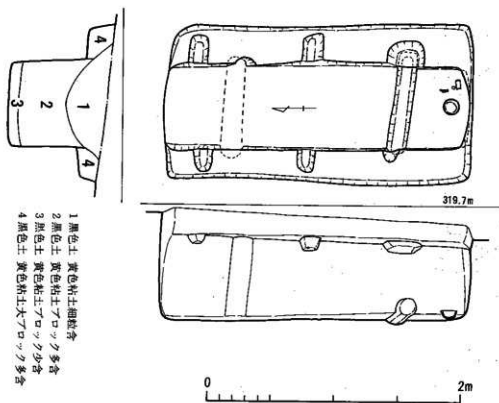


図49 木棺墓 SK11 1:30

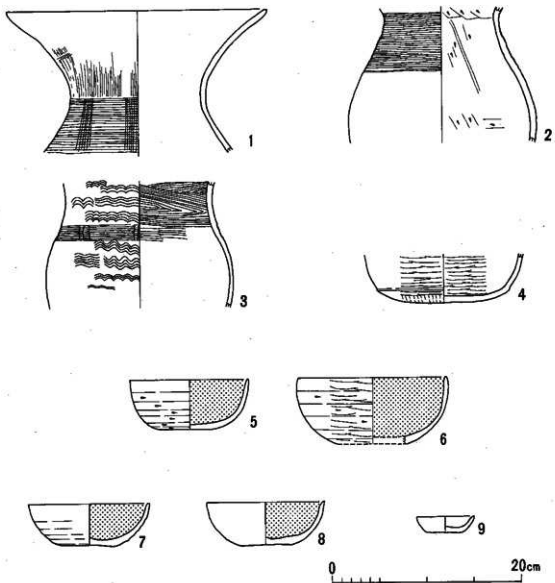


図50 その他の時代の土器 1 : 4

## (2) 弥生時代・古墳時代

弥生時代の遺構は明確ではないが、土器がB-5地区からまともに出土している（図50-1-3）。いずれも弥生時代後期に属するものと思われる。

古墳時代の土器はD-6地区のピットから出土している（図50-4）。いわゆる須恵器の環蓋を逆転させた形態のもので、内外面ともにいねいにヘラミガキされている。内面は黒色処理されているようである。6世紀代頃のものか。

## (3) 平安時代・中世

平安時代の土器（図50-7・8）はB-2およびC-2地区より出土している。いずれも口径12.8cm、器高4.5cmをはかる黒色土器碗で、底部は糸切り痕がそのまま残る。

## 第5章 結 語

大倉崎遺跡は、縄文前期後半期の土器及び先土器時代のブレイド様式土器の出土地として知られていた。特に先土器時代の石器は、千曲川に面した地点から出土しており、注目すべきものとされていた。

昭和45年秋、当時飯山北高等学校地歴部に所属していた大田文雄氏は、従来知られていた千曲川に面した地点からおおよそ西北に200mほど距てた残丘状地形の西側斜面に縄文前期土器が出土することをつきとめた。そこで直に飯山北高等学校地歴部の諸君が発掘調査を行い、縄文前期後半期上原式比定期の浅鉢形土器及び鉢形土器を検出し、良好な包含層が存在することを確認したのである。調査の時期は11月上旬～中旬にかけてであり、日本でも有数の深雪地帯にあたる奥信濃はすでに周辺の日々は雪化粧しており、いつも雪が降るか予測がつかないためにやむなく調査は中断せざるを得なかったのである。

昭和48年10月、当時駒沢大学学生であった金井正三氏は縄文前期土器の研究を卒論のテーマとしており、是非とも大倉崎遺跡の調査をしたいと熱望していた。たまたま飯山地方の遺跡分布図作成に全力を注いでいた飯山北高等学校地歴部及び同校地歴部OBもこの地域では数少ない縄文前期の調査は、是非とも行う必要があるとの観点から、飯山北高等学校地歴部が主体となって発掘調査を実施した。その結果、2軒の縄文前期住居地と集石址を検出し多量の縄文前期土器破片及び石器と剥片が得られた。出土した土器の主体は、縄文前期上原式に比定されるものであった。更に出土土器を検討する中で上原式土器が、二型式に分離される可能性が強いことを指摘した。因みに昭和45年調査地点をA地点、同48年に調査した地点をB地点とし、A地点の南方にも遺跡が存在することを指摘しておいた。この指摘した地点が、今回の調査の地点の東側斜面の下部にあっている。厳密に言えば昭和45年、同48年の調査地点は地字名では大倉崎外和柳であり、従来知られていた地点は瀬付である。従って一時両遺跡の分離を試みたことがあったが、混乱を避けるために昭和48年次の調査地点で両者を含めて大倉崎遺跡と称することとした。

さて、今回の調査では、昭和48年の調査の時点で予測したように縄文前期上原式に比定される土器片が多量に出土し、更に同時期に属すると考えて差支えない石器類が多数得られた。そして、住居址も5軒確認できた。今回検出し得た住居址群は、出土土器からみて前2回の調査のものと同時期のものと思われる。従って、丘頂を囲むように斜面上に住居址が形成されていたとみてよいであろう。いずれにしても、今回の調査で得た資料は前2回の調査の資料を補完するものであり、今後、鋭意究明に努め飯山地方の上原式比定土器の姿相を明かにしてゆきたいと思う。更に出土した多くの剥片についても前回の調査のように分析したいと思う。住居址の他に土壇も出土しており、住居址群といかなる関連を有するのか追求してゆく必要がある。

縄文前期以外では、中・近世に所属すると思われる土壇が14ヶ所検出された。これらの土壇は、いずれも土壇墓としてよいものと思われる。その他、宝篋印塔、五輪塔が多数出土しており、調査地点が中・近世の墓域として存在したことを裏付けている。調査地点の南側、現大関橋の渡り口には北信濃三大霊場の一つ小菅神社の一の鳥居があった。小菅神社はいうまでもなく飯山地方の中世史究明にかかせない重要な神社である。そして、小菅神社の存在する小菅荘をめぐる幾多の戦乱が中世に展開された。今回調査の結果出土した中世の遺物、遺構は、これと関係するものといったらいいすぎであろうか。今後の重要な研究課題であろう。

今回の調査に指導、助言を頂いた果文化課小林秀夫、児玉卓文両先生、物心両面にわたって御援助下さった市会議員藤沢賢一郎氏、大倉崎区長丸山淳一氏、常盤分館長高橋貫一氏、ならびに発掘調査に従事された作業員のみなさんに心よりお礼申し上げます。

— 了 —

# PLATE



▲ 遺跡航空写真



◀ 調査開始式



◀ 雑木の整理



◀ 重機による表土除去



▲ II区の調査（南から）



▲ IV・V区の調査（南から）

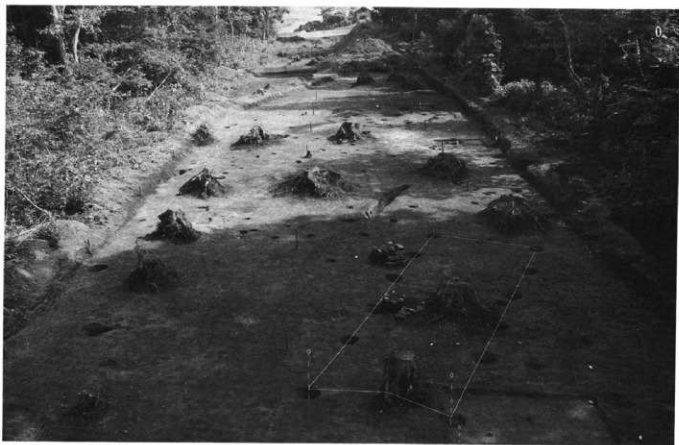




▲ I区・II区(南から)



▲ II区(北から)



▲ Ⅲ区 (北から)



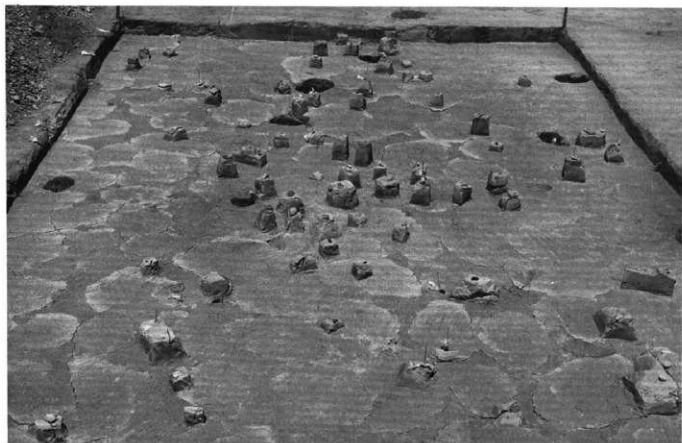
▲ Ⅳ区南部 (南から)



▲ IV・V区 遺構上面検出状況（南から）



▲ IV・V区 遺構完掘状況（南から）



▲ 第4地点(南から)



▲ 第4地点石器出土状態



◀ 第4地点北方  
尖頭器出土狀態



◀ 第4地点  
尖頭器出土狀態



◀ 第4地点  
土層